

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第21号

論文

アルタイ型言語における日本語複合動詞の対応表現について ―その2― …… 風間 伸次郎 (3)

資料

チチハル・ダグール語テキスト …… 風間 伸次郎 (27)

修士論文 要旨

Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil …… 小林 颯 (41)

山梨県国中地域方言における禁止形式「チョ」＋接続形式「バ」による

否定の順接仮定条件表現について …… 高橋 新 (51)

モンゴル語における動詞接辞-čix の意味・用法 …… ダグワドルジ マラルマー (61)

アラビア諸語にみられる語幹母音体系について …… 宮川 寛人 (71)

卒業論文 要旨

台湾語の方向補語“khí-lài 起來”と共起する動詞について

―中国語との対照を通じて― …… 今井 凜 (83)

宮古クレオロイドの形式「ベキ」について …… 岩隈 航男 (91)

ネットスラング表現の日仏対照 …… 大場 悠矢 (99)

千葉県銚子方言における経験者と刺激の格枠組み …… 笠原 隆成 (107)

A Morphosyntactic Study of the Subjunctive in Early Scots

―With Special Reference to The Original Chronicle of Andrew of Wyntoun― …… 川口 航太 (115)

The “Passive” in Spoken Finnish Revisited …… 小林 真緒 (123)

イタリア語書き言葉コーパスにおける部分冠詞複数形の出現分布について …… 酒井 将希 (131)

モンゴル語の相続相と結合する動詞の制限・傾向について …… 関根 彩乃 (139)

インドネシア語の di- 形による禁止表現 …… 高田 美登里 (147)

徳島方言の禁止表現について …… 多田 麻由佳 (155)

道具機能を兼務する能格の類型論―能格の異形態との関連から― …… 箱崎 光毅 (163)

韓国語における国語醇化運動の影響 …… 蓑輪 由芽 (171)

ドイツ語の従属文における定動詞中置 …… 米原 鈴乃 (179)

新しい表現形式「クナイ」の拡大について …… レクレイター 序守 (187)

2026 年

東京外国語大学

総合国際学研究科・言語文化学部

記述言語学研究室

序文

『思言』の第21号をお届けする。今号もその内容とレベルに関しては十分なものと言えるかわからないが、読んでくださる方々の評価を俟つ。広く御批判御叱正を賜りたい。

今号も個人研究費によって刊行することとなった。『思言』の電子資料はWeb化されているので、ネット上の『思言』も利用していただければ幸いである。なおキーワード検索も可能である(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kazama/Journal.html>)。HPの整理・更新にはいつもながら山田怜央さんにお世話になっている。この場を借りて深くお礼申しあげたい。

今号には風間自身の論文と資料、4本の修士論文要旨と14本の卒論要旨を掲載している。対象言語や扱っている言語現象は多岐に亘っている。言語類型論的知見を踏まえたものが多いといえることはうれしい。他方、外部から広く投稿を受け付けることは今年度も課題として残されたままである。当研究室での研究会に関しても、年に8回頑張っただけで開いているものの、まだ広く人に聞きに来ていただけるようなレベルには至っていない。より広く世界に発信し、通用するような研究環境を構築していく必要があると考えている。

今号に掲載した修論執筆者からは3名が博士に進学し、卒論執筆者からは6名が修士に進学した。皆才能に溢れ、素直な性格の持ち主であるので、指導する者の責任の重大さを感じている。修士に進学した者の中には他大学に進学した者もいる。一方、今年度はいないが風間ゼミの院に他大からの学生を受け入れたこともある。こうした交流があることは重要であるし、学生自身にとっても多角的な視野と経験を得ることにつながる。もちろん風間ゼミの院に内部進学した者たちも大きく成長し活躍してくれることを強く願う。

前号である20号の刊行日に風間もすでに還暦を迎えた。平均寿命も永い今日、還暦などといって老け込んでいる年でもない。文系の研究者としてはむしろ真価の問われる年齢であろう。学生の活躍を願うならまず自分が研鑽し励んでいる姿を見せられるよう、精進したいと思う。

今号の編集にあたっては、笠原隆成さんが中心になって尽力してくださった。ゼミの院生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。

相変わらず先行きの不明な世の中であるが、現状維持は退化と考え、新しいことにもチャレンジしていく一方で、こうした継続的な形での成果も変わらぬ形で出し続けて行けるようでありたいと考えている。

2026年2月22日

風間 伸次郎

思言 第21号 目次：

論文

アルタイ型言語における日本語複合動詞の対応表現について —その2—

On the Corresponding Expressions of Japanese Compound Verbs in Altaic-type Languages (2)

..... 風間 伸次郎 (3)

資料

チチハル・ダグール語テキスト

Tsitsikar (Qiqihaer) Dagur Texts

..... 風間 伸次郎 (27)

修士論文 要旨

Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil

..... 小林 颯 (41)

山梨県国中地域方言における禁止形式「チョ」＋接続形式「バ」による

否定の順接仮定条件表現について

A Study of “*cjoba*” in the Japanese Dialect of Yamanashi Prefecture

—On the Conjunctive Including an Imperative Form—

..... 高橋 新 (51)

モンゴル語における動詞接辞-*čix* の意味・用法

Meaning and Usage of the Verbal Suffix -*čix* in Mongolian

..... ダグワドルジ マラルマー (61)

アラビア諸語にみられる語幹母音体系について

On the System of Theme Vowels in Arabic Varieties

..... 宮川 寛人 (71)

卒業論文 要旨

台湾語の方向補語 “*khí-lâi* 起來” と共起する動詞について

—中国語との対照を通じて—

Verbs Co-occurring with the Directional Complement “*khí-lâi* 起來” in Taiwanese

—A Contrastive Study with Chinese “起來”—

..... 今井 凜 (83)

宮古クレオロイドの形式「ベキ」について

On the form ‘*beki*’ in Miyako-substrate Japanese

..... 岩隈 航男 (91)

ネットスラング表現の日仏対照

A Contrastive Study of Internet Slang in Japanese and French

..... 大場 悠矢 (99)

千葉県銚子方言における経験者と刺激の格枠組み

Case Frame of Experiencer and Stimulus in the Choshi dialect of Japanese

..... 笠原 隆成 (107)

A Morphosyntactic Study of the Subjunctive in Early Scots

—With Special Reference to The Original Chronicle of Andrew of Wyntoun—

..... 川口 航太 (115)

The “Passive” in Spoken Finnish Revisited

..... 小林 真緒 (123)

イタリア語書き言葉コーパスにおける部分冠詞複数形の出現分布について

Distribution of Italian Partitive Articles in Plural Form in Written Italian Corpora

..... 酒井 将希 (131)

モンゴル語の相続相と結合する動詞の制限・傾向について

Restrictions and Tendencies of the Mongolian Verbs Combining with Progressive Aspect

..... 関根 彩乃 (139)

インドネシア語の di- 形による禁止表現

Expression of Prohibition by Using the Prefix “di-” in Indonesia

..... 高田 美登里 (147)

徳島方言の禁止表現について

Prohibitive Forms in the Tokushima Dialect of Japanese

..... 多田 麻由佳 (155)

道具機能を兼務する能格の類型論—能格の異形態との関連から—

Typology of Multiple Ergative with Instrumental Function —Focusing on Ergative Allomorphy—

..... 箱崎 光毅 (163)

韓国語における国語醇化運動の影響

The Influence of Language Purification Movement in Korean

..... 蓑輪 由芽 (171)

ドイツ語の従属文における定動詞中置

The Medial Position of Finite Verbs in Embedded Clauses in German

..... 米原 鈴乃 (179)

新しい表現形式「クナイ」の拡大について

On the Recent Evolution of “kunai” in Japanese

..... レクレイター 序守 (187)

論文

アルタイ型言語における日本語複合動詞の対応表現について —その 2—

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

キーワード：複合動詞，アルタイ型言語，アルタイ諸言語，朝鮮語，言語類型論

0. はじめに

風間 (2025) では朝鮮語、ハルハ・モンゴル語（モンゴル諸語、以下では単に「モンゴル語」とする）、ウズベク語（チュルク諸語）を対象言語とし、日本語の複合動詞の意味がアルタイ諸言語を中心とする他のアルタイ型言語（風間 (2022) を参照）でどのように表現されているかを調査・分析した。その際には影山 (1993) が「統語的複合動詞」と呼んでいるものに姫野 (2018) が 3 語を加えた計 30 語の日本語の複合動詞を対象に研究を行った。

一方、寺村 (1984) は影山 (1993)・姫野 (2018) とは異なる 17 語の複合動詞を取り上げている (1.1. 節で後述)。風間 (2025) の研究を行った際には、この 17 語についても上記 3 言語のコンサルタントからデータを得た。本稿ではこの 17 語についての結果を報告する。したがって本稿は風間 (2025) の続編である。

1. 先行研究

1.1. 日本語の複合動詞の分類について

影山 (1993) は次の 27 語を統語的複合動詞の後項としてあげている。

始動：～かける、～だす、～始める 継続：～まくる、～続ける

完了：～終わる、～終わる、～尽くす、～きる、～通す、～抜く

未遂：～損なう、～損じる、～そびれる、～かねる、～遅れる、～忘れる、～残す、～誤る、
～あぐねる

過剰行為：～過ぎる 再試行：～直す 習慣：～つける、～慣れる、～飽きる

相互行為：～合う 可能：～得る

姫野 (2018:21) では、さらに次の 3 語を加え、計 30 語と考えてよいのではないか、としている。 始動：～かかる / 未遂：～損ねる / 完了：～果てる

姫野 (2018:21) は次の 2 つのテストにより上記の 3 語を統語的複合動詞と認定している。

① 代用形『そう』との置換可

彼もそうしかかった／彼もそうし損ねた／彼もそうなり果てた

② サ変動詞の使用可

落下しかかった／獲得し損ねた／退屈し果てた

寺村 (1984: 164-183) では以下の 37 種の後項動詞をあげている。このうち下線を施したものは上記の影山 (1993) と姫野 (2018) による 30 語には含まれていないものである。本稿で扱うのはこの 17 語である。

1. 時間的相：開始、継続、終了：～はじめる、～だす、～かかる、～かける、～つづける、～つづく、～おわる、～おえる、～やむ
2. 空間的相：上と下への動きの方向、内と外・周囲への方向、ある目標に向かっての動き：～あげる、～あがる、～おろす、～くだす、～さがる、～さげる、～おちる、～こむ、～こめる、～だす、～まわる、～まわす、～かかる、～かける、～つける、～つく、～かえす、～わたす、～わたる、～あう
3. 密度、強度の相（心理的相）：程度、密度、強さ、完成など：～ぬく、～きる、～あげる、～こむ、～とおる、～とおす、～つめる、～つくす

寺村 (1984: 117-118) は活用語尾ル／タによる対立を 1 次アスペクトとし、～テイル、～テシマウなどテ形に続くものを 2 次アスペクト、～シハジメル、～シオワルなど連用形に続くものを 3 次アスペクトとしている。

上記の 17 語の動詞は、文中における使用に際して、元の語彙的な意味を保持する場合から文法的でアスペクト的意味を示す場合まで、連続的な面を示す。これらの動詞を 3 次アスペクトとして扱うことについて、寺村 (1984: 167-170) は以下のように述べている（筆者による要約）。

多くの V1-V2 が語彙的なふつうの複合動詞として、アスペクトの対象から除外されるが、なかには V2 の形態は同じでも、あるものは複合動詞の後項として認められ、あるものは文法的／アスペクト的な補助形式として残されるということもでてくる。たとえば、

- a. 彼ハソノ虫ヲ箱カラツマミ出シタ
- b. 虎が檻カラ逃ゲ出シタ
- c. 赤ン坊が泣キダシタ

の三つの～ダスのうち、a のツマミダスは「誰かが何かに働きかけて、それをどこかの外へ移動させる」という「出ス」の一つの仕方を表わしている。したがって一語彙としての複合動詞である。一方 b, c. の場合は、「虎」や「赤ン坊」が、何かに働きかけてそれを外へ出した、という意味を含んでいない。～ダスの意味、機能は、明らかに他動詞「出ス」とは変わっている。しかしこのうち c. の～ダスは、～ハジメルとほとんど同じように、事象の開始、つまり時間的な相を表わしており、その結びつき先の V1 は数も多いし、種類も多様であるため、これまでアスペクトの形式の一つと認められているようである。けれども b. の～ダスは、人によって性格づけが異なるであろう。逃ゲダスに類する～ダスとしては、

- a. パイプノ穴カラ水（油、火など）ガ噴キダス（*水ガ～ヲダス）
- b. 会議ノ席ヲソット抜ケダス（*会議ノ席ヲダス）
- c. 夏が来レバ尾瀬ヲ思イダス（*尾瀬ヲダス）
- d. 水デ時ヲ計ル方法ヲ考エダス（*方法ヲダス）

のような言いかたがあげられるだろう。これらは、上の泣キダスの場合と異なり、空間的な（c. d. の場合は心理的な空間）移動を表わしている。しかし、空間的な外への移動といっても、

- a. 誰カガ小屋カラ走り出ル（誰カガ小屋カラ出ル）
- b. 苦勞が額ニジミデル（苦勞ガ額ニ出ル）

のように、V2 自体が、何かの外への移動を表わす動詞としての意味そのままを保持しているのとも異なる。ダス（出ス）は、本動詞としては他動詞であるが、逃ゲダスに類する～ダスはそう

ではない。意味的にも、単に、ある空間の外に出るというだけでなく、何らかの力で、ある空間に閉じこめられていたものが、その力を排除して、あるいは解放されて、突然その空間の外に出る、というような含みがある。したがってこのような～ダスの表わす事象の様相もアスペクトの中に入れようと思う。

1.2. 日本語と本稿の対象とするアルタイ型の「複合動詞」に関連する対照研究

日本語と本稿の対象言語の対照を扱った先行研究については、風間 (2025) ですでに整理したので、詳しくは風間 (2025) を参照されたい。ここではいくつかの重要な点を再確認するにとどめる。

一ノ瀬他 (2015) では日本語と朝鮮語の複合動詞の対照ならびにその研究状況について簡潔にまとめている。これをまず以下に要約して示す。

朝鮮語¹には、日本語と似た特性を持つ語彙的複合動詞が存在する(塚本 (2012)、和田 (2011) 等)。

a. olu-naylita

go.up-come.down 「上り下りする (lit. 上り下りる)」

b. ttwi-nolta

run-hang.out 「飛び回って遊ぶ (lit. 走り遊ぶ)」

一方、朝鮮語には日本語と同じような統語的複合動詞がほとんどないことが知られている(塚本 (2012))。塚本 (2012) が示すように、日本語で統語的複合動詞によって表される事象は朝鮮語では異なる方法で表される。例えば、日本語で統語的複合動詞として表される事象の V1 を朝鮮語では名詞化することによって表現する。

a. 太郎が弁当を食べ忘れた。

b. Taro-ka	tosilak-ul	mek-nun-kes-ul	ic-ess-ta
T-Nom	lunchbox-Acc	eat-Rel-NMNZ-Acc	forget-Past-Decl

直訳：太郎が弁当を食べることを忘れた

「終わる／終える」や「続ける／続く」の場合には「全て食べた」や「続けて食べた」のような表現を用いる。

a. 太郎が弁当を食べ終えた。

b. Taro-ka	tosilak-ul	ta	mek-ess-ta
T-Nom	lunchbox-Acc	all	eat-Past-Decl.

直訳：太郎が弁当を全て食べた。

a. 太郎が弁当を食べ続けた。

b. Taro-ka	tosilak-ul	kyeysok	mek-ess-ta
T-Nom	lunchbox-Acc	successively	eat-Past-Decl.

直訳：太郎が弁当を続けて食べた。

以上、一ノ瀬他 (2015: 454-459) より要約、朝鮮語の表記とグロス は原典のまま

¹ 一ノ瀬他 (2015) では「韓国語」であったが、本稿では「朝鮮語」に統一した。

塚本 (1995: 79) では菅原睦氏、谷博之氏、岸田文隆氏からの御教示によるとして「トルコ語、モンゴル語、満洲語それぞれについてアスペクトを表す際にどういう表現が用いられるかについては、日本語と朝鮮語の中間で、複合動詞が活用されることもあるし、そうでないこともあるようである」としている。

なおモンゴル語やウズベク語の補助動詞構造は 2 語からなり、日本語や朝鮮語のように生産性のある (1 語化する) 統語的な複合動詞の構造は形成されない。例えばモンゴル語の avčr-「持って来る」は av-č ir-: take-CVB.IPFV come-「取って 来る」の収縮形であり (小沢 1983: 6)、こうなると辞書に掲載される単なる 1 語彙になってしまう。avčr-a-x: bring-E-PTCP.IPFV と、母音調和の観点からも完全なる 1 語としての性格を示す。

1.3. 風間 (2025) の結果

風間 (2025) では下記の 2 点の分析結果を示した。まず対象言語の統合度の違いについて考察した。そこでは諸形式に関して独立性の低いものから高いものへと並ぶ下記のような序列を考え、それを点数化した (カッコ内がその点数)。

接辞 (4) > 複合動詞後項 (3) > 補助動詞 (2) > 副詞を含む分析的表現 (1)

これによって対象言語間の統合度を算出したところ次のようになった。すなわち、日本語以外の 3 言語の統合度にはあまり大きな違いはない、という分析結果を示した。

表 1: 言語間の統合度の違い

日本語	81
ウズベク語	44
モンゴル語	40
朝鮮語	36

次に対象言語間における対応表現の前置／後置の違いを考察したところつぎのような結果となった。

表 2: 本稿の対象言語における対応表現の前置／後置の違い

朝鮮語	前置 15/後置 8 (前置率 65.2%)
モンゴル語	前置 6/後置 15 (前置率 28.6%)
ウズベク語	前置 4/後置 20 (前置率 16.7%)

すなわち、他の言語に比べ、朝鮮語では日本語の複合動詞 (後項) の対応表現が動詞の前の位置で示されることが多いということを指摘した。

2. 研究方法

1.1. 節でみた寺村 (1984) における 17 語を対象とする。なお研究方法ならびにコンサルタントは基本的に風間 (2025) と同じである。

柏崎・田山 (編) (2023: 1403-1437) (『日本語複合動詞活用辞典』) にはこの辞典で見出し

語として取り上げた複合動詞についての後項動詞による索引がある。この索引にある語から、まず筆者は使用頻度が高く意味的にも一義的に把握しやすいと思われる語を任意に5語選んだ。ただし索引に5語以下しか語例のない後項動詞については2~4語となっているものもある(「~つづく」「~くださ」「~とおる」)。

次に柏崎・田山(編)(2023)の各複合動詞の項における例文も参考に、それぞれの複合動詞の例文を用意し複合動詞例文調査票を作成した(3.1.節で示す)。

ただこのようにして調査票を作成すると、頻度が高い自然な複合語で調査することはできるが、統語的でないものが生じる。本稿で扱うような行為の(広い意味での)方向を示す動詞は特にそうである(1.1.節参照)。そのため寺村(1984)の行ったテストによる判断を行った。これについては3.1.節で述べる。

このようにして作成した例文調査票を用いて、朝鮮語、モンゴル語、ウズベク語の話者に依頼し、この調査票の例文を日本語から各言語に翻訳していただいた(3人の話者とも高い日本語力を有している)。そこから日本語の複合動詞の機能と対応する表現(以下では「対応表現」と呼ぶ)のバリエーションを探った。コンサルタントの情報は下記である。なおウズベク語の話者はサマルカンド・タジク語とのバイリンガルである。

表1: コンサルタントの情報

	出身地	生年
朝鮮語	慶尚北道醴泉郡	1978
モンゴル語	ウランバートル	1989
ウズベク語	サマルカンド	1997

対応表現の判断のしかたは次のようなやり方に拠った。日本語の調査例文において、複合動詞に先行する部分に対応する訳語とは思われない要素で、複合動詞の持つ意味を何らかの形で実現していると思われる要素があれば、それを対応表現と判断した。

3. 調査・分析の準備

3.1. 調査票およびその例文の吟味

寺村(1984)では、「誰カガ小屋カラ走り出ル」における前項動詞(下線太字部分)を取り除いても「誰カガ小屋カラ出ル」となり、文が成立することから、後項動詞自体が「移動を表わす動詞としての意味そのままを保持している」とした。本稿でもこのテストを用い、その動詞の本来の意味を保持していると考えられる例文には#を付した。テストの判断は筆者(1965年東京生まれ)の内省による。判断が少し難しかったケースを2つ取り上げて説明を加えておく。まず[「(薪に斧を)振り下ろした」>「?(薪に斧を)下ろした」]のようなケースは文法的には言えそうだが、意味は大きく異なるので元の意味を保持している例とはみなさなかった。元の意味を保持していそうであっても、文全体が非文と思われる場合には基本的に#とはしなかった。次に[「#(水が跳ねて来て思わず)飛び下がった」>「(水が跳ねて来て思わず)下がった」]のケースでは下方向ではなく後方への移動と考えられるが、このような場合は元の意味(移動の意味)を保持しているものとみなした。

調査に使用した例文の一覧（統語的複合動詞であるか否かの判断を含む）

- [1] **～つづく** : # (一週間も雨が) 降り続いた
- [2] **～あげる** : (試合の後半であと 1 点の差まで) 追い上げ-た / (母親が赤ん坊を) 抱え上げ-た / (逃げ出したヒヨコを) 掴み上げ-た / (寝ない子供からおもちゃを) 取り上げ-た / (名前の一覧を上から) 読み上げ-た
- [3] **～あがる** : # (投げ込んだ木の棒が水の上に) 浮かび上が-た / # (階段を急いで) 駆け上が-た / # (台の上に) 跳び上が-た / (熱も下がってやっとさつき) 起き上が-た / (やっと論文が) でき上が-た
- [4] **～おろす** : # (火事になった家の二階の窓から子供を) 助け下ろし-た / # (息子を木の上から) 引きずり下ろし-た / (ハンマーをくいに) 打ち下ろし-た / (薪に斧を) 振り下ろし-た / (丘の上から街を) 見下ろし-た
- [5] **～くだす** : (その場で一つ詩を) 書き下し-た / (苦い薬を水で) 飲み下し-た / (その時代、金持ちたちは庶民を) 見下してい-た
- [6] **～さがる** : # (古い部屋には暗い電灯が) 吊り下がってい-た / # (風がなく、旗は) 垂れ下がってい-た / # (水が跳ねて来て思わず) 飛び下が-た / # (議論したが、はっきりした証拠を示されて) 引き下が-た / (断られたがなおも) 食い下が-た
- [7] **～さげる** : # (ドアを開けようとレバーを) 押し下げ-た / # (カーテンレールにカーテンを) 吊り下げ-た / # (風で飛ばないように帽子のつばを) 引き下げ-た / (いったん提出した申し込みを) 取り下げ-た / (国は国有地を民間に) 払い下げ-た
- [8] **～おちる** : # (ボールが坂を) 転がり落ち-た / # (棚から本が) 滑り落ち-た / # (汗がポタポタと) 流れ落ち-た / (子供の作った積み木のお城が) 崩れ落ち-た / (中身が重くて紙袋の底が) 抜け落ち-た
- [9] **～こむ** : (駅員はその乗客を車内に) 押し込ん-だ / (これは間違いないと) 思い込ん-だ / (ザックのひもが肩に) 食い込ん-だ / (冷たい空気を胸いっぱい) 吸い込ん-だ / (大雨が降り出したのでお店に) 走り込ん-だ
- [10] **～こめる** : (煙があたりに) 立ち込め-た / (ネコを部屋に) 閉じ込め-た / (肌にクリームを) 塗り込め-た / (カメは首を体の中に) 引っ込め-た / (その気体をビンに) 封じ込め-た
- [11] **～まわる** : # (コンビニを探して) 歩き回-た / # (良いプレゼントはないかと) 探し回-た / (犯人は警察から) 逃げ回-た / (子供たちは公園で) はしゃぎ回-た / (ガードマンは不審物がないか) 見回-た
- [12] **～まわす** : (イヌがネコを) 追いかけまわし-た / (母を一日あちこち) 連れまわし-た / (かわいくてその子猫を) 撫でまわし-た / (喜んで久しぶりに自転車) 乗りまわし-た / (その音に驚いてあたりを) 見まわし-た
- [13] **～かえす** : # (宛名が違っていたので) 送り返し-た / # (2 点取られたが 3 点) 取り返し-た / (納得できなかったので) 言い返し-た / (弟はお兄ちゃんからそのおもちゃを) 奪い返し-た / (忘れ物に気づいて途中で) 引き返し-た
- [14] **～わたす** : # (荷物を全部受取人に) 引き渡し-た / (戦いに負けて城を) 明け渡し-た / (裁判官は被告に判決を) 言い渡し-た / (教室に座っていた全員の顔を) 見渡し-た
- [15] **～わたる** : (月の光が空に) 冴えわたってい-た / (その噂はあっという間に) 知れわた-た / (今日の空は雲一つなく) 晴れわた-っている / (闇の中に救急車のサイレンが) 響きわた-た / (バラの甘い香りがあたりに) 満ちわた-っていた
- [16] **～とおる** : (傘を忘れたので、雨が服に) 沁みとお-た / (窓ガラスはきれいに) 透きとお-っていた / (彼が放った矢は的の中心に) 突きとお-た / (その国の政府ではひどい不正が) まかりとお-っていた
- [17] **～つめる** : (犯人を行き止まりに) 追いつめ-た / (彼女はその失敗のことをずっと) 思いつめ-ていた / (その部屋にじゅうたんを) 敷きつめ-た / (何か隠しているようなので) 問いつめ-た / (驚いて相手の顔をじっと) 見つめ-た

3.2. 各言語の背景知識

本稿の対象言語は、3 言語とも 2 つの動作が同時に生じる場合に使用する副動詞形と、2 つの動作が継起的に生じる場合に使用する副動詞形の 2 つの副動詞形を持つ（朝鮮語：-go, -A²、モンゴル語：-ž/-č, -AAAd、ウズベク語：-a/-y, -(i)b）。両者のグロスを以下では CVB.IPFV, CVB.PFV とする。これらはいずれの言語でも高い頻度で使用される³。

朝鮮語では複合動詞的な表現の前項動詞に -gi: NMLZ による名詞化や副動詞形 -Aso: CVB.ANT 「～してから」、-Ada(ga): CVB.ANT2 「～してから」、-goi: CVB.FIN 「～するように」、-daga: CVB.SIM 「～しかけて、～しながら、～する途中で」も用いられる。モンゴル語では非分離副動詞形 -(A)n: CVB.MOD(al)、継続副動詞形 -sAAr: CVB.ABTEMP(oral) も用いられる。

朝鮮語のハングルからの翻字は河野 (1955) に基づく（ただし ə は ㅅ とし、w には o/u を用いている）。朝鮮語における漢字語は《 》内に漢字を入れて示す（ただし便宜上繁体字でなく日本で用いられている字体で示した）。モンゴル語の翻字は次のような方式に拠っている： a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, e = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, o = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, щ = šč, ь = ”, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja。ウズベク語の表記はローマ字正書法による。

以下での朝鮮語の諸形式の意味は油谷他（編）(1993) に、モンゴル語の諸形式の意味は小沢 (1983) に拠った。ウズベク語の諸形式の意味はインディアナ大学チュルク・イラン語彙方言学センターのウズベク語-英語辞典に拠った。これ以外の先行研究に拠った場合は出典を示すが、この 3 つに拠った場合にはその出典を示していないことを断っておく。

4. 複合動詞の分野別の研究結果

調査結果のデータ本体は稿末に付録として示した。これには資料的な価値があると考えている。

以下 4 節では各対象言語で現れた日本語の複合動詞に対する対応表現の形態に関する分析を行う。寺村 (1984) の分類に従い、[4.1. 時間的相：継続] と [4.2. 空間的相]、[4.3. 密度、強度の相（心理的相）] に分けて示す。なお複雑な構造のものにはできる限りグロスによる説明を付けた。

なお 2 つの動詞による構造があった場合に、そのいずれかもしくは両方の動詞が文法は本当に文法化しているのかを判断することは難しいだろう。このことは 1.1 節における寺村 (1984) の議論をみても明らかである。どちらが主動詞でありどちらが補助動詞であるのかの判断も難しい。したがって以下に現れた 2 つの動詞による構造においては、日本語の複合動詞後項の意味を実現している方の動詞、つまり対応表現となっている方の動詞を便宜的に補助動詞と呼ぶことにする。したがって、一般にその言語の分析で主動詞／補助動詞とされるものとは逆になったり食い違う場合もあることに注意されたい。

² 大文字は母音調和等による異形態のあることを示す。

³ ただしウズベク語の -a/-y は補助動詞構造では頻繁に用いられるものの、単独で副動詞的に用いられることは稀であるという（日高晋介氏の御教示による）。

4. 1. 時間的相：継続

ここでは[継続：～つづく]について用いられた各言語の対応表現を扱う。「降り続いた」の表現は、(K) *gyoisog nairi-: continuation fall-*「続いて 降る」、*ülgelžl-e-n or-: continue-E-MOD enter(fall)-*「続いて 降る」、(U) *yog'-aver-: rain-COMPL-*であった。朝鮮語では副詞的な漢字語の前置が用いられた。モンゴル語では *ülgelžl-e-n or-: continue-E-MOD enter(fall)-*「続いて 降る」のように *ülgelžil-*「続く」そのものを用いるか、これを前置の補助動詞として用いていた。ウズベク語では (U) *yog'-aver-* であり、*V-aver-/V-yver-* が用いられた。島田 (2019: 222) はウズベク語のこの接辞について「-ver 補助動詞 *bermoq*「(単独での意味は) 与える」の転訛形。副動詞-a/-y とともに用い、動作の継続、反復の意味を表わす」としている。

4. 2. 空間的相

ここでは[上への動き：～あげる、～あがる]、[下への動き：～おろす、～くだす、～さがる、～さげる、～おちる]、[内への動き：～こむ、～こめる]、[周囲への方向：～まわる、～まわす]の11の複合動詞の対応表現についてみる。

4. 2. 1. 上への動き：～あげる、～あがる

まず「～あげる」についてみると、「追いつける」の表現は (K) *jjoc'-a#ga-: follow-CVB.PFV#go-*「追いかけて行く」(M) *onoo av-: point take-* (U) *yet-ib ol-: reach-CVB.PFV take-* で対応表現は見られない。モンゴル語の表現は「1点を取る(ことで「追いつける」)」という表現である。

「抱え上げる」の表現は (K) *'an-'a 'orri-: embrace-CVB.PFV raise-*「抱き上げる」(M) *tevr-: hold- / av-: take-* (U) *ko'tar-ib ol-: raise-CVB.PFV take-* で、朝鮮語で後置、ウズベク語で前置の補助動詞による対応表現が観察された。

「掴み上げる」の表現は (K) *jab-'a duur-: catch-CVB.PFV raise-*「つかみにかかると」/ *jab-'a 'orri-: catch-CVB.PFV raise-*「つかみ上げる」(M) *bar'-ž av-: catch-CVB.IPFV take-* (U) *ushla-b ol-: catch-CVB.PFV take-* で、3言語で共に後置の補助動詞が観察された。

「取り上げる」の表現は (K) *bbai#as-: take.out.CVB.PFV#rob-*、(M) *xuraa-ž av-: collect-CVB.IPFV take-* (U) *ol-ib qo'y-: take-CVB.PFV put-* でモンゴル語で前置、ウズベク語で後置の補助動詞が観察された。

「読み上げる」の表現は (K) *'irg-: read-* (M) *unš-: read-* (U) *o'qi-b chiq-: read-CVB.PFV go.out-* で対応表現は見られない。

次に「～あがる」についてみると、「浮かび上がる」の表現は (K) *dd-ᄒ#orui-: float-CVB.PFV#rise-*「浮かび上がる」(M) *xöv-ž {baj-/gar-}: float-CVB.IPFV {be-/go.out-}* (U) *yuza-ga chiq-: surface-DIR go.out-* で、朝鮮語の対応表現には後置の補助動詞、モンゴル語では進行アスペクトもしくは出現／上昇の補助動詞、ウズベク語の対応表現には[名詞+格]「表面に」が用いられた。

「駆け上がる」の表現は (K) *or-ra#ga-: rise-CVB.PFV#go-*「上がって行く」(M) *ögs-: ascend-* (U) *yugur-ib chiq-: run-CVB.PFV go.out-* で、朝鮮語で前置、ウズベク語で後置の補助動詞による対応表現が観察された。モンゴル語では語彙的に上昇の意味を持つ動詞が用いられた。

「跳び上がる」の表現は (K) *ddui-'ᄒ#or-ra#ga-: run-CVB.PFV#rise-CVB.PFV#go-*「駆け上がった

て行く」(M) üsr-č gar-: jump-CVB.IPFV go.out- (U) sakra-b chiq-: jump-CVB.PFV go.out- で、3言語とも後置の補助動詞による対応表現が観察された。

「起き上がる」の表現は (K) ir'-o#na-: occur-CVB.PFV#go.out- 「起き上がる」(M) bos-č ir-: get.up-CVB.IPFV come- (U) tur-: stand- で、朝鮮語にのみ後置の補助動詞による対応表現が観察された。モンゴル語の ir- 「来る」は方向が違うので対応表現とはしないこととする。

「でき上がる」の表現は (K) 'oanson#doi-: completion#become- 「《完成》なる」(M) duus-ga-: finish-TRVZ- / (belen) bol-: (ready) become- (U) tugat-: finish-, yoz-ib bo'l-: write-CVB.PFV become- で対応表現は観察されなかった。

4.2.2. 下への動き：～おろす、～くだす、～さがる、～さげる、～おちる

まず「～おろす」についてみると、「助け下ろす」の表現は (K) do'o-a#ju-: help-CVB.PFV#give- (M) avar-č buu-lga-: save-CVB.IPFV go.down-CAUS- (U) qutqar-ib (past-ga) tush-ir-: help-CVB.PFV (low-DIR) go.down-CAUS- でモンゴル語とウズベク語に後置の補助動詞による対応表現が観察された。

「引きずり下ろす」の表現は (K) gguur-'o#nairi-: drag-CVB.PFV#get.down- (M) tat-ž buu-lga-: pull-CVB.IPFV go.down-CAUS- (U) (past-ga) tushir-: (low-DIR) pull.down- で、朝鮮語とモンゴル語に後置の補助動詞による対応表現が観察された。ウズベク語は名詞項が対応表現となっていた。

「打ち下ろす」の表現は (K) nairi-ci-: downward-hit- 「下へ打つ」(M) cox'-: hit- (U) ur-: hit- で、朝鮮語で接頭辞による対応表現が観察された。

「振り下ろす」の表現は (K) nairi-ci-: downward-hit- 「下へ打つ」(M) xagal-: split- (U) (past-ga) siljit-: (low-DIR) move- で、朝鮮語で接頭辞による対応表現、ウズベク語で「名詞+格」「下に」による対応表現が用いられた。

「見下ろす」の表現は (K) nairi-oda bo-: get.down-CVB.ANT2 look- 「見下ろす (lit. 下ろして見る)」(M) xar-: look- / tol'd-: watch- (U) qara-: look- で、朝鮮語で前置の補助動詞による対応表現が観察された。

次に「～くだす」についてみると、「書き下す」の表現は (K) jog- 「書き記す」(M) bič-: write- (U) yoz-: write- でどの言語にも対応表現は観察されなかった。

「飲み下す」の表現は (K) samki- 「飲み込む」 / nom-gi-: exceed-TRVZ- 「過ぎさせる」(M) zalg'-: swallow- (U) ich-ib yut-: drink-CVB.PFV swallow- で、3言語とも語彙的に日本語の補助動詞に対応する意味を含む動詞を用いていた。

「見下す」の表現は (K) ggar#bo-go 'iss-: underlay#look-CVB.IPFV be- 「見下す (lit. 下に敷いてみる)」 / 'yat#jab-'a bo-go 'iss-: underestimate(shallow#grasp)-CVB.PFV look-CVB.IPFV be- (M) dord uz-: low see- (U) past nazar bilan qara-: low a.look with look- で、朝鮮語では前置の補助動詞、モンゴル語では前置の副詞、ウズベク語では副詞句を含む分析的な表現による対応表現が観察された。

「～さがる」についてみると、「吊り下がる」の表現は (K) mai#dar-ri-o 'iss-: tie.CVB.PFV#hang-INTRVZ-CVB.PFV be- 「吊り下がる」(M) ölgöotej baj-: hanged be- (U) osil-ib tur-: hang-CVB.PFV stand- で、3言語とも対応表現というべきものが見当たらないが、語彙的に日本語の補助動詞に対応する意味を含む動詞を用いているケースであると判断する。

「垂れ下がる」の表現は (K) nur-’o#jy-’o iss-: lengthen-CVB.PFV#become-CVB.PFV be- 「長くなる、垂れ下がる」 (M) dooš-oo unži-: downward-REFL droop- (U) osil-ib tur-: hang-CVB.PFV stand- で、朝鮮語とウズベク語には対応表現というべきものが見当たらないが、やはり語彙的に日本語の補助動詞に対応する意味を含む動詞を用いているケースであると判断する。モンゴル語では前置の副詞（場所名詞とみることでもある）が観察された。

「飛び下がる」の表現は (K) ddui-’osō murrō#na-: run-CVB.ANT go.back(return.CVB.PFV#go.out)- (M) üser-č xold-: jump-CVB.IPFV steq.away- (U) (past-ga) sakra-b tush-: (low-DIR) jump-CVB.PFV fall- で、朝鮮語とモンゴル語では後置の補助動詞、ウズベク語では [名詞+格] による対応表現が観察された。

「引き下がる」の表現は (K) murrō#sō-: go.back(return.CVB.PFV#stand)- (M) buu-ž ög-: go.down-CVB.IPFV give- (U) (orqa-ga) qayt-: (back-DIR) return- で、3 言語とも語彙的に日本語の補助動詞に対応する意味を含む動詞を用いているケースであると判断する。

「食い下がる」の表現は (K) mur-go nör-’o#ji-: bite-CVB.IPFV stretch-CVB.PFV#become- (M) buu-ž ög-öö=güj: go.down-CVB.IPFV give-PTCP.PRS=nothing (U) qattiq tur-ib ol-: difficult stand-CVB.PFV take- で、いずれの言語でも慣用句的もしくは分析的な表現となっている。これらも意味的に対応する要素による表現と見なす。

次に「～さげる」についてみると、「押し下げる」の表現は (K) mir-: push-(M) dooš erg-üül-: downward turn-CAUS- (U) bos-: push- で、モンゴル語では副詞による対応表現が見られる。

「吊り下げる」の表現は (K) mai#dar-: tie.CVB.PFV#hang- (M) ölg-: hang- (U) os-ib qo’y-: hang-CVB.PFV put- で、対応表現が見られない。

「引き下げる」の表現は (K) nairi-: lower- (M) dar-: press- (U) tush-ir-: go.down-CAUS- で、3 言語ともに語彙的に「～下げる」の意味を含む動詞が用いられている。

「取り下げる」の表現は (K) cōrhoi#ha- 「《撤回》する」 (M) bucaa-n tat-: return-CVB.MOD pull- (U) qaytar-ib ol-: return-CVB.PFV take- で、朝鮮語では対応する意味を含意する漢字語の動詞が用いられ、モンゴル語とウズベク語では前置の補助動詞が用いられている。ウズベク語 qaytar- は主体に返ってくる行為であることを表しているのかもしれないが、日本語の「～下げる」でもここでは「下」への方向とともに「戻す」という含意があると考えられるため、対応表現と見なす。

「払い下げる」の表現は (K) burha#ha- 「《拂下》(払下げ) する」 / maigag#ha- 「《売却》する」 (M) xudald-: trade- (U) sot-: sell- で、朝鮮語で漢字語の動詞が用いられているが、他の言語には対応表現が観察されない。

次に「～落ちる」についてみると、「転がり落ちる」の表現は (K) gur-rō ddōr-’o#ji-: roll-CVB.PFV drop-CVB.PFV#become- (M) (N uruu) önxr-: (N downward) roll- (U) dumala-b tush-: roll-CVB.PFV fall- で、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞が、モンゴル語では [名詞 格] が用いられている。

「滑り落ちる」の表現は (K) ddōr-’o#ji-: drop-CVB.PFV#become- (M) (N deer-ees) guls-: (N top-ABL) slide- (U) sirg’al-ib tush- / sirg’alib tush-ib ket-: slide-CVB.PFV go.down-CVB.PFV leave- で、朝鮮語では前置の補助動詞、モンゴル語では [名詞+格]、ウズベク語では後置の補助動詞が用いられている。

「流れ落ちる」の表現は (K) huur-rō#nairi-: flow-CVB.PFV#fall- (M) urs-: flow- (U) oq-ib tush-:

flow-CVB.PFV go.down- で、朝鮮語とウズベク語で後置の補助動詞が用いられている。

「崩れ落ちる」の表現は (K) mun-’o#ji-: destroy-CVB.PFV#become- (M) nur-: fall- (U) qula-b tush-: fall-CVB.PFV go.down- で、ウズベク語で後置の補助動詞が用いられている。

「抜け落ちる」の表現は (K) jijj-’o#ji-: tear-CVB.PFV#become- (M) coor-: get.a.hole- (U) tush-ib ket-: fall-CVB.PFV leave- で、ウズベク語において後置の補助動詞が用いられている。

4.2.3. 内への動き：～こむ、～こめる

「～込む」についてみると、「押し込む」の表現は (K) mir-’o#nöh-: push-CVB.PFV#release- (M) tülxe-ž or-uul-: push-CVB.IPFV enter-CAUS- (U) itar-ib yubor-: push-CVB.PFV send- で、内側方向への意味とは言えないが、朝鮮語とウズベク語では「押す」に補助動詞が加えられている。モンゴル語の後置の補助動詞とともに、これを対応表現とみなすことにする。

「思い込む」の表現は (K) saingag#ha-「考える（《生覚》する）」(M) itg-: believe- (U) o’ylan-ib qol-: think-CVB.PFV remain/stay- で、やはりウズベク語の補助動詞を対応表現とみなす。

「食い込む」の表現は (K) pa-go#duur-: dig-CVB.IPFV#enter- (M) šigd-: fall.into- (U) kir-ib ket-: enter-CVB.PFV leave- で、朝鮮語には内側方向への意味を示す後置の補助動詞が、モンゴル語では語彙的に対応する意味の動詞が、ウズベク語では後置の補助動詞がそれぞれ用いられている。

「吸い込む」の表現は (K) bbar-’a#dur-’i-: inhale-CVB.PFV#enter-TRVZ- (M) am’sgal-: breath.take- (U) nafas ol-: breath take- で、朝鮮語とウズベク語では主体自身への方向を示す後置の補助動詞を用いている。モンゴル語では語彙的に対応する意味の動詞が用いられている。

「走り込む」の表現は (K) ddui-’o dur-’o#ga-: run-CVB.PFV enter-CVB.PFV#go- (M) güj-ž or-: run-CVB.IPFV enter- (U) yugur-ib kir-: run-CVB.PFV enter- で、3言語ともに後置の補助動詞を用いている。

「～込める」についてみると、「立ち込める」の表現は (K) ja’ug#ha-: fog.lay#do- (M) suunagl-: (smoke etc.)lay- (U) tutun-la-: fog-VBLZ- で、対応表現は観察されない。

「閉じ込める」の表現は (K) gadu-: shut- (M) tügzi-: close- (U) qulflab qo’y-: rock-CVB.PFV put- で、対応表現は観察されない。

「塗り込める」の表現は (K) baru-: paint- (M) türx-: paint- (U) surt-: rub- で、対応表現は観察されない。

「引っ込める」の表現は (K) jib-’o#nöh-: retract(pick-CVB.PFV#get.sth.into)-(M) tat-: pull- (U) tort-ib qo’y-: pull-CVB.PFV put- で、朝鮮語には後置の補助動詞が観察される。

「封じ込める」の表現は (K) nöh-go mirpyoi#ha-「入れて《密閉》する」(M) bitüümžil-: cover- (U) muhrla-: seal- で、朝鮮語には前置の補助動詞が観察される。

4.2.4. 周囲への方向：～まわる、～まわす

まず「～回る」についてみると、「歩き回る」の表現は (K) dor-’a#dani-: go.around-CVB.PFV#commute- (M) ijš tijš alxl-: here there trot- (U) aylan-ib yur-: go.around-CVB.PFV walk- で、朝鮮語とウズベク語には前置の補助動詞が観察され、モンゴル語では副詞による表現となっている。

「探し回る」の表現は (K) caj-’a#dani-: look.for-CVB.PFV#commute- (M) xaj-: look.for- (U) qidir-ib yur-: look.for-CVB.PFV walk- で、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞が観察される。

「逃げ回る」の表現は (K) domar=’ur dani- 「《逃亡》を 行き来する」 (M) zugt-: run.away- (U) qoch-ib yur-: run.away-CVB.PFV walk- で、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞が用いられている。

「はしゃぎ回る」の表現は (K) ddui-’o#nor-: run-CVB.PFV#play- (M) toglo-: play- (U) o’yna-b yur-: play-CVB.PFV walk- で、朝鮮語では前置の補助動詞、ウズベク語では後置の補助動詞が用いられている。

「見回る」の表現は (K) dur-rə#bo-: wind-CVB.PFV#look- (M) [ergen tojrn]-oo xar-: [surrounding]-REFL look- (U) qara-b yur-: look-CVB.PFV walk- で、朝鮮語では前置の補助動詞、ウズベク語では後置の補助動詞が用いられ、モンゴル語では再帰の要素が付いた目的語相当の名詞による表現が用いられている。

次に「～まわす」についてみると、「追いかけまわす」の表現は (K) jjoc-’a dani-: chase-CVB.PFV commute-(M) xöö-: chase- (U) quv-ib yur-: chase-CVB.PFV walk- で、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞が用いられた。

「連れまわす」の表現は (K) mosi-go dani-: guide-CVB.IPFV commute- (M) daguul-aad jav-: bring-CVB.PFV go- (U) aylan-tir-ib yur-: go.around-CAUS-CVB.PFV walk- で、朝鮮語では後置の補助動詞、ウズベク語では前置の補助動詞が用いられている。

「撫でまわす」の表現は (K) ssudadum-: stroke- (M) enxrijl-: caress- (U) sila-: stroke- で、対応表現は観察されない。このことはここで調査している他の動詞とは違って、この表現では主語自体が移動しないためであると考ええる。

「乗りまわす」の表現は (K) ta-go dor-’a dani-: ride-CVB.IPFV go.around-CVB.PFV commute- (M) un-: ride- (U) hayda-b yur-: drive-CVB.PFV walk- で、朝鮮語とウズベク語で後置の補助動詞が用いられている。

「見まわす」の表現は (K) dur-rə#bo-: wind-CVB.PFV#look- (M) [ergen tojrn]-oo xar-: [surrounding]-REFL look- (U) (atrof-ga) qara-: (surrounding-DIR) look- で、朝鮮語では前置の補助動詞が用いられ、モンゴル語とウズベク語では名詞項が用いられている。

4.2.5. ある目標に向かっての動き：～かえす、～わたす、～わたる

まず「～かえす」についてみると、「送り返す」の表現は (K) dor-ry-ə bonai-: turn-TRVZ-CVB.PFV send- (M) bucaa-ž jav-uul-: return-CVB.IPFV go-CAUS- (U) qaytar-ib yubor-: return-CVB.PFV send- で、3言語とも前置の補助動詞を用いている。

「取り返す」の表現は (K) doi-caj-: regain(inverse-look.for)- (M) bucaa-ž av-: return-CVB.IPFV take- (U) qaytar-ib ol-: return-CVB.PFV take- で、3言語とも前置の補助動詞を用いている。

「言い返す」の表現は (K) doi-bad-’a-ci-: talk.back(inverse-get)-CVB.PFV-EMPH- / mar#daiggu#ha-: word#reply#do- (M) esergüüç-e-n üg xel-: resist-E-CVB.MOD word say- (U) javob qaytar-: answer return- で、朝鮮語では接頭辞が用いられている。モンゴル語とウズベク語では分析的な表現を用いている。

「奪い返す」の表現は (K) doro bbai’as-: back rob(pull.CVB.PFV#rob)- (M) bucaa-ž av-: return-CVB.IPFV take- (U) qaytar-ib ol-: return-CVB.PFV take- で、朝鮮語では副詞、モンゴル語とウズ

ベク語では前置の補助動詞が用いられている。

「引き返す」の表現は (K) doi-dor-'a#ga-: inverse-turn-CVB.PFV#go- (M) buc-: return- (U) qayt-ib bor-: return-CVB.PFV go- で、朝鮮語では接頭辞、ウズベク語では前置の補助動詞が用いられている。

次に「～渡す」についてみると、「引き渡す」の表現は (K) nöm-gi-ɔ#ju-: go.over-TRVZ-CVB.PFV#give- / gōnnō-i#ju-: cross.CVBPFV#give- (M) xülee-lge-n ög-: receive-CAUS-CVB.MOD give- (U) topshir-: commit- で、朝鮮語とモンゴル語では前置の補助動詞が用いられ、ウズベク語では語彙的に「～渡す」の意味を含む動詞が用いられている。ただこの動詞の場合、元の日本語の複合動詞において前項動詞の「引く」はもはや語彙の意味を失い接頭辞化している。

「明け渡す」の表現は (K) nai#ju-: take.out.CVB.PFV#give- (M) ald-: lose- (U) taslim qil-: surrender do- で、朝鮮語では前置の補助動詞が用いられ、ウズベク語では語彙的に「～渡す」の意味を含む動詞が用いられている。ただしこの動詞でも日本語の複合動詞において前項動詞は元の意味を失っている。

「言い渡す」の表現は (K) nairi-: pass.a.judgement- (M) ono-: hit- (U) (hukm) chiq-ar-: (judgement) go.out-CAUS- で、3言語とも定型の慣用的な表現であるという。

「見渡す」の表現は (K) dur-rɔ#bo-: wind-CVB.PFV#look- (M) tojr-uul-a-n xar-: go.around-CAUS-E-CVB.MOD look- (U) (atrof-ga) qara-: surrounding-DIR look- で、朝鮮語とモンゴル語に前置の補助動詞が用いられ、ウズベク語では〔名詞+格〕の項が用いられている。

次に「～わたる」についてみると、「冴えわたる」の表現は (K) marg-goi bic#na-go 'iss-: clear-CVB.FIN light#come.out- (M) gij-: brighten- (U) porla-b tur-: shine-CVB.PFV stand- で、朝鮮語では後置の補助動詞、ウズベク語では進行の補助動詞が用いられている。

「知れわたる」の表現は (K) nörri 'ar-ry-ɔ#ji-: widely know-TRVZ-CVB.PFV#become- (M) tarx-: spread- (U) (mish-mish) tarqal- (rumor) spread- で、朝鮮語では副詞が用いられている。モンゴル語とウズベク語では補助動詞の意味が本動詞として実現しており、主動詞に対応する表現がない。

「晴れわたる」の表現は (K) marg-: clear- (M) celm-: clear- (U) osmon musaffo: sky clear で、3言語のいずれにも対応表現がない。

「響きわたる」の表現は (K) urry-ɔ#pöji-: sound-CVB.PFV#expand- (M) cuurajt-: sound- (U) jarangla-: echo- で、朝鮮語でのみ後置の補助動詞が用いられている。

「満ちわたる」の表現は (K) gadug#ha-: full#do- (M) düür-g-: fill-TRVZ- (U) to'ldir-: fill- で、3言語のいずれにも対応表現がない。

4.3. 密度、強度の相（心理的相）：～とおる、～つめる

まず「～とおる」についてみると、「沁みとおる」の表現は (K) sumy-ɔ#duur-: soak-CVB.PFV#enter- (M) nevt norg-: through wet- (U) singi-b ket-: absorb-CVB.PFV leave- で、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞、モンゴル語では副詞が用いられている。

「透きとおる」の表現は (K) tumyɔŋ#ha- 「《透明》する」 (M) tungalag baj-: clear be- (U) ko'r-in-: look-PASS- で、3言語のいずれにも対応表現がない。

「突きとおる」の表現は (K) dduurh-: hole- / goanton#ha- 「《貫通》する」 (M) nevt xarv-: through shoot- (U) kir-ib ket-: enter-CVB.PFV leave- で、モンゴル語で副詞的表現、ウズベク語で後置の

補助動詞が用いられている。

「まかりとおる」の表現は (K) *ton'yon#doi-go 'iss-* 「《通用》なっている」 (M) *javdal baj-: progress be-* (U) *toqat qil-in-: permissible.range do-PASS-* で、3 言語のいずれにも対応表現がない。

次に「～つめる」についてみると、「追いつめる」の表現は (K) *mor-'a#noh-: chase-CVB.PFV#release-* (M) *muxard-uul-: come.to.a.deadlock-CAUS-* (U) *quv-ib qo'y-: chase-CVB.PFV put-* で、モンゴル語では語彙的に対応する意味の語が用いられ、朝鮮語とウズベク語では後置の補助動詞が用いられている。

「思いつめる」の表現は (K) *ddo#or-ri-: float.CVB.PFV#go.up-TRVZ-* (M) *bod-o-ž šanal-: think-E-CVB.IPFV worry-* (U) *o'yla- / o'yla-b tur- think- / think-CVB.PFV put-* で、モンゴル語と朝鮮語で後置の補助動詞、ウズベク語でも進行アスペクトの補助動詞が用いられている。

「敷きつめる」の表現は (K) *ggar-: spread-* (M) *devs-: spread-* (U) *yoyib qo'y-: spread-CVB.PFV put-* で、ウズベク語で後置の補助動詞が用いられている。

「問いつめる」の表現は (K) *ddajy-ɔ#mud-: make.sth.clear-CVB.PFV#ask-* (M) *asuu-ž šalgaa-: ask-CVB.IPFV press-* (U) *so'ra- / so'roq qil-: ask- / interrogation do-* で、朝鮮語で前置の補助動詞、モンゴル語で後置の補助動詞となっている。

「見つめる」の表現は (K) *bara#bo-: hope.CVB.PFV#look- / cy-ɔda#bo-: upward-CVB.SIM#look-* (M) *širt-: stare-* (U) *qara-b tur-: look-CVB.PFV stand-* で、朝鮮語で前置の補助動詞、ウズベク語では進行アスペクトの補助動詞が用いられている。

5. 日本語の方向等の（統語的）複合動詞の対応表現 —その統合度と位置—

以下の表 2 に本稿の対象 3 言語における日本語の（統語的）複合動詞の対応表現を整理する。

使用した略号はそれぞれ次のような構造を示すものとする。なお「主動詞」とは補助動詞構造などにおいて補助動詞などに伴われている方の動詞のことを指す。「本動詞」とは日本語の統語的複合動詞の対応表現として機能しているものの、（意味の）文法化が起きておらず、本来の語彙的意味のままで働いているものを指す。

—：対応表現が存在せず、単純動詞で示されるもの、頭 V：接頭辞-動詞、補 V：補助動詞-副動詞語尾 主動詞、V 補：主動詞-副動詞語尾 補助動詞、副 V：副詞／名詞-格 動詞、V：漢語動詞など、語彙的意味に対応表現のニュアンスが含まれるような動詞を用いたもの（慣用句的な表現や複数の語による分析的な表現を含む）

言語間における違いは下記で検討するが、日本語の複合動詞後項の意味によっても対応表現の違いに傾向がある。「～回った」「～返した」などでは対象言語でも比較的良好補助動詞が使われている。一方、「～込める」「～わたる」「～とおる」などでは比較的良好補助動詞が使われにくいようだ。

以上のデータに基づき、以下では次の 2 点について分析する：①言語間の統合度の違い、②言語間における対応表現の前置／後置の違い。

表2：本稿の対象3言語における日本語の移動等の（統語的）複合動詞の対応表現

	朝鮮語	モンゴル語	ウズベク語
～続いた	副V	補V	V尾
～上げた	―・V補・V補・V・―	―・―・V補・補V・―	―・補V・V補・V補・―
～上がった	V補・補V・V補・V補・―	V補・V・V補・―・―	副V・V補・V補・―・―
～下ろした	―・V補・頭V・頭V・補V	V補・V補・V補・―・―	V補・副V・V補・―・副V・―
～下した	―・V・補V	―・V・副V	―・V・副V
～下がった	V・V・V補・V・V	V・副V・V補・V・V	V・V・副V・V・V
～下げた	―・―・V・V・V	副V・―・V・補V・―	―・―・V・補V・―
～落ちた	V補・補V・V補・―・―	副V・副V・―・―・―	V補・V補・V補・V補・V補
～込んだ	V補・―・V補・V補・V補	V補・―・V・V・V補	V補・V補・V補・V補・V補
～込めた	―・―・―・V補・V補	―・―・―・―・―	―・―・―・―・―
～回った	補V・V補・V補・補V・補V	副V・―・―・―・副V	補V・V補・V補・V補・V補
～回した	V補・V補・―・V補・補V	―・―・―・―・副V	V補・補V・―・V補・副V
～返した	補V・補V・頭V・副V・頭V	補V・補V・副V・補V・―	補V・補V・副V・補V・補V
～渡した	補V・補V・V・補V	補V・―・V・補V	V・V・V・副V
～わたった	V補・副V・―・V補・―	―・V・―・―・―	V補・V・―・―・―
～とおった	V補・―・―・―	副V・―・副V・―	V補・―・V補・―
～つめた	V補・V補・―・補V・補V	V・V補・―・V補・―	V補・V補・V補・―・V補

5.1. 言語間の統合度の違い

何によってある言語、もしくはある言語形式における統合度を判定するかは難しい問題ではあるが、本稿で扱ってきた諸形式に関して、独立性の低いものから順に並べるならば下記のような序列になるだろう。

接辞＞複合動詞後項＞補助動詞＞副詞を含む分析的表現

そこで[接辞によるもの]（頭V・V尾）を4点、[複合動詞後項]（V複）を3点、[補助動詞によるもの]（補V/V補）を2点、[副詞を含む分析的表現]（副V）を1点、対応する意味を持つ動詞の使用（V）や対応表現がないもの（―）は0点として計算し、これによって定量的に言語間の統合度の違いの分析を試みることにする。なお日本語の諸形式は全てV複としてカウントする。すると結果は次のようになった。

表3：言語間の統合度の違い

日本語	216
朝鮮語	102
ウズベク語	86
モンゴル語	49

この結果は、ウズベク語と朝鮮語ではある程度補助動詞が使用され、朝鮮語ではさらに接頭辞も使用されるが、モンゴル語では対応表現のない例が多かったため生じたものであるといえる。

5. 2. 言語間における対応表現の前置／後置の違い

風間 (2025) で統語的な複合動詞の対応表現を研究した際には、朝鮮語に前置要素が多いという結果が得られた。そこで今回も前置／後置に関する定量的な分析を行う。まず対応する意味による表現 (V) と対応表現なし (—) を取り除き、残りを前置形式 (頭 V・補 V・副 V) と後置形式 (V 尾・V 補) に分けてその数をカウントする。下記の表においてスラッシュの前が前置形式の数、後ろが後置形式の数であり、%は前置の数を全体で割ったもので、いわば「前置率」(小数点第 2 位以下四捨五入) である。

表 4：本稿の対象言語における対応表現の前置／後置の違い

モンゴル語	前置 19/後置 10 (前置率 65.5%)
朝鮮語	前置 22/後置 25 (前置率 46.8%)
ウズベク語	前置 15/後置 29 (前置率 34.1%)

ここでもモンゴル語が他の 2 言語より高い前置率を示すことがわかる。一方、ウズベク語では「下へ・中へ・周りに」といった方向にはかなり一貫して後置の補助動詞を用いることも分かった。なお「～返した」ではモンゴル語の「引き返した」以外は 3 言語ですべてが前置表現であった。逆方向を示す動きは今回の対象 3 言語では動詞の前に表現される強い傾向を持つことがわかる。

6. まとめ

本稿では朝鮮語とモンゴル語、ウズベク語を対象として、母語話者からの聞き取り調査により、これらの言語における日本語の方向をはじめとする意味の複合動詞後項に機能的に対応する表現形式を探った。その結果、朝鮮語とウズベク語は後置の補助動詞をある程度用いるが、モンゴル語はあまり用いないことが分かった。ただしこのような言語間の違いの原因については、今のところまだ説明できていない。

方向をはじめとする意味に関して、モンゴル語は対応表現を用いないことが多く、用いても動詞に前置される要素を使用することが多いことがわかった。風間 (2025) の結果において、モンゴル語はアスペクトや可能／不可能について後置の補助動詞をある程度使用することがわかっている。したがってモンゴル語の補助動詞はアスペクト・可能／不可能と方向で使用に大きな違いがあるということがわかる。ただその原因についても今のところ説明できていない。

本稿では日本語と、朝鮮語、アルタイ諸言語との対照を通じ、方向をはじめとする意味の表現について、まずは実証的かつ定量的な分析を行った点に意味があると考えられる。

[謝辞]

時間を割いて面倒な例文の翻訳をしてくださったコンサルタントの方々に深くお礼申し述べたい。貴重なコメント・御指摘を下された日高晋介氏にもお礼申し上げたい。ただし本稿におけるいっさいの誤謬は筆者の責に帰すものである。

略号一覧 (Leipzig Glossing Rules にないもののみ)

=: 付属語境界 / #: 複合語境界 / ADN: adnominal / ANT: anterior / COMPL: completive / E: epenthetic / EMPH: emphasis / FIN: final / HBT: habitual / IMM: immediative / INTRVZ intransitivizer / PROP: proprietive / SIM: simultaneous / TERM: terminative / TRVZ: transitivity

参考文献

- 姫野昌子 (2018)『新版 複合動詞の構造と意味用法』(初版 (1999) ひつじ書房) 東京: 研究社
- 一ノ瀬陽子・木戸康人・團迫雅彦 (2015)「韓国語を母語とする日本語学習者における統語的複合動詞の習得」『福岡大学人文論叢』47(2): 453-475.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房
- 柏崎雅代・田山のり子(編集代表) (2023)『研究社 日本語複合動詞活用辞典』 姫野昌子監修. 東京: 研究社
- 風間伸次郎 (2022)『日本語の類型』東京: 三省堂
- 風間伸次郎 (2025)「アルタイ型言語における日本語複合動詞の対応表現について」『北方言語研究』15: 97-123.
- 河野六郎 (1955)「朝鮮語」市河三喜・高津春繁(編)『世界言語概説 下巻』東京: 研究社
- 小沢重男 (1983)『現代モンゴル語辞典』東京: 大学書林
- 島田志津夫 (2019)『大学のウズベク語』東京: 東京外国語大学出版会
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』東京: くろしお出版
- 塚本秀樹 (1995)「膠着言語と複合構造」仁田義雄(編)『複文の研究(上)』東京: くろしお出版
- 塚本秀樹 (2012)『形態論と統語論の相互作用 ― 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』東京: ひつじ書房
- 和田学 (2011)「二つの語彙的緊密性 ― 韓国語(と日本語)の複合動詞 ―」『山口大学文学会誌』61: 83-104.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎(編)『朝鮮語辞典』東京: 小学館
- インディアナ大学チュルク・イラン語彙方言学センターのウズベク語-英語辞典
<https://ctild.indiana.edu/Main/Uzbek-EnglishDictionary>. by Center for Turkic and Iranian Lexicography and Dialectology, Indiana University (最終閲覧日: 2024/12/24)

付録：本稿対象言語の日本語複合語に対する対応表現一覧

	朝鮮語	モンゴル語	ウズベク語
降り続く	gʷisog nairi-	ülgeļžen or-	yogʻaver-
追上げる	jjocʻaga-	onoo av-	yetib ol-
抱え上げる	ʻanʻa ʻorri-	tevr- / av-	koʻtarib ol-
掴み上げる	jabʻa duur- / jabʻa ʻorri-	barʻž av-	ushlab ol-
取り上げる	bbaiʻas-	xuraa-ž av-	olib qoʻy-
読み上げる	ʻirg-	unš-	oʻqib chiq-
浮かび上がる	ddoʻorui-	xövž baj-	yuzaga chiq-
駆け上がる	orraga-	ögs-	tur-
跳び上がる	dduiʻoʻorraga-	üsč gar-	yugurib chiq-
起き上がる	irʻona-	bosč ir-	yugurib chiq-
でき上がる	ʻoansəŋdoi-	duusga- / (belen) bol-	tugat-, yozib boʻl-
助け下ろす	doʻoaju-	avarč buulga-	(pastga) tushir- / qutqarib (pastga) tushir-
引きずり下ろす	ggurʻonairi-	tat-ž buu-lga-	(pastga) tushir-
打ち下ろす	nairici-	coxʻ-	ur-
振り下ろす	nairici-	xagal-	pastga siljit-
見下ろす	nairioda bo-	xar- / tolʻd-	qara-
書き下す	jəg-	bič-	yoʻz-
飲み下す	samki- / nəmgi-	zalʻgʻ-	ichib yut-
見下す	ggarbogo ʻiss- / ʻatjabʻa bogo ʻiss-	dord uz-	past nazar bilan qara-
吊り下がる	maidarryoʻiss-	ölgöotej baj-	osilib tur-
垂れ下がる	nurʻəjyoʻiss-	doošoo unži-	osilib tur-
飛び下がる	dduiʻoso murrəna-	üsč xold-	(pastga) sakrab tush-
引き下がる	murrəso-	buč-	(orqaga) qayt-
食い下がる	murgo nəʻəji-	buuž ögöo=güj	qattiq turib ol-
押し下げる	mir-	dooš ergüül-	bos-
吊り下げる	maidar-	ölg-	osib qoʻy-
引き下げる	nairi-	dar-	tushir-
取り下げる	cərhoiha-	bucan tat-	qaytarib ol-
払い下げる	burhaha- / maigagha-	xudald-	sot-

転がり落ちる	gurrə ddər'əji-	(N uruu) önx-	dumalab tush-
滑り落ちる	ddər'əji-	(N deerees) guls-	sirg'alib tush- / sirg'alib tushib ket-
流れ落ちる	hurrənairi-	ursaž baj-	oqib tush-
崩れ落ちる	munəji-	nur-	qulab tush-
抜け落ちる	jjij'əji-	coor-	tushib ket-
押し込む	mir'ənh-	tülxež oruul-	itarib yubor-
思い込む	saingagha-	itg-	o'ylanib qol-
食い込む	pagodur-	šigd-	kirib ket-
吸い込む	bbar'adur'i-	am'sgal-	nafas ol-
走り込む	ddui'ə dur'əga-	güjž or-	yugurib kir-
立ち込める	ja'ugha-	suunagl-	tutunla-
閉じ込める	gadu-	tügž-	qulflab qo'y-
塗り込める	barra-	tür-	surt-
引っ込める	jib'ənh-	tat-	tortib qo'y-
封じ込める	nəhgo mirpyoiha-	bitüümžil-	muhrla-
歩き回る	dor'adani-	ijš tijš alxl-	aylanib yur-
探し回る	caj'adani-	xaj-	qidirib yur-
逃げ回る	domaŋ'tur dani-	zügt-	qochib yur-
はしゃぎ回る	ddui'ənor-	tolgo-	o'ynab yur-
見回る	durrəbo-	ergen tojrnoo xar-	qarab yur-
追いかけてまわす	jjoc'a dani-	xöö-	quvib yur-
連れまわす	mosigo dani-	daaguulaad jav-	aylantirib yur-
撫でまわす	ssuudadum-	enxrijl-	silä-
乗りまわす	tago dor'a dani-	un-	haydab yur-
見まわす	durrəbo-	ergentojrnoo xar-	(atrofga) qara-
送り返す	dorryə bonai-	bucaaž javuul-	qaytarib yubor-
取り返す	doicaj-	bucaaž av-	qaytarib ol-
言い返す	doi-bad-'a-ci- mar#daiggu#ha-	/ esergüicen üg xel-	javob qaytar-
奪い返す	doro bbai'as-	bucaaž av-	qaytarib ol-
引き返す	doidor'aga-	bucł-	qaytib bor-
引き渡す	nəmgəyju- / gənnəyju-	xuleelgen ög-	topshir-
明け渡す	naiju-	ald-	taslim qil-

言い渡す	nairi-	ono-	(hukm) chiqar-
見渡す	durrɔbo-	tojruulan xar-	(atrofga) qara-
訝えわたる	marggɔi bɪnago 'iss-	gij-	porlab tur-
知れわたる	nɔrri 'arrayɔji-	tarx-	(mish-mish) tarqal-
晴れわたる	marg-	celmeg baj-	osmon musaffo
響きわたる	urryɔɔji-	cuurajt-	jarangla-
満ちわたる	gadugha-	düürg-	to'ldir-
沁みとおる	sumyɔdur-	nevt norg-	singib ket-
透きとおる	tumyɔŋha-	tungalag baj-	ko'rin-
突きとおる	ddurh- / goantonha-	nevt xarv-	kirib ket-
まかりとおる	toŋ'yonɔdoigo 'iss-	baj-	toqat qilin-
追いつめる	mor'anɔh-	muxard-uul-	quvib qo'y-
思いつめる	ddɔ'urri-	bodož šanal-	o'yla- / o'ylab tur-
敷きつめる	ggar-	delg-	yoyib qo'y-
問いつめる	ddajyɔ mud-	asuuž šalgaa-	so'ra- / so'roq qil-
見つめる	barabo- / cyɔdabo-	širt-	qarab tur-

On the Corresponding Expressions of Japanese Compound Verbs
in Altai-type Languages -2-

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

This paper examines the linguistic forms in Korean, Mongolian, and Uzbek that functionally correspond to the second elements of Japanese compound verbs, specifically those expressing direction and related meanings. Based on elicitations from native speakers, the study yields several key findings.

Key Findings

- **Cross-linguistic Comparison:** While Korean and Uzbek utilize postposed auxiliary verbs to some extent, Mongolian rarely employs them for these specific meanings. The underlying cause for this typological divergence remains to be explained.
- **Mongolian Characteristics:** Regarding directional meanings, Mongolian frequently lacks a direct corresponding expression altogether. When a correspondence does exist, the language tends to use elements preceding to the verb.
- **Functional Contrast:** According to Kazama (2025), Mongolian does utilize postposed auxiliary verbs to a certain degree for expressing **aspect** and **capability**. This indicates a significant disparity in the use of Mongolian auxiliary verbs between aspectual/modal functions and directional functions—a phenomenon for which a definitive explanation has not yet been reached.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)

資料

チチハル・ダグール語テキスト

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

1. はじめに

2025 年 3 月 17 日から 24 日にかけて、中国黒竜江省チチハル及びその周辺地域にてダグール語の調査を行った。本稿はその際に書き起こすことのできたテキスト 4 編（調査協力者による逐語的な漢語訳とローマ字表記のダグール語に日本語逐語訳を付けたもの）からなる。不明な点も多く残っているが、この状態で発表することにする。意味の不明な個所は XXX で示している。斜字体は漢語である。

テキストの元の録音音声は <http://www.tufts.ac.jp/ts/personal/kazama/SoundMaterials.html> で公開する予定である。なお表記等に関しては詳しくは風間・山田 (2020) を参照されたい。

調査の詳細は下記である。

梅里斯区で、11 年前に鄂彩凤氏 (1939 年梅里斯生まれ) より録音したものを氏の息子さんである多文忠氏の助けを借りて 3 編書き起こした。本稿のテキスト 1~3 がこれにあたる。テキスト中で [] が付いたセリフは多文忠氏のセリフである。鄂彩凤氏には今回もさらに歌を 3 編歌っていただいたが、なお未整理である。

その後、梅里斯よりもさらに南に位置する富拉尔基に行き、富拉尔基よりもさらにかなり南にある罕木岱村の小中学校を訪問した。この学校の先生である郭景林氏 (1967 年罕木岱村生まれ、达斡尔族婚俗国家级非物质文化遗产代表性传承人でもある) より 2 編の話を録音した。その場で一つ短い方の話の書きおこしを手伝っていただき、漢語訳も教えていただいた。本稿のテキスト 4 がこれにあたる。学校では初級・中級の教科書として『达斡尔语 (低年级／高年级)』(富拉尔基区达斡尔语研究室编写 黑龙江省达斡尔语校本教材 (主编)) が使用されているのを見せていただいた。低学年用は 38p、6 課までで、母音や子音ごとに単語が示されたのち、単文が若干ある。高学年用は 59p、16 課であるが、13 課まで来るとやっと若干の文章がある、そこまではやはり単語と単文のみである。単語は親族名称など語彙分野別に示されている。写真や漢語によるダグール文化の紹介などは豊富に書かれている。郭景林氏にはさらに一年生のダグール語の授業を参観させていただいた。生徒は 5 人で、「天(気)は暑い／寒い」「日が昇る」「雲はいくつ」といった単文の復唱を行っていた。

その後、莫彩银氏 (1941 年罕木岱村生まれ) から話と歌をいくつか録音させていただいた。莫雪银氏 (1969 年罕木岱村生まれ) からは歌を 2 編録音させていただいた。莫雪银氏は黒竜江省非物质文化遗产罕木岱传承人である。莫雪银氏は CD 付 164p の歌の本『达斡尔语传唱传统民歌选』の歌い手となっている。『达斡尔语传唱传统民歌选』は 53 編の歌からなり、歌は全編 CD に映像付きで入っている、歌詞は漢字によるダグール語の音表記と漢語訳のみが流れる。

上記調査の際には、大分大学の包联群氏に同行していただき、さまざまな便宜を図っていただき、多大な援助を賜った。包氏の同級生でダグール族である高春梅氏には村への訪問や連絡に関して、多大な便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

風間伸次郎・山田洋平 (2020) 『ダグールの言語と文化 1』アルタイ言語文化論集 2 東京外国語大学。

2. テキスト (ダグール語-日本語逐語訳・漢語訳)

以下、テキスト 1~3 は 2014 年 9 月 20 日梅里斯にて鄂彩凤氏より録音

2-1. 畑の作物と畑の一年

qiaomai jiau haola. goli badaa kiji idebei.
蕎麦のことは言う、「ハオラ」と。粉で練った 食べ物を作って 食べる。

utem bas kiji bolbei. [dal badaa.]
粉菓子 も 作ってもよい。 麵状の 食品¹だ。

darii yas, dakulong, miantiaor nugan boojiirbei.
肩甲骨 (に)、 孔を開ける、 麵と 同じように 落ちてくる。

dal badaa, terii dal badaa elbei. yas, terii
麵状の 食品、 それを 「ダル バダー」と 言う。 骨、それを

jiushi zha yidianryidianr kulong wanle jiu,
ほら 突き刺して 少しずつ少しずつ、 穴が できたら そこで、

mian jiu zheme ya. keeluu badaa..., ee.
蕎麦粉を さあこんな風に 押し込む。 「饅頭 面」だ、ああ。

garaaraa yeshi yii kiibe. aosem elbei.
手で やはり こんな風に 作る。 (黍(稷子米)を)「アオスム」と 言う。

jizimi daguuraar aosem elbei aosem..., aosem...,
黍を ダグール語で「アオスム」と 言う、 アオスム、 アオスムだ。

yoo kiigeer, zhege, zhe jizimi mei dacheng yiqian
何 することで、これ、 この黍は まだ 打ち終わる その前は

jiushi utaadii ye mangarma elbei. neriine,
ほら ああしてさらに 「マンガルマ」とも 言った。名前を、

daipierde jiu mangarma, hongserde, jiao mangarma.
皮が付いているので ほらマンガルマと、 赤いの、 そう言う、 マンガルマと。

¹ *dal badaa* とはそば粉を捏ねてところてん突きのようなもので突き出して筋状にし、そのまま鍋に落として煮て食べる食品であるという。

dawanle yihou jiushi aosem, aosem.
打ち終わった後は すなわちアオスム、アオスムだ。

[*tarie taribei, ker qarqibei, ker sogolbei,*
[畑を 耕す、 どのように 鋤を掛ける、 どのように 世話をする、

namar boloos ker hadbei.
秋に なったら どのように 刈り入れる。

田間作物和一年的田間生活

荞麦叫豪勒。面饭做着吃。饽饽也做着可以。饴饴面。肩胛骨，打窟窿，面条一样，漏下来。那个把他叫做饴饴面。骨头，那个就是扎一点一点窟窿完了就，面就这么压，这就是饴饴面，拿手也是这么做。黍叫稷子米。这样的话，这稷子米没打成。以前就是也叫稷子米带壳儿的。名字，带皮儿就红色的。打完了以后就是稷子米。种地，怎么铲，怎么伺候，秋天到了怎么收割。

2-2. 薬草とキノコ

yoo..., en olor akuu iqiiken aasa,
何だ、これらの人々は 皆 若いのであった、

ter huider ugumin hai keele hunde,
あの二番目の私の娘は ああ お腹が 重くて（妊娠していて）、

mashang yaoshenghaizi, wo hai wa neigeyaocai zoulaide,
もうすぐ 子供が生まれるはずだ、 私はまだあの薬草を掘りに 行っていない、

longdancao elji elbei. yoo..., hai guohe shade, zuochuan,
リンドウ と 言う。 何だ、、さらに 川を渡ったり 何だり、船に乗って、

jiebede sooji barjie, eremqi ele ailda,
船に 乗って それから、 エルムチ（地名） という 村に、

aasenmaa ter em euse ollog olseele.
泊まった、 その 薬 草を 探して取る 人たちは。

tii barji utaa murii hesergeji jiebi sooj garbei.
そうし終えてから すぐ 川を 渡って 船に 乗って 出発する。

utaadii tobukan aili iqii barji,
それから トブカン（地名） 村に行つて から、

utadii, eme eusei oloobei. yaochase meeleebai.
さあ、薬草を 探して取らせる。薬草用のフオークを 担いでいる。

wanle ren..., ter neige tuordi ren, hai nian anmen,
終わって人は、、、その、その 村の 人は さらに 私たちを追い払う、

bacaodianzi dou gei pao huaine, ni shuode,
薬草の生えている所を 全部 悪くしてやるか、と おまえは言うのだ、

qima nian aman, wo zhe duzi haida, huaiyunle.
馬に乗って 私たちを追いかける、 私はこのお腹が まだ大きい、妊娠した。

hahaha, tii barji-e, anmen yiqi zoude ren jiu shuo ya,
ハハハ、そうしてしまって、 私たちの一緒に 行っていた 人がそこで 言うのだ、

ni kedai mandianr, yishi yaoshi bandao shengle,
おまえは何とか ゆっくりして、 そこで もし 途中で 生まれたら、

kezazheng aa, hahaha.
どうすることができるか、 ハハハ。

wanquan wanle jiu, wa longdancao laide.
完全に 終わったら そこで、 リンドウを掘って取って 来るのだ。

xi jiade medgele. bid inie dao
おまえは教えたならわかるだろう。 別のを言えば かえって

ul medeme. [mingcheng buhao fanle.] aa.
〔否〕 わからないだろうか。 〔名称は うまく 翻訳できない。〕 ああ。

[baokuozhiwuleide, dongwuye bushaoleda huli, lang, tuzi...,]
〔植物の類を含め、 動物も 少なくない、 キツネに、 オオカミ、 ウサギ、、、〕

huli huneg elbei daguuraar.
キツネは「フヌグ」と言う、 ダグール語で。

guskee, lang jiu guskee, tuzi jiao taole.
「グスクー」と、 オオカミは すなわちグスクー、 ウサギはすなわち「タオル」だ。

[zai zaodiar paozi shenmede dou you laide...,]
〔もっと以前には ノロジカだ 何だも 全ていたものだが、、、〕

sheyii mog elbei.
ヘビは 「モグ」と 言う。

[jiushi dou wushinianqian ba, zhexie dongxi,
[それは全て五十年前 じゃないか、これらのものは、

wushinianqian dou nengkandao douyou. xianzai hen shao.]
五十年前は 全て見る事ができた、 全ていた。 今は すごく 少ない。]

daguraar uta meege elbei. daguraar jiu
(キノコは) ダグール語で すなわち「ムーグ」と 言う。 ダグール語で すなわち

meege elbei. niakanaar mu..., muer... muge elbei.
「ムーグ」と 言う。 漢語で 「ムー、、 ムーアル、、 ムーグ」と 言う。

daguraar ul xade.
ダグール語で (否) (言う事が) できない。

daguraar yooq ule el, meege barse,
ダグール語で 何とも (否) 言わない、 ムーグで 終わりだ、

daguraar utaa meege barsa. muer shi muer.
ダグール語で すなわち ムーグで 終わりだ。 ムーアル (キクラゲ) は ムーアルだ。

muerjiu utadii muer daguraar yoo elbei ul mede.
ムーアルは すなわち、 ムーアルを ダグール語で 何と言うのか (否) 知らない。

bii daguraar bii bas ul medeme.
私はダグール語で 私 も (否) 知らない。

muer shi hei sede neige. ul med.
キノコ は 黒い色の あれだ。 (否) 知らない。

meege, niaksel mogu elbei. baden neige xine meege.
ムーグ、漢人たちは モーグと 言う。 私たちの方で は ムーグだ。

药用草本植物和蘑菇

这些人都是年轻来的，那个正在怀孕我的第二姑娘，马上要生孩子。我还挖那个药材走来的，叫龙胆草。还过河啥的，坐船，坐船以后，到额鲁木齐（地名）的村庄，住在那里，那些挖药草的人们。然后就渡过河坐船过去了。然后去了 tobukan（地名）村，就挖草药。药叉子扛着。完了，那个屯子的人，还撵俺们，把草甸子 都给破坏呢，你说的，骑马撵俺们，我这肚子还大，怀孕了。然后，俺们一起走的人就说呀，你可得慢点儿，一时要是半道生了，可咋整啊。

完全完了就，挖龙胆草来的。你告诉，你懂的。别的不怎么，明白了。名称不好翻了。包括植物类的，动物也不少的狐狸，狼，兔子，，，狐狸叫 *huneg* 用达斡尔语。狼，狼就 *guskee*，兔子叫 *taole*。再早点孢子什么的都有来的，把蛇叫 *mog*。就是都五十年前吧，这些东西五十年前都能看到都有，现在很少。木耳用达斡尔叫 *meege*。用汉语木耳，叫木耳。用达斡尔语不会说。用达斡尔语什么也不叫，统称 *meege*，用达斡尔语就叫 *meege*。木耳就那样，木耳用达斡尔语叫什么不知道。我用达斡尔语我也不知道。木耳是黑色的那个，不知道。*meege* 汉族人叫蘑菇。我们这边叫 *meege* 也行。

2-3. 木の実について

hulle *elbei.* *tee* *tiimer* *akuutii* *haalisede* *wanniase teri,*
 コウメ²と 言う。 あれは あんな風に 全部 樹の上に 生える、あれは、

murii *tereete* *garji* *marqibei utaa* *tiimer* *iqikee,*
 川の 向こう岸へ 出て 採る、 すなわち あんな風に 小さい、

baade *iqigenee utaa* *tiimer* *yanstie* *aasanma.*
 私たちは小さい頃すなわち あんな 風に 暮らしていた。

yee *sardiiyee* *dagaji* *iqi* *barjie,*
 あれ、 年配の人たちに 随いて 行つて から、

edee tie *akuu,* *tiimer* *haalis* *akuu* *uw bolsee.*
 今はあんなのは みんな、あんな風な 木は みんな なくなった。

zhiwu *shuo* *utaadii* *henpur* *eleg haalse* *bei,* *yoo,*
 植物は 言うに すなわち、 サンザシと 言う樹が あつて、何だ、

hulle *eleg haalse* *bei,* *nyamela* *eleg haalse* *bei,*
 コウメと言う樹が あつて、 クワと 言う樹 あつて、

miele *eleg haalse* *bei,* *utaa* *tiimer* *yanstie* *aase.*
 エゾノウワミズザクラと 言う樹が あつて、すなわちそんな 風 だった。

mieline *jiushi* *utadii,* *jingxiaolier,* *heiserdii.*
 エゾノウワミズザクラ すなわち あんな風だ、 小さい粒ばかりで 黒色のだ。

nyamela eleni, *utaa* *nyamela ortolian* *qeer* *tiimer* *yanstie,*
 クワを 言う、 すなわちクワは 長細い、やや あんな 風だ、

² 漢語では「欧李」。黒龍江地方産コウメ（ニワウメ）近縁種の果実名である。桜桃くらいの大きさで、色も味もすもものに似る。砂糖漬けにして酒のさかなによいという。

holanqeer justie aa.
赤いような 色をしている、 ああ。

hunpur elgenni iimer bangele, aa.
サンザシと いうのは こんな風に 丸い、 ああ。

hulle, hunpur, utaa tiimer yanstie aa. hailse aasaa.
コウメ、サンザシ、 すなわち あんな 風だ、 ああ。 樹 だった。

xiaode shihou jiu meishaochi neige, yeshi.
小さかった 頃は つまり 結構食べた、 それを、 やはり (食べる)。

hulle, hunpur, miele, nyamele, edee, xianzai dou
コウメ、サンザシ、 エゾノウワミズザクラ、 クワ、 今、 今は みんな

meiyou, dou kaihuangle edee, akuu, taria neese.
なくなった。 全部 荒れ地を開墾した、 今や、 全部 開墾してしまった。

oo, tii eteke idi aasaa.
ああ、 そう 今は 食べ なくなった。

tenne madan tianjinqia irsendin,
あの 時に 天津から (人が) 来た時に、

zheng hao door yekee bii elsem,
まさに ちょうど下に ものが あると 言った、

“ta neke kuirer tingeri kete,” eliide.
「あなたたちは 一つ 二つ (ちょっと) 停まって よいか」と 言ったんだ。

tee heese, hai.
すぐに やった (停まった)、 やはり。

kele eleg tiimer yanstie, yoo bas aasaa, yeshi zhiwucai,
舌は言うにはそんな 風だと、 何で も そうなる?、 やはり 植物の野菜は、

nogei kele juu jusen(tii) idegde.
「犬の 舌」草³ (オカオグルマ) は やや酸っぱい、 食べるのに。

³ オカオグルマ：(丘小車、学名：Tephrosia integrifolia subsp. kirilowii) はキク科オカオグルマ属の多年草。かつて、キオン属に含まれていた。日本では本州、四国、九州に分布し、海外では朝鮮、中国、台湾、ロ

utaa tii barjii hajireesee,
すなわち そんな風に 終えて 戻った、

utadii ten kemedede jigaa uwei yoo aoji idbeide,
そんな風に その頃には お金が 無い、 何を 買って 食べられようか、

hajirede nogei keli aqiredi yak baisebei.
帰った時に 「犬の 舌」 草を持って来て、 すごく 喜んだ。

terin idi aasema aasaa, aa.
それを (我々は) 食べて 来たの だった、 ああ。

nogii kele, aa, nogii kele elbei, ee, daguuraaraa.
「犬の 舌」 草、 ああ、 「犬の 舌」 草と言う、 そう、 ダグール語で。

nyakanar ye, nogii kele nn.
漢語で も、 犬の 舌だ、 うん。

nogii kele, jinlinmaa kele bas aasaa,
「犬の 舌」 草、 「ツバメの 舌」 草というの も あった、

nariiken jinlinmaa kelin utaa tiimer.
細い 「ツバメの 舌」 草とは すなわち あんなだ。

akuu tiimer jisun, terin.
全部 あんな風に 酸っぱい、 あれは。

[jinlinmaakelin bii medeuwme.]
[「ツバメの 舌」 草とは 私は 知らない。]

aa, nogei kelin medebixie.
ああ、 「犬の 舌」 草はおまえは知っているのか？

[nogei keli elbei. nogei keli jiu utkai hanhua suanbujiang.]
[「犬の 舌」 草と言う。 「犬の 舌」 草 とはすなわち 漢語は 「酸布醬」 か。]

aa, tii tiimer, ee, kuanqierdii, eng. sardiisul
ああ、 それは そんなだ、 ああ、 少し広い、 ああ。 年輩の人たちは

シア、モンゴルに分布する。生育場所は乾いた日当たりのよい草原に自生する。以上、この註の内容は Wikipedia による。

utaadi, kumele marji hajir boloosoo,
すなわち、マンシュウヒトツバヨモギを 採って 戻ると なれば、

utadii nogei keli marj aqirbei.
すなわち「犬の 舌」草を 採って 持って来た。

tii barji utadi mande idelgelaasee, utaa tiimer.
そうしてから あんな風に 私たちに 食べさせた、つまり あんな風に。

hailastie gajir iqeese, miel yekee marji aqir ukbei.
樹のある 地域に 行けば、クワなどを 採って 持って来て くれた。

miel elee, hunpur elee, nyamele elee, eng.
クワを 言う、サンザシを 言う、エゾノウワミズザクラを 言う、 うん。

edee tiimer uwei. duruku akuu dao uwei
今は そんな風なのは ない。 買う人はもう むしろ いない、

nuge, timer haalise uwei bolloo.
そんな風だ、あんな 樹は 無く なってしまった。

[uw bolsee, uw bolsee.] edee nianqingren shuo
[なく なった、なくなった。] 今 若い人たちが 言うには、

hunpur hulle elgei akuu ul mede,
サンザシや コウメというものを 全部 (否) 知らない、

ujiji guolesee jak. women duoshao zhidao
見た こともない ものだ、と。 私たちはいくらかは 知っている、

dianr ye shi, baa nakama medeeba.
少し、 やはり それは、 私たちはいくらかは 知っている。

longdancao, bii ailaji ul xadema.
リンドウは、私は 翻訳 (否) できないよ。

关于坚果

叫欧李子。那样都树上生长的，那个，江对面过去采摘，就那样 小的，我们小的时候就那样生活来的。老人们跟着去然后，现在那样的树都没了，都没了。植物说就是，叫山楂树，叫欧李子树，叫桑椹树，叫稠李子树，就那样。稠李子就是那样，精小的粒，黑色的。叫桑椹，就是桑椹长一点儿， 那个样子，红一些颜色的。叫山楂这样园的。欧李子，山楂，就是那样

の樹来的。小的时候就没少吃那个，也是。欧李子，山楂，稠李子，桑椹，现在，现在都没有。都开荒了现在，都开荒了。没少吃来的。那次有人从天津来的时候，我正在下边儿我说，你们稍微停一下，说了。就停了，还。叫舌头那样的，也有来的。也是植物菜，狗舌头草酸酸的，吃的。就那样完了回来了。那样那个时候没有钱，能买什么吃呀，回来后，狗舌头草带回来，非常高兴。狗舌头，叫狗舌头，用达斡尔语。用汉语也狗舌头。狗舌头，燕子舌头草也有来的，细的燕子舌头草就那样，都那样酸，那个。我不知道燕子舌头草。你知道狗舌头草吗？叫狗舌头草，狗舌头草汉语就酸布酱。那个那样，宽一点的，嗯。老人们就那样的，采摘库木勒回来的时候，就狗舌头草采回来。然后就给我们吃来的，就那样。去有树的地方，采桑粒什么的采摘回来给我们。桑粒什么呀，山楂呀，稠李子呀，嗯。现在那样没有。买的人比较少，那样儿，那样的树没有了变的。没有了没有了。现在年轻人说，hunpur hulle 什么的都不知道，没看见过呀。我们多少知道点儿，也是，我们多少知道点儿。龙胆草，我翻译不了。

2-4. おじいさんと孫が卵を食べる話

2025 年 3 月 20 日富拉尔基市罕木岱村にて郭景琳氏より録音

enneke xine utaaqi omolotiele.

これ は おじいさんが 孫と。

eneke unnuge idegei, nek jaanasa.

これは 卵を 食べる、ある 話だ。

jaan ixine, ene omolo ene guiji hailasa-da.

さあこれは、この孫は こいつは走って (家に) 帰ったのだ。

jaa, uji oloso, huala deer. ene utaaqi,

さあ、見て見つけた、オンドルの 上に。 このおじいさんが、

neke ho airga soolekese, neke hendege soolekese.

一つの 瓶の酒瓶を 置いてあった、一つの 盃を 置いてあった。

hehe, caacugadine he, neke unnege tiereldii-ba.

さあ、お椀の中には さあ、一個の 卵が 置いてあった。

ensin san jaka bisiduwei. jaa ordene kemii, anii uduudur

これは 良い もの じゃないか。 さあ以前の 時には、 誰が毎日毎日

timii antii unnugu idi orobiida, timmer bixide.

そんな 風に卵を 食べることが できたろうか、そう じゃないか。

jaa gente uirii baraa haana hanii gaacii-ba.

さあすぐ すなわち たくさんどこからやって来て 出たんだろう。

ara utaaqi, “bii ene, yamar argara enene,”
 ああおじいさん、「私は これは、どんな やり方でこれは、

utaaqi enene unnegin, nek idegi olsaasa, aa tamciejiba.”
 おじいさんの この 卵を、 一つ 食べることに なれば、 ああ。」と 考えた。

jaa, tigjie holasa, “dagala dagala, unnuge hailajuuxie,
 さあ、 そうして考えて、「おじいさん おじいさん、 卵を 食べさせてくれませんか、

mojuxi saanina immer ajuxia, xijji airga ooyiigaa,
 毛主席の指導の下、 私たちはうまくできた、 あなたはお酒を 飲むがよい、

biiqi unnegexine, iidigiya.”
 私は あなたの卵を 食べてしましましょう。」

jee, ene utaaqi, uji bara hoo ororowei.
 さあ、 このおじいさんは、 見 終えて、 とても 頑固というわけではなかった。

gee, melesen, nimii qikergejiba. jaa,
 さあ、 考えた、 オレを からかっているのかと。 さあ、

kerkii bii-de uwei, ensine kettige omolo, janana.
 どうするにも（仕方が） ない、 こいつは何歳の 孫なんだ、 ああ。

andaragala iimiyanti. haoyaraa, gashka iimiyanti bixie.
 生活は こんな風だ。皆、 （自分）一人 こんな風 じゃない。

ollo akuu iimiyanti. akuu mokoro bixii-da.
 他の人も皆 こんな風だ。皆 貧しい じゃないか。

neke unnuge ide boloso, haanabida.
 一つの 卵を 食べると なったら、 食べてしまうんじゃないか。

jaa, bii enxine ike xiige nasaati bolso,
 さあ、 私はこんなに 多 大な 年齢と なった、

idu ide yeke bii-de, nek ailga ooi oloso,
 食べ物を食べる ことで あろうと、 ちょっと 酒を飲むことに なったら、

ballaa-da. jaa, tannama jaannajiba.
 すごくいいぞ。 さあ、 それで 歌を歌っている。

“dagala, dagala, unnuge hailajumie
「おじいさん、おじいさん、卵を 食べさせてくれませんか、

mojuxi sainina immer ajubei.”
毛主席の指導の下、 こうして 暮らしている。」

“xiiji unnege idi gee. biiqi argaa oojiigia jaa, ide-le.”
「おまえは 卵を 食べるがよい。 私は酒を 飲もう、さあ、 食べよ。」

关于爷爷和孙子吃鸡蛋的事情

这个是爷爷和孙子俩的对话。说的是关于吃鸡蛋的事情。这个孙子啊，跑回家来了。看到炕上的东西了。这位老爷爷身旁放着酒壶和一个酒杯。诶呀，旁边儿的碗里，放着一颗鸡蛋。这可是好东西呀。哎呀在过去的时候，谁能这样天天吃到鸡蛋啊。是不是这样啊？这他么孩子很惊奇。哎呀，我用什么办法，哄爷爷呢，把爷爷的鸡蛋吃到嘴里，该多好啊。有口水了。他想了想说，爷爷，爷爷，鸡蛋能不能给我吃。在毛主席领导下，咱们过的多好啊，您就把酒喝了吧。我把鸡蛋吃了呗。哎，这个老爷爷看了看孙子，啊呀呀，你这个小家伙。你逗我呢啊。哎呀，咋整啊，这才几岁的娃娃呀！大家生活都是这么难，不仅仅咱家这样啊。别人也都如此。都比较贫困。吃一个鸡蛋，就吃了吧。哎，我都这么大年龄了，吃不吃能咋滴，能喝上酒就挺好了。所以唱着歌儿。我不是舍不得鸡蛋啊，在毛主席领导下，我过的多好啊，你把鸡蛋吃了吧，我就把酒喝了吧。

修士論文 要旨

Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil

Hayato KOBAYASHI

(Master's Program in Global Studies, Language and Culture Studies Course)

Keywords: Tamil, Dravidian languages, noun modifying clauses, corpus-based study

0. Introduction

The purpose of this paper is to present an overview of the constraints on attributive clauses in Tamil¹, a South Dravidian language mainly spoken in Tamil Nadu, India. This paper first provides some preliminaries on attributive clauses in Tamil (§1). Sections 2 and 3 show some previous research and indicate its limitations. Section 4 explains the methodology used in this research. Then, Section 5 shows the results and discussion of the study. Lastly, Section 6 concludes the paper. Some punctuation marks and fonts are used in example sentences as needed: [brackets] for noun modifying clauses (NMCs), including attributive clauses; **boldface** for head nouns.

1. Preliminaries

Before moving on to the main discussion of the paper, I will provide some preliminaries on attributive clauses in Tamil. The term “attributive clause” in this paper refers to the clause that covers both European relative clauses and appositive clauses² (Comrie 1998: 51). From another syntactic perspective, Teramura (1992) classified two types of noun modifying clauses in Japanese: “inner-relationship” and “outer-relationship.” In this paper, the term “inner-relationship” noun modifying clause refers to the clause whose construction is equivalent to European relative clauses, and the term “outer-relationship” noun modifying clause refers to the clause whose construction includes appositive clauses.

Tamil has a construction that can be called this “attributive clause”; this construction can be used for both inner-relationship and outer-relationship NMCs, as in (1) and (2). This is why Comrie (1998) counted this construction as the attributive clause, the typical construction found in Asian languages. In this paper, I will use the “attributive clause” for this construction, so the terms in previous works are adapted. *-a* in the examples below is an attributive marker for the present and past tense, and *-um* in (2) is an attributive marker for the future tense. In (1), the head noun *naay* functions as an argument (here, subject) in the modifying clause, as in (1'), whereas in (2), the head noun *aacai* cannot function as an argument in the modifying clause.

- (1) [*kumaar-ai-k kaṭi-tt-a*] ***naay***
 PN-ACC beat-PST-ATTR dog
 ‘the dog which bit Kumar’
- (1') *oru naay kumaar-ai-k kaṭi-tt-atu*
 one dog PN-ACC bite-PST-3SG.N
 ‘A dog bit Kumar’ (adapted from Lehmann 1993: 288)³
- (2) *kumaar-ukku [amerikkaa-v-ukku-p poo-kiṛ-a/poo-k-um]* ***aacai*** *iru-kkiṛ-atu*
 PN-DAT America-DAT go-PRS-ATTR/go-FUT.ATTR desire be-PRS-3SG.N
 ‘Kumar has the wish to go to America’ (adapted from Lehmann 1993: 294)

¹ Based on previous studies and research methods, this paper deals with the standard written variety of Tamil, *centamiṇ* ‘beautiful Tamil’ unless otherwise noted. In this paper, Tamil scripts will be transliterated according to Lehmann (1993: xvii–xviii). A dot (·) used in the data indicates the result of the operation of the morphophonological rule or the morphological process of reduplication (Lehmann 1993: xix).

² Comrie (1998) used the term “fact-S construction” instead of “appositive clause.” The concepts of “fact-S construction” and “appositive clause” may not be necessarily identical, but when taking into account “inner-relationship” and “outer-relationship” of NMCs, both can be regarded as “outer-relationship.” Therefore, I will not delve into the detailed examination of these terms and will instead follow previous researches, such as Lehmann (1993) by using the term “appositive” in this paper.

³ Lehmann (1993) and others used the term “adjectivalizing suffix” instead of “attributive marker” for the suffix in question.

2. Previous research

This section introduces previous research on two types of attributive clauses in Tamil: inner-relationship in section 2.1, and outer-relationship in section 2.2. In addition, section 2.3 deals with complement clauses that have a form similar to that of an attributive clause.

2.1. Inner-relationship attributive clauses

There are some works on inner-relationship attributive clauses such as Lehmann (1993), Annamalai (1997)⁴, Rajendran (2016), and Kobayashi (2023). It is widely said that the relativization (i.e., “attributivization” in this paper) of an NP on the adjectival clause (i.e., “attributive clause”) strategy is very much constrained (Lehmann 1993: 287). For example, subject NMCs of verbs can function as the heads of the attributive clause while sociative NPs cannot head the concerned clauses, as in (3) and (4).

- (3) [*malar-nt-a*] *puu*
bloom-PST-ATTR flower
‘the flower which blossomed’

- (3') *puu malar-nt-atu*
flower bloom-PST-3SG.N
‘the flower bloomed’

(adapted from Rajendran 2016: 120–121)

- (4) **[raatai va-nt-a]* *kaṇṇan*
PN come-PST-ATTR PN

(adapted from Rajendran 2016: 128–129)

- (4') *raatai kaṇṇan-ooṭu/uṭan va-nt-aal*
PN PN-SOC come-PST-3SG.F
‘Radha came along with Kannan’

(adapted from Rajendran 2016: 128–129)

Table 1 shows the constraints on head nouns of inner-relationship attributive clauses presented in Lehmann (1993), Annamalai (1997), Rajendran (2016), and Kobayashi (2023). “+/-” in the table shows whether concerned NPs can be attributivized or not. The conditions are specified below “+/-” if there are any constraints on attributivizing them. “N/A” in the table indicates that there was no detailed explanation for the relevant part.

Table 1: Constraints on head nouns of inner-relationship attributive clauses in previous research⁵

NP	Lehmann (1993)		Annamalai (1997)		Rajendran (2016)		Kobayashi (2023)	
SU	+		N/A		+		N/A	
DO	+		N/A		+		N/A	
IO	+		+		+		N/A	
POST	+	-	-		-		N/A	
	‘in the middle of’	mostly						
DAT	+	-	+	-	+		+	-
	goal / subject	purpose	goal	default			goal / subject / purpose	time / proportion
INST	+	-	+	-	+	-	N/A	
	means / material	reason	material	reason	N/A			
LOC	+	-	N/A		+	-	+	-
	-il	-iṭam			-il: receiver	-iṭam goal	-il / head-iṭam	default
ABL	+	-	+	-	+	-	+	-
	head-ABL	default	head-ABL	default	N/A		-iliruntu / head-iṭamiruntu	default
SOC	-		-		-		N/A	
GEN	-		N/A		+	-	+	
					alienable / inalienable	with certain case		
OCOMP	N/A		-		-		N/A	

(adapted from Lehmann 1993, Annamalai 1997, Rajendran 2016, and Kobayashi 2023)

⁴ Annamalai (1997) mainly used the spoken variety of Tamil.

⁵ In Table 1, NP positions in the simplex main clause are arranged according to the Accessibility Hierarchy in Keenan and Comrie (1977: 66): SU (subject) > DO (direct object) > IO (indirect object) > OBL (major oblique case NP) > GEN (genitive) > OCOMP (object of comparison).

2.2. Outer-relationship attributive clauses

Table 2 summarizes the previous studies on constraints on head nouns and the relationship between nouns and clauses of outer-relationship attributive clauses.

Table 2: Categories of head nouns and clauses of outer-relationship attributive clause

About head nouns:	
Lehmann (1993)	mostly abstract nouns
	(i) “news” nouns (ii) “thought” nouns
	(iii) “reason” nouns (iv) “sensory” nouns
Rajendran (2016)	(v) nouns of emotions and feelings (vi) “picture” nouns
	(vii) nouns like “state” or “condition” (viii) nouns like “habit”
	(ix) nouns like <i>aḷavu</i> ‘amount,’ <i>vitam</i> ‘manner,’ etc.
	(x) nouns indirectly related to the attributivized verb
About clauses:	
Lehmann (1993)	the clause describes the reason for what is expressed by the NP
	(i) subject attributive clause (ii) object attributive clause
Annamalai (1997)	(iii) causal attributive clause (iv) genitive attributive clause
	(v) temporal attributive clause (vi) attributive clause of comparison
Rajendran (2016)	Compressed noun modifying expressions

(adapted from Lehmann 1993, Annamalai 1997, and Rajendran 2016)

According to Lehmann (1993: 293), the outer-relationship attributive clause has the function of describing or characterizing the content of the head NP. See (5).

- (5) [*aan kuzantai pira-nt-a*] *anta-c cantooṣam-aṇa ceyti-y-ai-k keet-ṭ-ēen*
 male child be.born-PST-ATTR that happiness-ADJZ news-ACC hear-PST-1SG
 ‘I heard that happy news that a male child was born’ (adapted from Lehmann 1993: 293)

Annamalai (1997) classified outer-relationship attributive clauses into six types in terms of the relation between the head NP and its clause: (i) subject attributive clause, (ii) object attributive clause, (iii) causal attributive clause, (iv) genitive attributive clause, (v) temporal attributive clause, (vi) attributive clause of comparison.

According to Rajendran (2001, 2016), head nouns of outer-relationship attributive clauses are called “non-argument nouns,” compared with “argument nouns,” which are the head nouns of inner-relationship attributive clauses. Rajendran (2016: 134) said that not all the non-argument nouns can head the NMCs, and only a set of nouns that is capable of expressing abstracting or objectivizing the information contained in the attributive clause can head the NMCs. Those nouns include abstract nouns like *ceyti* ‘news’, *viṣayam* ‘matter’, *karuttu* ‘opinion’, *uṇmai* ‘truth’, etc. Rajendran (2016) classified these kinds of head nouns of outer-relationship attributive clauses according to Teramura (1969) and Peter and Pardeshi (2015) as follows: (i) “news” nouns, (ii) “thought” nouns, (iii) “reason” nouns, (iv) “sensory” nouns, (v) nouns of emotions and feelings, (vi) “picture” nouns, (vii) nouns like “state” or “condition,” (viii) nouns like “habit,” (ix) nouns like *aḷavu* ‘amount,’ *vitam* ‘manner,’ etc., (x) nouns indirectly related to the attributivized verb. Moreover, Rajendran (2016: 140) infers that the noun modifying expressions (NMEs) headed by certain nouns require more information for the proper understanding of them as in (6), and this kind of NME is called Compressed NMEs.

- (6) [*irav-il kaṣivairai-kkup poo-ka-p payappaṭ-um*] *katai*
 night-LOC toilet-DAT go-INF be.afraid-FUT.ATTR story
 ‘the story which scares one to go to bathroom at night’ (adapted from Rajendran 2016: 140)

2.3. Complement clauses

Tamil has a complement clause with a structure similar to the attributive clause shown in Sections 2.1 and 2.2. “Complement clauses” here refer to the clauses that have complementizers, *eṇra*, *eṇkīra*, or *eṇṇum* in Rajendran (2016). These complementizers can enable finite clauses to modify the noun like (7).

- (7) [*kaṇṇan pooṭṭi-y-il ve-nṛ-aṇ* { *eṇra* / *eṇkīra* / *eṇṇum*}] *ceyti uṇmai*
 PN contest-LOC win-PST-3SG.M COMP / COMP / COMP news true
 ‘The news that Kannan won the contest is true’ (adapted from Rajendran 2016: 145)

Here, in (7), Rajendran (2016: 144) said that *enra*, *enkira*, and *ennum* can be replaced by each other without imparting meaning difference among the sentences which take *enra*, *enkira* and *ennum* as their respective complementizers.

Some complement clauses can be replaced with attributive clauses, while others cannot. According to Lehman (1993: 329), these complements can “occur in free variation as appositive complements to abstract head nouns.” See (8).

- (8) a. [*tiruṭaṇ* *varu-kir-a*] *paya-tt-aal* *kumaar* *tuuṅk-a-v-illai*
 thief come-PRS-ATTR fear-OBL-INST PN sleep-INF-be.not
 b. [*tiruṭaṇ* *varu-kir-aan* *enra*] *paya-tt-aal* *kumaar* *tuuṅk-a-v-illai*
 thief come-PRS-3SG.M COMP fear-OBL-INST PN sleep-INF-be.not

‘Kumar didn’t sleep for fear that a thief would come’ (adapted from Lehmann 1993: 329)

On the other hand, Lehmann (1993: 329) said nouns of perception, such as *cattam* ‘sound,’ *naarram* ‘smell,’ or *uṇarcci* ‘feeling’ cannot take complements.

There are also cases where complements are obligatory. According to Lehmann (1993: 329), complements are required when clauses are with defective verbs⁶ as in (9), or head nouns are the ones that take only interrogative clauses.

- (9) [*kaṭavuḷ* *uṇ-tu* *enra*] *nampikkai* *en-akku* *iru-kkir-atu*
 god exist-3SG.N COMP belief 1SG-DAT be-PRS-3SG.N

‘I have the belief that God exists’ (adapted from Lehmann 1993: 313)

According to Lehmann (1993) and Rajendran (2016), the complements can occur in the conditions shown in Table 3.

Table 3: The conditions for the occurrence of the complements

	Obligatory	Optional	Not allowed
Lehmann (1993)	- clauses with defective verbs - nouns that take interrogative clauses	abstract nouns	nouns of perception
Rajendran (2016)	N/A	abstract nouns	N/A

(adapted from Lehmann 1993 and Rajendran 2016)

3. Overview of previous research and its limitations

First, although the constraints on the inner-relationship attributive clauses are verified, none of the previous studies listed here have presented results from quantitative studies. Second, the classification of head nouns of outer-relationship attributive clauses in Rajendran (2016) seems precise, but, as in the case of inner-relationship attributive clauses, none of the previous studies listed here have presented results from quantitative studies. Thus, the present study will conduct corpus-based quantitative research. As for the clauses, all of the previous classifications seem vague. Particularly the classification of Annamalai (1997) appears to lack consistency, as some categories are based on the syntactic relationship between nouns and clauses, whereas other categories rely on the semantic relationship between them. Furthermore, the conditions for the occurrence of the complements argued in previous research (§2.3) need to be quantitatively verified using a corpus.

4. Methodology

The issues in this paper can be divided into two: [1] the percentage of occurrences of the head NPs in the attributive clause and the structure of each clause, and [2] the conditions for the occurrence of the complements. Thus, this research consists of two subcategories: Research 1 and Research 2. Research 1 deals with the former while Research 2 deals with the latter.

A corpus was chosen as the primary data source in each research to ensure a comprehensive and authentic representation of language use. The Tamil Web 2021 (taTenTen2021) corpus, available via Sketch Engine, was selected for this study due to its extensive size and diverse range of texts. It contains about 820 million words, consisting of sentences collected from websites written in Tamil

⁶ Defective verbs are verbs that cannot occur with all tense, person-number-gender, and non-finite verbal suffixes (Lehmann 1993: 81).

in 2021 and from the Tamil version of Wikipedia. The linguistic structure of interest in this study was identified using Corpus Query Language (CQL) in Advanced Concordance Search. The detailed procedures for each research are described in Sections 4.1 and 4.2.

4.1. Research 1: frequency and structural patterns

To extract instances of the attributive clauses, the following CQL queries were constructed:

[i] present-tense attributive clause

CQL	Filter ⁷
[word="*.கூற"][] {0,0} [tag="NOUN PROPN"] within<s>[] {0,15}</s>	என்கூற (Range: "Token" KWIC±3)

[ii] past-tense attributive clause⁸

[word="*.ந்த"][] {0,0} [tag="NOUN PROPN"] within<s>[] {0,15}</s>	[tag="DET"] (Range: "Token" KWIC)
[word="*.ண்ட"][] {0,0} [tag="NOUN PROPN"] within<s>[] {0,15}</s>	கீழ்க்கண்ட 'following' (Range: "Token" KWIC)
[word="*.ட்ட"][] {0,0} [tag="NOUN PROPN"] within<s>[] {0,15}</s>	↑ (Range: "Sentence" KWIC±1)
[word="*.த்த"][] {0,0} [tag="NOUN PROPN"] within<s>[] {0,15}</s>	நாள் 'day' (Range: "Token" KWIC±3)

For practical reasons, only sentences of 15 words or less were included in the study. Future-tense attributive clauses, which often share identical forms and are difficult to extract using a corpus, are excluded from this study. Furthermore, to avoid texts written in the colloquial style, this research was conducted using a subcorpus Tamil Wikipedia based on the Tamil version of Wikipedia.

Then the following search process was used: First, the CQL queries were executed in Advanced Concordance Search within the TaTenTen2021 corpus on Sketch Engine. Second, the results were filtered to eliminate complement clauses and similar forms. The filters applied in each search are as described above. As a result, [i] 478 examples of attributive clauses in the present tense, and [ii] 240,213 examples⁹ of attributive clauses in the past tense were obtained. From the corpus search results, 300 instances were randomly selected for each as the target of analysis. For past-tense attributive clauses, 60 instances were selected from each verb class for analysis. Since the past stem *ந்த* is used across two verb classes, 120 instances were selected exclusively from this form. During data collection, sentences that did not contain attributive clauses or were duplicates were manually removed.

The 600 example sentences thus obtained were first classified into inner-relationship and outer-relationship attributive clauses according to the structure within the clause. Subsequently, the inner-relationship attributive clauses were further classified based on the original case of the head noun, while the outer-relationship attributive clauses were further classified based on the type of head noun as classified by Rajendran (2016). The results of this research will be shown in Section 5.

4.2. Research 2: the conditions for the occurrence of the complements

Based on the results obtained in Research 1 and considering the bias in head nouns of outer-relationship attributive clauses observed in the subcorpus Tamil Wikipedia, this study examines the whole corpus, including sentences collected from websites written in Tamil in 2021.

This study only focuses on complement clauses with the complementizer *enra* and past-tense attributive clauses for the following two reasons: First, Rajendran (2016: 144) said that *enra*, *enkira*, and *ennum* can be replaced by each other without imparting meaning difference (See §2.3), and *enra* is the most frequent complementizer of the three¹⁰. Second, according to Research 1, the present-tense attributive clauses are significantly lower than the past-tense attributive clauses. The following four head nouns are targeted in this research: *ceyti* 'news,' *ennam* 'thought,' *cattam*

⁷ The filters were set to "Advanced" > keep lines "not containing" > Query type "simple" or "CQL," with the target word or CQL expression specified.

⁸ Traditionally, Tamil verbs are divided into seven classes of which two of them have subclasses, according to the set of tense allomorphs occurring with a particular verb stem (Lehmann 1993: 59). However, this search query can retrieve attributive clauses for only five of the seven verb classes. Although there are only four search queries here, the past stem *ந்த* -nt- is used across two verb classes. It is possible that sufficient results cannot be obtained for head nouns that tend to co-occur with the other two verb classes. This limitation will be addressed in future research.

⁹ The breakdown is as follows: *ந்த*: 90,177; *ண்ட*: 18,636; *ட்ட*: 72,970; *த்த*: 58,430.

¹⁰ In taTenTen2021, the following search counts were obtained: *enra*: 2,616,892; *enkira*: 258,586; *ennum*: 504,129. The fact that *enra* accounts for 77.4% of the total demonstrates its overwhelmingly higher frequency of use compared to the other two.

‘sound,’ and *pinṇar* ‘after.’ The reason for selecting these is based on the classification in Teramura (1992), which discusses the presence or absence of complementizers in outer-relationship attributive clauses in Japanese.

To extract instances of the sentence containing the target clause, the following CQL queries were constructed for each:

[i] past-tense complement clause

[tag="VERB|AUX"][] {0,0} [word="என்ற"][] {0,0} [word="target noun"] within<s>[] {0,15} </s>

[ii] past-tense attributive clause

CQL [word=".*ந்த"][] {0,0} [word="target noun"] within<s>[] {0,15} </s> Filter [tag="DET"] (Range: "Token" KWIC)

For practical reasons, only sentences of 15 words or less were included in the study.

First, to investigate whether the noun in question can be accompanied by a complement clause, the following search process was used: The CQL queries [i] were executed in Advanced Concordance Search within the TaTenTen2021 corpus on Sketch Engine. As a result, 3,051 examples for *ceyti* ‘news,’ 13,519 examples for *eṇṇam* ‘thought,’ 54 examples for *cattam* ‘sound,’ and 66 examples for *pinṇar* ‘after’ were obtained. From the corpus search results, 50 examples were randomly selected for *ceyti* ‘news’ and *eṇṇam* ‘thought’ as the target of analysis. For the other two, all of the examples were analyzed. During data collection, sentences that did not contain complement clauses or were duplicates were manually removed.

Next, based on the results of the first procedure, to investigate whether the nouns that could be accompanied by a complement clause could also be accompanied by an attributive clause, the following search process was used: First, the CQL queries [ii] were executed in Advanced Concordance Search within the TaTenTen2021 corpus on Sketch Engine. Second, the results were filtered to eliminate similar forms. The filters applied in each search are as described above. As a result, 5,715 examples of *ceyti* ‘news’ and 520 examples of *eṇṇam* ‘thought’ were obtained. Then, the examples were compared with the complement clauses. The results are shown in Section 5.2.

5. Results

5.1. Results of Research 1

In this section, I show the results of Research 1, which deals with the percentage of occurrences of the head NPs in attributive clauses and the structure of each clause. The occurrence frequency of inner-relationship and outer-relationship attributive clauses by tense is shown in Table 4. The “?” in the table indicates cases where judgment is unclear.

Table 4: Occurrence frequency of inner/outer relationship attributive clauses by tense

	Present		Past		Total	
Inner-relationship	263	87.7%	290	96.7%	553	92.2%
Outer-relationship	36	12.0%	10	3.3%	46	7.7%
?	1	0.3%	0	0.0%	1	0.2%
Total	300	100.0%	300	100.0%	600	100.0%

As shown in Table 4, inner-relationship attributive clauses are overwhelmingly more frequent than those with outer-relationship attributive clauses, particularly in the past tense, where 96.7% are of the inner-relationship attributive clause. Each attributive clause will be examined in the following Sections 5.1.1 and 5.1.2.

5.1.1. Results related to inner-relationship attributive clauses

First, the structure of inner-relationship attributive clauses will be examined. Table 5 shows the role of NPs within the inner-relationship attributive clause.

Table 5: The role of NPs within attributive clauses

NP	Present		Past		Total	
Nominative	218	82.9%	235	81.0%	453	81.9%
Locative	21	8.0%	28	9.7%	49	8.9%
Accusative	21	8.0%	24	8.3%	45	8.1%
Genitive	1	0.4%	3	1.0%	4	0.7%
Instrumental	1	0.4%	0	0.0%	1	0.2%
Ablative	1	0.4%	0	0.0%	1	0.2%
Total	263	100.0%	290	100.0%	553	100.0%

As shown in Table 5, over 80% of head NPs function as nominative within the attributive clauses, followed by approximately 8–9% functioning as locative or accusative. Genitive, instrumental, and ablative NPs each account for less than 1%. As noted in previous studies, no sociative NPs were observed. Furthermore, no dative and postpositional NPs were observed in this study. (10) is one of the instances that was observed.

- (10) *aanaal* [*viṣu-kir-a*] *veyil-il* *avarrukku* *atikam-aana* *paṅku* *kiṭai-kk-um*
 but fall-PRS-ATTR sunlight-LOC for.them much-ADJZ share get-INF-FUT
 ‘But they will get many shares in the falling sunlight’ [wikipedia.org]

Next, focusing on the high proportion of nominative NPs, the results of the structural analysis inside and outside the attributive clause are presented. Table 6 shows the voice (active or passive¹¹) within the clause of attributivized nominative NPs.

Table 6: The voice (active/passive) within the clause of attributivized nominative NPs

Active		Passive		Total	
361	79.7%	92	20.3%	453	100.0%

From the table above, it can be seen that 20.3% of attributive clauses formed from nominative NPs use passive constructions within the clause. In contrast, in the main clause of the dataset analyzed, only 83 out of 600 instances (13.8%) were expressed in the passive voice. The observed difference in the proportions of active and passive voice between main clauses and attributive clauses formed from nominative NPs is statistically significant, according to Fisher’s exact test ($p = 0.005774$). The significantly higher frequency of passive voice in attributive clauses formed from nominative NPs, compared to main clauses, can be ascribed to the avoidance of making accusative NPs the head noun of the attributive clause. By using the passive voice, it becomes possible to form attributive clauses from nominative NPs, which are at the highest position in the Accessibility Hierarchy in Keenan and Comrie (1977) (cf. §2.1).

5.1.2. Results related to outer-relationship attributive clauses

The occurrence of outer-relationship attributive clauses differs between the present tense and the past tense. First, in the present tense, head nouns frequently include words such as *vakai* (6 out of 36) or *murai* (4), which indicate ‘manner,’ followed by nouns representing *nilai* ‘condition’ or *urimai* ‘right’ (3 each).

- (11) *itu* *cuvai-y-aana* *ceyti-kaḷ-ai* [*makkaḷ-ai* *iir-kkir-a*] *vakai-y-il...*
 this taste-ADJZ news-PL-ACC people-ACC attract-PRS-ATTR manner-LOC
 ‘This... interesting news in a way that attracts people’ [wikipedia.org]

Second, in the past tense, words related to *aḷavu* ‘size’ or *pinṇar* ‘after’ are more common (3 out of 10 each), while *nilai* ‘condition’ appears in only one instance, and *vakai* or *murai* ‘manner’ do not appear at all.

- (12) [*uṇavu* *uṇ-ṭ-a*] *aḷav-il* *paci* *tiir-nt-u* *piṇ* *paci* *u-ṇṭ-aam*
 food eat-PST-ATTR size-LOC hunger end-PST-VP after hunger be-3SG.N-SUPP
 ‘It seems that hunger arises again after it ends, in proportion to the amount of food eaten’ [wikipedia.org]

¹¹ In Tamil, the verb *paṭu* ‘experience’ occurs as an auxiliary verb after a main verb in infinitive form to express the passive voice (Lehmann 1993: 218).

These differences can be ascribed to differences in tense. Furthermore, the lack of nouns representing ‘before’ may be due to the exclusion of the future-tense attributive clause.

Table 7 on the next page shows the frequency for each type of head noun of outer-relationship attributive clauses.

Table 7: Types of head nouns of outer-relationship attributive clauses

	Present		Past		Total	
(i) “news”	2	5.6%	0	0.0%	2	4.3%
(ii) “thought”	1	2.8%	0	0.0%	1	2.2%
(iii) “reason”	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
(iv) “sensory”	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
(v) emotions	1	2.8%	0	0.0%	1	2.2%
(vi) “picture”	1	2.8%	0	0.0%	1	2.2%
(vii) “condition”	5	13.9%	1	10.0%	6	13.0%
(viii) “habit”	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
(ix) ‘amount/manner’	15	41.7%	3	30.0%	18	39.1%
(x) indirectly related	11	30.6%	6	60.0%	17	37.0%
Total	36	100.0%	10	100.0%	46	100.0%

This distribution is likely influenced significantly by the nature of the corpus, specifically the fact that the study is based on a subcorpus Tamil Wikipedia, which has many explanatory passages. In this classification, based on Rajendran (2016), the definition of (x) nouns indirectly related to the attributivized verb is ambiguous, resulting in the inclusion of nouns with diverse meanings, despite the classification being intended to rely on semantic features.

5.2. Results of Research 2

First, out of 54 examples of *cattam* ‘sound’, only 9 were accompanied by a complement clause, while out of 66 examples of *pinṇar* ‘after’, only 3 were accompanied by a complement clause. In the former, many cases involved onomatopoeic words preceding *enṇa*, whereas in the latter, many cases involved another head noun before both *enṇa* and the noun, making it impossible to consider *pinṇar* as being accompanied by a complement clause. For *cattam*, all 9 examples obtained were used not as ‘sounds’ but as ‘voices’ associated with people or similar entities. Therefore, it is unlikely that these can be considered as complement clauses accompanying nouns of perception.

For comparison, examples of attributive clauses where *cattam* is used in the sense of ‘sound’ are also presented in (13).

- (13) [tarai-y-il cappaattu atir-nt-a] *cattam* irav-iṇ nicaptatt-ai-k kizi-tt-atu
 ground-LOC shoes shake-PST-ATTR sound night-GEN silence.OBL-ACC tear-PST-3SG.N
 ‘The sound of shoes shaking the ground tore the silence of the night’ [selvakumaran.com]

On the other hand, examples of *pinṇar* were observed where it appeared to be accompanied by a complement clause. See (14).

- (14) uṅkaḷ-ukku-t teriyum [puli-kaḷ illai enṇa] *pinṇar* uṭaṇaṭi-y-aaka-v-ee
 2PL-DAT know tiger-PL NEG COMP after immediately-ADVZ-EUPH
 ellaam talai-kiiṇ-aak-iṇ-a en-p-at-ai
 all top-bottom-become-PST-ATTR say-FUT-3SG.N-ACC
 ‘You know that everything turned upside down immediately after the tigers were gone’
 [yarl.com]

For the other two nouns, *ceyti* ‘news’ and *eṇṇam* ‘thought,’ 50 examples that were accompanied by a complement clause were collected. See (15) and (16).

- (15) [aṇpaṇaṇ uyir-iṇa-nt-aar enṇa] *ceyti* miku-nt-a
 PN life-lose-PST-3SG.HON COMP news surpass-PST-ATTR
 varuttam-aḷi-kkiṇ-atu
 pain-become-PRS-3SG.N
 ‘The news that Anbazhagan died brings great pain’ [navaiman.com]

- (16) [et-il-um verri per-a veṇṭum enra] **eṇṇam** toonr-um
 which-LOC-CUM success get-INF want COMP thought come.to.mind.INF-FUT
 ‘The thought that [we] must succeed in everything comes to mind’ [paasam.com]

This suggests that, in Tamil, only nouns that have a meaning of perception do not permit the complementizer, supporting the claim made by Lehmann (1993).

Second, I will examine the verbs observed within complement clauses. Defective verbs are the most common (29.1%), followed by past (22.7%), present (14.5%), and negative (10.9%) forms. However, given the limited number of target nouns, it is undeniable that the results are heavily influenced by a single type of noun.

Table 8 summarizes the verb forms in terms of “Tenseless/Tense with another suffix” and “Only tense.”

Table 8: Verbs categorized in terms of tense and tenseless

Tenseless/Tense with another suffix	56	53.3%
Only Tense	49	46.7%
Total	105	100.0%

The table shows that more than half of the verbs observed in the complement clauses are tenseless verbs or verbs with not only tense but also with another suffix or clitic. This suggests that, unlike attributive clauses, the use of complement clauses in outer-relationships noun modifying clauses is motivated by the ability to include tenseless verbs, such as defective verbs, or verbs with suffixes or clitics other than tense suffixes. In attributive clauses, it is not possible to use defective verbs, imperative and negative indicative verbs, or verbs with suffixes other than tense suffixes. Consequently, complement clauses are likely chosen. This partially supports the argument presented in Lehmann (1993) as discussed in Section 2.3. However, Lehmann (1993) did not address imperative and negative indicative verbs, or verbs with suffixes other than tense suffixes.

While *ceyti* ‘news’ can be the head noun for both complement clauses and attributive clauses, *eṇṇam* ‘thought’ does not appear to take outer-relationship attributive clauses. Among the top 50 examples randomly selected from the 520 collected cases, not a single instance of an outer-relationship attributive clause was observed. However, this does not indicate that “thought” nouns obligatorily take complement clauses. As demonstrated in Section 5.1.2, the example of “thought” nouns, *ninaippu* ‘thought,’ accompanied by outer-relationship attributive clauses were obtained from the corpus. Therefore, this suggests that *eṇṇam* may possess unique characteristics independent of its semantic meaning, while this requires further investigation with an expanded dataset for verification. Thus, I will limit this to a hypothesis for now.

5.3. Discussion

In this section, based on the results of Research 1 and Research 2 in previous sections, I will primarily discuss outer-relationship attributive clauses and complement clauses. As already mentioned in Section 5.1.2, in the classification based on Rajendran (2016), the definition of (x) nouns indirectly related to the attributivized verb is ambiguous, resulting in the inclusion of nouns with diverse meanings, despite the classification being intended to rely on semantic features. A category that is considered insufficient in the classification proposed in this paper is “relative nouns.” This category is adopted in the classification of semantic categories of head nouns in Japanese outer-relationship attributive clauses in Teramura (1992). Nouns expressing relative relationships, such as temporal or spatial order, were also observed in Tamil. For example, *pinnar* ‘after’ was one of the most frequent nouns found in Research 1. Annamalai (1997) identified (v) temporal attributive clauses under the classification of attributive clauses, but no mention was made of relative nouns. While further detailed classification may be possible from the perspective of “resultativity,” this requires additional verification due to the limited number of head nouns obtained in this research. Furthermore, whether or not a noun takes a complement clause, as addressed in Research 2, should be added as an axis of this classification. In practice, nouns of perception do not take complement clauses, which provides an objective basis for establishing a category for “nouns of perception.” Similarly, the same can likely be said for the relatively

infrequent relative nouns. On the other hand, *eṇṇam* ‘thought’ does not appear to take outer-relationship attributive clauses. That is, it seems that the use of complement clauses is obligatory.

Next, regarding complement clauses, head nouns that can take attributive clauses can also take complement clauses except nouns of perception. However, their use appears to be motivated by factors different from those driving the use of attributive clauses; they are used when tenseless verbs, such as defective verbs or verbs in imperative or negative indicative forms, are used in the clause. Furthermore, by using complement clauses, verbs with suffixes or clitics other than tense suffixes can be used. In summary, the constraints related to complement markers can be illustrated as shown in Table 9.

Table 9: The conditions for use of complement clauses

	Head nouns	Within clauses
Obligatory	<i>eṇṇam</i> ‘thought’	- Defective verbs - Tenseless verb forms - Verbs with suffixes other than tense
Optional	Most nouns that can head attributive clauses	N/A
Not allowed	Nouns of perception	N/A

6. Conclusion

This section concludes the study by discussing its limitations and proposing future research directions.

As challenges of this study, several points can be raised. First, the corpus used did not allow for the inclusion of literary texts, resulting in a bias in the results. Additional verification through an investigation targeting novels is therefore recommended. Second in Research 2, the limited number of nouns examined necessitates expanding the scope of the investigation and conducting a more detailed classification. Specifically, a large-scale investigation of head nouns and the forms of verbs within clauses, from both the perspectives of outer-relationship attributive clauses and complement clauses, is required. This would enable the establishment of syntactic and semantic criteria for reclassification. Moreover, as Dravidian languages, like Indo-Iranian languages, possess correlative relative clauses in addition to attributive clauses, future research should explore the roles of these correlative clauses in comparison to attributive clauses.

[Abbreviations (not listed on the Leipzig Glossing Rules)] ADJZ: adjectivalizer / ADVZ: adverbializer / ATTR: attributivizer / CUM: cumulative / EUPH: euphonic / HON: honorific / PN: proper noun / SOC: sociative / SUPP: suppositional / VP: verbal participle

[References] Annamalai, E. (ed.) (1997) *Adjectival Clauses in Tamil*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. / Comrie, Bernard (1998) Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology. In Winfried Boeder, Christoph Schroeder, Karl Heinz Wagner, and Wolfgang Wildgen (eds.), *Sprache in Raum und Zeit, In memoriam Johannes Bechert* [Language in Space and Time: In Memoriam Johannes Bechert]. Band 2, 51–60. Tübingen: Gunter Narr. / Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. In *Linguistic Inquiry* 8 (1): 63–99. / Kobayashi, Hayato (2023) 「タミル語における関係節 —斜格名詞句が関係節化する際にみられる制約について—」 [Constraints on the oblique head nouns in relative clauses in Tamil]. In *Shigen: Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistic Papers*. 19: 85–92. / Lehmann, Thomas (1993) *A Grammar of Modern Tamil*. Second Edition. Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture. / Rajendran, Sankaraveleyuthan (2016) Noun Modifying Expressions in Tamil. In *Language in India* 16 (4): 114–154. / Teramura, Hideo (1969) The Syntax of Noun Modification in Japanese. In *The Journal-Newsletters of the Association of Teachers of Japanese* 6 (1): 64–74. (as cited in Rajendran 2016) / _____ (1992) 『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』 [The collected works of Hideo Teramura I: Works on Japanese grammar]. Tokyo: Kuroshio Publishers. [Online resources] Rajendran, Sankaraveleyuthan (2001) Typology of Nominalization in Tamil. In *Language in India* 1 (7): <http://www.languageinindia.com/nov2001/rajendran1.html> [accessed 6 September 2024]. / [Corpus] Tamil Web 2021 (taTenTen21). https://app.sketchengine.eu/#dashboard?corpname=preloaded%2Ftatenten21_rft. [accessed 6 January 2025].

山梨県国中地域方言における禁止形式「チョ」＋接続形式「バ」による
否定の順接仮定条件表現について

高橋 新

(博士前期課程 世界言語社会専攻)

キーワード：山梨方言，国中地域，禁止表現，条件表現，願望

1. はじめに ー修士論文の主張と本稿で扱う範囲ー

本稿の内容は、修士論文本体から要点を抜粋し、再構成したものとなっている。先行研究の引用や、対象とする方言の概要、調査（アンケートとエリシテーション）の方法などに関する詳細については、修士論文本体を参照されたい。先行研究の内容をごく端的にまとめておくと、「チョバ」形については現状、以下のような指摘がなされているといえる。

- (1) 禁止の「チョ」と接続形式の「バ」が組み合わされてできたものである。前者は（終）助詞（清水・稲垣 1983 や吉田 2000、秋山 1991 など）に分類され、後者は（接続）助詞であるとの分析は各研究で一致している。
- (2) <願望><反実仮想>といった話脈や場面に依存して成立する主観的な物言いをする場合に用いられる（吉田 2000）。また、直接的でない禁止（吉田 2000）や、比較的消極的な働きかけ（秋山 1991）を表現する。
- (3) 後件に望ましいことが実現される／されたであろう場合に、<仮定条件>でも用いられることがある（吉田 2000）。ただし否定の仮定条件には別形式がいくつか範疇的に用意されており、通常はそちらが選択される（秋山 1991、吉田 2000）。
- (4) <確定条件>や<並列累加>の表現にも使用が及ぶことがあるが、文法性判断にはゆれがある（吉田 2000）。

しかし主に以下の点について、分析が不適当または不十分であると筆者は考える。

- (5) 「チョ」は終助詞と分析されるケースが多いが、果たしてこれは妥当であるか。
- (6) 「バ」は専ら接続助詞と分類されているが、妥当であるか。動詞に付く場合の「バ」は、接続先にどのような形態を要求する形式なのか。また、共通語の「(れ) ば」との差異はないのか。
- (7) 吉田 (2000) では、用法に関する記述があいまいかつ客観性を欠くものにとどまっている。
- (8) 禁止の「チョ」を含む「チョバ」だが、接続先の動詞や主語の人称などといった他要素との共起制限に関して、両者は異なる性質を持つのではないか。

以上の四つの観点に対し、修士論文本体では次のような論拠をもってそれぞれに仮説を立て、その検証・分析を行った。

- (9) 禁止の「チョ」は、動詞の命令法・否定の屈折接辞 -(i) cjo である。同形式は、アクセントや形態についてその接続先の動詞に従属的であり、動詞内部に付属されているものとして分析するのが適当であると考ええる。
- (10) 当該方言の「バ」は動詞接辞 -ba である。動詞に付く場合、同形式は命令法・肯定、もしくは直説法・非過去・否定、あるいは命令法・否定の屈折形を接続先に要求する。こうした点で、共通語の -(r) eba 「(れ) ば」とは様相を異にしているといえる。アクセントの実現も、ほかの「助詞」に分類可能な要素とは相違がある。
- (11) 範例的に併存するほかの否定の順接仮定条件と比べ、「チョバ」には使用可能となる場合の制限が大きい。命題に対する話者の認識・態度が多分に関わってくるものと思われる。認知上の問題ではあるが、これは条件表現を構成する従属節と主節（以下、併せて「主従二節」と呼ぶ）を意味レベルで再分析することによって、客観的に線引きすることができると思われる。
- (12) 「チョバ」は、文末に用いられる禁止の「チョ」に比べて働きかけの成分が薄くなる。よって、接続先の動詞に対する共起制限や、主語の人称制限を禁止形ほど厳しくは課さない。

本稿においては、上記のうち主に (11) (12) の観点について扱うこととする。さらに 4 節では、そこから浮き彫りになった課題を提示する。なお以下の「チョバ」に関する考察・分析結果は、アンケートによる許容度調査、およびエリシテーションによって検証を行ったものである。アンケートの協力者は A 氏～W 氏の 23 名である。エリシテーションには左記のうち A 氏（1963 年生・女・甲府市出身）と G 氏（1970 年生・男・甲府市出身）、これに加えて X 氏（1960 年生・女・甲州市出身）、Y 氏（50 代・男・甲斐市出身）、Z 氏（60 代・男性・甲府市出身）、吉田雅子氏（1968 年生・女・甲府市出身、「山梨ことばの会」会長）の計 6 名が協力してくださった。

2. 「チョバ」は否定の順接仮定条件表現である

2.1. {否定でない / 順接でない / 仮定でない} 条件文には現れない

- (13) クワンカッタラ コンナニヤセタ。 「食わなかったらこんなに痩せた」
- (14) クワンカッタニ フトッタ。 「食わなかったのに太った」

G 氏による作例

そもそも「仮定的な事態を表」したり「因果関係を表」す（いずれも益岡 2002: 78）「バ」が内蔵された条件表現であるので、上に示すような確定条件・逆接条件の文には「チョバ」形は選択されえない。確定条件には「(タ) ラ」（このほか「ノデ」「カラ」など）、逆接条件には「ニ」などが基本的には用いられる (13) (14)。否定でない「バ」条件形は「オヨゲバ（泳げば）」「シロバ（すれば）」のようになる。

2.2. 望ましくない事態の実現に関わる条件文には使われない

- (15) タクサン クッチョバ ヤセルヨ。 「たくさん食べなければ痩せるよ」
(16) アシタ アメン フッチョバ エンソクエ イケルニ。
「明日、雨が降らなければ遠足に行けるのに」

G氏による作例

(15) (16) のように、「チョバ」は原則、否定の順接仮定条件を表す形式である。しかし以下に示すような場合においては、否定かつ順接かつ仮定条件文であるにもかかわらず、「チョバ」形を用いることはできない。

- (17) タイフーガ コンケリヤー ガッコーニ イカネーナラン。
「台風が来なければ学校に行かないといけない」
(18) チアント ホサンキャ カビチモウヨ¹。
「ちゃんと干さなければカビが生えてしまうよ」
(19) オマンガ コンキヤー コマルトコロダッタジャン。
「あなたが来なければ困るところだった」
(20) タネ ウエンキヤー メーデンネ。
「種を植えなければ芽は出ない」
(21) ネンイリニ ジュンビ シンクチャ ダメドー。
「念入りに準備をしなければだめだ」

(18) のみ Z氏、残りは G氏による作例

吉田 (2000) などでも指摘されていることだが、後件の表す事象が「望ましいものであるか否か」が、「チョバ」形出現の是非に関わってきているように思われる。上記でいえば、「学校に行かないといけない」「カビが生えてしまうよ」「困るところだった」「芽は出ない」「だめだ」といった事態は、いずれも話者にとって（もしくは話者の認識に照らして一般的に）「望ましい」とはいえないものとなっている。

3. チョバはモダリティ的に有標な表現である

3.1. 主従二節の再解釈テスト

アンケート調査において 50%以上の許容度を示すか、もしくはエリシテーション調査で全員が（場合によっては条件付きとしながらも）許容できると判定した文に着目すると、いずれも下記のような主従二節の再解釈ができる点で共通することが分かる。既出の (15) (16) の文例について再解釈テストを試みたものが次頁の (22) (23) である。

¹ 「カビル」は当該方言における「カビが生える」というの意味の一段型の自動詞 kabi (-ru)である。

(22) 「たくさん食わなければ痩せるよ」

表層形:	タクサン食ッチョバ 仮定条件		痩セル 未実現の望ましい事態	ヨ。
深層形:	痩せる 未実現の望ましい事態	ためには	たくさん食うな。 禁止	

(23) 「(明日,) 雨が降らなければ遠足に行けるのになあ」

表層形:	雨ン降ッチョバ 仮定条件		遠足エ行ケル 未実現の望ましい事態	ニ。
深層形:	遠足に行くことができる 未実現の望ましい事態	ためには	雨よ降るな。 禁止	

ここでいう表層形とは実際に発話される文の形であり、深層形とは話者がその発話に際してどのような心情であるかを想定したものである。「チョバ」形仮定条件文を選択するときその話者は、ある未実現の望ましい事態（話者にとって、もしくは話者の認識に照らして一般的に望ましいと判断される事態）を生起させるために、ある動作（または状態・変化など）の遂行・進行・発生を阻止＝禁止したいと考えていることが分析できる。当該方言における禁止の形式「チョ」を含むだけあってその意味機能が暗に意識され、「チョバ」は単なる条件節を作る接続形式としてではなく、間接的な働きかけや、話者に＜願望＞があることを明示的に表出する形式として使用されていることがわかる。

一方で、「チョバ」の使用が不適格と判断される文例では、この再解釈が行えない。

(24) 「(明日) 台風が来なければ学校に行かないといけない」

表層形:	* 台風ガ来チョバ 仮定条件	??	学校ニ行カネーナラン。 未実現の望ましい×事態	
深層形:	学校に行かないといけない 未実現の望ましい×事態	ためには	台風よ来るな。 禁止	

(25) 「ちゃんと干さなければカビが生えるよ」

表層形:	* チャント干シチョバ 仮定条件	??	カビチモウ 未実現の望ましい×事態	ヨ。
深層形:	カビが生えてしまう 未実現の望ましい×事態	ためには	ちゃんと干すな。 禁止	

(24) (25) は筆者による作例（非文）

3.2. 命令（禁止）と願望の近接性

ここで、「チョバ」の＜願望＞的な意味が「チョ」の持つ禁止の意味とつながりを持つものであることを、仁田（1991）の内容を概観し確認しておく。なお仁田（1991:232）に、＜禁止＞は「否定命令」とあり、命令の範疇である旨の記述がある。よって以下、「命令」の部分は「禁止」に読み替えても差し支えない。

3.2.1. 仁田（1991：238-241）

命令形をとった働きかけの文が発せられるためには、次の〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕の条件が充たされている必要がある。これらの条件を欠くことに応じて、＜命令＞の文であることをやめたり、典型的なそれからずれていたり、不適切なものになっていたりする。

〔Ⅰ〕話し手が働きかけの文を発する際の話し手側の条件：

- a. 話し手は、相手たる聞き手に対して働きかけを行いうる立場・状況にある。
- b-1. 話し手は、相手たる聞き手がある動きを実現することを、望んでいる。
- b-2. 話し手にとって、相手が実現する事態は、都合の良い・望ましい・好ましいものである。

〔Ⅱ〕話し手が働きかけの文を発する際の聞き手側の条件：

- a. 話し手の働きかけを遂行する相手が聞き手として存在している。
- b. その聞き手は、自分の意志でもって、その動きの実現化を計り（その動きの実現化への動きを行い）、その動きを遂行・達成することができる。

〔Ⅲ〕実現される事態の側の条件：

命令されている事態は、未だ実現されていない事態である。

ここで、「明日天気になーれ！」といった文を例として見てみる。これは概略、「明日天気ニナッテホシイ」や「明日天気ニナッタラ（イイノニ）ナァ」などに該当し、話し手の事態成就への願いや希望、いわゆる＜願望＞を表している。＜願望＞では、事態実現に対する話し手の願望は存在するものの、話し手の願望に沿う事態を実現・体現しうる存在（＝自己制御性を持った存在）を相手たる聞き手として据えることができない。＜願望＞は、〔Ⅰb〕は充たしているものの、〔Ⅱ〕を充足させてはいないものである。

＜願望＞は＜命令＞よりも広く、＜命令＞であれば＜願望＞でもあり、命令の文は願望の文より限定されたものであることが分かる。「シテホシイ」「シテモライタイ」などの希望の文が、ある条件下において＜命令＞と同じ機能を果たすのも、この命令との大小関係によっている。

以上、仁田（1991:238-241）の内容を要約

3.2.2. 他の要素との共起関係に見る「チョ」と「チョバ」の差異

これまで見てきたように、「チョバ」形の表す意味には、その含有する「チョ」が持つ禁止の意味からの影響が確かに認められる。しかし「チョ」と「チョバ」には、後者が命令（禁止）の条件を欠くゆえの、他の要素との共起関係における性質の差異が見られる。存在動詞「ある」、非対格自動詞、および一・三人称の主語など、「チョ」とは相性の悪い要素とも、「チョバ」は共起可能なのである。以下、この点について具体例を挙げていく。

- (26) コンナトコ パチンコヤナン アッチョバ イーニ。
「こんなところにパチンコ屋なんかなければいいのに」

A氏による作例

文末に用いられる禁止の「チョ」は、有情物の存在・位置を表す「イル」とは共起して「ソナトコ イツマデモ イチョ」などと言えるが、「アル」とは共起できない。しかし「チョバ」形は、「イル」に加えて「アル」とも共起しうる(26)。「*アッチョ」が言えずに「アッチョバ」に許容の余地があるのは、やはり前者は対象に向けた働きかけの形式であり、後者は話者の願望を示すに過ぎない条件形式だからであろう。働きかけの場合、動きの制御性を有しているものに対して言うことが大前提であるため、専ら非情物の存在や位置を表すだけの「アル」とは共起しづらい。しかし<願望>であれば、対象に動きの制御性の保有は要求しないため、共起に抵抗がなくなるのだと考えられる。

次に、非対格自動詞との共起性について見る。禁止の「チョ」は、基本的にこれと共起できない。「*カミガ ヤブレチョ（紙が破れるな）」「*イトガ キレチョ（糸が切れるな）」「*エダガ オレチョ（枝が折れるな）」などが不可なのは、ガ格の「カミ（紙）」「イト（糸）」「エダ（枝）」などは動詞の表す事態に対して受動的に関わるものにすぎず、また非対格自動詞文においては「破る」「切る」「折る」などの（他動詞的）行為を遂行する者の存在は前提となっていないからである。しかし「チョバ」形であれば、これらはそれぞれ次のような言い方が可能である。

- (27) カミガ ヤブレチョバ イーニ。 「紙が破れなければいいのに」
(28) イトガ キレチョバ イーニ。 「糸が切れなければいいのに」
(29) エダガ オレチョバ イーニ。 「枝が折れなければいいのに」

A氏による作例

これについてもやはり、「チョ」が「チョバ」になることによって働きかけの機能が弱化され、話者の単なる<願望>の言明に過ぎない表現となり、動きの制御性を持つ何者かの在・不在が問われなくなるからと思われる。

ここからは主語の人称制限について述べる。まず禁止の「チョ」は、基本的に一人称主語では用いることができない。ただA氏によると、たとえば何かを見てはいけないうのについて見そうになって「イヤイヤ、ミチョ ミチョ（見るな見るな）」と自分に言い聞かせたり、

「ダメダメ、ニゲチョ ニゲチョ (逃げるな逃げるな)」と自分を奮い立たせたりといった、ある種自身を客体化して独り言つような極めて特殊な場面でならありえるそうである。しかし「チョバ」形であれば、そういった状況的な制限はなく、次のようなかたちで全く問題なく使うことができる。

- (30) コンナコトナラ キチョバ ヨカッタ。
「こんなことなら (私は) 来なければよかった」
(31) アンナタクサン ノンヂョバ ヨカッタ。
「あんなにたくさん (私は) 飲まなければよかった」

A 氏による作例

このように、「ミチョ ミチョ」「ニゲチョ ニゲチョ」にしても (30) (31) の例にしても、一人称主語に禁止形式が関わってくる表現の場合、「～してはだめだ」「～するべきでない」・「～してはだめだった」「～するべきでなかった」のような、＜当為判断＞的な文意になるところが興味深い。

禁止の「チョ」は、働きかけの形式というその役割上、二人称主語をとることが最も多い。しかし三人称主語でもある程度現れる。たとえば次のような文例があり得る。

- (32) オトコノコガ メソメソ シチョシ。 「男の子がめそめそするなよ」
(33) ブガイシャワ キーチョ。 「部外者は聞くな」
(34) アメ フッチョナー オイ。 「雨降るなよなーおい」
(35) アメリカワ イミンオ イジメチョ。 「アメリカは移民をいじめるな」

A 氏による作例

(32) (33) はそれぞれ「オトコノコ (男の子)」「ブガイシャ (部外者)」が主語ではあるが、話者の目の前にいる人物に対する働きかけであり、実質、「あなた」に対しての禁止の働きかけとなっている。一方で (34) (35) は、対象は目の前にはいないため、もはや働きかけの文ではないといえる。(34) のように、気象など行為主体のいない (もしくは制御性のない) 事態が禁止形となる場合、これは＜願望＞に近い意味を表す。(35) のように、行為主体が認められるものであれば＜願望＞から＜当為判断＞のようなニュアンスとなってくる。このように三人称主語でも、「聞き手が目の前にいる場合」や、聞き手が目の前にいなくても「行為主体の存在しない気象などを表す事態」であったり、「不定でない行為主体がいる」場合には「チョ」による禁止形を用いることができる。しかし、「聞き手が目の前におらず、行為主体は存在するがそれが不定である」場合には「チョ」禁止形を用いることができない (36) (37)。しかし「チョバ」形であれば、上記のすべてにおいて使用が可能である。(38) (39) は、それぞれ (36) (37) に対応した「チョバ」形の文である。

- (36) *ウチノコオ ヘンナヒトガ ツレテイッチョ。
「*うちの子を変な人が連れていくな」
- (37) *シラナイアイダニ ダレカガ カッチョ。
「*知らない間に誰かが買うな」
- (38) ウチノコオ ヘンナヒトガ ツレテイッチョバ イーケド。
「うちの子を変な人が連れて行かなければいいけど」
- (39) シラナイアイダニ ダレカガ カッチョバ イーケド。
「知らない間に誰かが買わなければいいけど」

A 氏による作例

(35) の「アメリカ」にしろ、「変な人」「誰か」にしろ、その場にいないため直接的な働きかけを行えないという点では同じである。ただし禁止形の使用が認められるには、3.2.1 節で見た仁田 (1991) の条件 [Ⅲ]、「命令されている事態は、未だ実現されていない事態である」に当てはまらなければならない。つまり、「アメリカが移民をいじめている (少なくともそうした気運が目に見えてある)」という事実が進行中である前提で、「アメリカが移民をいじめない」という未実現の事態を望みながら発話しているために、(35) は「チョ」形による<禁止>も適格となっている。一方で、「うちの子を変な人が連れていく」ことや、「知らない間に誰かが買う」ことは、確定した事実ではない。ゆえに、「そうならないこと」は未実現の事態ではないため、<禁止>のニュアンスの濃い「チョ」形にはしづらい。ただ、<願望>なら条件 [Ⅲ] を充たさなくても表せるので、「チョバ」形をとることは許されるものと考えられる。

4. 課題 -願望とは認めづらい用法-

4.1. 禁止寄りの用法

- (40) ヨゴシチョバ カシテヤル。
「25. 汚さないなら貸してあげる」

G 氏による作例

(40) は、アンケートでは許容度 44%とやや低い数値が出たものの、エリシテーションにおいては全てのインフォーマントが概ね許容可とした文例である。これに先の主従二節の再解釈テストを実行してみると、「貸してあげる ためには 汚すな」のような深層形が想定されることになる。この、聞き手に「貸してあげる」という帰結は、必ずしも話者にとって好都合なものではないはずである。「汚すな」と忠告する気持ちがあるということは、「貸す」ことが話者にとってある程度リスクを負わされるものという認識は存在していると思われる。この点で、この文は一般的な「チョバ」形が適用可能な状況とは異なっているために、アンケートにおいては許容度が低く示されたのかもしれない。(40) はむしろ、「(貸してあげるからそのかわりに) 汚すな」という、<禁止>する意図の方が強いものとも見える。

4.2. 反語的用法

4.2.1. 反語的チョ

仁田（1991）に、次のような記述がある。「バカ言え。」というとき話し手は、本当に相手が「バカを言う」ことを望んでいるわけではない。これは、実現されれば話し手にとって都合の悪い・望ましくない事態の実現を、形の上で相手に命じている。そしてその実、その事態が実現しないことを、相手に命じ、訴えている。この文は、相手に望む事態は話し手にとって都合のよい・望ましいものであるといった働きかけの文のための成立条件に反している。こういったタイプのものを＜反語命令＞と呼んでおく」（以上、仁田 1991:249-250 の内容を要約）。こうした＜反語命令＞的な用法は、当該方言の「チョ」にも観察される（41）

（42）。下の二つの例は、実際は「寝てほしい」「行ってほしい」と思っている、あえてそれを「禁止」するような言い方をしたものである（もちろん、本当に「寝なくてよい」「行かなくてよい」と思っている場合もある）。

- （41） ネタクナイジャー ネチョ。 「寝たくないなら寝るな」
（42） イキタクネージャー イッチョ。 「行きたくないなら行くな」

吉田雅子氏による作例

4.2.2. 反語的チョバ

- （43） アー ホーケ。イキタクネージャー イッチョバ？
「あっそ。行きたくなきゃ、行かなければ？」
（44） ソンネニ ヤスンヂョバ カラダニ ドクズラ。
「そんなに休まなければ、体に毒でしょう」
（45） チャント ホシチョバ カビン ハエルジャン。
「ちゃんと干さないとカビが生えるよ」

（43）はA氏の作例、（44）は吉田（2000: 224）より引用、（45）はZ氏の作例

「チョ」が持つ＜反語命令＞的な用法が「チョバ」形にも応用されていると考えられる例を、上に三つ示す。「イッチョバ？（行かなければ？）」などの言いさし形は、やはり本当に「行かなくてもよい」と思いながら言うこともできるが、実際は「行った方がよい」と思っている場合でも普通に言える（アンケート調査の結果では許容度 74%、エリシテーションではこれを許容不可としたものはいなかった）。（44）は、吉田（2000: 225）の説明によると「休んでくださいという願望の表現ともなりえる」とされていて、つまり話者は「ヤスンヂョ（休むな）」とは思っていない。「（聞き手の）体に毒」であることを不本意に思いながらも、「それでも構わないのならどうぞお休みなさるな」といった、やはり反語的ともいえる文意となっている。（45）に関するZ氏のコメントによると、「そんなにカビを生やしたければちゃんと干すな」といったニュアンスで、姑がお嫁さんをいびるような言い方になる、とのことだった。これらのようにあえて話者自身の望む事態の生起を遠ざける言表をするこ

とによって、聞き手を突き放したり、あるいは相手に間接的に何かを訴えかけたりする表現として「チョバ」形を用いるケースもあるのだと考えられる。

4.2.3. 「並列累加のチョバ」の実現可能性

前節で示した「チョバ」の反語的用法は、吉田（2000）で紹介されている＜並列累加＞に使用された「チョバ」形を説明するものとなるかもしれない。エリシテーション調査の中で、家事を全くしない相手を突き放すような意図で「もういい、洗濯もしないなら、掃除もするな！」と言えるかどうか、また言えるならどのような方言訳となるか質問したところ、「センタクモ シンジャー ソージモ シチョ！」という文が一応のところ得られた。本当は「してほしい」と思っている、あえてこのように禁止する言い方が可能であるということは、主従二節の再解釈が行われて、「ソージモ シチョバ センタクモ シン！」という文が実現しても不思議ではないということになる。

5. おわりに -今後の展望-

4.2 節で紹介した事例が、本当に仁田（1991）でいう＜反語命令＞的なモダリティを持つものであるかは、現状得られている文例が少ないこともあり、断言しきれないというのが実情である。今後は、この現象に焦点を当てるようなエリシテーションを行い、さらなる検証を進めていく必要がある。

上記の点を今後の課題とし、引き続き関連事象の研究に励んでいく所存である。

参考文献

- 秋山洋一（1991）「甲府市を中心に見た山梨県方言の仮定表現に関する調査研究—「見ロバ」「出ロバ」などの言い方について（下）」『山梨県立女子短期大学紀要』22: 83-96.
- 清水茂夫・稲垣正幸（1983）「山梨県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 6—中部地方の方言—』97-140, 東京: 国書刊行会.
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』日本語研究叢書 4, 埼玉: ひつじ書房.
- 益岡隆志（2002）「複文各論」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法 4 複文と談話』東京: 岩波書店.
- 吉田雅子（2000）「山梨方言における助辞チョによる表現—禁止表現・仮定表現との関わり—」変異理論研究会（編）『20世紀フィールド言語学の軌跡 “徳川宗賢先生追悼論文集”』219-228, 大阪: 変異理論研究会.

モンゴル語における動詞接辞-*čix* の意味・用法

ダグワドルジ マラルマー
(博士前期課程 世界言語社会専攻)

キーワード：アスペクトの意味，モダリティの意味，実現，動詞分類，完了形

1. はじめに

本稿の目的はモンゴル国内で話されている標準語であるハルハ・モンゴル語（以下モンゴル語という）における動詞接辞-*čix*¹の実例に着目し、その意味と用法を明らかにすることである。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で本稿の前提となる知識を概観したのち、3 節で先行研究を見る。4 節で問題提起をし、5 節で調査方法について扱う。6 節で調査結果を踏まえた分析・考察を行う。最後に 7 節で全体のまとめを述べる。

なお、本稿で扱う例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究以外の例文の和訳は筆者²によるものであり、特に断りのない限り、調査例文は Mongolian National Corpus を出典とする。下線：文内で重要な部分や注目すべき部分を強調する際に使用する。-*ČIX*：本稿で -*čix* をグロスとして表記する。

2. 背景知識

本稿で取り扱う -*čix* は、基本的にアスペクトを表す文法的な機能を持っていると考えられるため、以下は前提知識として Comrie (1976)³ のアスペクトに関する議論を要約する。

アスペクトの一般的な定義は、「場面の内的な時間構成を捉える、さまざまなし方」である Comrie (1976:9)。アスペクトの対立する意味分類は以下の通りである。

- ① 完結相 (Perfective Aspect): 動作や出来事を外部からひとまとまりの動作・行為として捉える。
- ② 不完結相 (Imperfective Aspect): 動作や出来事を内部 (初め・中・終わり) から捉える。
 - (ア) 習慣相 (Habitual Aspect): 繰り返し行われる動作を示す。
 - (イ) 継続相 (Continuous Aspect): 動作や状態が継続していることを示す。
 - ① 進行相 (Progressive Aspect): 動作が進行中であることを示す。
 - ② 非進行相 (Nonprogressive): 動作や状態が進行中であることを表す進行相に対立する。

モンゴル語の言語学解説辞典 (Bat-Ireeduj et.al.2014: 26) によると、アスペクトとは動詞の事象の関係を表す文法範疇であり、事象の関係とは一時的な時間内に起こる動作のシン

¹ 提示する例のラテン文字転写は以下の通りである。a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, е:үө/ye, ё:yo, ж:ž, з:z, и:i, й:j, к:k, л:l, м:m, н:n, о:o, ө:ö, п:p, р:r, с:s, т:t, у:u, ү:ü, ф:f, х:x, ц:c, ч:č, ш:š, ь:’, ы:y, ь:’’, э:e, ю:yu/үй, я:ya。

² 筆者は 1992 年生まれモンゴル国フブスグル県生まれのモンゴル語母語話者である。

³ 日本語訳は山田 (1988) を参考にする。

プル相、パーフェクト相、一回相、反復相、未完了継続相、強化、長時間相、瞬間相などの意味を示すものであると述べている。

Bazarragčaa (2017) によれば、モンゴル語のアスペクト表現は接辞法と分析的手法に大別されるという。接辞法とは、動詞語幹に屈折接辞を接続することで動詞のアスペクトを表現する方法である。例えば、yaw-uul-čix-laa {行く-CAUS-ČIX-DIR.PST} (直訳: 行かせてしまった) である。分析的手法とは、動詞の後ろに助動詞を伴ったり、動詞が重複したりすることでアスペクトを表現する方法である。例えば、šar-ž exel- {照り付ける-CVB.SIM 始まる-} (直訳: 照り付け始まる) という複合形式である。そのため、本稿で取り扱う動詞接辞-čix は、前者の接辞法になる。

3. 先行研究

3.1 節で-čix の形式及びそれに関連する形式を、3.2 節で接辞-čix の意味を扱う。

3.1. -čix の形式

山越 (2022: 264) では、-čix は連用形-ž に動詞 orxix 「うち棄てる」が続いた形式が縮約した形であり、口語で多用されると述べている。さらに-čix の簡略形は-č であり、未来連体形-x という接辞が-čix に後続する場合、-čix-ax ではなく簡略形の-č が用いられ、-či-x という形になるという。

Kullman and Tserenpil (1996:133-135) によると、-čix は分析的に表現された完了体 (perfect action) を表す-AAAd⁴ baj- 「完了副動詞+存在動詞」、-sAn baj- 「過去形+存在動詞」とともに現れることが非常に多い。従って、この接尾辞自体もわずかに完了の意味を持つという。さらに、-čix-AAAd baj- と -čix-sAn baj- という複合形式を完了体動作 (perfect action)⁵ としている。

- (1) Namaig ire-x-d ter ažil-aa duus-čix {-san/-aad}
 1SG.ACC 来る-PTCP.FUT-DAT 3SG 仕事-REFL 終わる-ČIX-{-PTCP.PST/CVB.PERF}
 baj-san.
 居る-PTCP.PST
 When I came, he had finished his work.

Kullman and Tserenpil (1996:137、一部改変)

上記の二種類の複合形式が動作の完成を示しているため、アスペクトの接尾辞-čix はその分析構文の一部となり、一方で構文における分析形は-AAAd で表されるか、-sAn で表されるかには大きな違いはない。ただし、選択された時点との関係において-čix-AAAd baj-の方が強いと述べている。

Bat-Ireeduj (2009: 100) は接辞-čix に後続する形式について扱い、接辞と複合形式の例を挙げている。-čix に後続する接辞は-AAAd 「～て終えて」、-ž 「～て」、-AarAj 「～てくださ

⁴ 大文字は母音調和による異形態を表す。

⁵ 完了体動作 (perfect action) とは、過去において選択された時点まで続く動作である。

い」があると指摘している。-čix に後続する複合形式は-čix gež bajgaa yum šig「～ようとしているかのように」、-čixsAn yum san žee「～てしまったのであった」という二つの形式を挙げて、これらをモダリティ的構成としている。

3.2. -čix の意味

動詞接辞-čix の意味については、さまざまな研究者が多方面から指摘してきた。ここで、山越 (2022)、Byambadorž (2006)、Baj Chigchi (2020) の先行研究を記述する。

山越 (2022:262) によると、-čix は動詞が表す動作が完遂した状態を示すという。

- (2) Ter med-lgüjg-eer ewder-sen mašin xudald-aad aw-čix-žee.
 3SG 知る-NEG-INS 壊れる-PTCP.PST 車 販売する-CVB.PERF 取る-ČIX-RES
 「彼は知らずに故障した車を買ってしまった。」

山越 (2022:265)

Byambadorj (2006: 157) は、-čix が būrmösön üjldex bajdal「徹底的に済ませるアスペクト」、erčimžüülex「強化」、šijdmeg「思い切った程度」を指し示すアスペクト的意味を持つと指摘しているが、それに関する詳細な説明がなされていない。

Baj Chigchi (2020) は接辞-čix が (through) completion, intensivity, perfectivity, resultivity という互いに密接に関連するアスペクト的意味を持つと言う従来の指摘に加え、これらのアスペクト的な意味が uncanceledness「不可逆の意味」から派生したものであると主張している。

4. 問題提起

先行研究から、-čix はアスペクト的意味を持つことは明らかである。しかし、-čix の意味と用法について、研究者によって異なる指摘もある。

一方、Byambadorž (2006: 157) によると、-čix が būrmösön üjldex bajdal「徹底的に済ませるアスペクト」、erčimžüülex「強化」、šijdmeg「思い切った程度」を指し示すアスペクト的意味を持つと指摘しているが、強化と思い切った程度はアスペクト的意味というより、話者の態度を表す点でモダリティの意味に近いと考えられる。そもそも erčimžüülex「強化」、šijdmeg「思い切った程度」とはどのような観点から見た定義なのかについての説明が不明瞭である。また、Baj Chigchi (2020) の uncanceledness「不可逆の意味」もモダリティの意味に近いと考える。とはいえ、先行研究から見て、-čix はさまざまな意味を持つ可能性があると言えるだろう。ただし、これらの意味は一つの文で同時に表現されることはなく、-čix に後続する形式や先行する動詞によって、意味が変化する場合もあると推測できる。そのため、先行研究で指摘された接辞-čix の意味や用法を明らかにするには、-čix をさらに詳細に検討する必要がある。

5. 調査方法

本稿ではモンゴル語のコーパスである Mongolian National Corpus⁶を用い、-čix を含む構文を収集し、それらの例文を分析する。具体的な手順は以下の通りである。

- ✓ コーパスに*-čix*、*-čix を入力し、-čix が含まれる例文を抽出する。
- ✓ 抽出した例文を分析し、-čix に先行する動詞と、-čix に後続する形式を記述する。
- ✓ これらの分析に基づき、例文を考察して、-čix の用法・意味を詳細に検討する。

6. 調査

コーパス調査の結果、接辞-čix は 4312 例が得られた。そのうち、手作業には検索上のノイズとなる 977 例を除き、3335 例を分析対象とした。6.1 で-čix の用法として-čix に先行する動詞、-čix に後続する形式を分析し、6.2 で-čix の意味を詳細に扱う。

6.1. -čix の用法

以下、-čix に先行する動詞 (6.1.1)、-čix に後続する形式 (6.1.2) を分析する。

6.1.1. -čix に先行する動詞

工藤 (1995) の動詞のアスペクト分類に基づいて、-čix に先行する動詞を分類した結果を表 1 で示す。

表 1: -čix に先行する動詞のアスペクト分類

動詞分類	下位分類と例	出現数 (610)
A.外的運動動詞	1. 主体動作・客体変化動詞 (al-「殺す」, ald-「落とす」, arilga-「消す」など)	180
	2. 主体変化動詞 (awir-「登る」, alduur-「結び目が解ける」, amil-「再生する」など)	183
	3. 主体動作動詞 (ažilla-「勤める」, algad-「手ではたく」, aldal-「両手を広げて計る」など)	188
B.内的情態動詞	aj-「怖がる」, almajr-「怠慢である」, amtaš-「興を覚える」, anzaar-「気づく」など	58
C.静態動詞	baj-「ある・いる」	1

分析した結果、静態動詞は baj-「ある・いる」という存在動詞の 1 つしかなかった。ただし、本動詞は-čix が後続することで意味が変化し、「やめる」という意味に変わる。

- (3) Manaj araažaw duugara-x-aa baj-čix-san.
 1PL.GEN ラジオ 鳴る-FUT-REFL ある-ČIX-VN.PST
 「うちのラジオが音を出さなくなってしまった。」

⁶ 本コーパスは Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスで、総語数は 1,160,000 語である。このコーパスでは *X や X*, *X* と入力して検索することで問題の形式 X の前後に何らかの要素のある形を検索することもできる。

この文は、baj-čix-san によってラジオが音を出さない状態になったことを表す文である。「やめる」は外的運動動詞の主体動作動詞に区分される。したがって、-čix には静態動詞が先行しないとと言える。

-čix は外的運動動詞に頻繁に付加され、動作の実現の確定性を表現する。一方で、内的情態動詞が現れる頻度が比較的低いが、これらの動詞に-čix が付加される場合、感情や思考の発生が強調される。このことより、-čix に先行する動詞が動作動詞と変化動詞であることは明らかである。

6.1.2. -čix に後続する形式

文中において-čix に後続する形式には、接辞や複合形式や助詞など、構文における位置と文法的な役割が異なるさまざまな形式がある。したがって、まず-čix に後続する接辞を分析した。その結果を図1で示す。

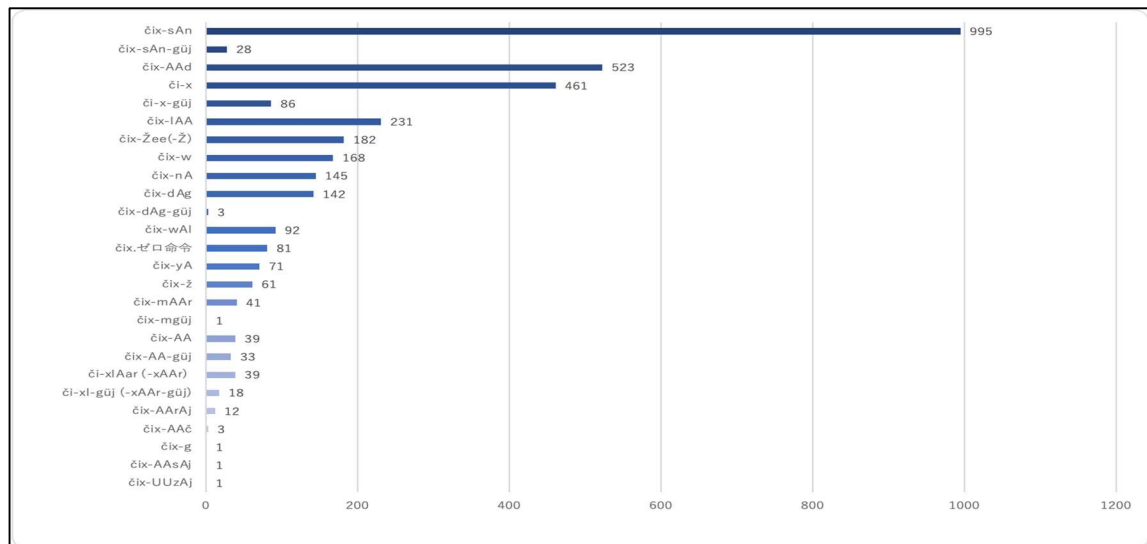


図1: 接辞-čix 及びそれに後続する各接辞の出現頻度

図1では、-čix に後続する接辞を分析した。以降、格接辞に後続する形式(助詞や複合する助動詞など)を詳しく見る。ただし、接辞ごとに記述するのは複雑であるため、この22の接辞を基本的な活用で区別し、形式を記述する。活用による区別は、①連体形(名詞を修飾する)、②終止形(文を終止させる)、③連用形(文中で文を中止させる)、④命令形の4つである。その分類および文法的機能による形式を表(2-5)で提示する。(表には、例文から抽出された形式を例として提示する。抽出されなかった場合はバツ(×)で示すが、抽出されなかったものの筆者(母語話者)の内省で表現可能な場合は三角(△)で表記する)。

表2: -čix に後続する連体形と文法的機能による形式

連体形	-x	-sAn	-dAg	-AA	-mAAr
	「する」	「～した」	「～している」	「～ている」	「～したい」

疑問文における 連体形	-x=UU 「～でもいいで すか」	△	-dAg=bilee 「～したのか」	-AA=w 「～したのか」	×
連体形の名詞化	-x=n' 「～するのは」	-sAn=n' 「～したのは」	-dAg=n' 「～したのは」	×	-mAAr=n' 「～可能である のは」
連体形を含む補 助動詞	-x šaxa- 「～そうになる」	-sAn baj- 「～ている」	-dAg baj- 「～ている」	×	-mAAr baj- 「～したい」
連体形を含むモ ダリティ形式	-x bajx/ -x bolow=uu 「～するかもし れない」	-sAn=bololtoj 「～たようだ」	-dAg bajž / -dAg xereg bajžee 「～ば/～たらよか った」	-AA bolow=uu/ -AA=yum bolow=uu 「～しているか な」	×
連体形と文末終 助詞との複合形	-x=bij=wij, 「～のではない か」	-sAn=šüü/ -sAn=dAA/ -sAn=šüü_dAA 「～したよ」	-dAg=yum /-dAg=xereg 「～のだ」	-AA=biz=dee 「～たと思う」	-mAAr=yum=daa 「～したらいい のだ」
連体形の終止文	×	-sAn 「～した」	-dAg 「～している」	×	-mAAr 「～したい」(言 いさし)
連体形の終止文 の否定	-xgüj 「～しない」	-sAngüj 「～しなかつ た」	-dAggüj 「～していない」	-AAgüj 「～していない」	-mgüj 「～ないような」

表 3: -čix に後続する終止形と文法的機能による形式

終止形	-w 「～した」	-žee (-ž) 「～した」	-nA 「～する」	-lAA 「～した」
終止形の疑問文	-w=UU/ -w 「～したか」	-ž=UU 「～したのか」	-nA=UU 「～するか」	×
終止形を含む補助動詞の 形式	-w baj- 「～た」	×	×	×
終止形と文末終助詞との 複合形	-w=UU/ -w=UU=dAA 「～したかな」	△	△	△
終止形を含むモダリティ 形式	-w bololtoj 「～たようだ」	×	×	×

表 4: -čix に後続する連用形と文法的機能による形式

連用形	-AAAd「～てから」/「～ ので」	×	-wAl「～ば」	-xAAr「～たら」/ 「～可能である」
文を終止する連用形	-AAAd「～たのに」(言 いさし文)	×	-wAl「～ば」 (言いさし文)	×
連用形を含む補助動 詞	-AAAd baj- 「～ている」 -AAAd ir- 「～てくる」	-ž baj-「～ている」 -ž čada-「～できる」	×	×
連用形を含むモダリ ティ形式	×	-ž=magad 「～するかもしれない」	×	×

表 5: -čix に後続する命令形と文法的機能による形式

命令形の終止	命令形の文末終助詞
ゼロ形「～しろ」	=döö/=l=dAA「～よ」
-UUzAj「～しないように」	×
-g「～させろ」	△
-AArAj「～してください」	×
-yA「～しよう」	-yA=l=dAA「～よ」
-AAč「～してくれ」	△
-AAsAj「～になればなあ」	×

6. 2. -čix の意味

6. 2. 1. -čix のアスペクト的意味

先行研究における-čix のアスペクト的意味と一般文法でのアスペクト的意味 (Comrie: 1976) を比較すると、-čix のアスペクト的意味は「完結相」と「非完結相の完了」また「結果」の意味に相当している。ただし、実例の分析結果から見れば、-čix のアスペクト的な意味は完結相と完了の意味に該当しない。なぜなら-čix は文全体のアスペクト的意味に直接関係せず、動作動詞または変化動詞を伴い、その動作に焦点を当てるためである。

(4) Xoyor-t, Süxbaatar-yn yuu yuu xel-ž baj-sn-yg nuu-lgüj .

二-DAT PSN-GEN 何 何 言う-CVB.SIM 居る-PTCP.PST-ACC 隠す-NEG

xel-čix

言う-ČIX.IMP

「第二に、スフバートルが何を言っていたか、包み隠さず話してしまいなさい！」

(4) において、bajсныг の部分までが「スフバートルが言っていた全てのこと」というひとまとまりを指している。このひとまとまりは、重複した目的語「何何」によって派生している。-čix はそのスフバートルが言っていたことを「話す」動作の実現を指している。文全体は動作のひとまとまりのことを指し示しているが、-čix は文全体に関係なく、動作主の「話す」という動作の実現のみを表している。「話す」という動作の完了も指し示さない。

完結相と完了の意味を除くと、結果の意味が残る。結果は、動作が終了した後の状態を示すものである (三原 2022: 134)。ただし、結果は動作後の状態に焦点を当てるという点で、-čix が表す「動詞が表す動作の実現」と異なる特徴を持つ。そのため、-čix の基本的な意味は「結果」ではなく、動詞が表す動作または行為の実現 (起こること) を表す動詞接辞と言える。

しかし、文全体の文脈から見ると、-čix が結果と解釈される場合もある。アスペクトとは、ある時間に起きた出来事がある時点でどのような段階にあるかを示すものである。結果は、その出来事の完了した状態を示すとともに、時点が明確であることを示す特徴もある。一方、実現は、時間における動作や変化が生じることを示すが、その出来事の完了する時点を確認に示さない特徴がある。したがって、結果と実現の違いは、出来事の完了した時点を確認にするか否かという点にある。なお、-čix は文中で、後続する形式によって実現または結果を表すことを確認できた。

例えば、終止形-IAA「近過去」は文末に用いられる場合、過去または近未来を表す。どちらにも解釈されうる場合は、-čix を付加することで出来事が完了した状態、いわば過去を示すことができるようになる。

- (5) a. Önöödör ažl-aas-aa awax-uul-laa.
 今日 仕事-ABL-REFL 取る-CAUS-DIR.PST

「今日、仕事が終わったら、(彼を) 迎えた/迎える事にする。」

- b. Önöödör ažl-aas-aa awax-uul-čix-laa.
 今日 仕事-ABL-REFL 取る-CAUS-ČIX-DIR.PST

「今日、仕事の後、(彼を) 迎えた。」

(5a.) は話者が聞き手に対して、仕事の後に誰かに迎えに来てもらおうと決意したことを伝えている場面、あるいは迎える行為がすでに完了した後に、その出来事について聞き手に語っている場面を指す。一方、(5b.) では、話者が確実に過去に起こった出来事について語っていることが明白である。このことより、-čix は「迎える」という動作が実現した結果を表し、-laa は-čix の付加によって過去を示していることになる。

上記のように-čix は文全体の意味表現に必須とされる場合があるが、一方でただ形式の一部として要求される場合もある。

- (6) Uu id ge-ž zügeer yaw-aa xün-ijg šaxa-ž
 飲む.IMP 食べる.IMP 言う-CVB.SIM 無事に 行く-PTCP.PROG 人-ACC 押しやる-CVB.SIM

šax-čix-aad...

押しやる-ČIX-CVB.PERF

「ただ歩いている人に対して『飲め、食べろ』としつこくせがんだのに...」

(6) は、話者はそのつもりはなかったが、行為者に「飲め、食べろ」と強いられた様子を表している。-čix によって強いられた結果が示され、-aad は結果状態の継続を示している。-čix がつかない場合は非文になるため、文の形成には-čix が必須である。すなわち、モンゴル語では šaxa-ž šax-aad と言わない。

6.2.2. -čix のモダリティの意味

モダリティとは、話し手の態度や意図、または発話内容に対する評価を示す文法形式である。動詞接辞-čix は、文中で実現や結果を表すだけでなく、モダリティ的な意味も含む。このモダリティ的な意味は、文脈の条件によって予想外、可能、許可、思い切った程度のニュアンスを表す。

(7) Awarga⁷, čī yaa-xlaar-aa nom dewtr-ee saw-taj=n`
INTJ 2SG どうする-CSL-REFL 本 ノート-REFL 容器-COM=3.POSS

xaya-čix-dag=bilee?

無くす-ČIX-PTCP.HAB=SFP.Q

「お前は どうして ノート や 本 を 入れ物 ごと なく した のだ。」

この文は話者が通常大切に扱うべきノートや本を無くしただけではなく、さらに入れ物まで無くしてしまった聞き手の様子に驚き、問いかけている状況を示している。-čix は、「無くす」という動作の結果を表すと同時に、その結果が予想外であるニュアンスを含んでいる。

このように何かの動作または行為において「驚く」「避けがたい結果」「突然思い浮かんだこと」「予期せぬ未来」などは、いずれも想定外であるため、「予想外」という概念にまとめて提案する。

(8) Ažl-yg=čin` būtee-či-x unaa ög'-yö.
仕事-ACC=2.POSS 成し遂げる-ČIX-PTCP.FUT 乗り物 あげる-VOL

「その仕事を成し遂げられるような乗り物をあげよう。」

この文では、話し手が聞き手の仕事を支援するために乗り物を提供しようとしていることを表現している。-čix によって「仕事を成功させることができる」という可能を表すモダリティの意味が派生する。

(9) Bi uu-či-x=uu?
1SG 飲む-ČIX-PTCP.FUT=Q

「私、飲んでもいいですか。」

⁷ 物怖じしない人を表現する際の甘やかした言い回し。

この文では、-čix によって uu-「飲む」という動作の実現が指し示されるとともに、相手に確認を取りながら自分が飲み物を飲む許可を求めているニュアンスがある。

- (10) Buu=č baj-na, sum=č baj-na, caaš xar-uul-čix-dag xereg=üü
 銃=EMP ある-NPST 弾=EMP ある-NPST 向こう 向く-CAUS-ČIX-PTCP.HAB べき=Q
 ge-ž xeseg ergelz-lee.
 言う-CVB.SIM しばらく 迷う-DIR.PST
 「銃もあるし、弾もある。殺してしまおうかと、しばらく迷った。」

この文は、ある行動（ここでは「殺す」という行為）を実行するかどうかに対して話し手が深く迷い、躊躇している様子を描写している。-čix は「殺す」という動作の結果を表し、その動作を思い切っ行おうとする意志や決断を強調している。

7. おわりに

本稿では、モンゴル語の動詞接辞-čix に着目し、この接辞の意味と用法を明らかにすることを目的とした。方法として、Mongolian National Corpus を用いてデータを収集し、分析考察をした。

動詞接辞-čix の基本的な意味は、変化動詞および動作動詞に後続し、それらが表す動作または行為の実現を指し示す。すなわち、文全体の意味に関与せず、先行する動作のみを対象とし、その動詞が表す動作が起こることを示す。その一方、文中では後続する形式によって実現の意味のみならず、動作が完了した結果として解釈され、動作または行為の結果を表す派生的な意味を持つこともある。このように、-čix は文中で「実現」もしくは「結果」の2つの意味を表すという特徴がある。

さらに、-čix は主観的な意味を持ち、文脈によって「可能」「許可」「予想外」「思い切った程度」のニュアンスを示す派生的なモダリティの意味を表すことを確認できた。

今後の課題として研究の成果を基に、口語で使用される-čix に関する形式に着目し、母語話者へのアンケート調査も実施する必要があると考える。

【略号一覧】1: 1 人称/ 2: 2 人称/ 3: 3 人称/ ABL: 奪格/ ACC: 対格/ CAUS: 使役/ COM: 共格/ CSL: 順序条件/ CVB: 副動詞/ DAT: 与位格/ DIR: 直接/ EMP: 強調/ FUT: 未来/ GEN: 属格/ HAB: 習慣/ INTJ: 間投詞/ IMP: 命令/ INS: 道具格/ NEG: 否定/ NPST: 非過去/ PERF: 完了/ POSS: 所有/ PROG: 継続/ PSN: 人名/ PST: 過去/ PTCP: 形動詞/ Q: 疑問詞/ REFL: 再帰/ RES: 結果/ SFP: 文末小辞/ SG: 単数/ SIM: 同時/ VOL: 意志

【参考文献】バーナード・コムリー、山田小枝 (訳) (1988) 『アスペクト』日本: むぎ書房 (*Aspect*. New York: Cambridge University Press, 1976). / 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンスとテキスト「現代日本語の時間の表現」』日本: 株式会社ひつじ書房. / 三原健一 (2022) 『日本語構文大全「アスペクトとその周辺」』第 I 巻. 日本: 株式会社くろしお出版. / 山越康裕 (2022) 『詳しくわかるモンゴル語文法 [新版]』東京: 白水社. / Базаррагчаа.М (2017) “Монгол хэлний бүтээвэр судлал”, Эрдэм шинжилгээний өгүүллийн чуулган, Монгол Улсын Их Сургууль, Монгол Судлалын Хүрээлэн. / Бат-Ирээдүй.Ж (2009) “Монгол хэлний хэл зүйн дагавар, нөхцөл, баймж, үгийн сан”, Мон Эдюкэшин Пресс Паблшинг, 122 хуудас. / Бат-Ирээдүй.Ж., Буянтогтох.Г., Өнөрбаян.Ц., Пүрэв-Очир.Б., Пүрэвжанцан.А. (2014) “Монгол хэл шинжлэлийн тайлбар толь бичиг”, МУИС Пресс хэвлэлийн газар, анхны хэвлэл. / Бямбадорж.Б (2006) “Орчин цагийн монгол хэлний хэлбэр судлал”, Улаанбаатар, Тоонот принт ХХК. / Bai Chigchi (2020) On the Aspectual Meaning of the Suffix -Čix in Modern Mongolian, 『モンゴル文化研究』第 2 号: 65-72. / Bernard Comrie (1976) *Aspect*. New York: Cambridge University Press. / Rita Kullman and D.Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*, Hong Kong: Jenco Ltd.

アラビア諸語にみられる語幹母音体系について

宮川 寛人

(博士前期課程 世界言語社会専攻)

キーワード：母音交替，他動性，喉音，アラビア語方言論

1. はじめに

アラビア諸語には語幹を構成する子音の数が 3 つに限定される動詞の類がある。その類の動詞において、語幹に付随する母音の音価は、一定ではなく、語彙的に定まっている。このような母音を語幹母音と呼ぶ。修士論文では、語幹母音体系がいかなるものかアラビア諸語のうち現代標準アラビア語 (MSA), マルタ語 (MLT), カイロ方言 (CYR) を調査対象として調査した。その結果、変種間で音韻的な特徴や文法的な特徴・現れ方が異なること、両語幹が独立していてそこに観られる語幹母音の異同が一方から他方への母音交替では説明できないことを明らかにした。本稿では、修士論文での成果の一部を報告する。

本稿の構成は次の通りである。2 節で背景知識を整理する。3 節で先行研究の記述を概観し、4 節で問題提起をする。5 節で調査方法を説明し、6 節で調査結果とその考察について述べる。7 節で全体のまとめを行う。最後に、8 節で今後の展望と課題を示す。

なお、本稿中の図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。本稿中にある割合などの数値は、少数第 2 位を四捨五入して示している。

2. 背景知識：語幹母音

本節では、アラビア諸語の語幹母音について、MSA のそれを例にとって、示す。MSA とは、古典アラビア語¹ (CA) を「その基本においた、現在アラブ諸国で公用語として制定されている書き言葉アラビア語のことであり、主にメディア・公的な場面で使用されている言語」(上原 2006: 32) で、「観念的には、コーランや古典期の言葉とまだ同じとされているが、実際には語彙に限らず、それ以外の面でも違いを見つける」(フェルスターヘ 2015: 355) ことができ、本稿では CA と MSA を便宜上区別する。

Holes (1995: 81) によると、大半の動詞語彙が抽象的な意味を担う 3 つの子音から成る子音語根² $\sqrt{R_1R_2R_3}$ と [母音の] テンプレートから形成される。Holes (1995: 86) は、取りうる接辞の種類から動詞語幹を接頭辞語幹と接尾辞語幹の 2 つに大別している。本稿では前者を「現在語幹」、後者を「過去語幹」と呼称することとする。Holes (1995: 90) によれば、現在形の語幹は $v_1R_1R_2v_2R_3$ で、過去形の語幹は $R_1v_1R_2v_2R_3$ である (表 1)。Holes (1995:

¹ 古典アラビア語とは、イスラーム帝国の拡大の中でアラブ文法学者らによってコーランや詩歌の言語をもとに規範化されたアラビア語のことである (フェルスターヘ 2015: 91-92)。

² 語根子音について、接辞などに現れる付加的な子音と区別し、本稿では略号に R (=Radical) を用いる。

87) は、MSA において v_1 は常に /a/ である一方で v_2 は一定でなく語彙的に定まっている ($v_2 = a, i, u$) とし、この v_2 が語幹母音であるとする。

表 1: MSA の動詞語幹構成

過去語幹	現在語幹
$R_1v_1R_2v_2R_3$	$v_1R_1R_2v_2R_3$

(Holes 1995: 90 より筆者作成, R=子音語根, v=短母音)

本稿では、スラッシュ (/) を用いて {[過去語幹]/[現在語幹]} という表記をする³。例えば、 $\sqrt{ktb}$ 「書く」から形成される動詞語幹を $kat\bar{a}b/akt\bar{u}b$ というように書き、さらに語幹母音を問題にしたいときは語幹母音だけを抽出し {a / u} などのように書く。全称には文字 x を用いて、例えば過去語幹の語幹母音が /a/ である動詞を全称する場合は {a / x} と書く。先行研究はしばしば語幹母音に語根子音の性質や動詞の他動性を関連付けて説明する。特に語根子音については、重要な自然類として喉音及び強勢音⁴の 2 種が挙げられる。喉音・強勢音はアラビア諸語全体においても母音の低母音化に広く関連し (長渡 2002, 2005)、語幹母音においても低母音の音色と強く関連する傾向がある (後述)。

3. 先行研究

3.1. 語幹母音体系の比較再建 (長渡 2002: 34-42)

長渡 (2002) はシリア方言・CYR・モロッコ方言・MLT (いずれも定住民型方言) を対象とし、これら 4 方言の祖語を再建し比較した。この研究の中で、長渡 (2002: 34-42) は、4 方言のうちモロッコ方言を除いたシリア方言・CYR・MLT と CA の動詞語幹母音の比較を行った。長渡 (2002) は CA から各方言へシフトしたという視点で比較を行った。長渡 (2002: 34-42) が動詞語幹母音の比較に用いた語彙データの出典と件数は次の通りである。長渡 (2002) は強動詞⁵を調査対象とし、文献 (シリア方言: Grotzfeld 1965: 150-171 から 149 語, CYR: Michel 1956: 195-265 などから 140 語, MLT: Aquilina 1965: 140-144 から 148 語, CA: Cowan 1976 などから 204 語) から動詞を収集した。

³ 過去語幹を先に置くのは、以下で見るように文献においてアラビア諸語の語幹母音が過去語幹を中心にまとめられることが多いためである。

⁴ フェルステーヘ (2015) による強勢音の説明を以下に示す:「強勢子音は、現代の音声学で言うと、舌根を軟口蓋へ向けて引っこめることによって作られ、それにとまって咽頭が狭まる 2 次的調音としてとらえることができるだろう。」

⁵ 語根の 3 子音のうちに半子音 /w/, /y/ を含まない動詞を指す。

表 2: 長渡 (2002) による比較結果の記述

ペア	他動性	音韻
CA – CYR	• CA $\{i / x\}$ の他動詞が CYR $\{a / x\}$ にシフト • CA $\{a / x\}$ の自動詞が CYR $\{i / x\}$ にシフト	• CA $\{a / i\}$ のうち喉音を持つものが CYR $\{a / a\}$ にシフト • CA $\{a / u\}$ のうち喉音を持たないものが CYR $\{a / i\}$ にシフト
CA – シリア	• CA – CYR と同様の傾向	• CA – CYR と異なり、非喉音語幹の $\{a / u\} \rightarrow \{a / i\}$ のシフトはない
MLT – CA	記述なし	• MLT では喉音、強勢音語幹が $\{a / x\}$ を持つ

長渡 (2002) による比較作業の結果は上記の表 2 にまとめた通りである。長渡 (2002: 42) は、シリア方言と CYR では動詞の意味による再編成が行われている可能性を指摘したものの、シフトしている数はわずかであり全体の傾向とは断言できないとした。長渡 (2002: 42) は、MLT について、語根に含まれる子音の特徴 (喉音・強勢音) によって再編成されたことがほぼ確認できたとした。長渡 (2002: 42) は、CA から方言へのシフトが説明可能であることから、3 方言から再建される祖語の語幹母音がほぼ CA と近いものであったと結論した。

3.2. 語幹母音の交替理論

3.2.1. 語幹母音の高低交替 (McCarthy 1981, McOmber 1995)

McCarthy (1981: 403) は、MSA の語幹母音の次の分布に注目して、現在語幹から過去語幹への母音交替モデル (図 1) を提示した ($\{a / i\}$: *ḍarab* / *ḍrib* ‘to beat’, $\{u / a\}$: *katāb* / *ktub* ‘to write’, $\{i / a\}$: *ʕalīm* / *ʕlam* ‘to know’)。

$$[a^{high}] \sim \begin{bmatrix} -a^{high} \\ a^{back} \end{bmatrix}$$

図 1: McCarthy (1981) による語幹母音の高低交替

(McCarthy 1981: 403 より一部簡略化して筆者作成)

McOmber (1995: 178-181) は、 $a \Leftrightarrow i, u$ の高低母音交替⁶と例外規則 (喉音語幹, 状態動詞) で語幹母音の分布の 90%以上を説明できるとした。

⁶ McOmber (1995: 178-181) は、「高低母音交替」のようなタームを直接的には用いていない。しかしながら、ここでは McCarthy (1981: 403) の議論を踏まえていると考えられる。そのため、McCarthy (1981: 403) の説明に合わせた「高低母音交替」という表現を用いた。

3.2.2. 語幹母音の線形交替 (Guerssel and Lowenstamm 1996)

Guerssel and Lowenstamm (1996: 2) は、以下の図 2 のような式を提案し過去語幹から現在語幹の母音交替を説明した。

$$\emptyset \rightarrow i \rightarrow a \rightarrow u \rightarrow u$$

図 2: Guerssel and Lowenstamm (1996) による語幹母音の線形交替

(Guerssel and Lowenstamm 1996: 12)

Guerssel and Lowenstamm (1996) によれば、図 2 の式は、過去語幹から現在語幹への語幹母音の交替を予測する ($i \rightarrow a$: *labis* → *lbās* ‘to wear’, $a \rightarrow u$: *katāb* → *ktūb* ‘to write’, $u \rightarrow u$: *kabūr* → *kbur* ‘to be large’)。Guerssel and Lowenstamm (1996: 11-12) は、 $\emptyset \rightarrow i$ について、基底のゼロ $\emptyset$ 母音が表層では 1 音節目と同じ /a/ で実現するものとした ($\emptyset \rightarrow i$: *darāb* → *drib* ‘to hit’)。Guerssel and Lowenstamm (1996) は、図 2 の式を定めるにあたって {a / a} および {i / i} を除外した。Guerssel and Lowenstamm (1996: 3-5) は、{a / a} は喉音語幹に限られること、{i / i} は用例が少なく例外的であることを理由として両者を排除した。

4. 先行研究の問題点

長渡 (2002) は、アラビア諸語の歴史音韻論を扱っており方言祖語の再構に主眼を当てたものである。長渡 (2002) は、CA から地域変種への「シフト」として、語幹母音体系に音韻 (喉音・強勢音) や意味 (他動性) による整理があることを確認した。長渡 (2002) は、CA から地域変種への変遷という、主に通時的な関心のみから語幹母音体系を扱っているため、個々の変種における語幹母音体系の共時的な分析が不十分であると言える。加えて、他動性の取り扱いにも若干の問題があると言える。長渡 (2002) では、他動性の評価に他動詞と自動詞の 2 つの分類が設けられている。アラビア諸語には、ある特定の意味で目的語を支配するのに前置詞が必須となるいわゆる句動詞 (Ryding 2005: 366) がある。Danks (2006) は、MSA において動詞結合価に関連する t 接辞の研究の中で、句動詞が他動詞と同じ振舞いを見せることを示唆している。この句動詞についても検討する余地がある。

最後に、高低交替 (McCarthy 1981, McOmber 1995) と線形交替 (Guerssel and Lowenstamm 1996) について述べる。両者とも、語幹母音の分布の多くを説明する。しかし前者の高低交替が現在語幹から過去語幹の母音交替を考えるのに対して、後者の線形交替を過去語幹から現在語幹の母音交替を考えており、相異なる。

5. 調査方法

長渡 (2002) と同様に、規則動詞を対象に文献から収集する (MLT: Aquilina 1987-1990; 掲載語数=39,149 語; 収集した動詞語数=263 語, CYR: Badawi and Hinds 1986; 掲載語数=22,500 語以上; 収集した動詞語数=1,023 語)。なお、MLT については補助的にマルタ大学が運営する Web 辞書である Ġabra も参照した (掲載語数=20,594 語; 2024 年 12 月 8 日時点)。MSA

については、筆者の卒業論文 (宮川 2024) で収集した規則動詞のデータ (Web 辞書 “Alladin Plus ver 1” から規則動詞 2,996 語を取得) を使用した。収集する項目は、語幹母音・語根子音・他動性・用例の 4 点である。データは Excel 上にて整理し、Python で記述したスクリプトを用いて各種の量的な分析を行った。

次の 2 つの調査を行った。1 つ目は、変種間の比較である。変種間で、語根にある 3 子音の音的対応から共通する語根 (共通語根) を抽出する。語根子音が同一で、意味が異なるもの (同根異義語) は別々にカウントする。共通語根のうちで、意味的な対応関係にあると判断したものを対応する語根 (対応語根) としてマークする。対応語根に注目して、変種間にもどのような語幹母音の対応があるかを観る。2 つ目は、変種それぞれにおける語幹母音体系の比較である。はじめに、各変種における語幹母音の分布を整理する。加えて、それぞれの語幹母音のパターンを示す語数がどのくらいあるかも示す。他動性は、他動詞・係動詞・自動詞の 3 系列で整理する。他動詞とは、直接目的語を取るものである。係動詞とは、4 節の Ryding (2005: 366) への引用でみたように、ある特定の意味で目的語を支配するのに前置詞が必須となる動詞のことである。自動詞とは、他動詞でも係動詞でもないものである。

6. 調査結果

6.1. 調査 1: 変種間の比較

調査 1 で得られた結果を以下の表 3 にまとめた。なお、表中の割合を示した部分で当該ペアの対応語根を上回る数が母数となっているのは、複数の語幹母音パターンを持つ動詞があり、それぞれのパターンについて別個に集計したからである。

表 3: 調査 1 の結果まとめ

ペア	共通語根	対応語根	概況
MSA – MLT	225 語根	182 語根	・MSA {a / u} と MLT {a / o} の対応が最頻 (43 語 / 256 語; 例: MSA. <i>daxal</i> / <i>dxul</i> :: MLT. <i>dahal</i> / <i>dhul</i> ‘to enter’) である。 ・他動性に関わらず非喉音語幹 MSA {a / x} はすべて MLT {i / x} に対応 (47 語, 例: MSA. <i>katab</i> / <i>aktab</i> :: MLT. <i>kiteb</i> / <i>ikteb</i> ‘to write’)
MSA – CYR	988 語根	881 語根	・MSA {a / u} と CYR {a / u} の対応が最頻 (165 語 / 1213 語; 例: MSA. <i>daxal</i> / <i>dxul</i> :: CYR. <i>dahal</i> / <i>dhul</i> ‘to enter’) である。 ・他動性の観点から分析した過去語幹における他動性の対応に偏りがある (後述)
MLT – CYR	199 語根	172 語根	・MLT {a / o} と CYR {a / u} の対応が最頻 (40 語 / 239 語)

MSA – CYR のペアにおける、過去語幹における他動性の対応に偏りというのは次のようなものである。表 4 を見ると、MSA – CYR で過去語幹母音の対応と他動性の分布は偏りがあることわかる。MSA /a/ :: CYR /i/ (表 4 左下) と MSA /i/ :: CYR /a/ (表 4 右上) で分布が非対称的である。

表 4: MSA – CYR における過去語幹母音の対応と他動性 (単位: 語)

			MSA					
			a			i		
			他動詞	係動詞	自動詞	他動詞	係動詞	自動詞
CYR	a	他動詞	167	0	10	13	4	31
		係動詞	0	0	0	0	0	0
		自動詞	5	5	24	1	2	10
	i	他動詞	0	0	0	1	0	0
		係動詞	0	0	0	0	0	0
		自動詞	2	0	7	1	2	17

MSA {a / x} :: CYR {i / x} において、MSA で自動詞かつ CYR で自動詞である動詞は 7 語ある (例: MSA. *baṭal* / *bṭul* :: CYR. *biṭil* / *bṭal* ‘to be void’)。MSA {a / x} :: CYR {i / x} において、MSA で他動詞かつ CYR で自動詞は 2 語ある (MSA. *ḥazan* / *ḥzun* ‘to sadden’ :: CYR. *ḥizīn* / *ḥzan* ‘to become sad’, MSA. *ḥabat* / *ḥbut* ‘to lower’ :: CYR. *ḥabāt* / *ḥbat* ‘to come down’)。MSA {a / x} :: CYR {i / x} の動詞は全体で 23 語あり、このうち 9 語 (39.1%) は他動性の関与した変化だと言える。

MSA {i / x} :: CYR {a / x} において、MSA で他動詞かつ CYR で他動詞である動詞は 13 語ある (例: MSA. *jarīṣ* / *jrāṣ* ‘to gulp’ :: CYR. *garaṣ* / *graṣ* ‘to drink’)。MSA {i / x} :: CYR {a / x} において、MSA で係動詞かつ CYR で他動詞である動詞は 4 語ある (MSA. *raḡīb* / *rḡab* + *fi* ‘to desire’ + ‘in’ :: CYR. *riḡīb* / *rḡab* ‘to desire’)。MSA {i / x} :: CYR {a / x} において、MSA で自動詞かつ CYR で他動詞である動詞は 31 語ある (例: *bašim* / *bšam* ‘to become fed up’ :: CYR *bišim* / *bšam* ‘to surfeit’)。MSA {i / x} :: CYR {a / x} の動詞は全体で 82 語あり、このうち 48 語 (58.5%) は他動性の関与した変化だと言える。

MSA {i / x} :: CYR {a / x} のうち、他動性が関与したと思われるものは 58.5% である。この割合は、MSA {a / x} :: CYR {i / x} において同様に他動性から説明できるものの割合である 39.1% より約 20 ポイント高い。他動性の整理は確かに観察できるが、ここにおいて、MSA {a / x} :: CYR {i / x} と MSA {i / x} :: CYR {a / x} が非対称的であると判断できる。この非対称性を生んだ原因について考察してみる。MSA /i/ :: CYR /a/ の変化にはもう 1 つ喉音・強勢音の関与が考えられる。他動性の整理に、喉音・強勢音の関与が交絡して、以上のような非対称性をもたらしたのではないだろうか。喉音・強勢音の関与のほうが先行しているともみることができる。MSA /i/ :: CYR /a/ において MSA で自動詞かつ CYR で他動詞である

動詞の 31 語は、他動性が関与したと考えられるもののなかで数も多い。まず、喉音・強勢音によって MSA $\{i/x\} :: \text{CYR } \{a/x\}$ の対応となり、CYR $\{a/x\} =$ 他動性が高い (0 節を参照) という図式からの類推で他動詞となったと考えることができる。

6.2. 調査 2: 個別の分析

以下の表 5 は、調査 2 の結果を簡潔にまとめたものである。

表 5: 調査 2 の結果まとめ

	語類	他動性	音韻
MLT	9 種類	・ 若干の関連がある。	・ 喉音語幹は $\{a/e\}$, $\{e/x\}$ 、非喉音語幹は $\{i/x\}$ に集中している。
CYR	9 種類	・ 過去語幹だけでなく、現在語幹にも関連が観察された。	・ 喉音語幹に 2 種類観察された: $\{a/a\} \rightarrow R_2$, R_3 に喉音を持つ, $\{i/a\}$ と $\{u/a\} \rightarrow \sqrt{R_1 R_2 R_3}$ に喉音を持つ。

表 6: MLT の過去語幹と他動性 (単位: 語)

		他動詞	係動詞	自動詞	計
過去語幹	<i>a</i>	105 (52.5%)	15 (7.5%)	80 (40.0%)	200
	<i>e</i>	41 (49.4%)	8 (9.6%)	34 (41.0%)	83
	<i>i</i>	38 (47.5%)	3 (3.8%)	39 (48.8%)	80
	<i>o</i>	15 (32.6%)	2 (2.2%)	30 (65.2%)	46

表 6 から、MLT の過去語幹と他動性の関連について次のように整理できる。他動詞の割合が /a/ から /o/ にかけて低下し、係動詞も同様の振舞いを見せる。一方、自動詞の割合が /a/ から /o/ にかけて上昇している。ここから、次の 2 つのことがわかる。1 つ目は、他動性のスケールを $a > e > i > o$ のように設定できることである。2 つ目は、係動詞は他動詞と同じ範疇にあるということである。MLT の語幹母音と他動性の関連については先行研究では指摘されてこなかった。

表 7: CYR の過去語幹 (左) 及び現在語幹 (右) と他動性

過去語幹						現在語幹					
		他動詞	係動詞	自動詞	計			他動詞	係動詞	自動詞	計
過去語幹	<i>a</i>	674 (63.6%)	26 (2.5%)	360 (34.0%)	1,060	現在語幹	<i>a</i>	188 (40.4%)	12 (2.6%)	265 (57.0%)	465
	<i>i</i>	31 (15.1%)	9 (4.4%)	165 (80.5%)	205		<i>i</i>	313 (69.6%)	12 (2.7%)	125 (26.3%)	450
	<i>u</i>	3 (5.2%)	3 (5.2%)	52 (89.7%)	58		<i>u</i>	231 (61.6%)	12 (3.2%)	132 (35.2%)	375

CYR の過去語幹母音については、他動性について、 $a > i > u$ のスケールを設定することができる。係動詞の分布は、他動詞よりも、自動詞と連動しているようである。自動詞の割合は $/a/$ $/i/$, $/u/$ で大幅に異なる ($a \gg i > u$)。CYR の過去語幹母音において、低母音は他動性の高い動詞と、高母音は他動性の低い動詞と関連する傾向がある。CYR では、現在語幹母音においても他動性の関連を指摘することができる。CYR の現在語幹母音について、他動性のスケールを $i > u > a$ と設定することができる。

7. 全体の考察

7.1. 語幹母音体系における 3 つのドリフトについて

語幹母音体系について、観察されたデータから、次の 3 つの傾向があることがわかる。1 つ目は過去語幹母音において低母音なら他動詞であり、高母音なら自動詞であることである。係動詞については、全体のデータが少なく断言はできないものの、他動詞と同じ傾向を有するか、自動詞と同じ傾向を有するかで分かれた。MLT では、係動詞は他動詞に連動した分布を見せる。一方、CYR では、係動詞は自動詞に連動した分布を見せる。2 つ目のドリフトは、喉音語幹や強勢音語幹でしばしば低母音を持つことである。以上 2 つの傾向は共時的にも通時的にも観察することができ、アラビア諸語の語幹母音における一般定向変化 (英: *general drift*) と言うべきものである。3 つ目は、MLT には当てはまらないが、過去語幹が低母音なら現在語幹は高母音で逆も然りという両語幹の対応関係である。以上のことは先行研究でも述べられている。

今回観察対象とした MLT, CYR の特徴を簡潔に述べる。MLT では、2 つ目の傾向、つまり喉音語幹でしばしば低母音を持つ傾向が特に強い。逆に非喉音語幹では、高母音を持つ。CYR では、1 つ目の他動性に関する傾向が強い。CYR では、3 つ目の傾向と併せて、現在語幹においても他動性の関連が観察できる状態である。

以上、アラビア諸語の語幹母音体系における 3 つのドリフトについて述べたが、このドリフトの発生原因について考察したい。3 つドリフトすべてにわたって、低母音と高母音の対立が関わっていることが分かる。これらの母音の音色の対立に直接関わっているのは、やはり喉音や強勢音である。喉音や強勢音の関与によって低母音と高母音の対立が生まれ、この対立が他動性や語幹の区別に転用されてきたのではないだろうか。実際、CYR では他動性の整理に喉音や強勢音の関与が先立っているものと考えられる (0 節)。一方、MLT では喉

音・強勢音によって語幹母音体系が整理されているが、そこに他動性は交絡してきていない(0 節)。このことに関しては、長渡 (2002) がすでに指摘している。しかし MLT における共時的な語幹母音体系を分析すると、分布と他動性が若干関連している(0 節)。MLT でも他動性と関連する語幹母音体系の残渣が見て取れる。これは、アラビア諸語の語幹母音体系の変化において、他動性による整理および喉音・強勢音による整理のうちで一方が一方に対して優勢になったり劣勢になったりというプロセスが繰り返されてきたことを示唆する。

7.2. 語幹母音体系の理論的な整理について

先行研究では、語幹母音体系について高低交替理論(0 節)と線形交替理論(0 節)という2つの理論が提唱されている。本稿では、高低交替理論が現在語幹から過去語幹を説明するのに対し、線形交替理論が過去語幹から現在語幹を説明しており、相異なることを問題とした。本節では、これらの理論が前節で述べたドリフトによって説明できることを述べる。狙いは、語幹母音体系が過去語幹からも現在語幹からも説明できないことを主張することである。

線形交替理論(図2)の $\emptyset$ は実質的には a であるから、 $u \rightarrow u$ を除けば図2の線形交替も結局は高低交替である。高低交替と線形交替の本質的な差異は、前者の高低交替が現在語幹から過去語幹への母音交替を想定し、後者の線形交替が現在語幹から過去語幹への母音交替を想定しているという点である。語幹母音体系は両語幹のいずれかから他方への母音交替では説明できないというのが本稿での主張である。通時的に見ると、語幹母音体系は実に多様な変化をする。過去語幹母音だけ変化したり現在語幹母音だけ変化したり、両方とも変化するような例も多々観察できる。このような状況から、両語幹それぞれ独立して話者に記憶されているものと判断できる。両語幹における母音の高低が意識されるのは、 $\{a/u\}$ (MLTでは $\{a/o\}$)が比較的安定した語類として成立していることが原因なのではないかと考える⁷。 $\{a/u\}$ は母音の高低で対立しており、この語類が語幹母音体系の標準語類として両語幹を母音の高低で交替させる動機となっているのではないかと推測する。

8. おわりに：今後の展望と課題

本稿では、アラビア諸語の語幹母音体系について、量的なデータの分析から先行研究の記述をさらに発展させ、その諸相について検討できた。今後の課題としては、①より多くのアラビア諸語の変種における語幹母音体系を検討しデータを蓄積すること、②そのデータからアラビア諸語の語幹母音体系の変遷を詳らかにすること、③さらに他のセム諸語との語幹母音体系の比較を試みること、である。

⁷ 筆者は $\{a/u\}$ (MLT $\{a/o\}$)が $\{u/u\}$ (MLT $\{o/o\}$)から由来するものと考えている。 $\{u/u\}$ (MLT $\{o/o\}$)は先行研究でも指摘されているように状態動詞の語類として非常に安定している。しかし、その成立の要因についてはアラビア諸語から例証できる範囲を超えるものと考え、ここで指摘するのに留める。

略号一覧

-	: 要素の境界	A-B	: A と B の比較
√	: 動詞の語根	A~B	: A と B の交替
R_n	: 第 n 語根	A::B	: A と B の対応
		{A/B}	: 語幹母音パターン{過去 _A /現在 _B }
CA	: 古典アラビア語	MSA	: 現代標準アラビア語
MLT	: マルタ語	CYR	: アラビア語カイロ方言

参考文献

Aquilina, Joseph (1965) *Maltese: A Complete Course for Beginners*. Illinois: NTC Publishing Group. / Cowan, J. Milton (1976) Hans Wehr: a Dictionary of Modern Written Arabic, 3rd ed. New York: Spoken Language Services. / Danks, Warwick (2011) *The Arabic Verb: Form and Meaning in the Vowel-lengthening Patterns*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. / フェルステーヘ, キース (2015) 『アラビア語の世界 歴史と現在』 長渡陽一 (訳), 東京: 三省堂. [原著: Kees Versteegh (2014) *The Arabic Language*. Edinburgh: Edinburgh University Press.]. / Grotzfeld, Heinz (1965) *Syrisch – arabisch Grammatik: Dialekt von Damaskus*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz. / Guerssel, Mohamed and Jean Lowenstamm (1996) Ablaut in Classical Arabic Measure I Active Verbal Forms. In: Jacqueline Lecarme et al. (eds.) *Studies in Afroasiatic Grammar*. 123-134. The Hague: Holland Academic Graphics. / Holes, Clive (1995) *Modern Arabic: Structures, Functions, Varieties*. New York: Longman Publishing. / 上原唱 (2006) 「現代標準アラビア語の地域的特徴に関する研究——CYR・シリア・チュニジアの新聞を比較して」 アラブ・イスラム研究編集委員会 (編) 『アラブ・イスラム研究』 5: 31-42. / McCarthy, John J. (1981) Semitic Gutturals and Distinctive Feature Theory. In: Bernard Comrie and Mushira Eid (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistic*, III: 63-91. / McOmber, Michael L. (1995) Morpheme Edges and Arabic Infixation. In: Mushira Eid (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics*, VII: 173-189. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. / Michel, T. F. (1956) *An introduction to Egyptian Colloquial Arabic*. Oxford: Oxford University Press. / 長渡陽一 (2002) 「アラビア語方言の祖語を再建する際の問題点」 東京外国語大学修士論文. / _____ (2005) 「アラビア語方言における歴史音韻論的ないくつかの問題」 東京外国語大学博士論文. / Ryding, Karin (2005) *A reference grammar of modern standard Arabic*. Cambridge: Cambridge University Press. / 宮川寛人 (2024) 「現代標準アラビア語の動詞語幹母音に観られる文法的・音響的な特徴」 『東京外国語大学記述言語学論集』 19: 133-140.

資料

MLT: Aquilina, Joseph (1987-1990) *Maltese-English dictionary*, 1-2. Valletta: Midsea Books. / CYR: Badawi, El-Said M. and Martin Hinds (1986) *A Dictionary of Egyptian Arabic: Arabic-English*. Beirut: Librairie du Liban.

ウェブ資料

Alladin Plus ver 1, <http://www.linca.info/alladinPlus/> (最終閲覧: 2024/12/08) / Gabra, <https://mlrs.research.um.edu.mt/resources/gabra/> (最終閲覧: 2024/12/08)

データセット

https://drive.google.com/drive/folders/1Y3_ntj36HFZkni-i4EQDY1ZlIdi2Nng?usp=sharing

卒業論文 要旨

台湾語の方向補語 “khí-lâi 起來” と共起する動詞について
—中国語との対照を通じて—

今井 凜
(言語文化学部 中国語専攻)

キーワード：台湾語，方向補語，コーパス調査，khí-lâi 起來，対照言語学

0. はじめに

台湾語の方向補語 “khí-lâi 起來” は動詞に後接し、様々な意味を示す。たまり (2021)¹ によれば、台湾語の補語 “khí-lâi 起來” は中国語 “起來”² と同様、「…し始める」の意味を持つが、結びつくことのできる動詞が中国語より少ないとしている。

したがって、本稿では、“khí-lâi 起來” と共起する動詞について、コーパス調査及び中国語 “起來” との対照と通じて、共通点、相違点を見つけることを目的とする。

なお、本稿中の図表番号、グロス、文字飾り、例文の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。本稿における “khí-lâi 起來”、“起來” のグロスは、本稿で扱う直接の対象であるため “khí-lâi”、“qilai” とする。出典元の記載のない例文はすべてコーパスからのものである。コーパスの例文以外の台湾語音表記は中華民国教育部 (2008)、盧廣誠 (編) からの引用とする。さらに、本稿では台湾華語は中国語として扱うこととする。両言語の判別のため、引用でない限り中国語の語句は漢字のみの表記、台湾語の語句は臺灣閩南語羅馬字拼音方案³をもとにローマ字と繁体字を併記する。

1. 背景知識

1.1. 台湾語 “khí-lâi 起來”

中華民国教育部 (2008) によると、台湾語 “khí-lâi 起來” は動詞として起床や下から上の方向、北上等の意味を示すほか、動詞の後について判断や脱離、付着を表すとされる。以下は脱離を示す例である。

- (1) Sann tām khì ah, kín thng khí-lâi.
衫 澹 去 矣, 緊 褪 起來.
衣服 濡れる 行く PART はやく 脱ぐ khí-lâi
「服が濡れたので、早く脱いでください。」

(中華民国教育部 2008)

¹ たまり (2021) は個人のブログサイトであることに注意されたい。

² 本稿は台湾華語のデータを使用するため、いわゆる北京語の先行研究からの引用は簡体字表記、それ以外は繁体字表記で書く場合がある。

³ 詳しくは中華民国教育部 (2024) を参照のこと。

1.2. 中国語“起來”

刘 (編) (1998) は中国語の“起来”の用法について、①方向義: 低い状態から高い状態への移動、②結果義: 結合ないし固定・突出や隆起、③状態義: 新しい状態への進入、④特殊用法: ある方面からの説明や評価・観点を挙げている⁴。以下は状態義を示す例である。

- (2) 雪 又 下 起來 了。
雪 また 降る qilai PART
「雪がまた降ってきた。」

(刘 (編) 1998: 364)

2. 先行研究

1 節で述べたように、台湾語“khí-lâi 起來”について、たまり (2021) は、“khí-lâi 起來”は中国語“起來”と同様、「…し始める」の意味を持つとしている。しかし、たまり (2021) は開始を表す“khí-lâi 起來”が結びつくことのできる動詞が中国語より少ないとしている。

【中国語】

- (3a) 天 上 下 起 雨 來 了。
天上 降る qí 雨 lai PART
「雨が降り出した。」

(たまり 2021)

【台湾語】

- (3b) Thinn-tíng teh lóh-hōo ah.
天頂 咧 落雨 矣。
天 PROG 雨が降る PART
「雨が降り出した (雨が降っている状態になった)。」

(たまり 2021)

上記のように、台湾語の場合は、“lòh-hōo 落雨 (雨が降る)”という動詞に“khí-lâi 起來”を組み合わせることができず、「雨が降っているという状態になった」と言うしかないとしている (たまり 2021)。

3. 先行研究のまとめと問題提起

中華民国教育部 (2008) によれば、台湾語の補語“khí-lâi 起來”は判断や脱離、付着の意味を持つが、たまり (2021) は開始の意味も持つことを示唆している。さらにたまり (2021) は“khí-lâi 起來”と結びつく動詞に制限があることを示唆している。以上から、筆者は以下の想定をもとに、共起する動詞についてコーパス調査を通して明らかにする。

⁴ 王 (2011) は、補語“起来”は下から上の移動という空間的範疇の意から派生し、時間の流れや状態変化のような時間的範疇については客観から主観などの心理的範疇の意に発展したとしている。

- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| ① 中国語と台湾語に共通する動詞: | ・ 方向、特殊用法を示す動詞
・ 一部の状態義を示す動詞 |
| ② 中国語のみに出現する動詞: | ・ 状態義を示す動詞 |
| ③ 台湾語にのみ出現する動詞: | ・ 脱離の意味を持つ動詞 |

4. 調査

4.1. 調査①

調査①では「臺灣台語語料庫應用檢索系統」を使用する。このコーパスは台湾語の辞典や雑誌、作文などから構成され、57名の作者による合計約30万字の文章と208時間分の音声が入力されている。このコーパスの検索欄に「起來」と「起」を入力し、出てきた用例を収集する。その後、検索結果から“khí-lâi 起來”方向補語として用いられている文を手作業で抽出し、3例以上出現した動詞を分析する。

4.2. 調査②

調査②では「中央研究院漢語平衡語料庫」を使用する。このコーパスは1981年から2007年までの報道、散文、評論、詩歌、等の様々な文献から約1755万字分のデータを収録したタグ付きコーパスである。台湾語コーパスと条件を揃えるため、検索元の媒体を一般雑誌とその他に、テーマを社会、生活、文学に設定したのち、検索欄に「?起來」と「?起」（「?」は0～3個）⁵の両方を入力し、出てきた用例を収集する。その後、検索結果から“起來”が方向補語として用いられている文を手作業で抽出したのち、エクセルの乱数関数を用いて無作為に500例を抽出する。3例以上出現した動詞を対象に分析する。

4.3. 調査③

調査①、調査②それぞれの結果において2%以上の頻度で出現した動詞とその例文を抜き出し、意味分析を行う。1.2節“起來”の用法に則り、の6項目に分けて調査する。なお、用法の判断は筆者による。

- ① 方向 (動作を通じて低い状態から高い状態)
- ② 集中 (分散した状態から集中した状態)
- ③ 開始 (動作が始まり継続する状態)
- ④ 評価 (事物に対する見積もりや評価)
- ⑤ その他
- ⑥ 判断不能

⁵ “?” は当該コーパスにおける正規表現の一種である。“?”の文字数だけ任意の文字が来ることを示す。このコーパスの性質上、他の語と“起來”がまとめて一単語としてタグ付けされている場合、「起來」のみの検索では結果が一部しか表示されないためこのように検索する。

5. 分析結果一覧

5.1. 調査①、調査②分析結果一覧

分析対象となった動詞の対訳を盧廣誠 (編) 『華台對照詞典』と中華民国教育部 (2008) 『教育部臺灣台語常用詞辭典』で調べ、意味の共通する動詞、片方の言語にのみ現れる動詞を特定したのち、さらにこれらの動詞を刈 (編) (1998: 374-380) に則り分類した。一部の動詞は重複する場合がある。紙幅の都合上、両言語とも分析対象となった動詞のみ表示する。

表 1: 台湾語と中国語に共通してみられる動詞

	【台湾語】					【中国語】			
方向義	khia̍	倚	立つ	8	2.08%	站	立つ	28	6.45%
	thèh	提	取り上げる 提示する	7	1.82%	拿	持つ	4	0.92%
	thiàu	跳	跳ねる	6	1.56%	跳	跳ぶ	7	1.61%
	peh	跣	這う	5	1.30%	爬	這い上る	11	2.53%
	liáh	掠	つかむ 推測する	3	0.78	抓	つかむ	4	0.92%
結果義	siūnn	想	思う	5	1.30%	想	考える、思う	14	3.23%
	uī	圍	囲む	4	1.04%	圍	囲む	4	0.92%
	ka	加	加える	4	1.04%	加	加える	12	2.76%
	liáh	掠	つかむ 推測する	3	0.78%	抓	つかむ	4	0.92%
	pau	包	包む	2	0.52%	包	包む	4	0.92%
状態義	khuànn	看	見る	51	13.25%	看	見る	55	12.67%
	kóng	講	話す	14	3.64%	講	話す	3	0.69%
						說	言う、話す	5	1.15%
	thiàu	跳	跳ねる	6	1.56%	跳	跳ぶ	7	1.61%
	siūnn	想	思う	5	1.30%	想	考える、思う	14	3.26%
	thiann	聽	聞く	5	1.30%	聽	聞く	10	2.30%
	tshīng	穿	着る	5	1.30%	穿	着る	1	0.23%
	tsiáh	食	食べる	5	1.30%	吃	食べる	5	1.15%
特殊	sng	算	計算する	3	0.78%	算	計算する みなす	3	0.69%
	khuànn	看	見る	51	13.25%	看	見る	55	12.67%
	kóng	講	話す	14	3.64%	講	話す	3	0.69%
						說	言う、話す	5	1.15%
	thèh	提	取り上げる 提示する	7	1.82%	拿	持つ	4	0.92%
	siūnn	想	思う	5	1.30%	想	考える 思う	14	3.23%
	thiann	聽	聞く	5	1.30%	聽	聞く	10	2.30%
	tsiáh	食	食べる	5	1.30%	吃	食べる	5	1.15%
	sng	算	計算する	3	0.78%	算	計算する みなす	3	0.69%

(刈 (編) (1998: 374-380) をもとに筆者作成)

表 2: 片方の言語にのみ現れる動詞

【台湾語】	動詞	意味	頻度	割合	対訳
方向義	giā 夯	肩で持ち上げる	11	2.86%	扛
	hian 掀	はがす、開く	5	1.30%	掀
	khioh 拵	拾う	8	2.08%	撿
結果義	kuainn 關	閉める	15	3.90%	關
	pák 縛	束縛する	6	1.56%	綁
状態義	giā 夯	肩で持ち上げる	11	2.86%	發作
	thng 褪	脱ぐ	5	1.30%	脱
特殊用法	thng 褪	脱ぐ	5	1.30%	脱
【中国語】	動詞	意味	頻度	割合	対訳
方向義	叫	呼ぶ、使役	3	0.69%	kiò 叫
結果義	蓋	ふたをする、建てる	4	0.92%	kah 蓋, khí 起
	建立	設立する、形成する	3	0.69%	kiàn-lip 建立
状態義	哭	泣く	5	1.15%	háu 哭
	笑	笑う	5	1.15%	tshiò 笑
	叫	呼ぶ、使役	3	0.69%	kiò 叫
	下	降る	3	0.69%	lòh 落
	唱	歌う	3	0.69%	tshiunn 唱
特殊用法	哭	泣く	5	1.15%	háu 哭
	笑	笑う	5	1.15%	tshiò 笑
	叫	呼ぶ、使役	3	0.69%	kiò 叫
	聞	嗅ぐ、聞く	3	0.69%	phinn 鼻
	玩	遊ぶ	3	0.69%	sng 耍
	唱	歌う	3	0.69%	tshiunn 唱

(刘 (編) (1998: 374-380) をもとに筆者作成)

5. 2. 調査③分析結果

表 3: 例文分析結果一覧

【台湾語】	①方向	②結果義	③状態義	④特殊用法	⑤その他	⑥判断不能	合計
khuann 看				51/100%			51
kuainn 關		15/100%					15
kóng 講				10/71.43%		4/28.57%	14
giā 夯	4/36.36%		7/63.64%				11
siu 收		10/100%					10
khia 倚	8/100%						8
【中国語】	①方向	②結果義	③状態義	④特殊用法	⑤その他	⑥判断不能	合計
看				55/100%			55
站	28/100%						28
想		10/71.43%		4/28.57%			14
加		12/100%					12
比				11/100%			11
爬	11/100%						11
聽				9/90.00%		1/10.00%	10

6. 考察

6.1. 両方の言語に共通して出現する動詞

概ね筆者の想定通り、台湾語の“khí-lâi 起來”は中国語と同様に方向、集合、特殊(評価)を示す動詞と共起することを確認できた。さらに、調査③から台湾語“khí-lâi 起來”は中国語と同様に方向や結果、状態義のような振る舞いをする事が確認できた。以下の例文は、両言語で同様の意味を持ち、かつ同様の用法を示す一例である。

・方向

【台湾語】

- (4) Khia̍ khí-lâi huê-lé
倚 起來 回禮
立つ khí-lâi 返礼する
「立って返礼する」

【中国語】

- (5) 女人 站 起來 ,
女の人 立つ qilai
「彼女は立ち、」

6.2. 片方の言語にのみ出現する動詞

6.2.1. 想定通り出現した動詞

3 節の想定通りに出現した動詞は“thng 褪”、“hian 掀”、“pak 剥”、“笑”、“哭”、“唱”、“叫”、“下”、“跳舞”、“玩”、“聞”、“振作”の12個である。台湾語側の動詞は脱離の意味が含まれるもの、中国語側の動詞は明らかな方向の意味を有していないものを取り上げた。

- (6) 她 突然 笑 了 起來 ,
3SG.F 突然 笑う PART qilai
「彼女は突然笑い出し、」

中国語の動詞の9例中5例が状態義に分類されていることから、たまり(2021)の主張通り、開始を示す台湾語“khí-lâi 起來”と共起する動詞に制限があることが示唆された。

6.2.2. 想定外の動詞

筆者が想定外と判断した動詞は、方向や集合の意味を伴っているが片方の言語でしか出現しない動詞である。“kuainn 關”、“giâ 夯”、“khioh 拊”、“pák 縛”、“khat 𪗇”、“khōng 鞏”、“ping 冰”、“建立”、“蓋”の9つが該当する。これらの動詞の対訳をコーパス内で検索したところ、動詞が片方のみにしか出現しなかった可能性が3点浮上した。

一点目は他の補語や動詞との共起である。例えば “扛”・“發作” (“giâ 夯”)、“撿” (“khioh 拵”)、“昏” (“khat 斟”) は、下から上の方角を示す “起” と共起する。“綁” (“pák 縛”) は付着を表す “上” や固定を示す “住” との共起がみられた。“砌” (“khōng 鞏”) は「…になる」という意味を持つ “成” との共起がみられた。

- (7) 他 舀 起 一粒 湯圓，
3SG.M すくう 上げる 一粒 湯圓
「彼は一粒の湯圓をすくい、」

二点目は目的語との共起である。“khí 起” (“蓋” 建てる) は直接目的語を取る、もしくは目的語を文頭に置く例が多くみられた。

- (8) Tsit king tuā-thiann **khí** liáu tsiānn thiau-lāng.
這 間 大廳 起 了 誠 挑佢。
この PART ホール 建てる PART とても 広々としている
「このホールはとても広々としている。」

三点目はデータ不足や集計漏れにより結果に反映されなかったためである。例えば “昏” (“khat 斟”) はコーパスでの検索結果が 1 件しかなく、データ不足が疑われる。“kuainn 關” (“關”) を含む例文はランダム抽出する前の元データには 33 件含まれていたが、抽出後の調査に用いたデータでは 0 件であったことから、集計漏れが関与していると考えられる。

6.2.3. 台湾語 “khí-lâi 起來” における開始の用法

調査③では、台湾語の動詞のうち “giâ 夯” の例文を状態義と分類した。

- (9) Tsit-sî-tsūn tiōh-ài kâ tiānn giâ khí-lâi,
這時陣 著愛 共 鼎 夯 起來，
この時 …しなければならない を 大鍋 上げる khí-lâi
「この時、大鍋を上げなければならず、」

- (10) Guá uī-thiānn koh giâ khí-lâi ah.
我 胃疼 閣 夯 起來 矣。
1SG 胃痛 また 出る khí-lâi PART
「私は胃痛がまた出てきた。」

例文 (9) の “giâ 夯” は具体的な下から上の方角を示すのに対し、例文 (10) は「胃痛」という物事が出現したことを表している。さらに “thêh 提” (取り上げる) に関しても、具体的な方向のみならず抽象的な概念の出現を示す例文が見つかった。

(11) Kuè-khì tsióng-tsióng ê tãi-tsi, tō mài koh thèh khí-lài
 過去 種種 的 代誌, 就 莫 閣 提 起來
 過去 様々 の こと EMP …するな また 取り上げる khí-lài

kóng ah.

講 矣。

言う PART

「過去の様々なことはもう取り上げるな。」

このことから、台湾語の“khí-lài 起來”は中国語の“起來”ほど開始の用法が見られないものの、下から上の方向の意味から派生的に出現を示し、結果的に動詞の意味や文脈によって“khí-lài 起來”が開始を示しているように見える可能性がある。

7. まとめと今後の課題

本研究を通して以下の4点を明らかにした。①台湾語“khí-lài 起來”、中国語“起來”は共起する動詞の多くが共通し、同様の振る舞いをする。②台湾語“khí-lài 起來”は、中国語よりも明らかな方向や集合の意味を持たない動詞とは共起しにくいこと。③方向や集合の意味を伴う動詞でも、言語によって他の補語と共起したり、補語を伴わず目的語と共起したりするため、必ずしも“khí-lài 起來”とは共起しないこと。④台湾語“khí-lài 起來”が一部の方向の意味を持つ動詞と共起する場合、派生的に出現の意味を示し、動詞の意味や文脈によって開始のように見える可能性があること。

今後の課題として、今回用いた台湾語コーパスは辞書からのデータも含んでいるため、調査結果には典型的な用法が多く反映されており、実情とずれている可能性がある。より広いジャンルや多くの資料からデータを収集し、実態に即した分析を行いたい。

〈略号一覧〉1: 1 人称/ 2: 2 人称/ 3: 3 人称/ COP: コピュラ/ EMP: 強調/ F: 女性/ M: 男性/ NEG: 否定/ PART: 小辞/ PL: 複数/ PROG: 進行/ SG: 単数

〈参考文献〉王晓凌 (2011)「补语“起来”隐喻认知的过程分析」『安徽大学学报 (哲学社会科学版)』77-84, 安徽: 安徽大学./ 陳麗君・蔡承維・林虹瑛・三尾裕子 (2012)『平成 24 年度言語研修 台湾語研修テキスト 1 台湾語入門』三尾裕子 (編)『平成 24 年度言語研修台湾語研修テキスト』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所./ 中嶋幹起 (1992)「閩南語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著)『言語学大辞典: 世界言語編 (下-1) む-ほ』3, 630-634. 東京: 三省堂./ 樋口靖 (2008)「台湾閩南語における状態補語の用法」『東京外国語大学論集』77, 31-45. 東京: 東京外国語大学./ 刘月华 (編) (1998)『趋向补语通释』342-380. 北京: 北京语言文化大学出版社./ 劉月華・潘文娛・故韡・相原茂 (監訳) (1991)『現代中国語文法総覧 (下)』132, 469-477. 東京: くろしお出版 (实用现代汉语语法. 北京: 外语教学与研究出版社, 1983)./ たまり (2021)「台湾語の方向補語その 2」<https://ameblo.jp/windy-wavy/entry-11963007618.html?frm=theme> [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]/ 中華民國教育部 (2024)「臺灣閩南語羅馬字拼音方案使用手冊 (改訂版)」https://language.moe.gov.tw/files/people_files/tshiutshoh_1131025.pdf [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]/ 中華民國教育部 (2008)『教育部臺灣台語常用詞辭典』<https://sutian.moe.edu.tw/zh-hant/> [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]/ 盧廣誠 (編)「華台對照詞典」https://tggl.naer.edu.tw/chinese_taiwanese_words [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]

〈調査資料〉国家教育研究院「臺灣台語語料庫應用檢索系統」<https://tggl.naer.edu.tw/> [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]/ 中央研究院 (2003)「中央研究院漢語平衡語料庫 4.0 版」<https://asbc.iis.sinica.edu.tw/> [最終閲覧日: 2025 年 1 月 10 日]

宮古クレオロイドの形式「ベキ」について On the form 'beki' in Miyako-substrate Japanese

岩隈 航男

(言語文化学部 ロシア語専攻)

キーワード：宮古クレオロイド，宮古語，言語接触，モダリティ

1. はじめに

本稿は、宮古クレオロイド（‘Miyako-substrate Japanese’，以下 ‘MSJ’）における形式「ベキ」の形式的特徴と用法を世代間のバリエーションの観点から記述することを目的とする。本稿では表記上の区別として、標準日本語（以下「共通語」）を仮名交じり文、MSJ をカタカナ、宮古語を音素表記で表す。例文・図表番号および共通語訳は、特に断りが無い限り筆者によるものである。

2. 背景知識

「琉球クレオロイド」(Anderson 2019 で ‘Ryukyu-substrate Japanese’，以下 ‘RSJ’) は、琉球諸語と共通語の言語接触によって生じた、琉球諸語の言語的特徴が持ち込まれた共通語諸変種を指す。琉球諸語の話者が共通語を習得する過程で、不完全な習得が行われた (狩俣 2019)。しかし、現在の琉球列島では日本語が住民の大半の母語となっている。

琉球列島における共通語諸変種の接触言語の理論的分類はロング (2010) や Anderson (2009) で議論されてきたが、クレオロイドの一種とする仮説を提唱したかりまた (2010) は「琉球クレオロイド (日本語)」という用語を採用した。この言語体系を「クレオロイド」と見なす妥当性について議論の余地はあるが、共通語・宮古語と区別するために、本稿では便宜的に用いることにする。

MSJ は RSJ の下位区分であり、宮古語を基層語とする。話者は伝統的に宮古語が話されている宮古列島に分布していて、現在は宮古列島の住民の大半は MSJ の変種を母語として使用していると推測される。MSJ の言語体系の大部分は上層語 (共通語) から来るが、音韻・文法・語彙の面で基層語 (宮古語) の影響が残っている。本稿で取り扱う「ベキ」もその一例である。

3. 先行研究

3.1. 宮古クレオロイドの「ベキ」について

永田 (1996) は MSJ の「ベキ」を、「義務」を表す宮古語の *gamata*¹ に対応する終助詞とし、共通語の終助詞「の」のように疑問文を形成できると述べている (1)。共

¹ この形式は文献上では「カマタ/ガマタ/*kamata/gamata/gumata/gumuta*」などと記されている上に、方言によって語形が異なるが、本稿では個別方言での語形への言及を除いて、斜字体の *gamata* に統一する。

通語の「義務」の形式として「ベキ」(2)が挙げられている。「ベキ」の使用年齢層について、「ベキ」は主に老年層に使われているとしている(永田 1996: 82)。

- (1) ドコエイクベキ?

「どこに行くの?」

(永田 1996: 81)

- (2) イクベキ。

「行かないといけない。」

(永田 1996: 77)

本永(1984)はRSJにおける動詞活用のもダリティ形式としてMSJの助動詞²「ベキ」を例として挙げ、それについて「当然・義務」の意味を伴わない「予定」の意味で使用されることもあると述べている(3, 4)。更に、基層語で「予定」を表す *gamata* を偶々「ベキ」に当てたものとし、形式間の関係性を指摘している。

- (3) ボクワアシタエイガオミニイクベキダ。

「僕は明日映画を見に行く予定だ。」

- (4) キミワイカナイベキカ?

「君は行かない予定か?」

(本永 1984: 378)

3.2. 宮古語の *gamata* について

3.2.1. 来間方言の *-gamata*

来間方言における *-gamata* は、認識的もダリティ内の仮定的ムードを表す形式であり、動詞の「辞書形」(直接法非過去形)に付く動詞屈折接辞として分析されている。この *-gamata* は通時的に文法化した形式名詞に由来する。*-gamata* は主な用法として、ある事象が未来に実現されることへの話者の強い確信を表すことである。*-gamata* は未来の事象に対する確信を表す用法以外にも、事象の必要性を表現する義務的もダリティの用法も持っている(Jarosz 2024: 117)。

肯定文で *-gamata* は非一人称主語と共起することができ、人称によって異なるもダリティを表す。二人称主語と共起する場合は必要義務もダリティを表し、三人称主語と共起する場合は仮定的認識もダリティを表す。疑問文で *-gamata* が疑問詞と共起し、動詞の可能形に付いた場合、形式として疑問文でありながら、命題に対する強い否定を表す反語的な用法を持つ。

3.2.2. 伊良部方言の *gumata*

伊良部方言における *gumata* は、形式名詞の *gumata* と、二次的屈折接辞の *-gumata* に分けることができる。*-gumata* は、*gumata* が文法化して動詞パラダイムに組み込まれたとい

² 本永(1984)と高梨(2005)(3.3.節)が言う「助動詞」は、国文法の枠組み内での意味で用いられている。「ベキ」の形態的振る舞いは形式名詞と見なす方が相応しいと考えるが、本稿では便宜的に「助動詞」という表現をそのまま残す。

う通時的变化を経たものである。gumata は、「義務・当然の帰結」を表すモーダルな用法を持つが、-gamata は認識的モダリティを持つ定動詞確定未来法の形と分析されている。確定未来形は発話時点で今後予想される事象を表す。しかし、-gamata が表す事象は、非過去直説形で表される事象と比べてそれほど切迫していないもしくは明白ではない (Shimoji 2008: 217)。-gumata は形式名詞に由来する形式として、名詞としての統語的性質を残しているためコピュラを取ることができ、過去時制の文もしくは否定文にする場合は名詞述語と同じストラテジーを使う。

3.3. 共通語の「べき」について

3.3.1. 評価的モダリティ形式内の「べき」と用法

高梨 (2005: 1)³ は共通語の「べき」を評価的モダリティ形式と位置付けている。評価的モダリティ形式が表す意味に、〈話し手の発話時の評価〉と〈客観的必要性・許容性〉の区別を、前者は「純粋な主観的態度」を示すが、後者は「客観世界の秩序、しくみ、事情のあり方として、ある事態が必要・不必要である、また許容される・許容されないということ」を示す。「べき」以外の多くの評価的モダリティ形式は両方の意味領域をまたぐ用法を持つが、「べき」はもっぱら主観的態度を示す形式とされているため、「当該事態が妥当である」という基本的意味を持ち、〈話し手の発話時の評価〉を表す (高梨 2005: 7)。

この評価の対象として、「一般的な事柄の妥当性」、「個別的な事柄の妥当性」について述べることができる。当該事態が聞き手の未実現の行為である場合、働きかけの機能が生じ、「勧め」の表現となる。否定形は当該事態が妥当ではないという評価を主に表すが、のように当該事態が聞き手の未実現の行為である場合、「禁止」を意味する。過去形かつ一人称主語である場合、当該事態が実現しなかったという「後悔」の意味になる。主語が一人称以外の場合だと「不満」を意味する。

3.3.2. 「べき」の形式的特徴

文節末で「べき」には必ずコピュラ「だ」が付き、「べきではない」、「べきだった」のようにコピュラが過去形・否定形として現れることができる。なお、「べき」の否定・過去時制はあくまで統語的性質であり、「べき」のモダリティは否定・時制変化の作用域に入らない (Larm 2018: 131)。「べき」が後続する要素として、主に動詞の肯定非過去形がある。それ以外の名詞・形容動詞・形容詞に付く場合、コピュラの「=で」や形容詞のク形など、連用形と状態動詞「ある」の組合せが必要となる。

日本語記述文法研究会 (2003: 105) は、「べき」は形容詞のイ形 (終止形) に直接続くことはできないとしている。動詞の否定形 (形態的に形容詞のイ形と同じであるため) に直接続くことはできず、動詞が表す動作を否定させる場合は「べき」に付くコピュラを活用させ、形式的に外部否定をしなければならない (Larm 2018: 119-120)。しかし、Larm (2018) による

³ 評価的モダリティは「ある事態が実現することに対する、必要だ、必要でない、許容される、許容されないといった評価的なとらえ方を示すモダリティ」である (高梨 2005: 1)。

と、若年層話者の中で動詞の否定形に「べき」が直接続く形式が使われていることを述べていて、統語的変化が起きつつあることを示している。加藤 (2016) は今後「～ないべきだ」という表現が増えていくかもしれないと述べている。

4. 問題提起

MSJ の「べき」に関する記述が少なく、形式的特徴や用法について先行研究間で矛盾や一部の欠落が見られる。

永田 (1996) は「べき」を終助詞とし、文末で疑問文を形成・終止する文例 (1, 2) を提示しているが、本永 (1984) の文例 (3, 4) では「べき」がコピュラ =ダ や疑問文末助詞 =カ に続いており、「べき」を終助詞とする位置付けは難しい。永田 (1996) は「べき」の用法として「義務」や「予定」の用法を挙げているが、具体的なモダリティの説明には乏しく、不明瞭な点が残されている。社会言語学的特徴について、永田 (1996) は「べき」の使用が老年層に限定されるとしているが、筆者の観察や島民の記述 (さいが族 2002) によると、この形式は非標準的な用法を含め、幅広い年齢層で認識されている。また、宮古語 *gamata* と共通語「べき」との関係について、本永 (1984) は3形式間の対応を指摘しているが、その詳細を記述していない。

以上の点を踏まえ、本稿の目的は、MSJ における「べき」の形式的特徴と用法を世代間のバリエーションの観点から記述することである。本稿では、話者の年齢区分を永田 (1996) による琉球列島における言語使用の世代区分、Anderson (2009) による話者グループ分類⁴と誕生年代を参考に改訂した表 1 のように設定する。○は完全習得、△は不完全習得、×は未習得を示し、調査時の話者分類も表 1 に準ずる。

卒業論文では調査ⅠからⅢまで実施し、調査Ⅱでは「べき」の形式面・用法面の世代差についてアンケート調査を行い、調査Ⅲでは談話資料収集を行った。なお、紙幅の都合上、本稿では調査Ⅰのみを取り扱う。

表 1: 筆者による宮古列島における言語使用の年齢区分

	老年層	中年層	若年層
誕生年代	～1950 年代半ば	1950 年代半ば ～ 1980 年代半ば	1980 年代半ば ～ 現在
対応話者グループ	Full speakers Rusty speakers	Semi-speakers	Non-speakers
宮古語	○	△	×
MSJ	○	○	○
共通語	×	×	△

(永田 1996: 9、Anderson 2009: 238, 283 をもとに筆者作成)

⁴ 世代区分の方法、話者グループの定義については永田 (1996: 9) と Anderson (2009: 238, 283) を参照。

5. 調査 I

調査 I では、調査 II の調査票作成のために、言語形成期を宮古島市で過ごした MSJ の若年層 (男 2005 年生)、中年層 (女 1968 年生)、老年層 (女 1934 年生) のコンサルタント 3 人を対象に、MSJ の「ベキ」の用法・形式的特徴に関する面接調査を実施した。

5.1. 調査結果

5.1.1. 「ベキ」の記述

「ベキ」は主に動詞の非過去形を後続し、発話時点から今後予想される事象を表す「予定」の用法で頻繁に用いられる。この用法は宮古語の *gamata* に類似し、未来時制的性格を持つが、確信度が非過去形と比べて低い。疑問文では予定や計画の確認を目的とし、三人称主語の場合には話し手が聞き手の知識を求める機能を持つ。理由節・条件節などの従属節でも現れ得るが、この場合は普段「予定」の用法でしか捉えられない。

共通語の「べき」の用法 (3.3 節) も MSJ の「ベキ」にあることが確認できたが、話者はこれらの用法は「標準的」とであると明確に意識している。また、共通語の用法と「予定」の用法以外に、次のような用法を立てる。疑問の文末形式 =カ もしくは =カヨと共起して、命題に対する強い否定を表す「反語」の用法があり、来間方言にも類似した用法があるため (3.2 節)、宮古語から継承した用法であると考ええる。存在の述語「アル・ナイ」と共起する場合、無生物主語の有無を表す命題に対して確信持っていることを表す、証拠性を伴う「強い推量」の用法がある。聞き手に対する否定的な事態への注意を促す「警告」の用法がある。

「強い推量・警告」を除き、全ての用法は *gamata*、もしくは「べき」に対応する用法があると考えられる。これを踏まえて、「べき」から引き継いだ用法 (3.3 節) を「共通語的用法」、*gamata* から引き継いだ用法 (予定・反語) を「宮古語的用法」、いずれの形式から来たと考えがたい用法 (強い推量・警告) を「その他の用法」と分類する。

5.1.2. 「ベキ」の世代差

「ベキ」の形式的特徴や用法に世代差が観察された。形式面では、中年層および老年層が「ベキ」に続く文末助詞として、疑問の「=カ」、問いかけの「=サ」、情報確認の「=ナ」、強調の「=サ」、確認要求の「=サーネ」、懐疑の「=カネ」、コピュラ「=ダ」などを使用する一方で、若年層では疑問の「=カ」や強調の「=サ」しか使わないことが分かった。文の終止について、老年層は平叙文を「ベキ」で終止できるが、若年層と中年層は「予定」の疑問文を除き、何らかの文末助詞を続けることを好む傾向が見られた。更に、中年層および老年層は従属節内でも「ベキ」を使用するが、若年層は従属節中に「ベキ」が現れることない。否定のストラテジーについては、老年層は共通語と同様に、「ベキ」に続くコピュラを使って外部否定を表現するが、若年層と中年層は動詞の否定形に直接「ベキ」を続けることができる。この違いは、年齢層ごとの「共通語的用法」と「宮古語的用法」の使い分けを反映していると考えられる。

若年層は「予定」の用法を疑問文専用の形式として用い、平叙文では同じ意味を伝えるために推量の「ハズ」を使用する。「強い推量」は若年層では使われない。

6. 分析・考察

紙幅の都合上、世代差に関する考察（卒業論文では 8.3.節）を省略した。

6.1. 宮古語の *gamata* による影響

本節では、MSJ の「ベキ」が宮古語の *gamata* からの言語転移の結果であることを論じる。言語転移における「負の転移」は、L1 言語の特徴 A が L2 言語に存在しないにも関わらず、L2 言語に持ち込まれることを指し、特殊な場合では、ある負の転移が多数の個人の話し方に変化をもたらし、その変化が最終的に言語共同体によって受け入れられることもあり、接触言語における基層語の影響は、接触言語成立が発達している早期段階における、個人による負の転移に起因すると考えることもできる (Siegel 2015)。

Siegel (2015) は言語接触における言語転移の例として、L1 言語の文法形態が持つ特性を、その特性を持たない L2 言語の形態素に適用させる「機能的転移」を挙げ、その一種である「再機能化」の二種類に分類している。「再機能化」は、「基層語の文法形態素の意味的・機能的特性を、語彙提供言語から獲得した既存の文法形態素に適用すること」であり、「語彙提供言語から既にある形態素の意味的・機能的特性を拡張または縮小する」のである (Siegel 2015: 171-172)。

宮古語話者が共通語を習得する過程で生じた複数の負の転移が、最終的には話者コミュニティによって受け入れられた結果として形成された接触言語が、MSJ と位置付けられる。この背景を踏まえると、「ベキ」は負の転移による再機能化の一例と見なすことができる。その理由として、宮古語の *gamata* が持つ意味的・機能的特性が、上層語の形式「ベキ」に適用され、形式的特徴を維持しつつ、意味的・機能的拡張を受けた点が挙げられる。調査 I で示したように、「ベキ」は共通語的用法に加え、宮古語的用法も持っている。この適応が可能となった動機としては、宮古語話者が宮古語の動詞屈折体系・モダリティ体系内で *gamata* が重要な役割を果たしていることを認識し、その体系を保持するために、*gamata* の機能を共通語の「ベキ」に適用し、「再機能化」の対象にしたと考えられる。

6.2. 「その他の用法」の発達について

まず、Narrog (2012) が提唱したモダリティの意味変化の枠組みで理論的基盤となる「主観性」、「間主観性」、「意志性」、「話者指向性」の用語について簡潔にまとめる。「主観性」とは、言語形式が話し手の関与を表す度合いであり、「遂行性」（話し手指向か否か）と「個人内接近可能性」（話し手の情報や思考に依拠するか否か）を基準に判定される。「間主観性」は聞き手への一般的な指向性を指し、「遂行性」と密接に関連している。「意志性」は、事象の実現に対する話し手の態度を示す尺度であり、「意志的モダリティ」と「非意志的モダリティ」の連続体として捉えられる。「話者指向性」は、言語形式が発話状況・発話行為・

聞き手に直接結びつく「発話行為指向的モダリティ」と、話し手と発話状況から独立して事象の参加者もしくは事象全体に対する条件を表す「事象指向的モダリティ」の対立を表す。

以上の定義を踏まえて、Narrog (2012) は、「意志性」と「話者指向性」の二つの軸をもとにしたモダリティの意味地図を提案している。矢印は、① モダリティ変化は文法化を伴うとともに、② 話者指向性の度合いとして同じ、もしくはより高い方へと移行する(Narrog 2012: 89) という通言語的傾向を持つことを表す。特に、指向性の増加はモダリティ形式の主観化、もしくは間主観化によって動機付けられ、話し手の主観性および聞き手への指向性が低い事象指向からより高い主観性と指向性を持つ発話行為指向へと変化することを示す(Narrog 2012: 105)。

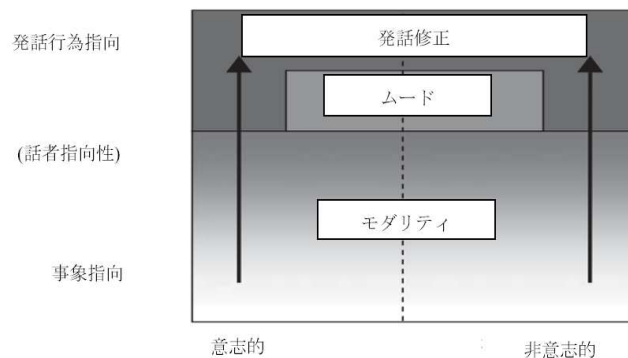


図 1: Narrog (2012: 112) によるモダリティ変化の意味地図

まず、「強い推量」の用法について考察する。この「ベキ」の用法は、命題に対する主観的態度を強く示す「妥当」の用法と近い特徴を持つが、話し手が有する情報に基づいた証拠性を含意する点で、高い主観性を表し、遂行性および個人内接近可能性の要素を有している。さらに、命題に対する確信度を明示することで、聞き手への発話的效果を伴っている。この点から、「強い推量」は発話状況および聞き手とより結びついた発話行為指向的モダリティに近いと位置付けることができる。一方、「強い推量」が推量形式の「ハズ」と意味の連続体を成しているため、認識的モダリティの要素を持つと考えられる。そのため、「強い推量」は事象の実現に対する意志性が「妥当」より低いと解釈することも可能である。結論として、「強い推量」の用法は、「ベキ」から継承された「妥当」の用法が発話行為指向的モダリティへの変化と意志性の低下によって派生した用法であると考えられる。

「警告」の用法は、話し手が聞き手の行動をもとに、今後望ましくない事象が発生する可能性を想定し、その事象を聞き手に伝えるものである。意味は多少異なるが、未実現の事象の実現可能性に言及する点で「予定」の用法との類似性が見受けられる。これより、前者は聞き手に対する指向性と、より主観的なモダリティを表し、「主観性」と「間主観性」が増加し、発話行為的指向が強調されていると考えられる。

ある事象が実現される蓋然性を表す「可能性」の標識が「注意ムード (admonitive mood)」の標識に変化する事例について、Narrog (2012: 168) は「二人称に否定的な出来事が起こる可能性を主張することは、話し手が二人称にその出来事が起こらないようにしたいと望んでいるという推論を招く」と推考している。このような変化が、「ベキ」にも起こったと考

えられる。未来の事象を示す「予定」の用法から派生し、発話行為的指向性と意志性が増加することによって、「警告」の用法が成立したと推測される。以上の議論を踏まえ、筆者は「ベキ」のモダリティ変化として図2で示されている意味変化を提唱する。

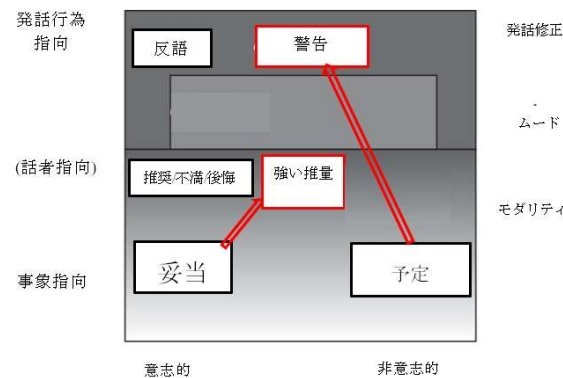


図2: MSJの「ベキ」のモダリティ変化の意味地図

7. まとめと今後の課題

本稿では、MSJにおける「ベキ」の用法と形式的特徴を世代差の観点から記述を試み、その対応形式である宮古語の *gamata* と共通語の「ベキ」との関係性、モダリティの変化について考察を行った。今後の課題として、地域差を考慮した「ベキ」の追加調査、MSJのモダリティ体系内での位置付けや他のモダリティ形式との関係性・機能的区別の記述に取り組む必要がある。

参考文献

- 加藤 恵梨 (2016)「コーパスに基づく『ベきだ』の分析」『朝日大学留学生別科紀要』(13): 15-24. / 狩俣 繁久 (2019)「沖縄クレオロイドの研究をめぐって」『琉球の方言』43: 85-96. / かりまた しげひさ (2010)「琉球クレオロイドの性格」石原 昌英[他](編)『沖縄・ハワイコンタクト・ゾーンとしての島嶼』31-42, 東京: 彩流社. / さいが族 (編) (2002)「読めば宮古!: あららがまパラダイス読本」那覇: ボーダーインク. / 下地 理則 (2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』東京: くろしお出版. / 高梨 信乃 (2005)「評価モダリティを表す助動詞『ベきだ』」『神戸大学留学生センター紀要』10: 1-15. / 永田 高志 (1996)「琉球で生まれた共通語 琉球篇」『地域語の生態シリーズ』東京: おうふう. / 日本語記述文法研究会 (編) (2003)「現代日本語文法 4 第8部モダリティ」東京: くろしお出版. / 本永 守靖 (1984)「南島方言と国語教育」中本 正智 [他](編)『沖縄・奄美の方言』364-386, 東京: 国書刊行会. / ロング ダニエル (2010)「言語接触から見たウチナーヤマトグチの分類」『人文学報』428: 1-30. / Anderson, Mark R. (2009) *Emergent Language Shift in Okinawa*. [Doctoral Thesis, The University of Sydney]. / Anderson, Mark R. (2019) *Ryukyu-substrate Japanese*. In: Heinrich, Patrick et al. (eds.) *Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics*, 43–62. London: Routledge. / Jarosz, Aleksandra (2024) *Descriptive Grammar and Diachrony of Kurima: A Minority South Ryukyuan Language of the Miyako Islands*. Leiden: Brill. / Larm, Lars (2018) *Weak deontic necessity in Japanese: the case of beki*. 『言語文化研究』38 (1-2): 113-140. / Narrog, Heiko (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press. / Shimoji, Michinori (2008) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. [Doctoral Thesis, Australian National University]. / Siegel, Jeff (2015) *The role of Substrate Transfer in the Development of Grammatical Morphology in Language Contact Varieties*. *Word Structure* 8(2): 160-183.

ネットスラング表現の日仏対照

大場 悠矢

(言語文化学部 フランス語専攻)

キーワード：フランス語、日本語、ネットスラング、対照

1. はじめに

本稿は、2024 年現在における日本語とフランス語のネットスラング表現について検討し、表現の成立についての類似点、相違点を明らかにすることを目的とする。

本稿における用語の日本語訳、図表番号、及び文字飾りは特に明記がない限りは筆者によるものである。

2. 背景知識

2.1. フランス語のネットスラング、langage SMS

松田 (2022) は、インターネットメディアを介したコミュニケーション (Communication médiée par ordinateur、以下 CMO とする) において、特に SMS (Short Message Service) でみられる特有の言い回しに着目した。それらの正書法から離れた表記法を、松田 (2022 : 44-50) をもとに、大まかに分類したものを以下に示す。<>内に示されたものは、その隣の langage SMS の本来のかたち、いわゆる規範的表記である。この 2.1.節において挙げられた例は特筆のない限り Fairon & Klein (2010) からのものである。

a) 発音に基づいた短縮・置換

フランス語は表記の中に読まない文字が含まれることがあり、規範的表記と発音に不一致があるため記述に対する音声的な操作がなされる例が散見される (松田 2022: 44)。例えば、jsui pa <je suis pas> [ʒə sui pa] (e は曖昧母音では発音されないため欠落、語末の s も発音されないため欠落。) があげられる。一方で、同じ音を持つ別の文字や記号に置き換えられることもある。例えば、G paC <j'ai passé> [ʒ_e pa.se] (j'ai と G、ssé と C の音が同じであるため、それぞれ表記が単純なものに置き換えられている。)

b) 書記的な短縮操作

発音に準えず、母音字省略や、特定の語句の頭文字を残す略号を用いた手法が用いられ、この手法を用いた表記が発音できるかどうかの判断は無問題である (松田 2022: 47-48)。例としては、前者は bjr <bonjour>, cmt <comment>、後者は mdr <mort de rire>, lol <laughing out loud> が挙げられる。

c) 記号の使用

語への置き換えと非言語要素の表出のために使用される (松田 2022: 49-50)。例としては、*ac <Star Academy> (*で Star を置換している。)、;-) (表情を示す顔文字である。) が挙げられる。

2.2. 日本語のネットスラング

岡田 (2010) は、「2ちゃんねる」と呼ばれる匿名掲示板の書き込みを注視し、観察された言葉を4種類に類別した。

I) 略字

乙「お疲れ様」、おk「OK」、kws「詳しく」、ggr「Googleで検索しろ」

II) 誤変換・誤読語

ふいんき「雰囲気」、がいしゅつ「既出」、厨房「中坊 (中学生)」

III) 読みの認識されない語

orz¹、くぁwせdrftgyふじこlp;@:「」²

IV) 顔文字

(´▽`)、(\*°ー°)、(・▽・)「笑い」、(#°Д°)ゴル!!、(#`Д´)「怒り」、
(ノД`)、(´;ω;`)、。°・(つД`)°・。「泣き」

略字や誤変換、誤読語に関しては、キーボードによる日本語入力の煩わしさや、誤変換によって生じたものである。誤変換に至っては、最初は意図的ではなく、ただの誤りとして書き込まれたものを、別のユーザーが意図的に面白がって利用し始め定着してしまった (岡田 2010: 201) とのことである。

3. 先行研究：仏英西間のネットスラングの対照、Tatossian (2010)

Tatossian (2010) は、フランス語と、英語、スペイン語のインターネット上のコミュニケーションにおいて見られる表現に着目し、オンラインテキストベースのチャットの対話を記録したコーパスから表記上の変異体 (正書法から離れた表記) を抽出した。そして、上記で述べた分類に従ってどの言語で特定の現象が現れるかを整理し、表にまとめている。その一部を以下に示す。Xの文字が置かれているところが、その言語において表の左に示された変異体の種類が観察されたということである。

表 1: チャットにおけるフランス語、スペイン語、英語の変異方法の統括の一部

	フランス語	スペイン語	英語
省略方式			

¹ 「人が膝と手をつき頭を下げ、落ち込んでいる、もしくは土下座をしている状態を横から見た構図を図式したもの。落ち込んだり、謝ったりする際に用いられる。」 (岡田 2010: 202)

² 「ローマ字入力でキーボードの「Q」キーと「A」キーを同時に押してそのまま右側に滑らせていくとこのような文字の羅列になる。読みは意識されず、書き込んだユーザーの声にならない悶絶、昏倒を意味する。」 (岡田 2010: 202)

語尾音消失		X	X	X
語頭音消失		X	X	X
語中音消失		X	X	X
複合書記素の欠落		X	X	X
	qu, que > k	X	X	
	ph > f	X		X
	(e) au > o	X		
	bu, gu, hu, vu > w		X	
	au > o, u			X

(Tatossian 2010: 301-302 を基に、筆者作成、一部改変)

4. 問題提起

Tatossian (2010) の対照形式は、仏西英以外の言語、特にラテン文字でないものにも適合するか、という点の一つの疑問であり、検討する余地があると考ええる。さらに、Tatossian (2010) は 10 年以上も前の研究であり、当時とはインターネット上のコミュニケーションの形態も少しずつ変わりつつある。実際、当時よりも SNS の発達や、スマートフォンの普及など、当時と異なる要素が多い。X (旧 Twitter) に代表される SNS でも同じようなネットスラングが用いられているか、もしくは新たな変種が生まれていないかなどの点について、調査する意義は十分にあらう。以上より、2024 年現在におけるネットスラングの使用状況を顧みて、過去からの変化があるのかを考慮にいれながら、2 言語間で対照方式を吟味し相違点、及び共通点を探るべく、調査を行うこととした。

5. 調査 1

5.1. 調査対象

実際にネットスラングが用いられている各 SNS や、チャットやコメント欄が存在するインターネット上のサイトをあたり、2024 年現在におけるネットスラング表現を収集する。収集する媒体は複数とし、ここでは X (旧 Twitter) と YouTube のコメント欄を使用する。

X (旧 Twitter) については 高度な検索機能を用いることとする。検索言語をそれぞれの言語に設定し、2024 年のとある期間に投稿されたポストを収集し、ネットスラングコーパスを構築する。期間を絞り、日仏ともに日本時間において 3 月 3 日、6 月 3 日、9 月 3 日の 8:02-8:22, 20:02-20:22 の二つの時間帯にそれぞれの言語で検索をかけ、ヒットした上位 100 ポスト程度をエクセルに打ち込み記録する。

次に、YouTube のコメント欄に寄せられた投稿も調査対象とする。日本語とフランス語で話題が同じものが好ましいと考え、以下の対の動画を調査することにした。コメント件数が膨大なものもあるため、ここでは最大でも一動画につき最新の投稿から 400 件程度までを対象とする。

「新作ゲームの発売告知 PV」

Légendes Pokémon : Z-A sortira simultanément en 2025 partout dans le monde !

https://www.youtube.com/watch?v=AKWg2xrKv_8

【公式】『Pokémon LEGENDS Z-A』 Announcement Trailer

<https://www.youtube.com/watch?v=axpTHexSIn8>

調査を行い、ネットスラングコーパスを構築したのち、各言語において見られたネットスラング表現を Tatossian (2010) が示した変異体の種類のどれに当てはまるかを検討し、分類する。言語を表記する文字体系が異なることから、表 1 で示したような具体的な文字単位での詳細の変化は省略し、変化の仕方に注視する。分類後、Tatossian (2010) の表 1 の日仏版を作成し、ネットスラング表現の成立における類似点、相違点を考察する。

5.2. 調査結果

5.2.1. 取得投稿数

以下の表に、取得した投稿数を言語別、媒体別に示す。

表 2: 取得した投稿数

	コメント欄	X (3 月 3 日)	X (6 月 3 日)	X (9 月 3 日)	合計
フランス語	323	217	221	214	975
日本語	441	237	217	232	1127

5.2.2. 変異体のまとめ

集積された投稿をもとに、ネットスラングを抽出し、Tatossian (2010) の表に則り発見された変異体を表に整理する。このとき、この調査において収集された数も明記しておく。Tatossian (2010) が言及していなかった変異方法が見受けられた場合、独自に追加する。空欄は、該当する省略形式および表現形式が適合されると認められた変異体が発見されなかったことを示している。

表 3: インターネット上におけるフランス語、日本語の語の変異方法の統括

	フランス語	日本語
省略方式		
語尾音消失	31	6
語頭音消失	1	
語中音消失	33	2
連続書記素の単純化	3	
略号化 / 頭字語化	62	34
表語文字	1	
曖昧母音の削除	0 ³	

³ Tatossian (2010) の表では、フランス語において曖昧母音の削除による変異体の存在が認められていたが、本調査では該当するものを発見できなかったためここでは 0 としている。

書記素の置換	7	2
絶対語尾の中和	2	
記号の脱落	65	
表現形式		
顔文字	7	62
反響文字	47	21
大文字	72	
半角カナ		18
捨て仮名化		14
口頭グロス		18
読みの認識されない語	1	1
取得された表現総数 ⁴	311	172

(Tatossian 2010: 301-302 を参考に、筆者作成)

5.3. 分析

5.3.1. 相違点

両言語は使用される文字から異なるため、文字の特性によって変異体を産み出す手法はかなり左右されている。全体的に省略方式においては、フランス語にはより多くの変異体が見られる。Tatossian (2010) においても、ラテン文字を使用する英語とスペイン語には省略から生まれる変異体が多くあることがわかる。ラテン文字は比較的省略されやすい特徴を持つ可能性がある。同じ表音文字であるひらがな、カタカナでも日本語においてラテン文字ほど省略は発生しておらず、日本語が省略されるときにあえてラテン文字を使用する事例がある。略号化、頭文字化においては顕著であるが、日本語が略号化されるときは日本語の文字ではなくラテン文字が使用されていた (NNT > 無い内定)。このことから推察できるように、省略されやすい文字、されにくい文字というものが存在する可能性があり、素早いコミュニケーションが必要とされるインターネット上ではそれが顕著に現れるものと考えられる。ラテン文字を使用する言語の中でもフランス語は特に発音されない文字が多いため、省略されたものの数に大きな差が出たことは納得できる。

5.3.2. 共通点

表現形式に至っては、その手法を取るにあたって文字の制約がないもの (反響文字、読みの認識されない語) は共通して両言語に見られた。フランス語では大文字化をして強調のニュアンスを、日本語では半角カナや捨て仮名化をすることで独特のニュアンスを表現していた。これらは文字の制約があれども、「文字のかたちを変化させて別のニュアンスを出す」という手法からの観点ならば、両言語ともに通じるものがあると言えるかもしれない。さらにここで共通しているところは「不必要なところで敢えて文字のかたちを変化させている」

⁴ 一つの変異体が複数の変異方法に該当する場合があるので、合計値は上記の和と等しくならない。

ということである。大文字にも、捨て仮名にも本来は規範的な用法がある。それを逸脱して、表現形式として新しいニュアンスを表現することに成功したものと考えられる。

5.3.3. 変異方法の統括

ここでは調査で得られた結果から Tatossian (2010) の表に日本語を追加したものを作成する。筆者が独自に調査で追加した項目はここでは Tatossian との対比のために除外し、純粋に Tatossian (2010) が示した基準に日本語がどのように当てはまるかを考察していく。

表 4: チャットにおける語の変異方法の統括

	フランス語	日本語
語尾音消失	X	X
語頭音消失	X	
語中音消失	X	X
連続書記素の単純化	X	
二重書記素の単純化	X	
略号化 / 頭字語化	X	X
表語文字	X	X
曖昧母音の削除	X	
書記素の置換	X	X
絶対語尾の中和	X	
顔文字	X	X
反響文字	X	X
大文字	X	
口頭グロス		X

(Tatossian 2010: 301-302 をもとに筆者作成)

Tatossian (2010) が作成した表に、日本語の項目を追加したものが上記のとおりである。Tatossian (2010) の比較基準が別言語にも適用できるか否かという疑問に対して、次のように考える。まずこの分類では日本語独自のインターネット上における変異体を生み出す形式を完全に網羅できていない。実際、調査において筆者は独自に項目を追加した。Tatossian (2010) が提示したこの分類基準は、ラテン文字を使う言語のみでの比較になっているがゆえに、ラテン文字に特徴的な変化に偏ってしまったのであろう。通言語的に比較するためには、よりそれぞれの項目に対して吟味が必要となると考える。ただし、日本語の調査、及び分類は限られた媒体の、限られたものによることに留意しなければならない。しかしながら、Tatossian (2010) が提示したこの分類は不十分であると結論づける。

6. 調査 2

調査 1 において、日本語とフランス語のインターネット上の変異体が大きく異なる要因は使用している文字の違いにあると考察した。しかし、同じラテン文字を用いた変異体同士を比較した場合、どのような差がでるのだろうか。日本語の文字であるひらがな、カタカナ、漢字には大文字小文字の区別がないため、表現形式においては日本語では大文字化による強調はないと示したが、それは本当だろうか。この点を確認するために、調査 2 を行う。

6.1. 調査方法

同じラテン文字を使用しているインターネットスラングの代表として、ここではフランス語は **mdr** (2.1. 節を参照、笑い死ぬを意味する)、日本語は **w** を取り上げることとする。意味もどちらも笑いを意味するため、対照するには適していると考ええる。この調査で比較する内容は、「表現形式」の現れ方であり、両語に対してどのような変異体が認められて、どのような変異体が認められていないかを調べる。

調査媒体に関しては、再び **X** の高度な検索を使用する。各語を含む投稿を日付指定を行い検索し、それぞれそれらが含まれる投稿を 100 件ずつ収集する。調査を行う日付は 2024 年 10 月 13 日とする。抽出された投稿に含まれる変異体を観察し、それぞれどのような表現形式が使用されているかを記録し、考察する。

6.2. 調査結果と分析

日本語フランス語両方に対して抽出された投稿を、表現形式と出現位置に則って分類したものが以下の表である。

表 5: mdr と w に適応された表現形式

	フランス語	日本語
反響文字	67	44
大文字	11	0
大文字と反響文字の複合	9	0

表 6: mdr と w が現れる位置

	フランス語	日本語
文末	60	100
文中	24	0
文頭	16	0
取得された変異体の総数	100	100

文字は同じで意味もかなり似通ったものである **mdr** と **w** ではあるが、実際に適用される表現形式の程度には差があることがわかった。両言語のインターネットスラングの相違点が高いのは文字の影響も間違いなく大きい、それだけが原因ではない。同じ文字に対しても同じ表現形式が同じように適応されるとは限らない。逆にこれが笑いを表す表現だから

こそ、文字は同じでも表現の形式は異なる可能性も考えられる。実際に **w** を強調するのに大文字が使われない理由は **w** の反響文字だけで程度を十分に表現できてしまうと判断されたからではないだろうか。さらには、日本語のインターネットスラングにおいて笑いを表現する手法が他にも存在することを忘れてはならない。口頭グロスの (笑) をはじめとして、**w** が雑草にみえることから「草」と表記するだけで笑いを表現することも可能である。さらにそこから派生して「大草原」と表現することもある。このような別の表現の仕方があるがゆえに、大文字化を起こさなかったのではなからうか。**mdr** と **w** は意味は似ているが、その使用実態には相違点が多いことがわかった。

7. 今後の展望

今後の課題点としては、結果的に限られた媒体の、限られた投稿のみでの検証となってしまったため更なる調査対象の拡大が必要とされることがまず挙げられる。インターネット上のコミュニティは媒体によって風土が異なり、本稿ではできるだけ大衆とされるメディアを取り上げたが、様々な変異体が観察されうる媒体からもより深く調査したい。

もう一つの課題としては、日本語とフランス語ともに文字が同じものの対照をより深く行う必要がある。本稿では **mdr** と **w** のそれぞれ一つの変異体同士での比較となったが、それだけではなく日本語においてラテン文字が使用されている別の変異体 (NNT など) に対してどのような表現形式が適応されるか検討の余地はあるだろう。

参考文献

岡田翔平 (2010) 「インターネット上で使われる言葉: 「2ちゃんねる」に見られる顔文字について」『比較民俗研究: for Asian folklore studies』 24: 198-206. / 文化審議会国語分科会 (2018) 『分かり合うための言語コミュニケーション(報告)』 https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401904.html (最終閲覧日: 2024 年 6 月 9 日). / 松田理沙 (2019) 「フランス語におけるインターネット上特有の表記の構造について」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』 28: 1-14. / ——— (2022) 「インターネット空間上のコミュニケーションにおけるフランス語言語表象に関する研究」筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文, 筑波大学. / Fairon, C. & J. R. Klein (2010) Les écritures et graphiques inventives des SMS face aux graphies normées. *Le français aujourd'hui*, 170: 113-122. / Tatossian, A. (2010) Vers une classification générale des variantes graphiques des dialogues en ligne? Le cas du français, de l'anglais et de l'espagnol. *Éla. Études de linguistique appliquée*, 159: 289-307.

参考資料

ポケモン公式 YouTube チャンネル (2024) 『【公式】『Pokémon LEGENDS Z-A』 Announcement Trailer』 <https://www.youtube.com/watch?v=axpTHexSln8> (最終閲覧日: 2025 年 1 月 9 日). / La chaîne officielle Pokémon en français (2024) *Légendes Pokémon : Z-A sortira simultanément en 2025 partout dans le monde !*. / https://www.youtube.com/watch?v=AKwg2xrKv_8 (最終閲覧日: 2025 年 1 月 9 日). / IT 用語辞典 e-Words: <https://e-words.jp> (最終閲覧日: 2024 年 12 月 16 日). / X: <https://x.com> (最終閲覧日: 2025 年 1 月 9 日).

千葉県銚子方言における経験者と刺激の格枠組み

笠原 隆成

(言語文化学部 英語専攻)

キーワード：非典型格標示，経験者，刺激，心情述語，与格主語，可能文

1. はじめに

本稿では、千葉県銚子方言¹における二項形容詞文の格枠組み (3 節) と斜格主語文の格枠組み (4 節) について記述する。さらに、日琉諸方言の二項形容詞文について、銚子方言と他の日琉諸方言のデータから、以下の 2 つの提案を行う (3 節)。

- (1) ある方言において階層の左側ほど対格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。
 - a. 二項述語タイプの階層：他動形容詞文＞準二重主語文＞二重主語文
 - b. 他動形容詞の階層：心情述語＞感覚述語
- (2) ある方言において、=o を含む複数の種類の対格標識があり、=o が他の対格標識と違って二項形容詞文における第二項の対格標示に用いられないとき、その方言において =o は共通語からの影響によるものであると考えられる。

2. 前提知識：銚子方言における対格標識

銚子方言の対格標識には、=ba、語末母音の延長、=o の 3 つがあり、いずれも有生性による制限はない。3 つの対格標識の機能的な違いは明らかにされていない。

- (3) ore(=ŋa) {keNta=ba/keNta=a/keNta=o} tadeeda.
 1SG(=NOM) {健太=ACC/健太=ACC/健太=ACC} 叩く .PST
 「私が健太を叩いた。」 (銚子方言)

3. 二項形容詞文の格枠組み

3.1. 先行研究：日琉諸方言の二項形容詞文における第二項の与格標示 (下地ほか 2018)

下地ほか (2018)、下地ほか (2022) は、日本語諸方言において、二項形容詞文²の第二項が与格で標示される場合があることに注目し、宮崎県椎葉村尾前方言について調査を行った上で、日本語諸方言のデータを整理し、二項形容詞文における第二項の与格標示について含意普遍的な階層による一般化を行った。

下地ほか (2022: 159-161) は、二項形容詞文を、他動形容詞文、準二重主語文、二重主語文の 3 つに分類する。他動形容詞文は、第一項³の意味役割が経験者で、第二項の意味役割が刺激であるような構文である (「俺は水が欲しい」「俺は花子が好きだ」)。準二重主語文

¹ 銚子方言のデータは A 氏に対する調査の結果に基づく。A 氏は 1945 年生まれの女性で、1967 年まで東庄町東今泉 (銚子市に隣接している) で過ごし、それから現在まで銚子市春日町で過ごしている。

² 述語が形容詞の二項文。形容詞は、いわゆるイ形容詞とナ形容詞の両方を含む。

³ 二項述語文において、情報構造的に無標な語順において先行し、かつ主語と見なせる方を第一項、そうでない方を第二項と呼んでいる。

は、「上手だ」「下手だ」「得意だ」を述語とし、第二項に行為名詞をとる構文である。第二項は第一項の属性と解釈することができ、2 項の間に広義の所有関係が成り立っている（「友達に絵が上手だ」）。二重主語文は、第一項と第二項が全体と部分、所有と被所有、主体と関連物の関係にある構文である（「俺は頭が痛い」「俺は親が病気だ」「俺は背が高い」）。

下地ほか (2018)、下地ほか (2022) は、日本語諸方言におけるデータから、二項形容詞文における第二項の与格標示について、次の階層 (4) を提案した。なお、下地ほか (2018)、下地ほか (2022) は第二項の対格標示については検討していない。

- (4) ある方言において階層の左側ほど与格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。
- a. 二項述語タイプの階層：他動形容詞文＞準二重主語文＞二重主語文
 - b. 他動形容詞の階層：心情述語＞感覚述語
 - c. 刺激タイプの階層：ネガティブな刺激＞ポジティブな刺激
- (下地ほか 2022: 167, 「与格交替」は「与格標示」に改めた)

3.2. 記述

銚子方言の二項形容詞文の第二項には、主格か対格が現れる。与格は確認されない。主格は必ず認められる一方で、対格標示は他動形容詞文と準二重主語文で認められ、二重主語文では認められない。対格標示は調査対象とした全ての心情形容詞と一部の感覚形容詞に見られる。第二項が対格で標示されるとき、=ba と語末母音の延長は用いられるが、=o を用いると不自然とされる。

表 1: 形容詞の種類と第二項の格標示

		主格	対格
心情形容詞 (他動形容詞文)	sukida「好きだ」、kireeda「嫌いだ」、hosii「欲しい」、 kosisii「恋しい」、oQkanee「怖い、恐ろしい」、 uresii「嬉しい」、kujasii「悔しい」、omosiree「面白い」、 acikoi「羨ましい」、azikoi「可愛い」、jagamasii「鬱陶しい」、 niguQtarasii「憎たらしい」、nigunigusii「憎々しい」、 udadee「きつい、苦しい、つらい、面倒くさい、悲しい、寂しい」、 kaweessooda「可哀想だ」、siNpeeda「心配だ」、 teeheNda「大変だ」(17 語)	○	○
感覚形容詞 (他動形容詞文)	mabusii「眩しい」、sideriQposii「(日光が) 眩しい」、 uQsee「うるさい」、sabui「寒い」、sjaQkoi「冷たい」、 suQpee「酸っぱい」、niŋee「苦い」、sibui「渋い」、 umee「美味しい」、karee「からい」(10 語)	○	○
	idee「痛い」、kaii「痒い」、aQtakee「温かい」、 kusee「臭い」、amee「甘い」、sjoQpee「しょっぱい」(6 語)	○	×
叙述形容詞 (準二重主語文)	umee「上手だ」、hedakusoda「下手だ」、 toguida「得意だ」、niŋateda「苦手だ」(4 語)	○	○
叙述形容詞 (二重主語文)	kireeda「綺麗だ」、aee「青い」、cuee「強い」、 naŋee「長い」、omoi「重い」、karui「軽い」、 tagee「高い」、agee「赤い」、iii「良い」(9 語)	○	×

- (5) wasi=ŋa nacu {=ŋa/=ba/=u/*=o} sukida.
1SG=NOM 夏 {=NOM/=ACC/=ACC/*=ACC} 好きだ.NPST
「私が夏が好きだ。」《他動形容詞文・心情》
- (6) wasi=ŋa toŋarasi {=ŋa/=ba/=i/*=o} karee.
1SG=NOM 唐辛子 {=NOM/=ACC/=ACC/*=ACC} 辛い.NPST
「私が唐辛子が辛い。」《他動形容詞文・感覚》
- (7) wasi=ŋa rjoori {=ŋa/=ba/=i/*=o} umee.
1SG=NOM 料理 {=NOM/=ACC/=ACC/*=ACC} 上手だ.NPST
「私が料理が上手だ。」《準二重主語文》
- (8) wasi=ŋa kono keeki {=ŋa/*=ba/*=i/*=o} amee.
1SG=NOM この ケーキ {=NOM/*=ACC/*=ACC/*=ACC} 甘い.NPST
「私がこのケーキが甘い。」《他動形容詞文・感覚》
- (9) wasi=ŋa udeQpusi {=ŋa/*=ba/*=i/*=o} cuee.
1SG=NOM 腕っふし {=NOM/*=ACC/*=ACC/*=ACC} 強い.NPST
「私が腕っふしが強い。」《二重主語文》

3.3. 考察

3.3.1. 対格標示の階層

7つの方言(宮崎県椎葉村尾前方言(松岡 2019)、佐賀県武雄市北方方言(松岡 2019)、甕島里方言(久保 2019)、長崎県五島列島宇久島野方方言(中村 2019)、福井県三国町安島方言(松倉 2023)、埼玉県東南部方言(原田 2016)、銚子方言)のデータをもとに、対格標示について、与格標示に関する(3)と同様の階層が成立するかどうか検討する。

a. 二項述語タイプの階層については、他動形容詞文のみに対格標示が認められる方言(尾前、北方、野方、安島、埼玉県東南部)と他動形容詞文と準二重主語文に対格標示が認められる方言(里、銚子)の2パターンが観察され、階層の提案が支持される。

b. 他動形容詞の階層については、心情述語のみに対格標示が認められる方言(尾前、北方、里、野方、安島、埼玉県東南部)と心情述語と感覚述語の両方に対格標示が認められる方言(銚子)の2パターンが観察され、階層の提案が支持される。

c. 刺激タイプの階層については、ネガティブな刺激とポジティブな刺激の両方に対格標示が認められる方言(尾前、北方、里、安島、埼玉県東南部、銚子)が観察される一方で、野方方言では *hoska*「欲しい」の一語のみに対格標示が確認されている。*hoska*「欲しい」はポジティブな含意があると考えられ、対格標示では階層の提案が支持されない⁴。

したがって、二項形容詞文における第二項の対格標示について、次の階層が提案できる。ただし、6つの方言のデータだけでは、通方言的な一般化を行うにあたって不十分である。今後、より多くの方言について調査し、この階層の妥当性を検証する必要がある。

- (10) ある方言において階層の左側ほど対格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。
- 二項述語タイプの階層：他動形容詞文>準二重主語文>二重主語文
 - 他動形容詞の階層：心情述語>感覚述語

⁴ なお、原田(2016: 222)は、埼玉県東南部方言について、対格標示を容認する感覚形容詞の例として「つらい」「痛い」というネガティブな刺激を保証するもののみを挙げているが、感覚形容詞がポジティブな刺激を表す場合に対格標示が容認されないという否定証拠は示していない。

3.3.2. 対格標識=o の在来性テスト

銚子方言では、3つの対格標識 (=ba、語末母音の延長、=o) のうち、=o だけが二項形容詞文の第二項を標示することができない。しかし、他の日琉諸方言を見ると、系統的な距離の大きい複数の方言において、=wo 系の対格標識が二項形容詞文の第二項を標示する例が広く見られる。

- (11) heizizi:to sigetakei kanasikja.
「ヘイジじいとシゲタケが悲しいよ」 (八丈語三根方言) (金田 2001: 40)
- (12) そらごとをこそねたけれ。 (うつほ物語・国譲上) (小田 2015: 280)
- (13) バガドゥ タローユ ウトゥルスムヌ。
「私が太郎が怖い。」 (南琉球宮古語池間方言) (松岡 2020)

このことから、銚子方言において=o だけが第二項を標示することができないのは、=o が銚子方言に本来のものではなく、(共通語において=o による第二項の標示が衰退した後で) 共通語から借用されたものであることによると考えられる。

日本語諸方言には、青森県津軽方言 (大槻 2018) など、=o を含むいくつかの対格標識を持ち、=o が共通語からの借用ではないかと疑われている方言があるが、借用と見なす十分な根拠が示されてこなかった。しかし、=o が他の対格標識とちがって二項形容詞文の第二項を標示できないことを確認すれば、=o が共通語からの影響によるものと判断する証拠とすることができる。実際に、青森県北津軽郡旧中里町出身の I 氏⁵に尋ねたところ、他動形容詞文における刺激項の対格標示に=o を用いると不自然であることが確認された。

- (14) wa taro {*=o/=ba/*=to⁶=toba/=goto/=gotoba} oQkane.
1SG 太郎 {*=ACC/=ACC/*=ACC/=ACC/=ACC/=ACC} 怖い.NPST
「私は太郎が怖い。」 (旧中里町方言)

4. 第一項の斜格標示

4.1. 先行研究

4.1.1. 関東地方南東部の方言に見られる経験者格

関東地方南東部の方言には、間接目的語などを表す与格とは別に、主に経験者のみを表す経験者格が存在する。以下の例文は水海道方言における経験者格の例である。同様の格形式は、水海道 (佐々木 2004)、埼玉県東南部 (原田 2016)、南房総市三芳地区 (佐々木 2022)、群馬県の一部 (飯豊・大橋 1971) などに報告されている。

- (15) ore=ngani sore erane.
1SG=EXP それ 要らない
「私にはそれが要らない。」 (水海道方言) (佐々木 2004: 17, 一部改変)

⁵ I 氏は、1978 年生まれの女性で、19 歳までを青森県北津軽郡中泊町 (旧中里町) で過ごしている。

⁶ ここで=to が許容されないのは、=to は典型的に人称代名詞に付くなど、意味範囲が最も限定的である (大槻 2019: 156) ためであると思われる。

経験者格は有情名詞句にのみ付く。通時的には、所有格= ηa (有情名詞句にのみ付く) と与格 (位格) = ni からできたものと考えられている (佐々木 2016: 6; 原田 2016: 288 など)。

4.1.2. 共通語と関東地方の方言における第一項の斜格標示

共通語において第一項に与格が、埼玉県東南部方言と水海道方言において第一項に経験者格が現れる述語の種類を整理すると、表2のようになる。共通語については日本語記述文法研究会 (編) (2009: 35-36) などに、埼玉県東南部方言については原田 (2016: 273-277) に、水海道方言については佐々木 (2004) に、それぞれ基づく。

表2: 共通語と埼玉県東南部方言と水海道方言における斜格主語が現れる述語の種類⁷

述語の種類	例	共通語	埼玉県東南部	水海道
a. 所有	ある、ない	○	○	×
b. 所有の成立	できる、生まれる	○	○	×
c. 必要	要る、必要だ	○	○	—
d. 可能 (他動)	見える、教えられる	○	○	○
e. 可能 (自動)	歩ける、寝られる	△	○	○
f. 自発	思われる、笑える	○	○	—
g. 難易 (派生)	難しい、～づらい	○	—	○
h. 願望	～たい	×	○	—
i. 心情形容詞	いとしい、鬱陶しい	○	○	—
j. 感覚形容詞	甘い、眩しい	○	○	—
k. 叙述形容詞	大きい、高い	○	○	○

いずれの言語変種においても、二項述語において、第一項が斜格で標示されるとき、第二項は原則として主格で現れる。ただし、d. 可能 (他動) においては、埼玉県東南部方言、水海道方言共に第二項は対格で現れるのが普通であり (原田 2016: 306; 佐々木 2004: 88, 91)、共通語においても対格で現れる場合があるとされる (次節で述べる)。

(16) kodomo= ηani = $'wa$ $'oja$ {= ηa /= $koto$ } $'okoreroNka$.
 子供=EXP=TOP 親{=NOM/=ACC} 怒る.POT.RQ
 「子供には親を叱れない。」《d. 可能 (他動)》 (埼玉県東南部方言)(原田 2016: 196)

さらに、埼玉県東南部方言では、i. 心情においても、「おれガニはおまえコト羨ましかった」のように第二項が対格で現れうるといふ (原田 2016: 276)。

4.1.3. 共通語における可能文の格枠組み

日本語共通語の可能文において、主語は主格と与格のいずれかを、直接目的語は主格と対格のいずれかをとり。そして、主語と直接目的語の格の選択には一定の条件がある。

⁷ ○…現れる △…現れるが、容認度について議論がある (次節で述べる) ×…現れない
 —…現れるかどうかに関する記述が見当たらない

予想される格枠組みのうち、主格のない格枠組み (自動詞可能文における【与格】と他動詞可能文における【与格-対格】) は柴谷 (1978: 251-253) などによって原則として非文法的とされている。柴谷 (1978: 256) は「主格保持の原則」を提案している。

ただし、主格名詞句のある可能文であっても、主語の与格標示や目的語の対格標示には一定の条件が必要とされる。金井 (2016) は、【与格-主格】の格枠組みが容認される条件には主語と対照的な名詞句の存在などがあるとしており、青木 (2008) は、他動性が高いと【主格-対格】の格枠組みが容認されるようになるとしている。

そして、主格名詞句のない可能文も、主格名詞句のある可能文と同様の条件を満たせば成立するとする研究がある。以下、石田・田川 (2018) による。

自動詞可能文における【与格】については、McGloin (1980)、Nagatomo and Nakagawa (1984)、長友 (1986) が、対照的な文脈が必要であると指摘している。さらに、否定文にしたり (McGloin 1980)、特定の助詞を付けたり特定の構文に埋め込んだり (長友 1986) することで対照的な含意が示されやすくなり、容認度が高まるとしている。

(17) 私にはそんなに速く走れません。 (McGloin 1980: 67)

(18) こんな不衛生な場所でも太郎には働ける。 (Nagatomo and Nakagawa 1984: 60)

他動詞可能文における【与格-対格】については、石田・田川 (2018) が、対照的な文脈があり、なおかつ他動性が高いときに容認性の高い文が存在すると指摘している。そして、Hopper and Thompson (1980) をふまえた上で、(19) では Individuation of O が高い a.の方が、(20) では Affectedness of O が高い b.の方が、それぞれ容認度が高いとしている。

(19) a. 結局僕にはこのパソコンを直せないらしい。

b. ??結局僕にはパソコンを直せないらしい。 (石田・田川 2018: 25)

(20) a. (?) 結局僕にはまだこの DVD を捨てられないらしい。

b. ?? 結局僕にはまだこの DVD を観られないらしい。 (石田・田川 2018: 26)

このように、共通語の可能文の格枠組みには複数のパターンがあるが、いずれのパターンにおいても、主語の与格標示には対照文脈が必要であり、他動性の高さが直接目的語の対格標示を容認しやすくすると言える。

4.2. 記述

4.2.1. 第一項の斜格標示が現れる述語の種類と格枠組み

銚子方言における経験者格= η ani は、表 2 に挙げた述語の種類のうち、f. 自発と h. 願望以外で用いられることが確認された。f. 自発については、銚子方言に接辞による自発形式そのものが見られない。なお、経験者格標識= η ani は全て与格標識= ni に置き換えることができる。

二項述語において第一項が経験者格で標示される場合、第二項はふつう主格で現れるが、述語の種類によっては対格で現れることもできる。埼玉県東南部方言と同様、d. 可能 (他動) と i. 心情で現れる。ほかに、g. 難易でも対格が現れることが確認されたが、g. 難易

については同じ話者に同じ例文を提示しても容認されるときとされないときがあり、やや容認されにくいようである。ただし、d. 可能 (他動)、i. 心情、g. 難易のいずれにおいても、対格標識として=oを用いると不自然であると判断されることが多い。j. 感覚形容詞、k. 叙述形容詞の場合、【経験者格-主格】の格枠組みを用いると、「経験者には～すぎて好ましくない」というネガティブな含意が生じる。

以下にそれぞれの述語の種類について例文を示す。

- (21) ore=ɲani=wa kane=ɲa nee.
1SG=EXP=TOP お金=NOM 無い.NPST
「私には金がない。」《a. 所有》⁸
- (22) ore=ɲani=wa sima=ɲa deginee.
1SG=EXP=TOP 暇=NOM できる.NEG.NPST
「私には暇ができない。」《b. 所有の成立》⁹
- (23) ore=ɲani=wa kane=ɲa sicujoonee.
1SG=EXP=TOP お金=NOM 必要ない.NPST
「私にはお金が必要ない。」《c. 必要》¹⁰
- (24) ore=ɲani=wa ano kuruma {=ɲa/=ba/=a/*=o} meenegaQta.
1SG=EXP=TOP あの 車 {=NOM/=ACC/=ACC/*=ACC} 見える.NEG.PST
「私にはあの車 {が/を} 見えなかった。」《d. 可能 (他動)》¹¹
- (25) ore=ɲani=wa moo arugenee.
1SG=EXP=TOP もう 歩く.POT.NEG.NPST
「私にはもう歩けない。」《e. 可能 (自動)》¹²
- (26) ore=ɲani=wa sono zi {=ɲa/?=ba/?=i/*=o} mizuree.
1SG=EXP=TOP その 字 {=NOM/?=ACC/?=ACC/*=ACC} 見づらい.NPST
「私にはその字 {が/?を} 見づらい。」《g. 難易 (派生)》¹³
- (27) ore=ɲani=wa sitorinjurasi {=ɲa/=ba/=i/*=o} udadee.
1SG=EXP=TOP 2SG=NOM 恐ろしい.NPST
「私には一人暮らし {が/を} 寂しい。」《i. 心情形容詞》¹⁴
- (28) ore=ɲani=wa kono zjuusu=ɲa amee.
1SG=EXP=TOP この ジュース=NOM 甘い.NPST
「私にはこのジュースが甘い。」《j. 感覚形容詞》¹⁵
- (29) ore=ɲani=wa kono hugu=ɲa igee.
1SG=EXP=TOP この 服=NOM 大きい.NPST
「私にはこの服が大きい。」《k. 叙述形容詞》¹⁶

⁸ a. 所有は、他に【主格-主格】の格枠組みもとりうる。

⁹ b. 所有の成立は、他に【主格-主格】の格枠組みもとりうる。

¹⁰ c. 必要は、他に【主格-主格】【主格-対格】の格枠組みもとりうる。

¹¹ d. 可能 (他動) は、他に【主格-主格】【主格-対格】の格枠組みもとりうる。

¹² e. 可能 (自動) は、他に主格もとりうる。

¹³ g. 難易 (派生) は、他に【主格-主格】の格枠組みもとりうる。

¹⁴ i. 心情形容詞は、他に【主格-主格】【主格-対格】の格枠組みもとりうる。また、全ての心情形容詞に【経験者格-主格】【経験者格-対格】の格枠組みが現れるわけではなく、例えば、sukida「好きだ」、kireeda「嫌いだ」に関しては経験者格を使用しないようである。

¹⁵ j. 感覚形容詞は、他に【主格-主格】の格枠組みもとりうる。語によっては、【主格-対格】の格枠組みもとりうる (5 節参照)。

¹⁶ k. 叙述形容詞は、他に【主格-主格】の格枠組みもとりうる。

4.2.2. 可能文の格枠組み

銚子方言では、可能文において経験者格を用いるのに、対照文脈（を想起させる構文など）が要求される。対照文脈があれば、自動詞可能文でも経験者格が認められる（25）。

他動詞可能文においても、対照文脈があれば【経験者格-対格】の格枠組みも問題なく認められる。他動性の関与は銚子方言では確認できない。

- (30) ore=ɲani=wa (kono) pasokoN=ba naosenee.
1SG=EXP=TOP この パソコン=ACC 直す.POT.NEG.NPST
「私には（この）パソコンを直せない。」
- (31) ore=ɲani=wa kono deebuidec=ba {suturaNnee/miraNnee}
1SG=EXP=TOP この DVD=ACC {捨てる.POT.NEG.NPST/見る.POT.NEG.NPST}
「私にはこの DVD を {捨てられない/見られない}。」

5. まとめ

本稿では、銚子方言における二項形容詞文と斜格主語文の格枠組みを記述し、日本語諸方言におけるデータから以下の2つを提案した。今後、より多くの日琉諸語でデータを集め、提案の妥当性を検証する必要がある。

- (32) ある方言において階層の左側ほど対格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。
a. 二項述語タイプの階層：他動形容詞文＞準二重主語文＞二重主語文
b. 他動形容詞の階層：心情述語＞感覚述語
- (33) ある方言において、=o を含む複数の種類の対格標識があり、=o が他の対格標識と違って二項形容詞文における第二項の対格標示に用いられないとき、その方言において =o は共通語からの影響によるものであると考えられる。

【略号一覧】11 人称/ ACC 対格/ DAT 与格/ EXP 経験者格/ NOM 主格/ NPST 非過去/ POT 可能/ PST 過去/ RQ 反語/ SG 単数/ TOP 主題【参考文献】《日本語文法》石田尊・田川拓海 (2018) 「他動詞可能文における例外的格パターンの出現——主格保持の原則をめぐって——」『日本語文法』18 (1): 20-28./ 飯豊毅一・大橋勝男 (1971) 「利根川流域方言の文法」九学会連合利根川流域調査委員会 (編)『利根川：自然・文化・社会』東京：弘文堂./ 青木ひろみ (2008) 「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」『世界の日本語教育』18: 133-146./ 大槻知世 (2018) 「青森県津軽方言の情報の表示をめぐって」博士論文、東京大学./ 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』大阪：和泉書院./ 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』東京：風間書院./ 久保薫愛 (2019) 「甕島里方言の二格形容詞」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会、国立国語研究所、2019年3月10日./ 金井勇人 (2016) 「可能構文における二格主語について——成立条件・許容度・表現効果——」河正一・金井勇人・仁科弘之 (編)『一小出慶一教授退職記念論文集——ことばの本質を求めて』10-25. さいたま：埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科./ 佐々木冠 (2004) 『水海道方言における格と文法関係』東京：くろしお出版./ 佐々木冠 (2016) 「関東地方の方言における格と文法関係」共同研究プロジェクト研究発表会「格と取り立て」、国立国語研究所、2016年9月19日./ 佐々木冠 (2022) 「千葉県南房総市三芳地区」セリック、ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一 (編)『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』37-76. 立川：国立国語研究所言語変異研究領域./ 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析——生成文法の方法——』東京：大修館書店./ 下地理則・松岡葵・井上郁菜・宮岡大 (2018) 「与格項形容詞構文について——宮崎県椎葉村尾前方言を中心に——」第43回九州方言研究会、かごしま県民交流センター、2018年1月6日./ 下地理則・松岡葵・宮岡大 (2022) 「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編)『日本語の格表現』157-174. 東京：くろしお出版./ 中村京介 (2019) 「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文、東京外国語大学./ 長友和彦 (1986) 「文法と談話文法——日本語の与格主語可能文を中心に——」『白馬夏季言語学会論文集』1: 1-16./ 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』東京：くろしお出版./ 原田伊佐男 (2016) 『埼玉県東南部方言の記述的研究』東京：くろしお出版./ 松岡葵 (2019) 「九州方言における形容詞経験者構文の非典型格標示：宮崎県椎葉村尾前方言と佐賀県武雄市北方方言を中心に」学士論文、九州大学./ 松岡葵 (2020) 「日琉諸方言における心情述語文の格フレーム：意味的結合価・意味役割・述語の品詞に着目して」『日本語文法』20 (2): 158-174./ 松倉昂平 (2023) 「福井県三国町安島方言における二項形容詞文の格標示」『日本語学会 2023 年度春季大会予稿集』73-78. 《英語文獻》Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. Language, 56 (2): 251-299./ McGloin, Naomi Hanaoka (1980) Ga/ni conversion re-examined. Journal of Japanese Linguistics, 7 (1-2): 65-77. (筆者未見)/ Nagatomo, Kazuhiko and Yukiko Nakagawa (1984) 'NP-ni Vi-Potential' in Japanese. 『神戸大学教育学部研究集録』72: 59-65.

A Morphosyntactic Study of the Subjunctive in Early Scots
—With Special Reference to *The Original Chronicle* of Andrew of Wyntoun—

KAWAGUCHI Kota
(English Major, School of Language and Culture Studies)

Keywords: Early Scots, Middle English, Subjunctive, Philology

1. Introduction

“Early Scots” refers to the Scots language as it existed between 1375 and 1450 (Aitken 1985). Though there are some similarities to English from the same period, its subjunctive usage remains unclear. Key aspects that require exploration include how ordinary verbs inflect to express mood and how the frequency of subjunctive usage varies depending on the type of clause. This study aims to reveal the morphosyntactic features of the subjunctive in Early Scots, with a particular focus on *The Orygynal Cronykil of Scotland (The Original Chronicle)* by Andrew of Wyntoun. The analysis involves identifying subjunctive verb forms and examining expressions that co-occur with the subjunctive.

In quotations from Amour’s (1908) edition of *The Original Chronicle*, the character ȝ (yogh) is replaced with the numeral 3. However, in this study, all instances are restored to the original yogh for consistency. Throughout this study, “Chr.” represents *The Original Chronicle*. The two numbers following it indicate the chapter and line numbers in Amour’s (1908) edition. All glosses and translations into Present-Day English are made in this study.

2. Background

2.1. Early Scots

Early Scots is classified as a stage of Older Scots, which was spoken in southern Scotland from 1100 to 1700 (Aitken 1985). Older Scots can be subdivided into three periods: Pre-literary Scots (pre-1375), Early Scots (1375-1450), and Middle Scots (1450-1700) (Aitken 1985). Before the Older Scots period, the language form was Old English, as both English and Scots originated from Old English (Millar 2023: 24). The language after the Older Scots period is referred to as Modern Scots (Aitken 1985: xiii).

2.2. Middle English

Middle English was spoken in Britain between approximately 1100 and 1500 (Brinton & Arnovick 2017). During this time, English functioned primarily as a local language rather than a national one (Brinton & Arnovick 2017). The dialects of Middle English included Northern (which encompassed Scots), East Midlands, North-West Midlands, South-West Midlands, Southern, and Kentish (Millar 2023: 27-28).

3. Previous Studies

Since there is likely insufficient research focused specifically on Early Scots, this study examines studies of Older Scots, which includes Early Scots. Additionally, Middle English is discussed due to its grammatical similarities to Early Scots.

3.1. Older Scots / Early Scots

Older Scots has three moods: indicative, subjunctive, and imperative (Macafee 1992: 21-22). As the imperative is not the focus of this study, only the indicative and subjunctive moods are discussed here.

3.1.1. Indicative

King (1997: 175) claims that Older Scots has two verb conjugation paradigms in the indicative: one for when the subject is a personal pronoun in the first-person singular or any plural person and immediately adjacent to the verb (either preceding or following the verb), and one for when the subject is not adjacent to the verb. When such a pronoun is adjacent to the verb, the verb has no ending. These paradigms are shown in Table 1. This subject-verb concordance is known as the Northern Personal Pronoun Rule (McIntosh 1983).

Table 1: Northern Personal Pronoun Rule

	Adjacent pronoun	Other
1st person singular / all persons plural	- $\emptyset$	-(i) s
2nd / 3rd person singular	-(i) s	-(i) s

(Adapted from King 1997: 175)

3.1.2. Subjunctive

The subjunctive mood is used for hypothetical and conditional statements (Macafee 1992: 21). In Older Scots, the subjunctive has two subcategories: present subjunctive and past subjunctive (Macafee 1992: 21, 29). Since the definitions of these subjunctive types have not been fully established for Older Scots, this study applies the definitions from Middle English. The present subjunctive is used to express wishes and commands, while the past subjunctive expresses situations that are unlikely to occur (Burrow & Turville-Petre 2005: 49). However, in this study, only present subjunctive is discussed.

The present subjunctive is expressed through specific verb conjugations. This study discusses the works of King (1997) and Macafee (1992). According to King (1997: 179), verbs in the subjunctive mood are generally uninflected, except for *be* and *have*, which possess unique forms. Even the *-e* inflection, commonly observed in Southern English, is not used in Scots (King 1997: 179). While King (1997) does not explicitly use the terms “present subjunctive” or “past subjunctive,” the descriptions align with Macafee’s (1992) categorisation of the present subjunctive. Thus, King’s (1997) subjunctive

references pertain to the present subjunctive.

While King (1997) suggests that verbs in the subjunctive mood lack the *-e* ending, Macafee (1992) provides evidence for two forms of present subjunctive inflections: one ending in *-e* (singular) or *-en* (plural), and another with no ending.

Additionally, regarding the present subjunctive inflection of *be*, according to Macafee (1992: 28), both *be* and *beis* are valid forms.

3. 2. Middle English

Regarding the usage of the subjunctive in Middle English, Urata (2010) examined the use of the past and present subjunctive in the *Gospel According to St. Matthew* from the Later Version of the Wycliffite Bible, which John Wycliff translated into the East Midland dialect of Middle English around 1388. The results for the present subjunctive are summarised in Table 2.

Table 2: Syntactic Categorisation of Present Subjunctive in Middle English

Types of clauses		Tokens
Main clauses		33
Subordinate clauses	Noun clauses	39
	Adverb clauses	68
	Others	4
Overall		144

(Adapted from Urata 2010: 450)

In Table 2, “Others” includes *whether*- clauses. *Whether* was used as an interrogative marker to form direct interrogative sentences until 1588. In such *whether*-clauses, the subjunctive mood could be used (Urata 2010: 461).

4. Issues

First, there is a discrepancy between King’s (1997) description of Older Scots and that of Macafee (1992). While King (1997) asserts that subjunctive verbs lack endings and denies the existence of inflections ending in *-e* or *-en*, Macafee (1992) identifies two varieties of verb paradigms, including one that uses the *-e* / *-en* inflection. This inconsistency may stem from the broad temporal scope of Older Scots.

According to Aitken (1985: xiii), Older Scots spans approximately 600 years, during which grammatical changes, such as the addition or loss of verb morphemes, likely occurred. To clarify how verbs were inflected during a narrower timeframe—namely Early Scots—further investigation is required.

Urata (2010) examines the frequency of subjunctive usage and observes that its occurrence varies depending on whether it appears in noun clauses or adverbial clauses. However, Urata (2010) focuses solely on material from the East Midlands dialect of Middle English and does not address

other dialects. Therefore, it is essential to investigate whether similar patterns are present in Early Scots.

5. Investigation Material

The primary source for this investigation is Amour's (1908) edition of *The Orygynal Cronykil of Scotland* by Andrew of Wyntoun. Wyntoun lived between approximately 1350 and 1422, with the final revision of his manuscript believed to date to 1420 (Matthew & Harrison 2004: 700). The manuscript was written in Scotland (National Library of Scotland n.d.), confirming that it qualifies as Early Scots material. This manuscript consists of 197 chapters across six volumes, making it a rich resource for the proposed investigation.

6. Research 1: The Verb *be*

Research 1 focuses on identifying expressions or grammatical features that co-occur with the subjunctive by analysing instances of *be* in its subjunctive forms.

6.1. Methodology

The electronic version of the investigation material was imported into Microsoft Word and searched for the terms *be* and *beis* to identify present subjunctive sentences. The principal criterion for identification was whether the sentences contradicted the subject-verb concordance rules for the indicative mood described by Macafee (1992) and King (1997) while aligning with their descriptions of the subjunctive.

Decisions were based solely on syntactic features, following Urata's (2010) methodology, rather than on semantic interpretation. If a verb conjugated differently from the indicative paradigms, the sentence was classified as subjunctive. To refine the results, the following exclusions were applied: (a) instances where *be* was used as infinitive or as a part of another word (e.g., *befor* 'before'), (b) sentences that could be interpreted as either indicative or subjunctive in terms of morphosyntax, (c) clauses that spanned several lines, to avoid ambiguity, and (d) subjunctive constructions involving modal auxiliaries, as the focus of this research was to analyse verb forms, and it was difficult to determine whether such sentences were indicative or subjunctive.

6.2. Results

A total of 29 sentences were syntactically classified as present subjunctive. The distribution is summarised in Table 3. All sentences were identified as subjunctive because they violated the Northern Personal Pronoun Rule. Specifically, the verb *be* appeared in contexts where it was adjacent to either the first-person singular or any plural pronoun but did not follow the expected indicative inflection.

Table 3: Categorisation of Clauses with the Present Subjunctive Using *be* in Early Scots

Verb forms	Types of clauses		Tokens
<i>be</i>	Main clauses		3
	Subordinate clauses	<i>gif</i> ‘if’ -clause	11
		<i>þat</i> / <i>that</i> / <i>at</i> ‘that’ -clause	6
		<i>quheþer</i> / <i>quhether</i> ‘whether’ -clause	4
		<i>till</i> ‘till’ -clause	1
		<i>from</i> ‘from’ -clause	1
		<i>þocht</i> ‘though’ -clause	1
		<i>gif that</i> ‘if that’ -clause	2
<i>beis</i>	Main clauses	0	
	Subordinate clauses	0	
Overall			29

One of the sentences extracted in the research is shown below.

- (1) *Ȝe may wit quhat þe sentens sayis,*
 2PL.NOM may.AUX know.INF what DEF sentence say.IND
Þocht it be nocht rehearsit alwayis.
 though 3SG.NOM be.SUBJ NEG rehearse.PP always
 “You may understand what the sentence says, though it is not always mentioned.”
 (Chr. 107: 599-600)

In the sentence (1), the verb *be* needs to inflect into *is* to follow the Northern Personal Pronoun Rule, as it comes next to the personal pronoun of third person singular. However, the form is *be*, so it contradicts to the Northern Personal Pronoun Rule while it follows Macafee’s (1992) description of the subjunctive. Hence, this sentence is judged to be subjunctive.

6. 3. Discussion

The research shows that the present subjunctive tends to occur more frequently in subordinate clauses, such as *þat* / *that*-clauses and *gif*-clauses, than in main clauses. Therefore, words that mark subordinate clauses—such as *þat* / *that*, *gif*, *quheþer* / *quhether*—are key to identifying other present subjunctive sentences in Early Scots.

Although Macafee (1992) asserts that both *be* and *beis* are possible forms of the present subjunctive, no examples of *beis* in the subjunctive mood have been found in this study. This finding highlights a significant gap in usage between *be* and *beis*. One of the possible reasons for this is that the form *beis* is relatively new, and in Early Scots, the only subjunctive form was *be*. Since the previous studies focused on Older Scots, it is possible that they include results from the Middle Scots period. As Early Scots predates Middle Scots, it is also likely that *beis* was introduced as a subjunctive form in the Middle Scots period.

7. Research 2-4: *gif*, *þat* / *that*, and *quheþer* / *quhether*

These researches aim to identify the verb forms of the present subjunctive by searching the manuscript for occurrences of *gif*, *þat* / *that*, *quheþer* / *quhether*, subordinate markers that, according to the results of Research 1, may lead to subjunctive mood clauses.

7.1. Methodology

The text is searched for occurrences of *gif*, *þat* / *that*, *quheþer* / *quhether* to identify present subjunctive clauses. The primary criterion is the same as Research 1.

7.2. Results

Table 4 shows the results of Research 2, 3 and 4. All sentences were identified as subjunctive because they contradicted the descriptions of indicative. Specifically, ordinary verbs appeared in contexts where it was not adjacent to either the first-person singular or any plural pronoun but did not have a - (*i*) *s* morpheme at the end, as seen in Table 1.

Table 4: Categorisation of Verb Forms in Subordinate Clauses in Present Subjunctive in Early Scots

Types of verbs	Verb forms	<i>gif</i>	<i>þat</i> / <i>that</i>	<i>quheþer</i> / <i>quhether</i>
The verb <i>be</i>	<i>be</i>	14	6	4
	<i>beis</i>	0	0	0
Ordinary verbs	Loss of inflection	3	17	0
	Ending with - <i>e</i> / <i>en</i>	0	2	0
Overall		17	25	4

7.3. Discussion

In the results, most ordinary verbs lose the inflection, although some occasionally show the -*e* or -*en* inflection. These results align more with Macafee (1992) than with King (1997). The presence or absence of a morpheme is likely due to phonetical reasons. To match the number of syllables or to end with a similar sound to the adjacent line, the choice of verb inflection may vary.

In addition to that, a different way of violating the Northern Personal Pronoun Rule has been discovered, though this is not in *þat*-clause but just found coincidentally.

(2) *Throu þat strait rod, as I devisa,*

through DEM straight rad as 1SG.NOM deafen

Thai gat weill fra þar innemyis,

3PL.NOM get.PST wheel from 3PL.GEN enemy.PL

And lessit noþer man nor lad.

and reduce.PST neither man nor boy

“Through that straight-armed incursion, I became deaf, and they got wheels from their enemies and didn’t kill either a man or a boy.”

(Chr. 168: 4615-4617)

Here, the infinite form for *deviss* is *deve* or any other variant forms. Since the verb is adjacent to the first-person singular pronoun, it does not require an *-s* ending, either in the indicative or in the subjunctive. A possible reason for this is that the *-s* ending is needed for rhyme: the following line ends with *-s* because the final word of the line is the plural form of a noun. If the line were written according to the grammatical features described by King (1997) and Macafee (1992), it would not rhyme with the following line, as one would end with *-e* while the other would end with *-s*. To maintain the rhyme, *-s* is intentionally added here, which makes it appear that the verb paradigm differs from those found in previous studies.

8. Conclusion

This section synthesises all the information retrieved in Research 1 through 4 and discusses it from the perspective of verb forms and types of clauses.

8.1. Verb Forms

Considering the results from Research 1 to 4, the number of present subjunctive sentences using the verb *be* identified is 29, all of which inflect into *be*, and the form *beis* has not discovered. This result contradicts to the description of Macafee (1992). Even other possible forms for the present subjunctive have been identified. Hence, it is likely that *be* is the only form for the present subjunctive in Early Scots.

In the results of ordinary verbs, most verbs lose the inflection, although some occasionally show the *-e* or *-en* inflection. This shows that the inflection with no morpheme is the mainstream, but *-e* or *-en* can be added to rhyme: the choice of verb inflection may not be solely based on meaning. The exception, which is shown in the sentence (2), also supports this hypothesis.

8.2. Types of Clauses

The clause-type categorisation of the results in this study is shown in Table 5, based on information in Research 1 through 4.

Table 5: Types of Clauses in the Present Subjunctive in Early Scots

Types of clauses		Tokens
Main clauses		3
Subordinate clauses	<i>gif</i> -clause	17
	<i>þat / that / at</i> -clause	25
	<i>quheþer / quhether</i> -clause	4
	<i>till</i> -clause	1
	<i>from</i> -clause	1
	<i>þocht</i> -clause	1
	Others	4
Overall		56

In Table 5, “others” contain subordinate clauses that start with two different subordinate clause markers (e.g. *þat gif* and *quheþer þat*).

The results show that in Early Scots the present subjunctive is used more frequently in subordinate clauses than in main clauses, which aligns with Urata’s (2010) descriptions of East Midlands dialect in Middle English. Even among the types of subordinate clause markers, there are variations in their frequency. This difference can be partially attributed to the frequency of these subordinate clause markers themselves. The more frequently a subordinate marker is used, the more likely it is to appear in the subjunctive mood. A preliminary examination reveals that the total number of sentences containing *quheþer* or *quheter* in *The Original Chronicle* is less than 40, while the number for *þat* or *that* exceeds 500. This demonstrates a significant gap in the frequency of the markers themselves.

9. Prospects for the Future

The research does not account for the subjunctive using modal auxiliaries, as morphosyntactically, it is difficult to determine whether such sentences are indicative or subjunctive. Consequently, differences in frequency between inflection-type subjunctives and periphrasis-type subjunctives have not been identified. Therefore, to understand the overall subjunctive in Early Scots, it is necessary to consider meaning as well.

Ambiguous sentences, which cannot be syntactically classified as either indicative or subjunctive, were excluded from this research. However, such sentences should be retained for further study.

<Abbreviations> 1: first person / 2: second person / 3: third person / AUX: auxiliary / DEF: definite / DEM: demonstrative / GEN: genitive / IND: indicative / INF: infinitive / NEG: negation / NOM: nominative / PL: plural / PP: past participle / PST: past / SG: singular / SUBJ: subjunctive **<References>** Aitken, A. J. (1985) *A History of Scots*. In: Mairi Robinson (ed.) *The Concise Scots Dictionary*. Aberdeen: Aberdeen University Press. ix-xvi. / Brinton, L. & L. K. Arnovick (2017) *The English Language: A Linguistic History*. Third Edition. Don Mills: Oxford University Press. / Burrow, J. A. & T. Turville-Petre (2005) *A Book of Middle English*. Third Edition. Hoboken: Blackwell. / King, A. (1997) *The Inflectional Morphology of Older Scots*. In: C. Jones (ed.) *The Edinburgh History of the Scots Language*. Edinburgh: Edinburgh University Press. 156-181. / Macafee, C. I. (1992) *A Short Grammar of Older Scots*. *Scottish Language*, 11. 10-36. / Matthew, H. G & B. Harrison. (eds.) (2004). *Oxford Dictionary of National Biography: In Association with the British Academy: From the Earliest Times to the Year 2000, Volume 60, Wolmark - Zuyelestein*. Oxford: Oxford University Press. / McIntosh, A. (1983) *Present Indicative Plural Forms in Later Middle English of the North Midlands*. In: D. Gray & E. G. Stanley (eds.) *Middle English Studies: Presented to Norman Davies in Honour of his Seventeenth Birthday*. Oxford: Clarendon Press. 235-254. / Miller, R. M. (2023) *A History of the Scots Language*. Oxford: Oxford University Press. / National Library of Scotland. (n.d.). Online. Retrieved 6th January 2025 from www.nsl.uk. / Urata, K. (2010) *Notes on the Use of the Subjunctive in Late Middle English: With Special Reference to the Later Version of the Wycliffite Bible*. *Area and Culture Studies*. 81, 447-465. **<Dictionaries>** *Dictionaries of the Scots Language* (n.d.) Online. Retrieved 6th January 2025 from <https://dsl.ac.uk> / *Middle English Dictionary* (n.d.) Online. Retrieved from 6th January 2025 from <https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary> / *Oxford English Dictionary* (n.d.) Online. Retrieved 6th January 2025 from <https://oed.com/> / Robinson, M. (1985) *The Concise Scots Dictionary*. Aberdeen: Aberdeen University Press. **<Investigation Material>** Wyntoun, A. (1908) F. J. Amour (ed.) *The Original Chronicle of Andrew of Wyntoun: Printed on Parallel Pages from the Cottonian and Wemyss MSS., With the Variants of the Other Texts*. Edinburgh / London: William Blackwood and Sons.

The “Passive” in Spoken Finnish Revisited

Mao Kobayashi

(Department of Russian Language, School of Language and Culture Studies)

Keywords: Finnish, Passive Voice, Impersonal Passive, Null Subject

1. Introduction

This paper is part of the author’s bachelor’s thesis. It aims to refine the analysis of the present tense passive¹ form (-*TAVn*) in spoken Finnish² through an inductive investigation using corpus data and questionnaires. The Finnish *passive* exhibits a wide range of functions. This paper argues that several functions traditionally classified as active uses should instead be analyzed as instances of an agent-defocusing voice (agent-suppressive voice) with the impersonal function that stands in opposition to the active voice. Unless otherwise indicated, all example sentences and table numbers, as well as glosses and translations of previous studies, are provided by the author.

2. Preliminary

The Finnish passive is morphologically expressed by **a verbal stem + the passive marker -*TA*³ + (a tense suffix or a mood suffix) + the passive personal ending -*Vn*⁴**. The passive conjugates across all tenses (present, past, perfect, and pluperfect) as well as all moods (conditional, potential, and imperative). From the perspective of contemporary Finnish, the combination of the passive marker -*TA*- and the personal ending -*Vn* is analyzed as a single morpheme, -*TAVn*; this analysis is adopted in the present paper.

In general, the functions of the Finnish passive are divided into three types: (i) the impersonal function, (ii) the first-person plural active function, and (iii) the hortative function (imperative first-person plural) (VISK § 1313).

¹ Expressions employing the Finnish passive form have long been the subject of substantial debate with respect to whether they should be termed “passive”. The Finnish passive cannot express direct passive, indirect passive, or possessive passive meanings (Sakata & Takahashi 2013), nor can it represent constructions that are typically expressed by passive forms in other languages. For this reason, beginning with Shore (1986, 1988) and Tommola (1993, 1998), there has been a persistent view that it is problematic to label the Finnish construction as “passive.” Nevertheless, following VISK, which refers to this form as *passiivi* “passive,” this paper adopts the term “passive” form for constructions expressed by -*TAVn*, regardless of tense or mood.

² The term “spoken Finnish” as used in this paper refers to *yleispuhekieli* (standard colloquial Finnish).

³ The allomorphs are represented by -*TA*-. Finnish exhibits vowel harmony, and its vowels are classified into three groups: front vowels (*ä, ö, y*), back vowels (*a, o, u*), and neutral vowels (*e, i*). Hereafter, *A* within affixes represents *ä* or *a*.

⁴ The allomorphs of the personal ending are represented as -*Vn*; in spoken Finnish, the word-final /*n*/ may be omitted in actual speech.

- (1) Sauna-ssa **juo-daan** olut-ta
sauna-INE drink-PASS.PRS beer-PART
'Beer is drunk in a sauna (We/You/They drink beer in a sauna)' (impersonal function)
(Example by the author)

- (2) a. Me **juo-daan** olut-ta sauna-ssa
PRO.1PL.NOM drink-PASS.PRS beer-PARTsauna-INE
b. (Me) **juo-mme** olut-ta sauna-ssa
(PRO.1PL.NOM) drink-1PL.PRS beer-PARTsauna-INE
'We drink beer in a sauna' (active first-person plural function)
(Example by the author)

- (3) a. **Juo-daan** olut-ta sauna-ssa!
drink-PASS.PRS beer-PARTsauna-INE
b. **Juo-kaamme** olut-ta sauna-ssa!
drink-IMP.1PL beer-PARTsauna-INE
'Let's drink beer in a sauna!' (hortative function)⁵
(Example by the author)

3. Previous Research

When used in the first-person plural active function, the form typically co-occurs with a nominative personal pronoun (2a) (VISK §1272). However, the first-person plural pronoun used as the subject is not always repeated (4), and even in clauses without an overt subject, the agent of the "passive" form may be interpreted as a specific first-person plural referent (5) (VISK §1326; Shore 1988: 170).

- (4) me **men-tii** Juttutupa-a ja sitte, **istu-ttii** sie-l
PRO.1PL.NOM go-PASS.PST PN.Juttutupaa-ILL and then sit-PASS.PST there-ADE
'We went to Juttutupa and then sat there.'
(Example by the author based on VISK §1326)

⁵ Example (3a) is synonymous with the active first-person plural imperative illustrated in (3b). However, the active first-person plural imperative is generally regarded as formal in contemporary Finnish and is therefore rarely used; instead, the present passive form is commonly employed to express the hortative function (Yoshida 2010: 320).

- (5) **Näh-tiin** hänet.
 see-PASS.PST PRO.3SG.ACC
 ‘He [/she] was seen.’

(Shore 1988: 170)

By contrast, when used in the hortative function, a personal pronoun indicating the subject either does not appear at all (3a) or occurs after the verb (VISK §1654).

In previous studies, the first-person plural function and the hortative function have been treated as active voice, rather than as instances of the impersonal function of the passive voice because a first-person plural pronoun functioning as the agent can be supplied either as an overt subject or as a null subject, that is, these functions are analyzed as cases of pronoun omission (VISK §1315, 1331; Shore 1988).

4. Research Questions

The function classifications proposed in previous studies are incomplete and allow for numerous exceptions. Moreover, these analyses are largely deductive, and it is difficult to say that they adequately describe the actual range of functions of constructions employing the passive form. This paper, therefore, focuses on the Finnish passive in the present tense represented by the suffix *-TAVn-*, and attempts an inductive discussion of its functions.

5. Research

5.1. Methodology

A corpus-based investigation was conducted using the *Helsinki Corpus of Spoken Finnish* (hereafter SKN)⁶. Using a CQP query⁷, tokens that are classified as verbs in the part-of-speech annotation and are morphologically analyzed as present passive forms (indicative mood, passive voice, present tense) were extracted.⁸

5.2. Results and Analysis

The CQP query returned 2,811 tokens. From these, 300 tokens were randomly sampled; after excluding 68 tokens that were not in the *-TAVn* form (e.g., constructions involving the negative verb), 232 tokens were retained as the dataset for analysis. These tokens were analyzed together with their surrounding context.

⁶ This corpus contains 841,755 tokens and 51,254 sentences and is morphologically annotated. The data are based on a dialect collection of the same name, consisting of transcriptions of approximately two hours each of spoken dialect material published between 1978 and 2000.

⁷ The following CQP query was used: [pos = “V” & msd = “.*MOOD_Ind.*” & msd = “.*VOICE_Pass.*” & msd = “.*TENSE_Prs.*”]

⁸ As a supplementary investigation, a questionnaire survey was conducted with 20 native speakers to determine the interpretation of the semantic subject and to assess the acceptability of newly observed functions.

- (6) me takaisin **vie-dään** mutta kotona (?me) se
 PRO.1PL.NOM back take-PASS.PRS but at.home (?PRO.1PL.NOM) it.NOM

syö-dään.

eat-PASS.PRS

‘We take it back and eat it at home.’

(SKN15b_Rautu / Kaakkoismurteet / 1982; partially modified by the author)

Previous studies have argued that in the latter part of (6), although the nominative pronoun *se* is present, a first-person plural pronoun can be supplied as a null subject as a semantic agent. However, the data reveal cases in which the semantic agent is not first-person plural; rather, it appears that both semantically and syntactically the construction inherits the preceding subject (third person singular in (7)).

- (7) kun minä men-i-n lääkäri-lle Turku-un, sitten kun se
 when PRO.1SG.NOM go-PST-1SG doctor-ALL Turku-ILL then when PRO.3SG.NOM

rupes-i kun (*se) verenpaine **ote-taan**...
 begin-PST.3SG when (*PRO.3SG.NOM) blood.pressure.NOM take-PASS.PRS

‘When I went to the doctor in Turku, at that time, when he (= the doctor) starts from here, when (*he = the doctor) takes one’s blood pressure...’

(SKN27a_Velkua / Lounaismurteet / 1986; partially modified by the author)

Next, cases were also found in which the agent of the “passive” form is not expressed by an overt first-person plural pronominal subject, yet the semantic agent is clearly a definite first-person plural referent (8).

- (8) **ol-laan** Artjärve-n Hietana-n kylä-ssä, Anttila-n talo-ssa
 be-PASS.PRS PN.Artjärvi-GEN PN.Hietana-GEN village-INE PN.Anttila-GEN home-INE
 ‘(At the start of the interview recording) We are at the Anttila house in the village of Hietana, Artjärvi.’

(SKN35a_Artjarvi / Hämläismurteet / 1993; partially modified by the author)

Furthermore, cases were identified in which, despite the hortative interpretation, the construction syntactically inherits a preceding subject that is not first-person plural (third person singular in (9) or possibly plural). In these instances, as well, it is not possible to supply a first-person plural pronoun as a syntactic null subject.

- (9) häne-ltä loppu-i raha-t ja, hän puhu-i
 PRO.3SG.ABL run.out-PST money-PL.NOM and PRO.3SG.NOM speak-PST.3SG

jo-lle=kin omaise-lle. sitten poika sano-i että asunno-ssa
 someone-ALL=also close.relatives-ALL then boy.NOM say-PST.3SG that home-INE

on tyyris vakuutus ja
 be.3SG.PRS pricey.NOM insurance.NOM and

(*mä/?me/*se/*ne) polte-taan se.
 (PRO.1SG.NOM/PRO.1PL.NOM/PRO.3SG.NOM/PRO.3PL.NOM) fire-PASS.PRS it.NOM

‘When the money ran out, and the matter was discussed with some relatives as well, the boy said that there was a large insurance policy on the house, so they should set it on fire and burn it.’

(SKN50b_Eurajoki / Lounaismurteet / 2000; partially modified by the author)

6. Analysis

This paper argues that, on the omission of first-person plural pronouns, it is necessary to distinguish between cases in which the first-person plural pronoun is not repeated, as in (4), (10a), (10b), and (11a), and cases in which the first-person plural pronoun does not appear anywhere in the same clause or in which another nominative argument functions as the subject of the “passive” form, as in (5), (6), (8), (10c), and (11b).

- (10) a. Me **men-nään** ja (me) **näh-dään** hänet.
 PRO.1PL.NOM go-PASS.PRS and (PRO.1PL.NOM) see-PASS.PRS PRO.3SG.ACC
 ‘We go and meet him/her.’

- b. Me **puhu-taan** että (me) **näh-dään** hänet.
 PRO.1PL.NOM speak-PASS.PRS that (PRO.1PL.NOM) see-PASS.PRS PRO.3SG.ACC
 ‘We say that we will meet him/her.’

- c. (?me) **Näh-dään** hänet.
 (?PRO.1PL.NOM) see-PASS.PRS PRO.3SG.ACC
 ‘(?We) meet him/her.’

(Example by the author)

- (11) a. Me men-nään ja (me) **syö-dään** se⁹
 PRO.1PL.NOM go-PASS.PRS and (PRO.1PL.NOM) eat-PASS.PRS it.NOM
 ‘We go and eat it.’

- b. Me men-nään ja (*me) se **syö-dään.**
 PRO.1PL.NOM go-PASS.PRS and (*PRO.1PL.NOM) it.NOM eat-PASS.PRS
 ‘We go and eat it.’

(Example by the author)

This is because, if one were to posit the presence of a null subject in cases such as (5), (6), (8), (10c), and (11b) where no first-person plural pronoun appears anywhere in the same clause, or where another nominative argument functions as the subject of the “passive” form, and the agent being interpreted as first person plural, it would be impossible to explain why a null subject should *not* be posited in cases such as (7) (or (9)), where the agent is identifiable but is not first-person plural. Accordingly, cases without a first-person plural pronoun, such as (5), (8), and (10c), as well as cases such as (7) and (9), and cases in which another nominative argument functions as the subject of the “passive” form, such as (6) and (11b), should be clearly distinguished from cases with a first-person plural pronoun, such as (4), (10a), (10b), and (11a). In this paper, the latter are analyzed as instances of the active first-person plural function, whereas the former are argued to belong to the impersonal function that stands in opposition to the active voice, traditionally referred to as the “passive,” that is, an agent-defocusing voice or agent-suppressive voice¹⁰ (cf. Shibatani 1985; Tammola 1993, 1998).

7. Conclusion

In this paper, corpus-based instances were examined in depth together with their surrounding context, and the semantic subjects of “passive” clauses without a syntactical subject were carefully analyzed. In addition, the study pointed out the existence of clauses in which nominative arguments other than first-person plural pronouns occur, thereby clarifying the conditions under which the “null first-person plural subject” assumed in previous studies cannot be established. On this basis, the present analysis revises the boundary between the impersonal function and the active function (the

⁹ When the present “passive” form is used as an active first-person plural present function, a singular total object appears in the nominative case (VISK §1326).

(12) Me ote-taan se (Me ota-mme sen)
 PRO.1PL.NOM take-PASS.PRS it.**NOM** (PRO.1PL.NOM take-1PL it.**ACC**)
 ‘We take it.’

(VISK § 1326)

¹⁰ Here, the terms “agent-defocusing” or “agent-suppressing” are used in order to avoid confusion arising from the conflation of the broad and narrow senses of the term *passive*. While it is not particularly problematic referring to the voice expressed by *-TAVn* as “passive” within studies of the Finnish language, doing so can be misleading in typological studies.

first-person plural active function and the hortative function) of the Finnish “passive” form from a syntactic perspective.

Table 1: Reanalysis of the “Passive” in Spoken Finnish

	Previous Studies	This Paper
Personal Conjugation	Active Voice	Active Voice
“Passive” Form with a First-person Plural Nominative Pronoun in the Same Clause (without other argument preceding the verb)	Active Voice (Null-subject)	
“Passive” Form with a First-person Plural Nominative Pronoun in the Same Clause (with other arguments preceding the verb)		
“Passive” Form without a First-person Plural Nominative Pronoun in the Same Clause		
Hortative Function		
Impersonal Function	Passive Voice	“Passive” Voice (agent-defocusing /agent-suppressive voice)

As criteria for reanalysis, this paper proposes the following three points and argues that the Finnish passive can be divided into two types: the **active first-person plural function**, which belongs to the **active voice**, and the **impersonal function**, which constitutes a voice opposed to the active, traditionally referred to as the “passive,” that is, an **agent-defocusing / agent-suppressive voice**.

- (12) a. “Passive” forms that do not contain a nominative first-person plural pronoun within the same clause are part of the impersonal function.
- b. Even when a nominative first-person plural pronoun is present in the same clause, if another subject argument appears in a preverbal position, a null subject cannot be supplied, and the construction is classified as the impersonal function.
- c. The hortative function constitutes a subset of the impersonal function.

This classification can also be applied to dialects in which active third-person plural meanings can be expressed by the “passive” form (cf. Laakso 2022: 261) and to tenses other than the present.

List of Abbreviations

ABL ablative / ACC accusative / ADE adessive / ALL allative / GEN genitive / ILL illative / IMP imperative / INE inessive / NOM nominative / PART partitive / PASS passive / PL plural / PN proper noun / PRO pronoun / PRS present / PST past / SG singular / 1 first-person / 3 third-person / - affix boundary / = clitic boundary / . separator for metalanguage elements

Bibliographies

- Laakso, Johanna (2022) Finnish, Meänkieli, and Kven. In: Marianne Sz. Bakró-Nagy, Johanna Laakso, and E. K. Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages*, 254-268. Oxford: Oxford University Press.
- Sakata, Haruna and Takahashi, Kentaro (2013) 「フィンランド語」 [Finnish Language]. *Journal of the Institute of Language Research* 18: 381-408.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and related constructions. *Language* 61: 821-848.
- Shore, Susanna (1986) *Onko suomessa passiivia?* Helsinki: Suomalainen Kirjallisuuden Seura.
- Shore, Susanna (1988) On the so-called Finnish passive. *Word* 39 (3): 151-176.
- Tommola, Hannu (1993) Ambipersonainen suppressiivi: diateesista suomessa ja virossa. In: Valma Yli-Vakkuri (eds.) *Studia comparative linguarum orbis Maris Baltici 1. Tutkimuksia syntaksin ja pragmatiikan alalta*, 41-96. Turku: University of Turku.
- Tommola, Hannu (1998) Zametki k tipologii ambipersonala. In: N.A. Kozinceva and A.K. Ogloblin (eds.) *Tipologija. Grammatika. Semantika. K 65-letiju Viktora Samuilovicha Xrakovskogo*, 41-57. Sankt-Peterburg: Nauka.
- VISK = Vilkuna, Maria (eds.) (2008) *Iso suomen kielioppi verkkoversio*. Helsinki: Kotimaisten kielten tutkimuskeskus. <https://kaino.kotus.fi/visk/etusivu.php>. [accessed: 2025/12/16].
- Yoshida, Kingo (2010) 『フィンランド語文法ハンドブック (Suomen kieliopin käsikirja)』 [Finnish Grammar Handbook] Tokyo: Hakusuisha.

Corpus

Institute for the Languages of Finland (2014) The Helsinki Korp Version of Samples of Spoken Finnish [data set]. Kielipankki. <http://urn.fi/urn:nbn:fi:lb-2016042702> [accessed: 2025/12/16].

Referenced Dictionaries

- Kotimaisten kielten keskus (2024a) Kielitoimiston sanakirja. <https://www.kielitoimistonsanakirja.fi> [accessed: 2025/12/16].
- Kotimaisten kielten keskus (2024b) Suomen murteiden sanakirja. <https://kaino.kotus.fi/sms/> [accessed: 2025/12/16].
- Sanakirja.fi (n.d.) <https://www.sanakirja.fi/> [accessed: 2025/12/16].

イタリア語書き言葉コーパスにおける部分冠詞複数形の出現分布について

酒井 将希

(言語文化学部 イタリア語専攻)

キーワード：イタリア語，部分冠詞複数形，無冠詞，コーパス調査，出現分布

0. はじめに

いくつかの先行研究 (Luraghi & Albonico (2021) など) によると、イタリア語の冠詞体系に欠如している不定冠詞の複数形は、部分冠詞の複数形により代替されるという。そこで本稿では、以下の2点をコーパス調査により明らかにする：①部分冠詞複数形はたしかに不定冠詞の複数形として用いられるが、一部の環境ではその使用に制限があること。②不定複数を表す名詞句では、部分冠詞複数形ではなく無冠詞のほう主流な選択肢であること。

本稿の構成は以下の通りである。まず1節で背景知識を概観し、2節で先行研究の概要を述べ問題提起を行う。3節で調査・分析を行い、最後に4節で結論と今後の課題を述べる。なお、本稿中の例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものである。パーセンテージの計算では小数第二位を四捨五入する。

1. 背景知識

1.1 節でイタリア語の冠詞について、1.2 節でイタリア語の無標の語順について述べる。

1.1. イタリア語の冠詞体系と、部分冠詞の形態、用法 (長神 (2018))

長神 (2018: 30-31, 80) によると、イタリア語の冠詞には定冠詞、不定冠詞、部分冠詞の3種類があり、名詞と性・数について一致する。本稿では、長神 (2018) に記載されている各形態を参考に各冠詞を (無冠詞も含め) 以下のように総称的に表記する。

表 1: 本稿における冠詞の総称的な表記 (体系、部分冠詞の形態は長神 (2018) に基づく)

	定冠詞	不定冠詞	部分冠詞	無冠詞
単数	IL	UN	DEL (男性形... <i>del/dello/dell'</i> ・女性形... <i>della/dell'</i>)	φ (単)
複数	I		DEI (男性形... <i>dei/degli</i> ・女性形... <i>delle</i>)	φ (複)

このうち DEL は不可算名詞の漠然とした量を表す一方、DEI は可算名詞の漠然とした数を表す (長神 (2018: 66, 80))。

(1) *Ieri sono venuti dei ragazzi.*

昨日 AUX.PR.F.3.PL 来る.PTCP.PST.M.PL DEL.M.PL 少年.M.PL

「昨日 (何人かの) 少年たちが来た。」

(Luraghi & Albonico (2021: 171))

1.2. イタリア語の無標の語順 (Lepschy & Lepschy (1981))

Lepschy & Lepschy (1981: 145-148) によるとイタリア語の無標の語順は以下の通りである。

表 2: Lepschy & Lepschy (1981) に基づくイタリア語の無標の語順

	語順	
自動詞文	S (旧情報) +V	V+S (新情報)
他動詞文	S+V+O	

2. 先行研究の概要と問題点、仮説

イタリア語の部分冠詞および無冠詞に関する先行研究を、以下にまとめる。生起頻度の具体的な数値については、藤田 (2013: 85) と Luraghi & Albonico (2021: 172) を参照されたい (この二つはそれぞれ部分冠詞の使用実態に関するテキスト調査、コーパス調査である)。

表 3: 先行研究の概要 (☆...原則使用、◎...高頻度、○...可、△...低頻度、×...原則不可)

観点	条件		DEI	φ (複)	先行研究 (アルファベット順)
文法機能	目的語		◎		藤田 (2013) /Luraghi & Albonico (2021)
		修飾語あり		×	Renzi (2001)
		修飾語なし		○	
	主語			△	Luraghi & Albonico (2021)
		動詞の後	◎		藤田 (2013)
				○	Renzi (2001)
		動詞の前	△		藤田 (2013)
				×	Renzi (2001)
				○	
		存在を表す述語・非対格動詞と共起		◎	Luraghi & Albonico (2021)
		他動詞・非能格動詞と共起		△	
	名詞文・副詞句		△		藤田 (2013) /Luraghi & Albonico (2021)
	前置詞句		△		藤田 (2013) /Luraghi & Albonico (2021)
				○	猪浦 (1986) /Renzi (2001) /遠山 (2019)
	属詞		△		藤田 (2013) /Luraghi & Albonico (2021)
				☆	猪浦 (1986)
限定する要素	数量詞・所有形容詞・指示形容詞あり			☆	猪浦 (1986)
	修飾語なし		☆	×	Renzi (1982)
	関係節あり	節内の動詞が直説法	☆	×	
		節内の動詞が接続法	○	○	

- ・ DEI は不定冠詞の複数形である (Luraghi & Albonico (2021: 170) 、Renzi (2001: 388)) 。
- ・ イタリア語書き言葉コーパス CoLFIS (サイズは約 380 万語) において、DEL・DEI は 1,447 件ヒットした (Luraghi & Albonico (2021)) 。
- ・ 調査した前置詞句内の冠詞 2,500 件のうち、DEL・DEI は 0 件であった (遠山 (2019)) 。

ただし、先行研究では以下の点が示されていない。

- ・ UN・DEI の、各環境における出現分布の傾向の差異
- ・ 不定複数を表す DEI・ ϕ (複) の使い分けに関する各記述の妥当性を実証するデータ

これを踏まえ、以下の仮説①・②を立てた。

仮説① DEI・UN の出現分布の傾向は、以下の点 (a-c) において一致している。

- a : DEI・UN を伴う名詞は目的語として多く出現し、主語、属詞、前置詞句、名詞文として現れる割合は少ない (藤田 (2013) 、Luraghi & Albonico (2021) から) 。
- b : DEI・UN を伴う主語名詞は非対格動詞と多く共起する一方で、非能格動詞、他動詞とは共起しにくい (Luraghi & Albonico (2021) から) 。
- c : DEI・UN を伴う主語名詞は、自動詞文ではそのほとんどが VS 語順で現れ、他動詞文では基本語順の SVO で現れる (Lepschy & Lepschy (1981) から) 。

仮説② 名詞が不定複数を表す場合、DEI を伴う場合よりも無冠詞で用いられる場面のほうが多い (Luraghi & Albonico (2021) によるコーパス調査において、約 380 万語のうち部分冠詞が 1,447 件しかヒットしなかったことから) 。特に、属詞、名詞文、前置詞句で不定複数を表す名詞は原則無冠詞で用いられる (藤田 (2013)、猪浦 (1986) 、Luraghi & Albonico (2021) 、Renzi (2001) 、遠山 (2019) から) 。ただし名詞が修飾語 (形容詞、関係節) を伴う場合のみ原則 DEI を伴う (Renzi (2001) から) 。

3. 調査

3.1 節で調査①について、3.2 節で調査②について述べる。ただし、調査①については紙幅の都合上その概要のみを記載する。

3.1. 調査①

調査①では、イタリア語書き言葉コーパス CORIS を用い仮説①を検証する。本コーパスはボローニャ大学が 1998 年に開設し、2024 年 12 月時点での収録語数は約 1 億 6 千万語となっている。収録ジャンルは出版物、物語、学術散文、行政文書、論叢、ポスターである。

3.1.1. 調査方法と分類の基準

DEI の検索には、長神 (2018: 30-31, 80) に記載の各形態を参考に検索式 "de(i|gli|lle)" を、UN については検索式 "u(n|no|na|n')" を用いる。Time Slice を All に設定し、藤田 (2013) と

条件を揃えるため Subcorpus を NARRATIVA (物語) に設定する。各冠詞の用例を 500 件ずつ収集し、後述の分類 a-b を行う。

分類 a では、DEI・UN を伴う名詞を藤田 (2013) を参考に「主語 (V 前)」、「主語 (V 後)」、「目的語」、「属詞」(広義でのコピュラ動詞の補語)、「前置詞句」、「名詞文」(一切の動詞を伴わず単独で文中に現れる名詞)、「その他」に分類する。

次に分類 b では、「主語 (V 前/V 後)」と共起する動詞を、Luraghi & Albonico (2021) を参考に「他動詞」、「自動詞」の二つに分け、さらに後者の下位カテゴリとして「非対格動詞」、「受動・非人称」、「再帰」、「非能格動詞」の四つに分類する。

3.1.2. 調査結果 (分類 a-b)

分類 a-b の結果は以下の通りである。

表 4: DEI・UN を伴う名詞の文法機能ごとの生起件数と割合 (分類 a)

	DEI		UN	
	件数	%	件数	%
目的語	345	69.0	151	30.2
主語 (V 前/V 後)	79 (9/70)	15.8 (1.8/14.0)	43 (13/30)	8.6 (2.6/6.0)
前置詞句	51	10.2	203	40.6
属詞	20	4.0	50	10.0
名詞文	3	0.6	24	4.8
その他	2	0.4	29	5.8
合計	500	100	500	100

表 5: DEI・UN を伴う主語名詞と共起する動詞の種類 (分類 b)

		DEI		UN	
		主語 (V 前)	主語 (V 後)	主語 (V 前)	主語 (V 後)
自動詞	非対格動詞	2 (22.2%)	60 (85.7%)	0 (0%)	20 (66.7%)
	受動・非人称	2 (22.2%)	7 (10.0%)	1 (7.7%)	2 (6.7%)
	再帰	0 (0%)	2 (2.9%)	2 (15.4%)	5 (16.7%)
	非能格動詞	0 (0%)	1 (1.4%)	4 (30.8%)	2 (6.7%)
	小計	4 (44.4%)	70 (100%)	7 (53.8%)	29 (96.7%)
他動詞		5 (55.6%)	0 (0%)	6 (46.2%)	1 (3.3%)
合計		9 (100%)	70 (100%)	13 (100%)	30 (100%)

分類 a (表 4) の結果から仮説①a を修正すると、「DEI は UN と比べ主語 (V 後)、目的語と共に現れやすい一方で、主語 (V 前)、前置詞句、名詞文では非常に現れにくく、属詞とも共起しづらい」となる。

次に分類 b (表 5) の結果を踏まえ仮説①b を修正すると、「DEI・UN を伴う主語名詞が動詞の後に現れる場合は、主に非対格動詞と共起し、非能格動詞、他動詞とは共起しにくい一方で、動詞の前に現れる場合には他動詞、非能格動詞と共起するケースが半数以上を占める」となる。仮説①c 「DEI・UN を伴う主語名詞は、自動詞文ではそのほとんどが VS 語順で現れ、他動詞文では基本語順の SVO で現れる」は、正しいといえる。

3.2. 調査②

調査②ではオンラインイタリア語コーパス PAISÀ (*Piattaforma per l'Apprendimento dell'Italiano Su corpora Annotati*) の CQP (corpus query processor) Search 機能を用いて DEI・φ (複) を伴う名詞をそれぞれ検索することで、以下の仮説②の検証を行う: 「名詞が不定複数を表す場合、DEI を伴う場合よりも無冠詞で用いられる場面のほうが多い。特に、属詞、名詞文、前置詞句で不定複数を表す名詞は原則無冠詞で用いられる。ただし名詞が修飾語 (形容詞、関係節) を伴う場合のみ原則 DEI を伴う」。本コーパスの収録語数は約 2 億 5 千万語であり、収録テキストの出典は 2010 年 9-10 月時点のウェブサイトである。

3.2.1. 調査方法

調査①と同様に主語 (V 前/V 後)、目的語、属詞、前置詞句内名詞、名詞文にわけて検索を行い、ノイズを手作業で除去する。検索式については、次節で後述する。DEI については、後述の事情により主語 (V 後)、目的語、属詞をまとめて検索し、手作業で分類する。名詞文以外については、前後に形容詞を伴うもの、関係詞を伴うもの、どちらも伴わないものの 3 つに分けて検索する。さらに、関係詞を伴う用例を、関係節内の動詞が直説法のもの、接続法のもの、条件法のものに手作業で分類する。名詞文については、前後に形容詞を伴うものとそうでないものの 2 つに分ける。なお目的語、属詞については、Lepschy & Lepschy (1981) の基本語順に関する記述を参考に動詞の後に置かれるもののみを調査の対象とする。

3.2.2. 使用する品詞タグ、依存関係タグ、検索式と補足

調査②で使用する各タグ、検索式、補足は以下の通りである。

表 6: 調査②で使用する品詞タグ、依存関係タグ、検索式 (【】内は式番号)、補足

品詞タグ	A…形容詞 B…副詞 E…前置詞 EA…前置詞+冠詞 FS…句点・感嘆符・疑問符 PR…関係代名詞 S…一般名詞 V…本動詞
依存関係タグ	subj…主語 obj…目的語 pred…述語 (属詞)
その他の要素	::a.head=b.id & a.deprel="〇" within s...a が主要部 b に対し〇の機能をもつ feats contains "num=p"...複数形 ".*"...任意の語 "[A-Z].*"...大文字で始まる任意の語 ○ & ! □...〇かつ□ではない
検索式	《DEI》【1A】形容詞を後に伴う主語 (V 前) ... "De(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="A"] [pos="V"] 【1B】関係代名詞を伴う主語 (V 前) ... "De(i)gli(l)le" [pos="A"] [pos="S"] [pos="V"] 【2】関係代名詞を伴う主語 (V 前) ... "De(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="PR"] [pos="V"] 【3】修飾語を伴わない主語 (V 前) ... "De(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="V"] 【4A】形容詞を後に伴う主語 (V 後) ・目的語・属詞... [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] "de(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="A"] 【4B】形容詞を前に伴う主語 (V 後) ・目的語・属詞... [(pos="V") & (word="[A-Z].*")]"de(i)gli(l)le" [pos="A"] [pos="S"] 【5】関係代名詞を伴う主語 (V 後) ・目的語・属詞... [(pos="V") & (word="[A-Z].*")]"de(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="PR"] 【6】修飾語を伴わない主語 (V 後) ・目的語・属詞... [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] "de(i)gli(l)le" [pos="S"] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] 【7A】形容詞を後に伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")]"de(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="A"] 【7B】形容詞を前に伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] "de(i)gli(l)le" [pos="A"] [pos="S"] 【8】関係代名詞を伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")]"de(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="PR"]

	【9】修飾語を伴わない前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] "de(i)gli(l)le" [pos="S"] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] 【10A】形容詞を後に伴う名詞文... "De(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="FS"] 【10B】形容詞を前に伴う名詞文... "De(i)gli(l)le" [pos="A"] [pos="S"] [pos="FS"] 【11】形容詞を伴わない名詞文... "De(i)gli(l)le" [pos="S"] [pos="FS"] < φ (複) > 【12A】形容詞を後に伴う主語 (V 前) ... a: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] b: [(pos="V") ::a.head=b.id & a.deprel="subj" within s 【12B】形容詞を前に伴う主語 (V 前) ... [(pos="A") & (word="[A-Z].*")] a: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] b: [(pos="V") ::a.head=b.id & a.deprel="subj" within s 【13】関係代名詞を伴う主語 (V 前) ... a: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] & (word="[A-Z].*")] [pos="PR"] [* b: [(pos="V") ::a.head=b.id & a.deprel="subj" within s 【14】修飾語を伴わない主語 (V 前) ... a: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="V") ::a.head=b.id & a.deprel="subj" within s 【15A】形容詞を後に伴う主語 (V 後) ... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="A"] ::b.head=a.id & b.deprel="subj" within s 【15B】形容詞を前に伴う主語 (V 後) ... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] ::b.head=a.id & b.deprel="subj" within s 【16】関係代名詞を伴う主語 (V 後) ... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="PR"] ::b.head=a.id & b.deprel="subj" within s 【17】修飾語を伴わない主語 (V 後) ... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] ::b.head=a.id & b.deprel="subj" within s 【18A】形容詞を後に伴う目的語 ... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="A"] ::b.head=a.id & b.deprel="obj" within s 【18B】形容詞を前に伴う目的語... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] ::b.head=a.id & b.deprel="obj" within s 【19】関係代名詞を伴う目的語... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="PR"] ::b.head=a.id & b.deprel="obj" within s 【20】修飾語を伴わない目的語... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] ::b.head=a.id & b.deprel="obj" within s 【21A】形容詞を後に伴う属詞... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="A"] ::b.head=a.id & b.deprel="pred" within s 【21B】形容詞を前に伴う属詞... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] ::b.head=a.id & b.deprel="pred" within s 【22】関係代名詞を伴う属詞... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="PR"] ::b.head=a.id & b.deprel="pred" within s 【23】修飾語を伴わない属詞... a: [(pos="V") & (word="[A-Z].*")] b: [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] ::b.head=a.id & b.deprel="pred" within s 【24A】形容詞を後に伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="A"] 【24B】形容詞を前に伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] [(pos="S") & (feats contains "num=p")] 【25】関係代名詞を伴う前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="PR"] 【26】修飾語を伴わない前置詞句内名詞... [(pos="E") & (word="[A-Z].*")] [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [(word=".*") & ! (pos="A B E EA PR V")] 【27A】形容詞を後に伴う名詞文... [(pos="S") & (feats contains "num=p")] & (word="[A-Z].*")] [pos="A"] [pos="FS"] 【27B】形容詞を前に伴う名詞文... [(pos="A") & (word="[A-Z].*")] [(pos="S") & (feats contains "num=p")] [pos="FS"] 【28】形容詞を伴わない名詞文... [(pos="S") & (feats contains "num=p")] & (word="[A-Z].*")] [pos="FS"]
補足	・ 簡便のため、以下の要素の有無については考慮していない: 対格や与格などを表す接語、法・相・態を表す助動詞、否定語、コロンなどの句境界を表す要素、カンマ、ハイフン。 ・ DEI の検索式について、依存関係タグを用いた検索では期待する結果が得られなかったため、φ (複) とは異なりタグを使用せずに検索する (DEI に割り当てられているのが不定冠詞タグではなく、全く同じ形態である前置詞 di+定冠詞のタグであるためだと考えられる)。 ・ 各検索式において、最初の語が大文字で始まるように設定している。これは、小文字から始まる用例も含めて集計した場合、例えば【26A】では 60 万件以上がヒットしてしまいノイズを除去する作業が難しくなってしまうためである。この絞り込みにより、ヒットする文の一語目が理論上は文頭に置かれているものに絞られノイズ除去が非常に容易になる一方で、データに若干の偏りが生じている可能性もある。

3.2.3. 調査結果とその分析

調査結果と特筆事項を以下に示す。DEI の使用率が 15%を超える項目は内訳の数値と分類を太字にし、合計該当件数が 20 件未満の項目 (以下、言及しない) には下線を付した。

表 7: DEI・ ϕ (複) の環境別生起件数、割合 (括弧内の数値はノイズ除去前のヒット件数)

分類			検索式番号		該当件数		各冠詞の使用割合 (%)	
			DEI	φ (複)	DEI	φ (複)	DEI	φ (複)
主語 V 前	形	後置	1A	12A	30 (90)	1,684 (1,826)	1.8	98.2
		前置	1B	12B	14 (75)	1,260 (1,277)	1.1	98.9
	関 (直/接/条)		2	13	7/0/0 (90)	570/5/17 (883)	1.2/0/0	98.8/100/100
	修飾語なし		3	14	67 (294)	3,882 (5,840)	1.7	98.3
主語 V 後	形	後置	4A	15A	45 (375)	364 (420)	11.0	89.0
		前置	4B	15B	21 (177)	1,092 (1,866)	1.9	98.1
	関 (直/接/条)		5	16	27/1/0 (110)	47/2/0 (53)	36.5/33.3/—	63.5/66.6/—
	修飾語なし		6	17	41 (537)	182 (195)	18.4	81.6
目的語	形	後置	4A	18A	120 (375)	1,866 (2,015)	6.0	94.0
		前置	4B	18B	64 (177)	569 (626)	10.1	89.9
	関 (直/接/条)		5	19	19/3/0 (110)	179/14/5 (211)	9.6/17.6/0	90.4/82.4/100
	修飾語なし		6	20	87 (537)	1,901 (2,298)	4.4	95.6
属詞	形	後置	4A	21A	58 (375)	767 (1,140)	7.0	93.0
		前置	4B	21B	35 (177)	42 (44)	45.5	54.5
	関 (直/接/条)		5	22	27/0/0 (110)	483/0/14 (520)	5.3/—/0	94.7/—/100
	修飾語なし		6	23	105 (537)	733 (842)	12.5	87.5
前置詞句	形	後置	7A	24A	47 (55)	5,767 (8,738)	0.8	99.2
		前置	7B	24B	29 (30)	4,602 (7,344)	0.6	99.4
	関 (直/接/条)		8	25	4/0/1 (7)	177/5/7 (220)	2.2/0/12.5	97.8/100/87.5
	修飾語なし		9	26	26 (51)	9,361 (10,800)	0.3	99.7
名詞文	形	後置	10A	27A	4 (8)	3,739 (5,011)	0.1	99.9
		前置	10B	27B	2 (3)	412 (443)	0.5	99.5
	修飾語なし		11	28	22 (71)	12,438 (14,490)	0.2	99.8
合計					906	52,186	1.7	98.3

- ・ 主語 (V 前) は Renzi (2001) に反し、修飾語の有無を問わず 98%以上が無冠詞になる。
- ・ 主語 (V 後) は関係詞 (直説法) を伴う場合、36.5%と比較的高い割合で DEI が使用されていたが、それ以外の場合には少なくとも 8-9 割が無冠詞であった。
- ・ 目的語は Renzi (2001) の記述に反し修飾語を伴う場合でも 9 割程度が無冠詞だった。
- ・ 属詞については、形容詞が先行する場合 45.5%と最も高い割合で DEI が使用されている。それ以外の場合では、猪浦 (1986) の記述どおり 9 割程度が無冠詞である。
- ・ 前置詞句内名詞と名詞文は、原則無冠詞になる。前者については、DEI のもつ前置詞句としての本来的なステータスへの、潜在的な認識が影響していると考えられるだろう。
- ・ 修飾語の有無による DEI 使用率を比較すると項目ごとに傾向がまちまちであることから、修飾語の有無と種類が冠詞選択に一貫した影響を与えているわけではないといえる。

このことから、本調査では、表 6 の「補足」に挙げたような改善点を残しつつも、表 7 で太字になっていない条件では原則無冠詞になると結論づける。

4. 結論と今後の課題

調査結果を踏まえ、以下の2点を本稿の結論とする：①DEIはたしかにUNの複数形(=不定冠詞複数形)として用いられるが、主語(V前)、属詞、前置詞句、名詞文ではその使用に一定の制限がある。②不定複数を表す名詞句においては、DEIではなく全体の98.3%を占めるφ(複)のほうがはるかに主流な選択肢である。

主な今後の課題は以下の通りである：表6の「補足」で述べた問題点を解消すること。属詞、前置詞句、名詞文でのDEIの使用制限と、修飾語の有無による冠詞選択への影響についてより深く考察すること。「なぜDEIではなく無冠詞が主流になっているのか？」という問いに答えること。DEIとφ(複)の使い分けに関して、通時的な観点から調査すること。

《略号一覧》: 機能の兼担 / +: 縮約形の境界 / 1:1 人称 / 2:2 人称 / 3:3 人称 / ACC: 対格 / AOR: アオリスト / AUX: 助動詞 / CAUS: 使役態 / COMP: 補文標識 / COND: 条件法 / COP: コピュラ / DAT: 与格 / DEL: 部分冠詞 / F: 女性 / FUT: 未来 / GEN: 属格 / GER: ジェルンディオ / IL: 定冠詞 / IMP: 命令法 / INF: 不定法 / IPRF: 未完了 / M: 男性 / NEG: 否定 / NOM: 主格 / OBLG: 義務 / PASS: 受動態 / PL: 複数 / POSB: 可能 / PRF: 完了 / PRN: 代名詞 / PRS: 現在 / PST: 過去 / PTCP: 分詞 / REFL: 再帰 / REL: 関係詞 / SG: 単数 / SBJV: 接続法 / UN: 不定冠詞《参考文献》【和文】青木洋一郎 (2014) 「イタリア語の冠詞における指示と数量について」『明治学院大学教養教育センター紀要カルチュラル』8: 89-96. / 猪浦道夫 (1986) 「イタリア語冠詞論」『ロマンス語研究』19: 9-22. / 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房. / Zamborlin, Chiara (2006) 「イタリア語の近過去における助動詞の選択の基準について —意味論的観点からの提案—」『ニダバ』35: 56-64. / 鈴木信吾 (1986) 「イタリア語における無標の語順について」『イタリア学会誌』36: 102-121. / 遠山綾香 (2019) 「イタリア語の前置詞句における冠詞の有無について」『東京外国語大学記述言語学論集 思言』15: 187-194. / 土肥篤 (2021) 「イタリア語における情報構造と名詞述語文」『東京外国語大学語学研究所論集』26: 121-126. / 長神悟 (1988) 「イタリア語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上) あ-こ』591-605. 東京: 三省堂. / — (2018) 『イタリア語のABC [改訂版]』東京: 白水社. / 橋本勝雄 (2014) 「動詞にもとづくイタリア語の文型について」『研究論叢』83: 349-366. / — (2017) 「イタリア語の部分冠詞と接辞 *ne* について」『研究論叢』89: 9-28. / 藤田健 (2008) 「イタリア語における再帰非人称構文の統語構造」『北海道言語文化研究』6: 43-64. / — (2013) 「フランス語とイタリア語における部分冠詞の分布について」『北海道言語文化研究』11: 77-98. / — (2017) 「スペイン語とイタリア語における定冠詞の分布について」『北海道言語文化研究』15: 71-93. / 松岡知津子 (2002) 「非対格性・非能格性の概念に基づいた自動詞の分類に関する研究の動向」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』51: 351-356. / 三上傑 (2018) 「英語の結果構文が示す「非能格性」—非能格動詞結果構文が許容する二つの解釈と構造的曖昧性」『英文学研究』95: 53-71. 【欧文】Antinucci, Francesco & Guglielmo Cinque (1977) *Sull'ordine delle parole in italiano: l'emarginazione*. *Studi di grammatica italiana*, 6: 121-146. / Bruyn, Bert Le (2007) *The partitive article dei in Italian*. *Linguistics in the Netherlands*, 24: 138-149. / Cinque, Guglielmo (1995) *Italian syntax and Universal Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press. / Dardano, Maurizio & Pietro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Bologna: Zanichelli. / Gruppo di Padova (1974) *L'ordine dei sintagmi nella frase. Fenomeni morfologici e sintattici nell'italiano contemporaneo*, 7: 147-161. / Lepschy, Anna Laura & Giulio Ciro Lepschy (1981) *La lingua italiana. Storia, varietà dell'uso, grammatica*, Milano: Bompiani. / Luraghi, Silvia & Giovanna Albonico (2021) *The partitive article in Old Italian: Early stages in the grammaticalization of the Italian partitive article*. Petra Sleeman & Giuliana Giusti (eds.) *Partitive Determiners, Partitive Pronouns and Partitive Case*, 169-201. Berlin / Boston: Mouton De Gruyter. / Perlmutter, David (1978) *Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis*. *Berkeley Linguistics Society*, 4: 157-189. / Perlmutter, David & Paul Postal (1984) *The 1-Advancement Exclusiveness Law*. David Perlmutter & Carol Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar 2*, 81-125. Chicago: University of Chicago Press. / Peyronnel, Stella & Ian Higgins (2005) *Basic Italian: A Grammar and Workbook*, London: Routledge. / Renzi, Lorenzo (1982) *Il vero plurale dell'articolo UNO*. *Lingua Nostra*, 43: 63-68. / — (2001) *L'articolo*. Lorenzo Renzi et al. (eds.) *Grande grammatica italiana di consultazione*, 371-427. Bologna: il Mulino. / Salvi, Giampaolo & Laura Vanelli (2004) *Nuova grammatica italiana*, Bologna: il Mulino. 《参考資料》CORIS: <https://corpora.ficlit.unibo.it/TCORIS/> (最終閲覧日: 2024年12月25日) / PAISÀ: <https://www.corpusitaliano.it/en/> (最終閲覧日: 2024年12月25日) / WordNet: <http://wordnetweb.princeton.edu/perl/webwn> (最終閲覧日: 2024年12月25日) 《辞書》池田廉 他 (編) (1999) 『伊和中辞典 第2版・改訂新版』東京: 小学館。

モンゴル語の相続相と結合する動詞の制限・傾向について

関根 彩乃

(言語文化学部 モンゴル語専攻)

キーワード：モンゴル語, ハルハ方言, 動詞, アスペクト, 相続相

1. はじめに

本稿は現代モンゴル語における相続相と結合する動詞の制限について、コーパス調査により結合する動詞の制限と結合しやすい動詞の傾向を明らかにすることである。本稿で扱うモンゴル語はモンゴル国で使用されているハルハ方言とする。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2章でモンゴル語の動詞、アスペクト体系に関する背景知識を整理し、第3章で先行研究を概観し、第4章で問題提起、第5章で調査について述べる。第6章で考察を行い、第7章で今後の課題について述べる。

本稿での例文の表記は、キリル文字による正書法に従いローマ字転写¹したものを用いる。

なお、特に断りのない限り、例文番号、グロス、文字飾り、転写は全て筆者によるものである。ただし先行研究の例文の転写、日本語訳に関しては、先行研究のままとする。

2. モンゴル語の動詞・アスペクトに関する背景知識

本章では、モンゴル語のアスペクトによる動詞分類について、松岡の分類に倣い説明する。松岡は、モンゴル語ホルチン方言を対象としているが、モンゴル語ハルハ方言を対象に動詞分類をおこなっている先行研究が管見の限り見当たらなかった為、今回はこの松岡の分類を参照する。

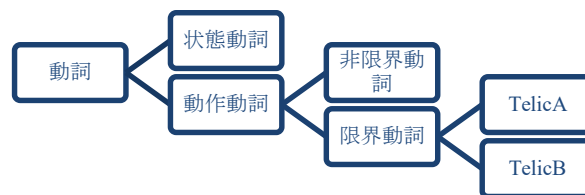


図 1: 動詞のアスペクト的クラスの分類 (松岡 2007: 24)

松岡 (2007) によると、

現代モンゴル語の動詞は、第一に、形式的にゼロの形と -ju bayi- がアスペクト的に対立するかどうかによって、動作動詞と状態動詞に分類しうる。対立する動詞を動作動詞、対立しない動詞を状態動詞と呼ぶ。第二に、動作動詞は -γ ad bayi- が結果性を表すかどうかによって、限界動詞と非限界動詞に分類しうる。-γ ad bayi- が結果性を表す動詞を限界動詞、結果性を表さない動詞を非限界動詞と呼ぶ。

¹ a=a, ɓ=b, v=v, ɣ=g, d=d, e=je/jö, ẽ=jo, ʒ=ž, z=z, ɪ=i, ʏ=j, k=k, l=l, m=m, n=n, o=o, ɵ=ö, p=p, pʰ=pʰ, c=s, t=t, y=u, ʏ=ü, ɸ=f, x=x, ɕ=c, ɕʰ=ç, ʃ=š, ʁ=ʁ, ʁʰ=ç, ʏ=j, ʏ=j, ʏ=j.

第三に、限界動詞は-ju bayi-が結果性を表すかどうかによって、TelicA²と TelicB に分類しうる。-ju bayi-が進行性のみを表す動詞を TelicA、結果性を表すことのできる動詞を TelicB と呼ぶ。

以上、アスペクト的意味と限界性の関係を整理すると表 1 のようになる。

表 1: アスペクト的意味と動作の限界性 (一回的動作／状態の場合)

網掛けの部分は反復性になる

	状態動詞	動作動詞	
	非限界動詞	限界動詞	
		TelicA	TelicB
-γad bayi-		結果性	
-ju bayi-	状態性	進行性	結果性
-γsayaŋ bayi-	状態性	進行性	結果性

(松岡 2007: 25)

ただし非限界動詞は動詞以外の文成分によって任意の終了限界を定めると限界動詞として用いられる。

2. 1. モンゴル語のアスペクト体系

松岡 (2004) によると、モンゴル語のアスペクトは、接尾辞、形動詞³、形動詞形+ bayi-、副動詞形⁴+ bayi-の形式で表現される。

本稿では、副動詞+ bayi-について扱う。副動詞+ bayi-について、3 つの相続相を以下で説明する。

2. 1. 1. -ju bayi-形

松岡 (2004) によると、-ju bayi-形は、事柄の局面とは全く関係なく、事柄の継続をあらわすと記述するのが妥当である。進行の意味は、-ju bayi- の継続の意味が動詞の語彙的な意味と結合して派生するものと考えられる。

2. 1. 2. -AAd bayi-形

松岡 (2004) によると、-AAd bayi-⁵形は中断のある継続をあらわすとしている。事柄の継続を前提として、さらにその継続が途中で一度以上中断 (完了も含む) していると考ええる。この中断を二度以上含むものが「反復」である。また、「反復」や「完了」の意味は、-ju bayi-形と同じく -AAd bayi-形の「中断のある継続」の意味が動詞の語彙的な意味と結合して派生すると考えられる。

² TelicA, TelicB について、松岡は Song の分類に倣うとしている。Song (1995,1997) は終了限界後の結果状態を含意しない限界動詞を TelicA 含意する限界動詞を TelicB と呼ぶとしている。

³ 日本語の連体形に相当する形である。(松岡 2004:114) による。

⁴ 日本語の連用形に相当する形である。(松岡 2004: 114) による。

⁵ -AAd bai-はホルチン方言の-γ ad bayi-に対応するハルハモンゴル語の転写である。

2. 1. 3. -sAAr bayi-形

松岡 (2004) によると、-sAAr bayi-⁶形は「切れ目のない継続」である。

- (1) Tere kü ajilaqu cay-un kūsüntü ben
彼 仕事をする-FUT 時-GEN 梓 REFL

siduryu jirumla-n ajilla-γsaγar bayi-la.
遵守する-SIM 働く-ASP-TEN

「彼は仕事をするときの格式を真面目に守って仕事していた。」

(松岡 2004: 117)

松岡 (2004) によると、(1) は「今見たら、仕事をしている」ではなく「ずっと (休まずに) 仕事をしている」と言う意味である。-sAAr bayi-形は継続の長さではなく、継続の間に中断が入らないことと考えるのが妥当である。

3. 先行研究

本章では、モンゴル語の継続相について言及している先行研究を扱う。3.1 節で松岡 (2004) を、3.2 節で松岡 (2009) を扱う。

3. 1. 存在を表す動詞とアスペクト形式の共起

松岡 (2004) ではモンゴル語のホルチン方言を扱っている。

松岡 (2004) によると、モンゴル語の特徴として、存在を表す動詞とアスペクト形式が共起する点を挙げている。

3. 2. モンゴル語の相続相に結合する動詞の制限

松岡 (2009) は、モンゴル語のアスペクトについて、朝鮮語・満洲語との対照研究の観点から、体系的に記述している。

松岡 (2009) によると、モンゴル語の継続相-ž bai-⁷と-AAAd bai-の対立は現代朝鮮語の相続相-ko iss-と-a/e iss-の対立と大変類似している。ただし、モンゴル語と朝鮮語の継続相は、結合する動詞についての制限において違いがある。モンゴル語の-ž bai-と-AAAd bai-は、結合する動詞に制限がないのに対して、朝鮮語の-ko iss-と-a/e iss-は、結合する動詞に制限がある。-ko iss-は他動詞と結合することができるのに対して、-a/e iss- は他動詞と結合することができない。

⁶ -sAAr bai-はホルチン方言の-γ sa γ ar bayi-に対応するハルハモンゴル語の転写である。

⁷ -ž bai-はホルチン方言の-ju bayi-に対応するハルハモンゴル語の転写である。

4. 問題提起

松岡 (2004) や松岡 (2009) では、モンゴル語の継続相には結合する動詞に自他動詞、主体の変化性による制限がないとされているが、例が少なくこれらの継続相と結合する動詞の特徴について十分に述べられていない。したがって、モンゴル語の継続相が結合する動詞について、-ž bayi-, -AAd bayi-, -sAAr bayi-の3種類の継続相それぞれに関して、結合しやすい動詞の特徴や存在をあらわす動詞が共起する頻度について明らかにする必要があると考える。

5. 調査

5.1 節で調査方法について述べ、5.2 節で調査結果を示す。

5.1. 調査方法

Mongolian national corpus⁸を使用する。工程①: Mongolian national corpus 内で状態動詞、非限界動詞、限界動詞 TelicA, B の動詞数例をそれぞれ -ž, -AAd, -sAAr に結合する形にし、検索する。工程②: 検索結果から、-ž bayi-, -AAd bayi-, -sAAr bayi-の形になっているものを手作業で抽出、整理する。なお、検索する動詞は松岡 (2001: 25) の例を参照した。

5.2. 調査結果

表 2: 相続相に結合する動詞

	動詞	件数 -ž /-ž baj-	割合	件数 -AAd/ AAd baj-	割合	件数 - sAAr/ sAAr baj-	割合
状態動詞	medex (知る)	178/356	50.0%	3/123	2.4%	12/21	57.1%
	bajx (ある)	89/1512	5.9%	17/670	2.5%	6/48	12.5%
非限界動詞	ažillax (働く)	83/129	64.3%	1/6	16.7%	0/3	0%
	unšix (読む)	26/100	26.0%	3/77	3.9%	1/2	50.0%
	uux (飲む)	35/170	20.6%	0/30	0%	1/4	25.0%
	ineex (笑う)	19/142	13.4%	0/166	0%	3/15	20.0%
限界動詞 (TelicA)	üxex (死ぬ)	11/73	15.1%	2/11	18.2%	0/1	0%
	irex (来る)	135/1013	13.3%	49/892	5.5%	4/18	22.2%
	alax (殺す)	4/68	5.9%	2/34	5.9%	0/0 ⁹	0%
	xürex (着く)	71/626	11.4%	7/210	3.3%	0/6	0%
限界動詞 (TelicB)	suux (座る)	318/726	43.8%	23/273	8.4%	11/39	28.2%
	neegdex (開く)	3/39	7.7%	0/3	0%	1/1	100%
	ömsöx (着る)	8/128	6.3%	0/43	0%	0/0 ¹⁰	0%

⁸ Mongolian national corpus は、Mongolian national corpus Corpus Technologies が 2007 年から 2009 年にかけて開発したウェブコーパスであり、総語数は 1,160,000 語である。

⁹ モンゴル語母語話者の方に聞いたところ、алсаар бай- (alsaar baj-) で「連続殺人犯が次々と殺し続けている」という「多回性」の意味で使用可能であるという。

¹⁰ モンゴル語母語話者の方に聞いたところ、同じく「多回性」の意味で使用可能であるという。өмссөөр бай- (ömssöör baj-) で「(イベントや気候により) 同じ服装を着続けている。」

5.2.1. -ž baj-に結合する動詞

-ž baj-に結合しやすい動詞の特徴として、終了限界が明確ではない動詞が挙げられる。

さらに、非限界動詞の中でも ažiḷḷax (働く) の結合率が特に高い理由として、松岡 (2009: 33) にあるように、-ž baj-は動詞によって表される動作を継続的に捉える形式であることが関係していると考えられる。よって、ažiḷḷax (働く) の場合は、-ž baj-をつけることで終了点を意識する必要がなく、働き続ける状態を明確に描写できる。これは労働が「継続的な日常行為」として捉えられていることも背景にあると考える。

- (2) Би оронд нь ажилла-ж байг-аа.
 bi orond=n' ažiḷḷa-ž bajg-aa.
 1SG 代わりに=3.POSS 働く-CVB.SIM ある-PTCP.PROG
 「私が代わりに働いている。」

(Mongolian national corpus)

5.2.2. -AAd baj-に結合する動詞

-AAd baj-には終了限界がある動詞が結合しやすいと考える。以下の図からもわかるように、限界動詞 TelicA, TelicB は共に終了限界をもつ動詞である。

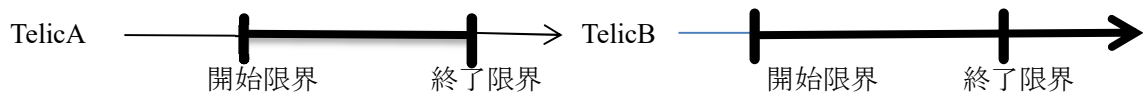


図 2: TelicA, B の示す範囲 (太線の部分) (松岡 2007: 17)

限界動詞 TelicA, B は明確な終了限界を持つため、以下の図から分かるように、-AAd baj-の表す終了限界後の「結果性」というアスペクト的意味との相性が良いと考える。

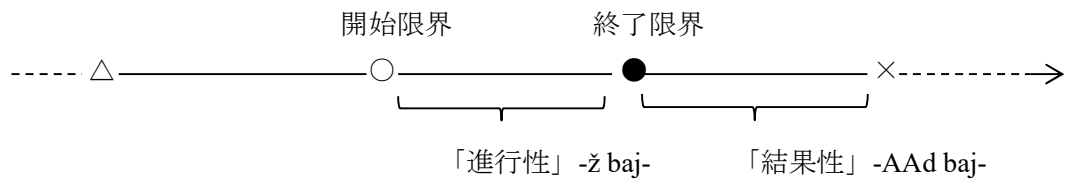


図 3: TelicA と結合した-ž baj-と-AAd baj-のアスペクト的意味 (松岡 2009: 35)

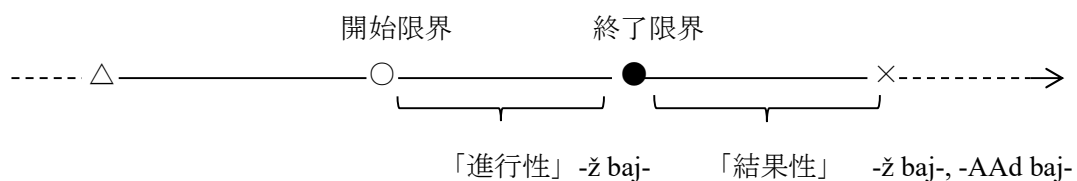


図 4: TelicB と結合した-ž baj-と-AAd baj-のアスペクト的意味 (松岡 2009: 36)

以下に限界動詞 TelicA と結合し、結果性を表す-AAAd baj-の例文を挙げる。

- (3) Одоо онгоц-оор аймг-ийн төв дээр ир-ээд бай-на.
 Odoo ongoc-oor ajmg-ijn töv deer ir-eed baj-na.
 今 飛行機-INS アイマグ-GEN 中心 上 来る-CVB.PERF ある-NPST
 「今、飛行機でアイマグの中心地に着いたところ。」

(Mongolian national corpus)

5.2.3. -sAAr baj-に結合する動詞

-sAAr baj-は長期間に亘って動作が行われていることを表すため、-sAAr baj-は比較的短い時間で完結する動作を表せないと言う (松岡 2009: 46)。そのため、-sAAr baj-に結合しやすい動詞も状態の継続を表す動詞が多いと考える。

5.2.3.1. 状態動詞+-sAAr baj-

baina (ある、いる): 存在の継続、medex (知る): 認知や認識が持続する状態

これらの動詞は、一定の期間の継続を表す。以下に状態動詞 medex (知る) の例文を挙げる。

- (4) Чи хүлээ-х нь зөв гэ-ж энэ зов-сон эмэгтэй-г
 ĉi хүlee-x=n' zöv ge-ž ene zov-son emegtej-g
 2SG 待つ-PTCP.FUT=3.POSS 正しい 言う-CVB.SIM この 苦しむ-PTCP.PST 女性-ACC
 мэд-сээр байг-аад хуура-х сэтгэл бай-сан-гүй.
 med-seer bajg-aad хuura-x setgel baj-san-gүй.
 知る-DUR ある-SVB.PERF 欺く-PTCP.FUT 心 ある-PTCP.PST-NEG
 「君にとって待つのは正しいと、この女性の苦しみを知っていながら言い騙すことはできなかった。」

(Mongolian national corpus)

5.2.3.2. 限界動詞における例外的使用

限界動詞は終了限界を伴うため、状態の継続性と矛盾するが、TelicB は終了限界後の状態も表すため、動作の結果が継続する場合などは-sAAr baj-に結合し、使用されると考える。

- (5) Үдэш боло-хо-д зам-ын тоос бол-сон хувцс-аа=ч
 Ydeš bolo-xo-d zam-yn toos bol-son хувcs-aa=č
 夕方 なる-PTCP.FUT-DAT 道-GEN ほこり なる-PTCP.PST 衣服-REDL=EMP
 соль-сон-гүй юм бод-он суу-саар бай-в.
 sol'-son-gүй jUm bod-on suu-saar baj-v.
 取り替える-PTCP.PST-NEG 何 考える-CVB.SIM 座る-DUR ある-PST
 「日が暮れても、遠出で汚れた服も着替えず考え事をして座り続けていた。」

6. 考察

以上の調査を踏まえ、それぞれの継続相に結合しやすい動詞の傾向について、以下のよう
にまとめることができる。

表 3: 継続相に結合しやすい動詞の傾向

継続相	結合しやすい動詞	例	結合傾向の特徴	理由
-ž baj-	状態動詞 非限界動詞	medex (知る), ažillax (働く)	終了限界を 持たない動詞、 または任意の 終了限界を持つ 動詞	・動作の終了限界が曖昧、または存在しないため、「進行中の動作や状態」を表現する。 ・状態動詞は、存在や状態の持続を示すため適しており、非限界動詞は動作の連続性があるため適している。
-AAd baj-	限界動詞 TelicA, TelicB	irex (来る), suux (座る)	終了限界を持つ動詞	・動作に終了限界が存在し、その終了限界を挟んで中断がありながらも継続的な状態を示す。 ・限界動詞の結果としての継続的な状態が適合。
-sAAr baj-	状態動詞 (限界動詞 TelicB)	medex (知る), suux (座る)	状態の継続を表す動詞	・「切れ目のない継続」を表すため。継続性のある状態動詞が適合。 ・限界動詞 TelicB も、動作の結果が静的状態として継続する場合に適合する。

今回の調査では、動詞の意味的特性の把握とそれぞれの継続相が示す時間範囲の把握が重要であった。

動詞の意味的特性の把握に関しては、状態動詞、非限界動詞、限界動詞 TelicA, TelicB の特性が、それぞれの継続相とどのように結びつくかを明確化することが重要であった。

それぞれの継続相が持つ時間的ニュアンスについて、-ž baj- は「動作・状態が進行中」であることを、-AAd baj- は「動作が一旦中断されるも継続している」ことを、-sAAr baj- は「中断のない継続状態」を表す。この時間的ニュアンスを動詞の特性と結びつけて考察する必要があった。

7. 今後の課題

Mongolian national corpus では話し言葉が収録されていないため、書き言葉を主とした調査に留まってしまった。状態動詞の中でも *baix* は話し言葉でよく使用されるとモンゴル語母語話者の方から意見をいただいた。今後は、コーパスのみでなく話し言葉も調査範囲に含み考察をする必要がある。

略号一覧

-: 接辞境界/=: 接語境界/ 1:1 人称/ 2:2 人称/ 3:3 人称/ ABL: 奪格/ ACC: 対格/ ASP: アスペクト/ CVB: 副動詞/ DAT: 与格/ DUR: 継続/ EMP: 強調/ FUT: 未来/ GEN: 属格/ INS: 道具格/ NEG: 否定/ NPST: 非過去/ PASS: 受動/ PERF: 完了/ POSS: 所有/ PROG: 進行/ PTCP: 刑動詞/ PST: 過去/ REFL: 再起/ SG: 単数/ SIG: 同時/ TEN: テンス

参考文献

- 阿拉塔 (2011) 「モンゴル語のアスペクト形式に関する基礎研究 ―日本語との対照の観点から―」『ニダバ』40: 29-36.
- 松岡雄太 (2004) 「現代モンゴル語ホルチン方言のアスペクト「副動詞形+*bayi*」形を中心として」『福岡発・アジア太平洋研究報告書』13: 113-119.
- 松岡雄太 (2007) 「現代モンゴル語のアスペクトと動詞の限界性」『九州大学言語学論集』28: 39-68.
- 松岡雄太 (2009) 「モンゴル語のアスペクトに関する研究: 満洲語・朝鮮語との対照研究」『韓国研究センター年報』9: 65-68.
- Song, Jae-mog (1995) Progressive in Korean and Khalkha Mongolian, Working Papers in Linguistics & Phonetics 5: 251-270, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Song, Jae-mong (1997) Tense, Aspect and Modality in Khalkha Mongolian, Dissertation, University of London.

参考資料

- 小沢重男 (編著) (1994) 『現代モンゴル語辞典』東京: 大学書林.

調査資料

Mongolian national corpus

<http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/> [最終閲覧日 2024 年 12 月 6 日]

インドネシア語の di- 形による禁止表現

高田 美登里

(言語文化学部 インドネシア語専攻)

キーワード：インドネシア語，接頭辞，受身形，禁止，動詞

1. はじめに

本稿の目的はインドネシア語における di- 形による禁止表現について明らかにすることである。本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で本稿の前提となる知識を概観したのち、3 節で先行研究を見る。4 節で問題提起をし、5 節で調査について扱う。調査結果を踏まえ、6 節で分析と考察を行う。最後に 7 節で全体のまとめを述べる。なお、本稿中の例文・図表番号、グロス、文字飾り、先行研究の日本語訳については、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 背景知識

2.1. インドネシア語の di- 形

以下に、原 (2020: 139) で述べられている内容をまとめる。

インドネシア語における接頭辞 meN-¹ は、他動詞を形成する機能をもち、「動作主 + meN- 他動詞 + 動作対象」という構造の文で使われ、これを能動文という。それに対し、動作対象が主語になる文を受動文という。受動文で用いられる他動詞の形態について、接辞が付加する前の「他動詞語幹」が元となり、動作主が一・二人称である場合は「ゼロ形²」が、三人称である場合は「di 形」が用いられる。

(1) Buku itu di-baca Dewi.

book that DI-read Dewi

「その本は、デウィが読んだ。」

(原 2020: 141)

2.2. 接頭辞 di- による受動文を用いる命令文

原 (2020: 172) では、「聞き手に特定の対象への何らかの行為をやってほしいとき、「それが～される」という他動詞 di- 形を用いる受動文を使うことがある。動作主が聞き手ではなく第三者であるということを示すため、命令の意図が間接的に表される。その結果、命令のニュアンスが薄れ、丁寧な印象を与えることがある」と述べられている。

¹ N は鼻音交換を表す。接頭辞 meN- は、後接する語幹の語頭音により、mem-, men-, meng-, meny- の形をとる (原 2020: 125)。

² 以降、“ø-” 形と示す。

(2) Barang itu di-taruh di sini saja!

baguage that DI-put in here EMPH

「その荷物はここに置いて！」

(原 2020: 172)

2.3. インドネシア語の禁止文

jangan を動詞句などの前に置くことによって、話し手が聞き手に何かの行為を禁じることを表す (原 2020: 171)。

jangan を用いる禁止の命令文は、受動の接頭辞 di- が付加した動詞 dilarang (禁じられる)、あるいは tidak boleh (してはいけない) によっても、ほぼ同じ内容で表すことができる (原 2020: 171)。

3. 先行研究

3.1. 接頭辞 di- 及びインドネシア語における受動表現に関する先行研究

Tiwuk (2015) は、インドネシア語の di- 動詞と ø- 動詞の構文は、目的語 (動作対象) が話題の出発点になる際に使用される構文だと考えられ、この構文は日本語のヲ格項の主題化文と対応するとしている。

「日本語のヲ格項の主題化はインドネシア語の di- + 動詞と ø+ 動詞構文と対応関係がある」とし、「インドネシア語では、助詞ハのような対比の機能を持つ文法的手段が存在しないので、日本語の名詞句が不定名詞の場合、インドネシア語にそのまま訳すと不自然な文になり、それを特定するための手段を講じなければならないことが分かる」(Tiwuk 2015: 106) と述べている。

3.2. インドネシア語における禁止表現に関する先行研究

ムティ (2023) の調査によると、インドネシア語の無待遇表現の中で、“dilarang” を使用しているものが最も多く、その次に多い「基本命令文」は“dilarang” を使用するものの半数以下だった。すなわち、“dilarang” の使用数は圧倒的に多く、「禁止サインに待遇表現が使用されていない場合でも、使用されている無待遇表現の中にほとんどむき出しの表現は使用されていない」(ムティ 2023) という。「di-」の接頭辞を用いる「dilarang」、「diwajibkan tidak」、「tidak diizinkan」は、受け身動詞の形を用いることによって、B & L³ のフェイス侵害行為を一般則として述べるポライトネス・ストラテジーが使用されていることになる」(ムティ 2023: 113) ため、むき出しの表現 (直接的な表現) を避けていると言える。「wajib」については、語用論的な解釈が必要であるため、読み手の行動を直接的に制限していない (ムティ 2023: 113)。

³ Brown, P. and S. C. Levinson (1987)

4. 問題提起

先行研究を踏まえ、以下のような問題点が挙げられる。

Tiwuk (2015) によると、インドネシア語の di- 動詞と ø- 動詞の構文は、「目的語 (動作対象) が話題の出発点になる際使用される構文」であるという。したがって、「di- は動作対象が主題化されるときに現れる」という性質が要求文の否定 (禁止) でも適用され、禁止表現においても、動作対象が主題化されるときに表れるはずであると考ええる。

なお、Tiwuk (2015) は、「相手に何かを要求するとき、di+ 動詞と ø+ 動詞の形式が良く使われる」と述べており、ø+ 動詞を使わず、di+ 動詞を使用する場合、「相手を指定しないより丁寧な文と考えられる」 (Tiwuk 2015: 104) としている。このことは禁止表現においても当てはまるのか、すなわち、ø- 形による禁止表現がある場合、di- 形による禁止表現と比較すると、di- 形による禁止表現と ø- 形を用いる禁止表現では、di- 形による禁止表現の方がより丁寧な文であると言えるのか、検証の余地がある。

5. 調査

5.1 節では調査 1、5.2 節では調査 2 について、それぞれ調査方法を示した後、調査結果とその分析を示す。

5.1. 調査 1

インドネシア語における禁止文と、禁止文のうち、禁止される行為の動詞が di- 形で現れる禁止文を収集するため、コーパスを用いて文例を集め、分析する。禁止文のうち、禁止される行為の動詞が di- 形で現れる文の割合について調査する。

使用するコーパスは MALIND Conc である。このコーパスは、Leipzig Corpora Collection (以下、LCC) の再編成版のインドネシア語およびマレー語コーパス、Indonesian Frog Storytelling Corpus、Corpus of Malay Varieties の 3 種のコーパスを検索できる。LCC の各ファイルは全て 30 万文のテキストで構成されており、LCC のうち、現バージョンで検索できるのは、6 ファイル (ind_mixed_2012、ind_web_2012、ind_wikipedia_2016、zsm_mixed_2012、zsm_web_2012、zsm_wikipedia_2016) のみである。

検索の指定は検索パネルで行う。検索パネルは、キーワードを指定するパネルと、共起語を指定するパネル、検索対象とするコーパス・サブコーパスを指定するパネルの合計 3 つからなる。

5.1.1. 調査方法

キーワードパネルで表 1 における検索語のうち、1 語かつ接辞が付いていないものは“Surface Form”欄に語をそのまま入力した。検索語が 1 語で接辞が付いているものは、接辞を指定し、語幹を入力した。検索語が 2 語のものについては、キーワードパネル及び共起語パネルでは、接辞が付かないものは“Surface Form”欄にそのまま語を入力し、接辞が付くものは、接辞を指定し、語幹を入力した。その他のものに関しては、特に制限を設けていない。コーパスパネルでは、マレー語の文例を除くため、かつ文例数を限定するため、

全て ind_mixed_2012 を指定した。検索語は表 1 の通りである。検索語の選定については、ムティ (2023) で扱われている形式を参考にした。

5.1.2. 調査結果

MALIND Conc を用いて検索した検索語と、検索語の用例件数を多い順に表 1 にまとめた。なお、表 1 に記した件数は、求める条件にそぐわないもの⁴を手作業で取り除いた後の件数である。

表 1: コーパスで文例収集した禁止表現

検索語	件数	di- 形 ⁵ の件数	di- 形の 割合 ⁶	特記事項
jangan	1,826	148	8.11	
tidak boleh	623	174	27.93	
tidaklah	533	57	10.69	
dilarang	353	3	0.85	dilarang そのものの形は 342 件、残り 11 件は dilarangnya の形で出てきた。
janganlah	336	7	2.08	
tidak diperbolehkan	52	0	0.00	全て tidak diperbolehkan の形で出てきた。
tidak diizinkan	16	0	0.00	全て tidak diizinkan ⁷ の形で出てきた。
mohon tidak	9	1	11.11	
mohon jangan	5	1	20.00	
tidaklah boleh	2	1	50.00	
mohon dilarang	0	0		
diwajibkan	0	0		
計	3,402	391	11.49	

表 1 より、禁止文で禁止される行為に接頭辞 di- が付く語が現れる例は、割合としてはそれほど多くないものの、一定数存在することが分かった。

否定辞 + di- という組み合わせが既に出来上がっている場合 (tidak diperbolehkan と tidak diizinkan) 、その後ろにさらに接頭辞 di- の付く語が続くことはほとんどないということが分かる。この他に既に接頭辞 di- が用いられている禁止文に、“dilarang” を用いたものがあるが、“dilarang” に接頭辞 di- の付く語が後続する例は、3 件だった。“dilarang” が用いられている文例は 353 件だったので、“dilarang + di-” は、文として成立しうるものの、割合としては 0.85%と、極めて少ないことが伺える⁸。

⁴ 例えば、mohon jangan で検索すると、“mohon diingat, jangan ~” のように mohon と jangan の間に切れ目が入ってしまう文例もヒットする。“jangan” のみよりも丁寧な表現だとされている“mohon jangan” が現れる文例を調査するため、この形式で現れないものについては発表者が手作業で取り除いた。

⁵ 検索語によりヒットした文例のうち、禁止される語が di- 形で出てくるもの。

⁶ 少数第三位で四捨五入した。以降、小数点以下まで表記のあるものは同様である。

⁷ tidak diijinkan も含む。

⁸ 表 1 中の太字部分に注目されたい。

次に、禁止文における否定辞と di- 形動詞の間に入る語から、禁止文における禁止される行為の動詞が di- 形で現れる特徴を探る。禁止される行為の動詞が di- 形で現れる文例を全て抽出した後、間に入る語を品詞によって分類した。その結果が表 2 である。

表 2: 否定辞と di- 形動詞の間に入る語⁹

否定辞	なし	名詞	助動詞	内訳	副詞	内訳	その他	内訳
jangan	105	7	6	mau (3), ingin (3)	22	hanya (7), langsung (4), sekali-kali (3), selalu (2), terlampau (2), lagi (1), segera (1)	12	sampai (10), deh (1), untuk (1)
tidakboleh	174	0	0		0		0	
tidaklah	28	8	18	dapat (12), bisa (3), akan (2), boleh (1), pernah (1)	3	mungkin (2), sering (1)	1	pula (1)
dilarang	3	0	0		0		0	
janganlah	1	4	1	mau (1)	0		1	pula (1)
mohon tidak	0	0	0		0		1	agar (1)
mohon jangan	1	0	0		0		0	
tidaklah boleh	0	0	0		0		1	secara sewenang-wenang (1)

どの語についても、否定辞のすぐ後ろに di- 形動詞が続いているものが最も多いが、否定辞と di- 形動詞の間に語が入る場合、名詞、助動詞、副詞のどれかである場合が多い。まず、名詞については、現れた名詞のすべてが「動作対象となる名詞」である。したがって、名詞が否定辞と di- 形動詞の間に現れるのは、接頭辞 di- の特徴が大きく関わっていると言える。次に、助動詞に関しては、文中に助動詞が現れる場合、インドネシア語の一般的な語順が「否定辞 + 助動詞 + 動詞」であるため、禁止文においても、この語順が守られている。副詞についても、インドネシア語の一般的な語順が関係していると考えられる。今回文例収集できたものは、その多くが、程度の副詞、時を表す副詞、限定の副詞のいずれかであり、直後の動詞を修飾するため、di- 形動詞の前に現れている。

⁹ 品詞の選定については、Kamus Besar Bahasa Indonesia (2023) に依っている。

“jangan” と di- 形動詞の間に現れる語のうち、“sampai” は「その他」に分類されるが、10 件見られた。“sampai” は動詞であるが、“jangan sampai” で「くれぐれも～しないように」という意味になるため、慣用句として定着している可能性があると考えられる。

“sampai” 以外のその他の欄にある語は、“pula” 「また、同様に」、 “untuk” / “agar” 「…するために / するように」、 “secara sewenang-wenang” 「任意に、ランダムに」、 “deh” 「勧誘、保証、納得などを表す小詞」である。“deh” 以外の語は、前置詞でありながらも、今回収集した文例中では、副詞的な働きをしている。

5.2. 調査 2

インドネシア語母語話者を対象に、Google フォームを用いたアンケート調査を行う。調査 1 では、“dilarang” を用いた禁止文が多く存在することや “jangan” に接頭辞 di- が後続する禁止文が一定数存在することが分かった。一方、その使用場面や禁止の強度、di- 形が現れるときと現れないときの丁寧度の差については検討することができなかった。そこで、調査 2 を実施することで、その様態を明らかにする。

5.2.1. 調査方法

インドネシア語母語話者を対象に、Google フォームを用いたアンケート調査を実施した。アンケートの回答者はインドネシア語を母語とする計 34 名である。

調査対象とする禁止表現を口頭で「使う」「自分は使わないが、他人が使うのを見たこと・聞いたことがある」「自分も使わないし、他人が使うのを見たこと・聞いたこともない」の中から 1 つ選択してもらった。

【調査対象とする禁止表現】

dilarang / dilarang di- / jangan / jangan di- / tidak / tidak di- / tidak boleh / tidak boleh di-

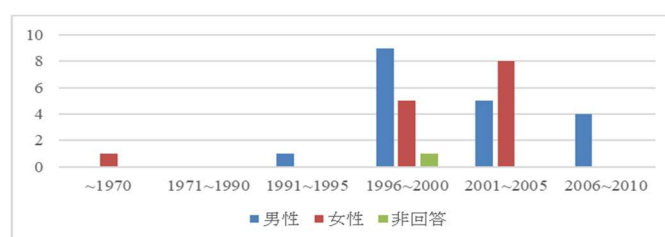


図 1: 回答者の生年と性別

5.2.2. 調査結果

禁止される行為が di- 形で現れる禁止表現の口頭での使用について、di- 形で現れない場合と比較することでその様態を明らかにする。

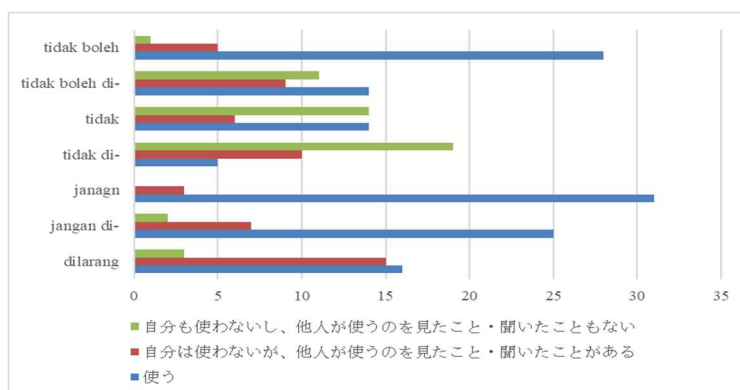


図 2: 禁止される行為が di- 形で現れる禁止表現の口頭での使用

どの対¹⁰についても、禁止される行為が di- 形で現れる場合の方が、口頭での使用度が落ちるという結果になった。特に、“jangan” と “jangan di-” の対以外は、di- 形で現れる場合の方がそうでない場合の半数以下まで使用度が下がっている。口頭の場合、話しかける他者（注意をする相手）が存在すると考えられ、この場合における他者は二人称であると考えられる。したがって、「行為者は三人称である」という di- 形の特徴が口頭での使用度に関わっていると考えられる。一方、“jangan di-” については、“jangan dimakan” などの表現が、ある種決まり文句として定着していることから、口頭での使用にも影響していると考えられる。

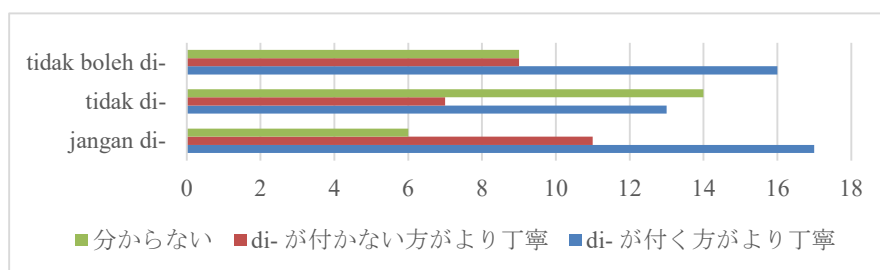


図 3: 禁止される行為が di- 形で現れるとより丁寧だと感じるか

図 3 は、禁止される行為が di- 形で現れる場合、そうでない場合と比べて、より丁寧だと感じるかという質問に対しての結果を示している。

どの語及び句についても、接頭辞 di- が付く方が、付かないときに比べてより丁寧であると回答する人が多かった。理由としては、「接頭辞 di- が付かない場合、直接的な表現であるため」、「“di-” は受動的な表現だから」、「接頭辞 di- のない方はインフォーマルだから」、などが挙げられた。

¹⁰ “jangan” と “jangan di-”、“tidak” と “tidak di-”、“tidak boleh” と “tidak boleh di-” をそれぞれ対とする。以降、同様である。

6. 分析と考察

コーパスを用いて、禁止文のうち、禁止される行為の動詞が *di-* 形で現れる文の割合について調査したところ、割合は決して多くないが、一定数存在するということが分かった。そのうち、禁止文におけるインドネシア語の否定辞の種類に関わらず、否定辞のすぐ後ろに *di-* 形の動詞が続いているものが最も多かった。一方、否定辞と *di-* 形の動詞の間に語が現れる例も一定数見られる場合もあるが、間に入りうる語は、名詞、副詞、助動詞に限定されている。なお、名詞の場合は、*di-* 形の特徴、助動詞及び副詞はインドネシア語の一般的な語順がその要因であると考えられる。

インフォーマント調査からは、禁止される行為が *di-* 形で現れる場合とそうでない場合と比較した際の、口頭での使用度、丁寧度の差について、明らかにできた。禁止される行為が *di-* 形で現れる方が口頭での使用度が下がるという結果が得られたが、これは「当該行為の動詞が *di-* 形の場合、行為者は三人称である」という *di-* 形の特徴が影響しているのではないかと考えられる。丁寧度の差については、禁止される行為が *di-* 形である方がより丁寧な表現であると感じる人が多いという結果が得られた。「*di-* 形を用いた表現＝遠回しな表現」であり遠回しな表現となることで、より丁寧さが増すと考えられる。

7. おわりに

本稿では、インドネシア語の禁止文において、禁止される行為が *di-* 形で現れる場合について、否定辞と *di-* 形動詞の間に入る語やインフォーマント調査の結果から考察した。

今後の課題としては、実生活における *di-* 形が現れる禁止文の検討である。コーパス調査で得られた文例は、文例のソースまで辿ることのできないものが多く、さらに実生活で使われているものであると断定できないものがほとんどであった。そのため、公共の場などで実際に使用されている、禁止される行為が *di-* 形で現れている禁止文とそうでない文を比較・検討する必要がある。

【略号一覧】 -: 接辞境界 / DI: 接頭辞 *di-* / EMPH: 強調

【参考文献】 Tiwuk Ikhtiari (2015) 「日本語のヲ格項の主題化文とインドネシア語の *di*+ 動詞及び *o*+ 動詞の構文との対応関係」『ニダバ』 44: 99-108. / 原真由子 (2020) 『世界の言語シリーズ 14 インドネシア語』大阪: 大阪大学出版会. / ムティ・アフィファー (2023) 「動物園における禁止サインー日本語とインドネシア語の「禁止表現」の比較ー」『金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習論文集』18: 106-116. / 湯浅章子 (2004) 「‘Volitionality’ と ‘Responsibility’: インドネシア語における 3 種の受動表現 ‘*di-*’, ‘*ter-*’, ‘*ke-an*’」『甲南女子大学研究紀要』40: 85-91. / Brown, P. and S. C. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universal in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳: 田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス言語使用におけるある普遍現象』研究社. / Hopper, P. J. & S. A. Thompson. (1980) “Transitivity in Grammar and Discover”, *Language* 56, Warely Press, U. S. A. / Safriyah, A. (2015) “Tidak Tuter Imbauan dan Larangan Pada Wacana Persuasi di Tempat – Tempat Kos Daerah kampus” Universitas Muhammadiyah Surakarta. Skripsi. / Sasanti, Y. N. (2013) “Tidak tutur “Melarang” dalam Bahasa Indonesia” *Jurnal Penelitian* 16: 2: 196-206.

【調査資料 (先行研究で使用されているものを含む)】 Kamus Besar Bahasa Indonesia (2023) <https://kbbi.kemdikbud.go.id/>. / 村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森 (上) (下)』講談社. / Murakami, Haruki (2005) *Norwegian Wood*. Kepustakaan Populer Gramedia. / MALINDO Conc. <https://malindoconc.lagoinst.info/concordance/en/> (最終閲覧日 2024 年 12 月 9 日).

徳島方言の禁止表現について

多田 麻由佳

(言語文化学部 朝鮮語専攻)

キーワード：四国方言，徳島方言，禁止表現，せられん，モダリティ

1. はじめに

本稿の目的は、徳島県を含む四国方言に特徴的な「セラレン (以下、レン・ラレン形)」を中心に、徳島方言における禁止表現の使用実態を明らかにすることである。本文中の図表番号については特に断りのない限り筆者によるものである。筆者は2000年代生まれの徳島方言母語話者であり、適宜内省を入れることとする。

2. 背景知識 (四国方言の禁止表現の種類と分布)

岸江 (2008) は、香川県高松市から徳島県徳島市を經由して高知県土佐清水市までの沿岸の市町村34か所を時計回りにグロットグラム調査¹を行い、「(子供たちにもうけんかを) するな・してはいけない」という場合にどう言うかを尋ねた。その結果、シタライカン、シタラアカン、シタライケン、セラレン、スナ、スンナ等の形式が見られた。

シタライカンは全地点で、シタラアカンは主に徳島県で見られ、岸江 (2008: 33-34) は従来使用されてきたシタライカンが近畿中央部方言の影響でシタラアカンに置き換わりつつあると述べた。香川県の数か所を除きほぼ全地点に分布するセラレンは、動詞「する」の未然形に助動詞「れる・られる」の打消形レン・ラレンのうちラレンが下接したもので、五段活用動詞にはレン、一段活用動詞にはラレンが下接する。岸江 (2008) は愛媛県を調査地点に含めていないが、土居 (1975: 24) によると愛媛県でも用いられる表現である。スナは徳島県南部地方にまとまって分布するが、岸江 (2008) や遠藤 (1984) はスルナからの変化ではなく「する」の古形式である終止形「す」に禁止の「な」が付いたものと述べ、同様にカ行変格活用「来る」もクナという形式が見られる。他に、読ミナのような終止形＋「な」に加え、読ミナ・起キナのような連用形＋「な」の形が用いられるが、後者は高知方言で多く聞かれ、徳島、愛媛、香川の各方言では少ないようである (岸江 2008: 37)。

3. 先行研究

3.1. レン・ラレン形について

レン・ラレン形について言及している文献は『カクナ (書くな)、ミルナ (見るな)』などよりもやさしい禁止表現 (上野 1997: 20)、「多少やわらかみのある表現であり、女子が

¹ 亀井・河野・千野 (編著) (1996: 317) によると「グロットグラム」とは、年齢層をほぼ一定にして広がりを持った地域を対象にすることで地域差をみる方法と、ある地点の老年層から若年層までの変化を調べ年齢差を見る方法を組み合わせたもの、すなわち「地理 (地域)×年齢図」であるという。

男子よりも多く用いる」(加藤 1970: 300) などの短い説明のみの場合や、その成立過程について議論されている場合が多く、機能についての詳細な記述は少ない。

上野 (1996) は徳島市とその周辺に生育した 20 代以下から 60 代以上の 135 人を対象に、レン・ラレンを含む複数の禁止表現について「よく使う」「たまに使う」「自分では使わないが、聞いたことがある」「まったく聞かない」の 4 段階で判定する調査を行った。その調査でも、レン・ラレン形は男性の使用率が 50～80%ほどで高いものの、女性が全世代 90% 以上で、女性の使用率がより高いという結果になった。

3.2. 徳島県下郡方言のレン・ラレンの使用条件

小林 (2023) は、徳島県下郡方言²におけるレン・ラレンの使用条件を明らかにするため、下郡方言母語話者の 20 代 30 人と 30 代 1 人を対象に 3 つの調査を行った。

聞き取り調査は提示された状況設定での発話内容を回答する形式で、①誰にとっての②どのような不利益か、③行為のタイミングに着目している。アンケート 1 は①行為を行おうとしているか、②発話者は行為の実現に関心がないか、③行為で発話者以外に不利益が生じるか、の 3 条件に着目し、共通語の例文に対して *raren* 形・*runa* 形・*tara akan* 形のうち容認できるものをすべて選んでもらう。アンケート 2 は①誰に②どんな被害があるかに着目し、*raren* 形を用いた例文の容認度を 7 段階で評価してもらう。調査の結果、*raren* 形の使用条件は「禁止する行為を実行しようとしている、もしくは実行している」ことと「話し手は行為の実現で生じる、自身より非話し手にとっての不利益を案じている」ことの 2 つであるとした。

runa 形についてはこの調査ではほとんど容認されなかったが、*raren* 形や文末助詞との組み合わせにより直接的な印象をやわらげることで容認される場合があるとした。一方、*tara akan* 形は広範囲で容認され、*raren* 形が禁止対象の行為を行うタイミングによって容認度が変わるのに対し、容認度の変化がなかった。また、聞き手に生じる直接的な不利益が明確であると容認されやすいという。

4. 問題提起

レン・ラレン形についての先行研究は実際の用法や他の禁止表現との違いを詳細に述べたものが少ない。小林 (2023) は、より幅広く細かな状況設定の調査によりレン・ラレン形の使用条件を示したが、会話の相手の年齢や関係性が考慮されていない点、回答者のほとんどが 20 代である点、レン・ラレン形以外の表現に関しても記述しているものの使用条件の明確化には至っていない点は課題といえる。よって、他の年齢層の話者を調査対象に含めると同時に、話し相手の情報も設定することで、話者の年齢や相手との関係性などによるレン・ラレン形の使用傾向を明らかにする必要がある。続いて、例文を用いた調査によってレン・ラレン形と他の禁止表現との使い分けに関しても考察を行う。

² 上野 (1997) は徳島方言を、上郡・下郡・うわて・海部・山分の 5 区画に分類している。このうち下郡は徳島市や鳴門市を含む県東北部にあたる。

5. 調査

5.1. 調査 I の調査方法

Google Forms で 60 人にアンケート調査を行った。問 1 は、レン・ラレン形について「言う」「たまに言う」「自分は言わないが他の人が言うのを聞く」「聞くこともない」「その他」から選ぶ形式とした。問 2-1 を「【家族や親しい友人】のうち、以下のそれぞれの年齢層の人に対して『～せられん』を用いますか。」とし、〈小学生以下、中高生、大学生～20 代、30・40 代、50・60 代、70 代以上、使わない〉から選んでもらう（複数回答可）。同様に【前問ほど親しくない知人】【初対面の人】について問を設け、それぞれのうち「～せられん」を用いる相手の年齢層もしくは「使用しない」を選択してもらった。回答者の情報は以下の通りである。徳島県外での居住期間の方が長い 16 人について、表では斜字体で記す。

表 1: アンケート回答者の情報

出生年	性別	県内居住歴	出生年	性別	県内居住歴	出生年	性別	県内居住歴
1941	男性	鳴門市、海部郡	1972	男性	徳島市	1995	女性	徳島市
1950	男性	徳島市	1973	女性	徳島市	1995	女性	徳島市
1953	男性	三好郡 (現: 三好市)	1973	女性	徳島市	1996	女性	三好郡 東みよし町
1954	男性	徳島市	1973	男性	吉野川市	1997	男性	徳島市
1958	男性	徳島市	1974	男性	徳島市	2002	女性	松茂町
1959	女性	徳島県	1975	女性	石井町	2002	女性	徳島県 板野郡
1959	女性	居住歴なし	1976	男性	名西郡	2002	女性	徳島市
1961	女性	徳島市	1977	女性	三好郡	2002	女性	徳島市
1962	女性	徳島県	1978	男性	板野郡	2002	女性	徳島市
1962	男性	那賀郡 木頭村	1978	女性	美馬郡貞光町 (現つるぎ町)	2002	女性	徳島市
1963	男性	三好市、 徳島市	1981	男性	阿波市、 徳島市	2002	女性	徳島市
1964	女性	徳島市	1982	男性	徳島市	2002	女性	名西郡
1964	女性	徳島市	1984	男性	鳴門市	2002	女性	鳴門市、 徳島市
1964	女性	三好郡 東みよし町	1985	女性	徳島市、 那賀郡	2002	男性	徳島市
1965	女性	徳島市	1986	女性	徳島市	2002	男性	徳島市
1965	女性	徳島市	1986	男性	なし	2002	女性	徳島市
1966	女性	那珂郡 木頭村	1989	男性	徳島市	2002	女性	徳島市
1967	男性	徳島市	1990	男性	美馬郡 つるぎ町	2003	女性	吉野川市、 徳島市
1971	男性	板野郡	1994	男性	徳島市	2003	女性	徳島市
1971	男性	なし	1994	女性	美馬市	2004	男性	徳島市

5.2. 調査 I の結果

5.2.1. レン・ラレン形の使用率

5.2.1.1. 全体の使用率と性差

レン・ラレン形の使用率について、全体としては「言う」「たまに言う」を合わせた割合が 59%、さらに「自分は言わないが他の人が言うのを聞く」を合わせると 92%となり、現在も広く聞かれる表現と言える。「聞くこともない」と答えたのは 50 代と 60 代の女性 3 人男性 1 人のみで、この 4 人は徳島県内よりも県外での居住期間が長いことが要因の 1 つと考えられる。その他を選択したのは 40 代女性で、「最近は使わなくなった」と答えている。男女別でみると、人数差があるため一概には言えないが「言う/たまに言う」の割合は女性が 70%、男性は 42%となり、女性の使用率の方が高いという結果になった。

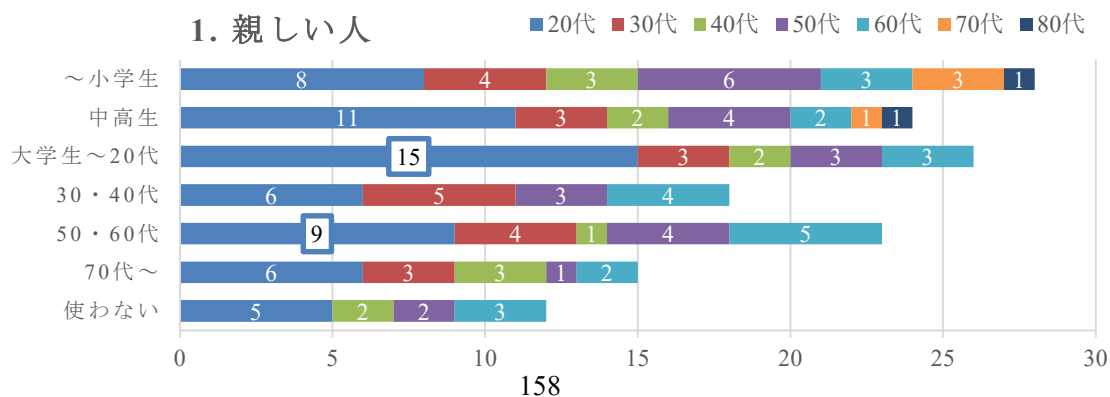
5.2.1.2. 世代差

回答者の年代別で見ると「言う/たまに言う」の割合は、回答者が 1 人のみの 80 代を除いて 20 代、30 代、50 代、60 代で 50%以上、さらに 20 代、50 代、60 代は 60%以上となっている。20 代とそれ以外の年代で人数差が大きくなってしまったものの、若い世代ほど使用率が低いという傾向は見られなかったため、話者の年齢のみでは使用率に大きな影響はないと考えられる。

5.2.2. 話し相手の世代・関係性によるレン・ラレン形の使用傾向

5.2.2.1. 世代差

図 1 は、問 2 の結果を回答者の年齢層によって色分けして示したグラフである。問 2-2 知人、問 2-3 初対面の人については小学生以下の子どもに対する使用が最も多く、相手の年齢が上がると減少していく傾向がある。一方、問 2-1 親しい人に対する回答では中高生より大学生～20 代が、30・40 代より 50・60 代が多い点が他の問と異なる。その原因は、20 代前半の回答者が特に多いためと考えられる。20 代の回答者にとっては大学生～20 代の相手は同世代、50・60 代は親の世代にあたる場合が多く、このように実際に親しい人が多い世代を選択したことで回答が集中した可能性がある。さらに 3 つの結果を比較すると「使わない」の回答数が問 2-1 から 2-2、2-3 へと大きく増え、反対に、各世代を選択した回答者の数は順に減少している。よって、レン・ラレン形は親しい相手に比べると初対面の人やそれほど親しくない知人に使うことが少なく、関係性が遠いほど容認度が下がると同時に、親しい人以外では相手の年齢が低いほど使用しやすい傾向があると分かった。



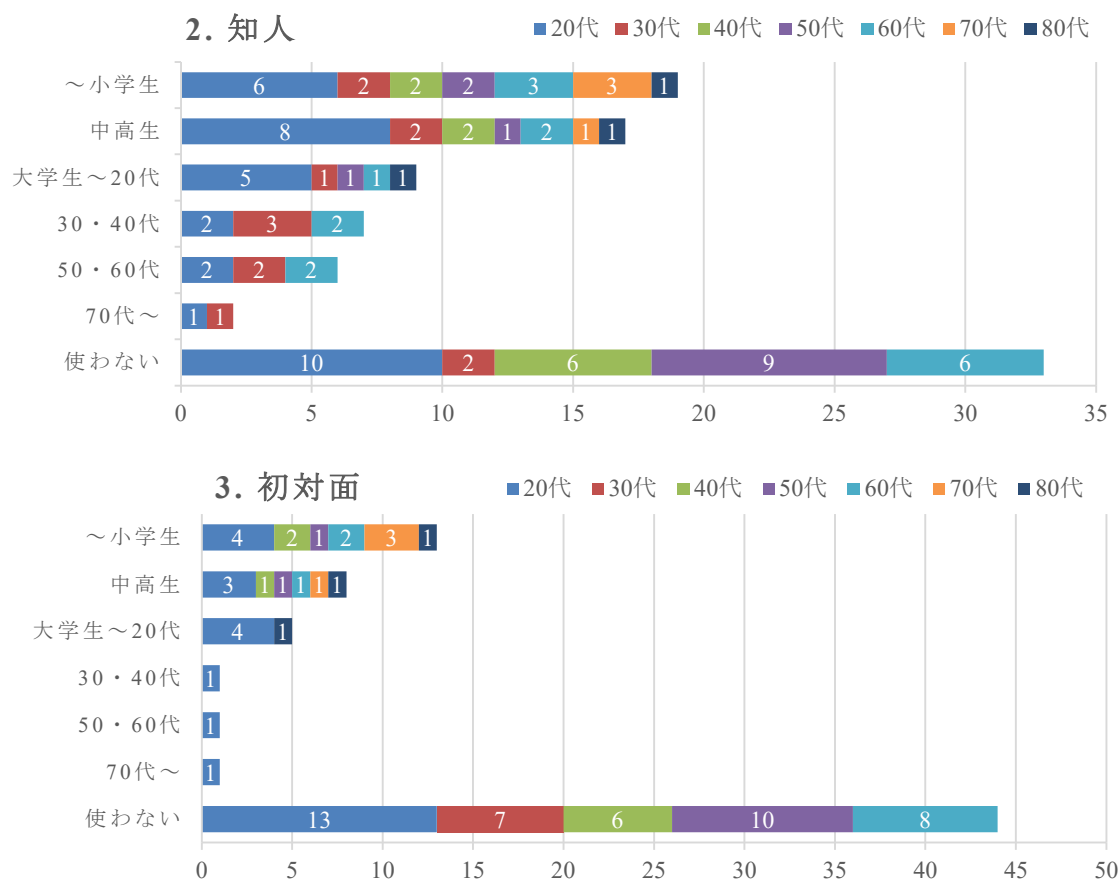


図 1: 話し相手の世代・関係性によるレン・ラレン形の使用傾向 (世代別)

5.2.2.2. 性差

男女別で見た場合も、問 2-2 と 2-3 は男女ともに相手の世代が上がるごとに回答数が減少する傾向があると同時に、どちらの間も男女の回答数がともに「使わない」で最多となった。一方、問 2-1 で女性は、小学生以下、中高生、大学生～20 代の順に回答が増加しているのに対して男性は逆に減少し、大学生～20 代を選択した回答者数において男女差が最も大きくなった。図 1 の 1. で 20 代の回答がここでの女性の回答と同様に増加しており、20 代の回答者が多いことと、その大半が女性であることがこの男女差の要因とみられる。

5.3. 調査Ⅱの調査方法

調査Ⅱでは、調査Ⅰの回答者の中から徳島県内でより長く暮らしている 9 人を対象に、Google Forms でアンケート調査を行う。共通語の例文を示して禁止表現の部分を方言だなどのように表すかを記述する形式とした (複数回答可)。回答者の情報は以下の通りである。

表 2: アンケート回答者の情報

	出生年	性別	居住歴		出生年	性別	居住歴		出生年	性別	居住歴
①	1961	女性	徳島市	④	1975	女性	石井町	⑦	1986	女性	徳島市
②	1964	女性	徳島市	⑤	1977	女性	三好郡	⑧	1995	女性	徳島市
③	1973	女性	徳島市	⑥	1985	女性	徳島市、 那賀郡	⑨	2004	男性	徳島市

調査Ⅱでは高木 (2009) による禁止表現の分類と例文を用いる。高木 (2009) は「聞き手に対する拘束力の強さ」と「要求内容の聞き手利益性」を基準として以下のように分類した。行為の停止が聞き手の利益となる場合が「聞き手利益」、そうでない場合は「非聞き手利益」となり、それぞれ行為の拘束力の強さによってさらに2つに分けられる。

表 3: 禁止表現の分類

拘束力	非聞き手利益	聞き手利益
強	①〈命令的阻止〉 おい、人のビールを飲むな。	③〈勧めの阻止〉 おい、身体に悪いからそれ以上飲むな。
弱	②〈依頼的阻止〉 おい、人のビールを飲まないでくれ。	④〈勧めの阻止〉 おい、身体に悪いからそれ以上飲まない方がいいぞ。

(高木 2009: 134 を基に筆者作成)

今回は③④の勧めの阻止の例文を用いて調査を行う。小林 (2023) は禁止する行為による非話し手への不利益、つまり高木 (2009) での行為停止による聞き手利益がある場合 (勧めの阻止) にレン・ラレン形の容認度が高く、タラアカン形も聞き手への不利益が明確である場合に容認されやすいと結論づけた。そこで、どちらの表現の使用にも影響する聞き手利益性を持つカテゴリーの中でどのように表現が使い分けられているのかを知るため、今回は勧めの阻止の例文に絞ることとした。調査で用いる例文は以下の通りである。

表 4: 調査Ⅱ例文

③勧めの阻止・拘束力弱	④勧めの阻止・拘束力強
1. 書くことがなければ無理に [書くな]	9. 無効になるから余計なことは絶対 [書くな]
2. いそがしいなら無理に [行くな]	10. 危ないから、絶対にそっちへ [行くな]
3. (風邪が治りきっていないから) 今日は風呂に [入るな]	11. 危ないから、絶対に中に [入るな]
4. いそがしいなら、無理に [見るな]	12. 怖い映画だから、絶対に [見るな]
5. 無理をしてここに [いるな]	13. 寒いからいつまでも外に [いるな]
6. お腹が空いていないなら、無理に [食べるな]	14. お腹をこわすといけなから、絶対にこれは [食べるな]
7. いそがしいなら、無理に [来るな]	15. 危ないから、こちらの方へ [来るな]
8. 疲れているなら、無理を [するな]	16. 無理な運動は絶対に [するな]

5.4. 調査Ⅱの結果

表 5 はアンケートの回答で見られた形式の一覧である。～ナの 3 種類と～タラアカン/～タライカンはそれぞれ 1 項目にまとめ、以降の考察でもナ形とタラアカン形に統一する。

表 5: 調査Ⅱアンケート結果 (形式一覧)

～レン・ラレン	～タラアカン/～タライカン
～ナ: 終止形+ナ (スンナなどの撥音化したものも含む)、 古終止形+ナ (スナ・クナ)、連用形+ナ	～ンデエエ (～ンデモエエも含む。 共通語: ～しなくていい、～しなくてもいい)
～ントキ (共通語: ～しないでおけ)	～ントイテ (共通語: ～しないで)
～ンノ (共通語: ～しないの。動詞否定形に終助詞が接続)	

次の表 6 は例文ごとの各形式の回答数を示している。

表 6: 調査Ⅱアンケート結果 (形式別)

	～レン・ ラレン	～タラアカン ・イカン	～ナ	～ンデエエ	～ントキ	～ントイテ	～ンノ
1. 書くな	9			2	1		
2. 行くな	9		1	1	1		
3. 入るな	9	1			1		
4. 見るな	8			2	1		
5. いるな	6		2	2	1		1
6. 食べるな	6		1	3	1		
7. 来るな	7		1	2	1	1	
8. するな	9		1		1		
9. 書くな	9	1					
10. 行くな	9	1	1				
11. 入るな	9	2	1				
12. 見るな	9	2	1		1		
13. いるな	6	1	3				1
14. 食べるな	6	5	1				
15. 来るな	6	2	2				
16. するな	6	2	2				

5.4.1. 拘束力の強さによる影響が小さいもの

表 6 のように、レン・ラレン形は拘束力の強さに関わらず回答数が多く、すべての間で他の形式の回答数を上回った。最も回答数が少なかったのは問 5 と 13 「いるな」、問 6 と 14 「食べるな」、問 15 「来るな」、問 16 「するな」で、それぞれ 6 人がレン・ラレン形で答えた。問 5 と 13 については、ナ形の回答が前半 8 問の中では問 5、後半 8 問の中では問 13 が最も高くなっていることから、話者の中には存在の意味の「おる」に接続するのはレン・ラレン形よりもナ形の方が自然と考えている人もいと推測される。問 6 では～ンデエエ、問 14 から 16 ではタラアカン形とナ形の割合が高くなっている。このことから、問 6 の例文は前半の問の中でも「～ンデエエ＝～しなくてもいい」という相手の意思に委ねる意味合いが強く、問 14～16 は後半の他の問よりも相手の行動を制限する拘束力が強いと判断した回答者が多いのではないかと考えられる。ナ形は後半の「入るな」「見るな」「いるな」「来るな」「するな」の 6 項目で 1 ずつ回答が増え、前半から後半で回答が減った項目はないため、いずれも後半の例文で拘束力が強くなったことでナ形の容認度が高まったと考えられる。

5.4.2. 拘束力の強さによる影響が大きいもの

前半 8 問と後半 8 問の回答で大きな差があるのはタラアカン形、～ンデエエ、～ントキの 3 形式である。いずれもレン・ラレン形に比べると回答数は少ないが、タラアカン形は後半の間に、～ンデエエ、～ントキは前半の間に回答が偏っている。回答者①によると、

方言に直すときにまずレン・ラレン形が浮かんだ文が多かったが、後半の拘束力が強い例文であればタラアカン形も使いやすくなるという。前半の拘束力が弱い例文については「無理にする必要はない」「どちらでもいい」という意味合い (高木 2009: 134 の述べる「許容」の用法) があるため〜ンデエエなどの方が自然で、タラアカン形は「無理したらあかんよ」のように相手への気遣いや話す時の優しい口調まで想定すれば使用できると述べていた。

〜ントキについては回答者④しか答えていないものの、回答者④の回答は前半でレン・ラレンと〜ントキ、後半でレン・ラレンとタラアカンという傾向があり、拘束力の強さによって〜ントキとタラアカンを使い分けていると見られる。筆者の内省でも、拘束力の強いものの中でも特に「絶対に」という言葉が含まれるような強い禁止や「危ないから〜するな」のような緊急性の高い場面の例文において、〜ントキは容認されにくいと感じる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、徳島方言の禁止表現の使用実態について考察してきた。調査Ⅰでは、レン・ラレン形は親しい人との会話ほど使用率が高いこと、そして親しい人以外には相手の年齢が関係し、年齢が低いほど使用率が高くなりやすいことが分かった。調査Ⅱではレン・ラレン形とタラアカン形の使い分けに焦点を置き、同じ聞き手利益性のある勸めの阻止の中でも、タラアカン形は拘束力の強い文章の方が容認されやすく、レン・ラレン形は拘束力の強さに関わらず使用できるという違いが表れた。

今回は、先行研究よりも調査対象の年齢層と地域を広げたものの、20代の話者と下郡出身者に偏りが生じた点が課題である。加えて、調査Ⅱでは勸めの阻止に絞って拘束力の強さを変数として調査を行ったが、各表現の差異や使用条件をさらに明確にするために、聞き手利益性のない文や拘束力以外の条件を設定した文でも再度調査が必要である。

〈参考文献〉

上野和昭 (1996)「徳島県の禁止表現をめぐって」徳島大学国語国文学会 (編)『徳島大学国語国文学』9: 26-39. / 上野和昭 (1997)『徳島県のことば』, 日本のことばシリーズ 36. 東京: 明治書院. / 遠藤潤一 (1984)「四国における禁止の一表現方法 —〈言ワレン・捨テラレン〉の系譜について—」平山輝男博士古稀記念会 (編)『現代方言学の課題』3: 405-432. 東京: 明治書院. / 加藤信昭 (1970)「四国方言の文法」平山輝男博士還暦記念会 (編)『方言研究の問題点』296-318. 東京: 明治書院. / 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) (1996)『言語学大辞典: 術語編』第 6 巻. 317-318. 東京: 三省堂. / 岸江信介 (2008)「四国方言における禁止表現と禁止表現行動」山口幸洋博士の古希をお祝いする会 (編)『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』29-46. 富山: 桂書房. / 小林花音 (2023)「徳島県下郡方言における禁止相当の表現「レン・ラレン」の使用条件」卒業論文, 九州大学. / 高木千恵 (2009)「禁止表現」大西拓一郎 (編)『方言文法調査ガイドブック 3』131-154. 東京: 国立国語研究所 全国方言調査委員会. / 土居重俊 (1975)「四国の方言」大石初太郎・上村幸雄 (編)『方言と標準語: 日本語方言学概説』316-335. 東京: 筑摩書房.

道具機能を兼務する能格の類型論—能格の異形態との関連から—

箱崎 光毅

(言語文化学部 チェコ語専攻)

キーワード：能格，A 機能，道具機能，機能の兼務，異形態，類型論

1. はじめに

本稿は、能格型言語において他動詞主語に代表される A 機能を標示する能格が道具機能の標示を兼務する現象に関する類型論であり、以下の 4 点を述べる。

1. 能格の道具機能兼務は、規模の大きい語族に限らず通系統的に観察される、能格型言語それ自体の現象である。
2. 能格異形態と道具能格が共に観察される場合、有生性の低い能格異形態が道具機能の標示を兼務する強い傾向がある。
3. 能格型言語における A 機能～道具機能の格標示体系には、有生性の同異を優先して反映する格体系と機能の同異を優先して反映する格体系がある。
4. 能格型言語における A 機能～道具機能の格標示体系には、有生性および機能の異質性よりも同質性に基づいたものの方が多い。

言語の系統および分布は Glottolog (Hammarström et al. 2024) による。例文の文字飾りは筆者による。本稿において算出する百分率は小数第 1 位を四捨五入している。

2. 能格の道具機能兼務

A を標示する能格の形式が道具を標示する形式と同一の場合、そのような能格を本稿では道具能格と呼ぶ。何らかの斜格機能を標示する形式と同一の場合、斜格能格と呼ぶ。

Manange 語 (Sino-Tibetan > Bodic > Bodish; Nepal)

(1) *lɲa=tse nyũkyu=ko=ri pèrkA=tse 2pho-tsi.*

1(SG)=ERG dog=DEF=LOC stick=INSTR beat-PERF

I beat the dog with a stick.

(Hildebrandt 2004: 70)

能格形式が道具形式と同一でなく別の場合、そのような能格を本稿では専用能格と呼ぶ。

Hunzib 語 (Nakh-Daghestanian > Daghestanian > Avar-Andic-Tsezic; Georgia, Russia)

(2) *kid-bo-l čax q'alam-li-d.*

girl-OBL-ERG write.PRES pencil-OBL-INS

The girl writes with a pencil.

(van den Berg 1995: 43)

3. 先行研究

3.1. 能格の斜格機能兼務

能格の斜格機能兼務は、Dixon (2018 [1994]: 71-72) や Palancar (2009: 567-570) において既に言及および概説がある。その概説書において能格が斜格機能を兼務する現象が言及されている諸語には、カフカース諸語 (石田 2011, 2019; Daniel and Ganenkov 2009)、チベット・ビルマ諸語 (澤田 2010, LaPolla 1995)、インド・イラン諸語 (Butt 2017, Verbeke 2009)、オーストラリア諸語 (Dixon 2002)、パプア諸語 (Foley 1986)、南アメリカ諸語 (Loos 1999) などがある。能格の斜格機能兼務は多くの地域に既に報告されているが、その諸相に関する記述は十分ではない。

Palancar (2009: 567) は3つの諸語において、能格が斜格機能を兼務する言語と兼務しない言語の数を表1のように概観している。系統的多様性の確保は不十分であるが、能格型言語のおよそ4分の3が能格の斜格機能兼務の現象を持つことが示されている。

表 1: 3つの諸語における能格の斜格機能兼務

	兼務現象あり	兼務現象なし	合計
オーストラリア諸語	67 (76%)	21 (24%)	88
チベット・ビルマ諸語	8 (67%)	4 (33%)	12
カフカース諸語	12 (63%)	7 (37%)	19
合計	87 (73%)	32 (27%)	119

(Palancar 2009: 567 を参照し筆者作成)

加えて、具格・共格・動作主格の同形式性を通言語的に調査した Stolz (2001) は、16 語族の能格型言語のうち 23/37 言語 (62%) が道具能格を持つこと示唆している。

クリモフ (2016 [1983]) らによる内容類型学は、主にカフカース諸語の観察を通じて能格の斜格機能兼務を能格型言語の格体系に内在的な特徴であるとし、これを「作因性・叙実性原理」から論じている (石田 2019: 129)。

3.2. 能格の有生性異形態

Arkadiev (2017) は、能格が何らかの要因による異形態を持つような multiple ergatives の体系を通言語的に研究している。その要因の1つに名詞の語彙的あるいは意味的なクラスを挙げ、能格がそれによる異形態を持つならば次の階層に従うことを示した。

local pronouns > non-local pronouns/demonstratives > proper names > kinship terms
> humans > non-human animates > inanimates

(Arkadiev 2017: 726)

例えば、Una 語 (Nuclear Trans New Guinea > Mek; Indonesia) の能格異形態は表2のように、この階層の連続した箇所分布する。

表 2: Una 語の能格異形態の分布

1SG	2SG	1PL, 2PL	3	proper n.	kinship n.	human	anim.	inanim.
ERG1 <i>-ci</i>				ERG2 <i>beji</i>		ERG3 <i>aji</i>		

(Arkadiev 2017: 727, Louwerse 1988: 112 を参照し筆者作成)

Arkadiev (2017) による能格異形態の記述には、このような能格異形態と斜格の同形式性への言及が少数ながら存在する。Chukchi 語および Koryak 語 (共に Chukotka-Kamchatkan > Chukotian; Russia) では “higher animate” の能格が所格と同形式であり、無生名詞の能格が具格と同形式である (Arkadiev 2017: 763, Spencer 2006: 6-7, Žukova 1972: 99)。Pendau 語 (Austronesian > Malayo-Polynesian > Celebic; Indonesia) では、普通名詞の能格が具格と同形式である (Arkadiev 2017: 733, Quick 2007: 99-100)。

4. 研究方針

道具能格を始めとする斜格能格の現象は既に報告されているが、その多くは規模の大きい語族についての付随的な記述に留まり、包括的な研究は管見の限り存在しない。本稿では、調査言語の数および系統的多様性を十分に確保した言語サンプルを構築し、以下の 3 つの研究方針を立てる。

- 道具能格の現象の通系統的な分布を調査し、これが系統によらない能格型言語それ自体に特徴的な現象であるかどうかを検証する。
- 能格が有生性による異形態を持ちかつそのいずれかが道具機能の標示を兼務する場合 (表 3 の類型 A)、その分布が Arkadiev (2017) による階層に従うかどうかを検証する。
- 能格型言語の A 機能～道具機能の格標示体系において、能格異形態の有無と能格の道具機能兼務に相関・傾向が見られるかどうかを類型論的に検証し、それが意味するものを考察する。

研究方針 c について、以下の 2 つのパラメーターに従い 4 つの類型を立てる (表 3)。

- 能格が有生性による異形態を持つかどうか。
- 能格が道具機能の標示を兼務するかどうか。

表 3: 類型と有生性および機能の同異

	道具機能を兼務する	道具機能を兼務しない
能格が異形態を持つ	A	B
能格が異形態を持たない	C	D

5. 定義

5.1. 意味役割・機能・格

本稿における意味役割・機能・格の定義を表 4 にまとめる。

表 4: 本稿における意味役割・機能・格

意味役割	動作主 ¹	原因	道具
有生性・意志性	有生・意志	無生・無意志	
±被使用	－被使用		＋被使用
文法関係による格	文法格	文法格～意味格	意味格
本稿における機能・格	A 機能・能格		道具機能

±被使用の素性は、典型的な A である動作主と原因の意味役割を機能的にまとめ、道具の意味役割・機能から区別するために設定する。原因を表す格は筆者の経験的に、文法格（他動詞文の統語的主語）である場合と意味格（自動詞文の斜格的付加詞）である場合が想定される。能格が原因の意味役割を兼務する言語について、個別言語における動詞の自他を筆者が判定できない場合、統語的な無生能格と付加詞的な原因格の区別が付かない。よって、統語的ステータスに拠らない定義をする必要がある。

本稿における原因と道具の区別は、その参与者を使用している別の参与者が形式的に明示されているかどうかで判定する。その参与者を使用している別の参与者が明示されていれば、道具の意味役割および機能とする。そのような参与者が実際の事態において存在し得ても、明示されていなければ原因の意味役割とし、A 機能に含める。すなわち A stone killed him. 型の文において、石を道具として使用した動作主が実際の事態に存在することが想定し得るとしても、文に現れている参与者に基づき a stone を原因とする。

5.2. 能格の認定

能格の認定は、節の動詞がヴォイスの観点から形態的に無標であることを前提とする。よって本稿では、特徴的なヴォイス・焦点体系を持つフィリピン・タイプの言語は扱わない。

6. 言語サンプル

本稿では、研究方針 a のために系統的バイアスに考慮した分布サンプルと、研究方針 b, c のために調査言語数を最大化した諸相サンプルの 2 つを用いる。分布サンプルは、Grambank (Skirgård et al. 2023) の Feature 409: Is there any ergative alignment of flagging? (Witzlack-Makarevich 2023) で 1 present の判定を受けている 390 言語、Arkadiiev (2017) が用いた multiple ergatives 体系を持つ 73 言語、McGregor (2010) が用いた選択的能格標示を持つ 114 言語の合計異なり言語数である 505 言語から、系統的多様性を可能な限り確保して抽出した 49 語族 104 言語を目録とする。系統的多様性は、分布サンプルおよび各語族に属する言語の数を考慮しつつ可能な限り上位の系統分岐グループから 1 言語を抽出することで確保する。言語数の少ない語族および系統的孤立語を「1 言語語族」としてまとめ、分布サンプルの目録情報を表 5 に示す。

¹ 本稿における動作主の意味役割は、被動者に状態変化をもたらすことを必須とせず、事態の遂行のために道具を使用し得る参与者を広く指す。よって、例えば移動の自動詞文において手段を用いる行為者を含む。

表 5: 分布サンプルの言語目録²

地域	語族	言語	地域ごとの小計
アフリカ	1 言語語族	2 (100%)	2 語族 2 言語 (2%)
ユーラシア	Sino-Tibetan Indo-European Nakh-Daghestanian Abkhaz-Adyge その他 1 言語語族	21 (56%) 6 (16%) 3 (8%) 2 (5%) 6 (16%)	10 語族 38 言語 (37%)
パプネシア	Nuclear Trans New Guinea Austronesian その他 1 言語語族	7 (35%) 3 (15%) 10 (50%)	12 語族 20 言語 (19%)
オーストラリア	Pama-Nyungan Nyulnyulan その他 1 言語語族	15 (54%) 2 (7%) 11 (39%)	13 語族 28 言語 (27%)
北アメリカ	1 言語語族	4 (100%)	4 語族 4 言語 (4%)
南アメリカ	Pano-Tacanan その他 1 言語語族	5 (42%) 7 (58%)	7 語族 12 言語 (12%)
合計		49 語族 104 言語	

1 言語語族の割合は 41/50 語族 (82%) および 41/105 言語 (39%) であり、系統的多様性は十分に確保したとする。諸相サンプルは系統的バイアスが排除し切れていないが、分布サンプルに 45 言語を加えた 149 言語からなる。

7. 道具能格の通系統的分布

研究方針 a について、道具能格の通系統的分布を表 6 に示す。「全体」「小語族」各行の上段が道具能格の言語、下段が専用能格の言語である。

表 6: 道具能格の通系統的分布

	アフリカ	ユーラシア	パプネシア	オーストラリア	北アメリカ	南アメリカ	合計
全体	0 (0%)	24 (63%)	16 (80%)	25 (89%)	2 (50%)	9 (75%)	76 (73%)
	2 (100%)	14 (37%)	4 (20%)	3 (11%)	2 (50%)	3 (25%)	28 (27%)
小語族	0 (0%)	1 (17%)	7 (70%)	9 (82%)	2 (50%)	5 (71%)	24 (60%)
	2 (100%)	5 (83%)	3 (30%)	2 (18%)	2 (50%)	2 (29%)	16 (40%)

通言語的に能格型言語のおよそ 4 分の 3 が道具能格を持つが、ユーラシア地域における分布はシナ・チベット語族およびカフカース諸語に偏っている。1 言語語族については 24/40 言語 (60%) に観察されることから、本稿では道具能格が通系統的に能格型言語それ自体に特徴的な現象であると結論付ける。

² 「言語」は各地域の言語総数における割合である。「地域ごとの小計」は分布サンプル全体における言語数の割合である。

8. 道具能格と有生性異形態

研究方針bについて、能格異形態および道具能格の分布はArkadiev (2017) の階層に従い、道具機能を兼務するのは有生性の低い能格異形態であるという強い傾向がある。3.2節に示した Una 語における道具機能標識は、有生性の低い能格異形態 *aji* と形式が同一であり、表7のように有生性階層に従って連続している。

表 7: Una 語の能格異形態と道具機能の標識

1SG	2SG	1PL, 2PL	3	prop.	kin.	human	anim.	inani.	instr.
ERG1 <i>-ci</i>				ERG2 <i>beji</i>		ERG3 <i>aji</i>			INST <i>aji</i>

(Arkadiev 2017: 727, Louwerse 1988: 112 を参照し筆者作成)

能格が有生性による異形態を持ちかつそのいずれかが道具機能の標示を兼務する言語は諸相サンプルに 16 言語確認されたが、道具機能の標示についてこの傾向に明確に違反する言語は Bumthangkha 語 (Sino-Tibetan > Bodic > Bodish; Bhutan, China) のみである。有生性の高い (代名詞・有生名詞) 能格異形態=*i* が道具機能の標示を兼務し、有生性の低い (自然力) 能格異形態=*lé* は専用能格である (Peck 2017: 5, 42, 62-63, van Driem 2015: 28)。

9. 類型論

9.1. 有生性および機能の同異の格体系への反映

研究方針cについて、4つの類型は表6のように分布する。これらの類型は、有生性および機能の同異がどの程度反映されているかについて整理することができる。

表 8: 類型の分布と同異の反映

	道具機能を兼務する	道具機能を兼務しない
能格が異形態を持つ	A. 有生性○ 機能× 16 言語	B. 有生性△ 機能△ 11 言語
能格が異形態を持たない	C. 有生性△ 機能△ 91 言語	D. 有生性× 機能○ 31 言語

能格型言語における A 機能～道具機能の格標示体系には、有生性の同異 (類型 A) よりも機能の同異 (類型 D) を反映するものの方が多い。

9.2. 有生性および機能の同質性と異質性

研究方針cについて、4つの類型は表9のように格形式が分配されている。有生性および機能の同質性と異質性のどちらに基づいているかという原則を考慮して、整理することができる。意味地図理論においては、形式を区別する言語が少なくとも1つ存在することが異なる機能をノードとして設定する根拠となる (Haspelmath 2003: 216-217)。通言語的な比較研究である本稿において、有生性および機能は、実際に観察される形式的区別のパターンを総合して下位区分の存在を作業原理として認める。それら下位区分を単位とし、異なる有生性および機能を同一形式が標示しているかどうかを論じることができる。

表 9: 類型における格形式の分配と原則

有生性 機能	有生	無生	原則	言語数
	A	道具		
類型 A	X	Y	有生性	16 言語
類型 B	X	Y	異質性	11 言語
類型 C	X	X	同質性	91 言語
類型 D	X	Y	機能	31 言語

能格型言語における A 機能～道具機能の格標示体系には、有生性および機能の異質性 (類型 B) よりも同質性 (類型 C) に基づくものの方が多い。

これら 4 つのタイプの言語は、表 10 のように例示することができる。

表 10: 4 つのタイプの言語例

	1, 2 pron.	3 pron.	anim.	inanim.	instr.
A Binandere ³	-ne	-mi			
B Khwarshi-Inkhoqvari ⁴	-e	obl. stem, -i	-mo	-z	
C Yele ⁵		ngé			
D Wadjiginy ⁶		-karran			-cene

10. 今後の展開

本稿は能格に関するより包括的な研究の初歩であるが、その最終的な研究目標から以下の 3 つを挙げる。

1. 能格が道具以外の斜格機能を兼務する現象を観察し、能格が標示を兼務する意味役割のパターンに含意普遍性が見出せるかを検証する。加えて能格の語用論的な示差的標示と斜格能格の有無の相関を検証し、能格の意味地図を作成する。
2. 道具機能を兼務する能格異形態が有生性の観点から動機づけられている (8 節) ように、他の斜格機能を兼務する能格 (異形態) にも同様の有生性による動機が存在するかを検証する。
3. それぞれの能格型言語における A 機能～道具機能の格体系が反映する要素 (9 節) が、その言語の他の斜格を含む格体系全体に一貫しているかどうかを検証する。

【略号一覧】 Manange 語 1 1 人称 / DEF 定 / ERG 能格 / INSTR 具格 / LOC 所格 / SG 単数 (Hildebrandt 2004: 7)
Hunzib 語 ERG 能格 / INS 具格 / OBL 斜格 / PRES 現在 (van den Berg 1995: xiii-xv)

【参考文献】 Arkadiev, Peter (2017) Multiple ergatives: From allomorphy to differential agent marking. *Studies in Language* 41-3: 717-780. / Butt, Miriam (2017) Hindi/Urdu and Related Languages. In: Jessica Coon, Diane Massam and Lisa Demena Travis (eds.) *The Oxford Handbook of Ergativity*, 807-831. Oxford: Oxford University Press. / Daniel,

³ Wilson (1996: 39, 50-51) Nuclear Trans New Guinea > Greater Binanderean (Papua New Guinea)

⁴ Khalilova (2009: 68-70, 141-144) Nakh-Daghestanian > Daghesatanian > Tsezic (Russia)

⁵ Levinson (2022: 154-156) Yele (Papua New Guinea)

⁶ Ford (1990: 74-77, 80-81) Wadjiginy (Australia)

- Michael and Dmitry Ganenkov (2009) Case marking in Daghestanian. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer. (eds.) *The Oxford Handbook of Case*, 668-685. Oxford: Oxford University Press. / Dixon, R. M. W. (2002) *Australian Languages: Their Nature and Development*. Cambridge: Cambridge University Press. / ディクソン, R. M. W., 柳沢民雄・石田修一 (訳) (2018) 『能格性』 東京: 研究社 (*Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- / Foley, William A. (1986) *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press. / Ford, Lysbeth J. (1990) The phonology and morphology of Bachamal (Wogait). MA thesis, Australian National University. / Hammarström, Harald, Robert Forkel, Martin Haspelmath and Sebastian Bank (2024) Glottolog 5.0. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology <https://glottolog.org/> (最終閲覧: 2025 年 1 月 10 日) / Haspelmath, Martin (2023) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.) *The new psychology of language*, vol. 2. 211-242. Mahwah, NJ.: Lawrence Erlbaum. / Hildebrandt, Kristine A. (2004) A Grammar and Glossary of the Manange Language. Dissertation, University of California at Santa Barbara. / 石田修一 (2011) 「G. A. クリモフ著『能格性総論概説』についての覚書」『類型学研究』3. 39-103. / 石田修一 (2019) 「人類史における活格言語、能格言語—内容類型学の視点から—」『類型学研究』5: 79-156. / Khalilova, Zaira (2009) A grammar of Khwarshi. Dissertation, Rijksuniversiteit te Leiden. / クリモフ, G. A., 石田修一 (訳) (2016) 『内容類型学の原理』 東京: 三省堂 (*Принципы контентивной типологии*. Москва: академия наук СССР институт языкознания, 1983). / LaPolla, Randy J. (1995) 'Ergative' Marking in Tibeto-Burman. In: Nishi Yoshio, James A. Matisoff and Yasuhiko Nagano (eds.) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*, *Senri Ethnological Studies* 41. 189-228. National Museum of Ethnology, Osaka. / Levinson, Stephen C. (2022) *A Grammar of Yéli Dnye: The Papuan Language of Rossel Island*, *Pacific Linguistics*, 666. Berlin: Mouton. / Loos, Eugene E. (1999) Pano. In: R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *The Amazonian Languages*. 227-250. Cambridge: Cambridge University Press. / Louwrese, John (1988) *The Morphosyntax of Una in Relation to Discourse Structure*. *Pacific Linguistics: Series B*, 100. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University. / McGregor, William B. (2010) Optional ergative case marking systems in s typological-semiotic perspective. *Lingua* 120. 1610-1636. / Palancar, Enrique L. (2009) Varieties of Ergative. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer. (eds.) *The Oxford Handbook of Case*, 562-571. Oxford: Oxford University Press. / Peck, Naomi (2017) Predication, reference and modification: Major word classes in Bumthang, a Tibeto-Burman language. MA thesis, Australian National University. / Quick, Phil (2007) *A grammar of the Pendau language of central Sulawesi, Indonesia*. *Pacific Linguistics*, 590. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University. (筆者未見) / 澤田英夫 (2010) 「本論集で取り上げるチベット＝ビルマ系言語の格標示の概観」澤田英夫 (編) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』1-13. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. / Skirgård, Hedvig et al. (2023) Grambank v1.0 (v1.0) [Data set]. <https://grambank.clld.org/> (最終閲覧: 2025 年 1 月 10 日) / Spencer, Andrew (2006) Syntactic vs. morphological case: implications for morphosyntax. In: Leonid I. Kulikov, Andrej L. Malchukov and Helen de Hoop (eds.) *Case, valency and transitivity*, 3-22. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins. (筆者未見) / van den Berg, Helma (1995) *A Grammar of Hunzib (with Texts and Lexicon)*, *LINCOM Studies in Caucasian Linguistics* 01. München: Lincom. / van Driem, George (2015) Synoptic grammar of the Bumthang language: A language of the central Bhutan highlands. *Himalayan Linguistics: Archive* 6. 1-77. / Verbeke, Saartje (2013) *Alignment and ergativity in new Indo-Aryan Languages*. Berlin: De Gruyter Mouton. / Wilson, Jonathan P. (1996) Binandere Nominal Structures. MA thesis, University of Texas at Arlington. / Witzlack-Makarevich, Alena (2023) Feature GB409: Is there any ergative alignment of flagging? <https://grambank.clld.org/parameters/GB409#2/21.0/152.1> (最終閲覧: 2025 年 1 月 10 日) / Žukova, Alevtina N. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka. Fonetika. Morfologija*. Leningrad: Nauka.

韓国語における国語醇化運動の影響

蓑輪 由芽

(言語文化学部 トルコ語専攻)

キーワード：韓国語，国語醇化運動，和製漢字語，言語政策

0. はじめに

本稿の目的は韓国語において、和製漢字語がどれだけ定着しているのか、また国語醇化運動¹が韓国語に与えた影響について明らかにすることである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節で前提となる知識を概観し、第3節で先行研究を見たのち、第4節で問題提起、第5節でコーパス調査をおこない、第6節で今後の展望について述べる。なお、本稿内で示す、転写はイェール式にしたがい、文字飾り、日本語訳は特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 日本から流入した和製漢字語に関する背景知識

日韓語彙交流を史的観点から問題にすると、まず日本に対して韓国が開港した 1876 年を基準に大きく以前と以後に分けられ、1876 年以降になると、政治的・文化的な背景により 1876 年以前とは違って、本格的に日本語が入り定着するに至るという。東アジアにおいていち早く欧米の近代文明を導入した日本では、多くの近代用語が新しい言葉として生成された。これらの語の中には、漢字を組み合わせて作られたものが多くある。日本に対する韓国の開港と日韓併合を経て韓国語にはおびただしい数の日本語が入ることになり、和語・外来語などは 1945 年以降に行われた国語醇化運動によって排除されたものの、漢字語のほうは多く使われ続けているという（張元哉 2000）。

また、韓国に流入した日本語系語彙は、借用様式により、音を借りた「音声借用」と、漢字を介した「文字借用」と、その両方を重ねた「混合借用」とに分けることができる。本稿では、韓国に流入した日本語系語彙のうち文字借用に分類されるものを和製漢字語と定義づけ、研究対象とする（李光済 2006）。

2. 先行研究

2.1. 国語醇化運動に関連する政策と時代の流れ

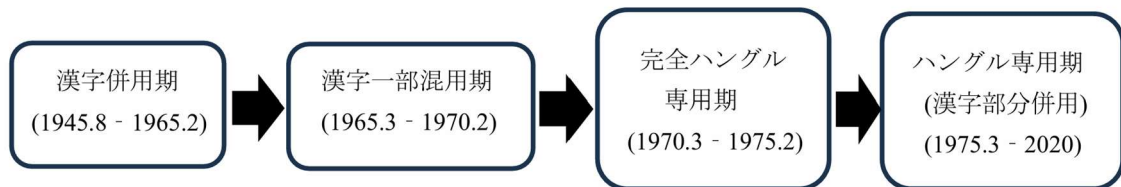
1945 年以降に行われた国語醇化運動は、時期によって徹底度が違う。特に、1960 年代から 1980 年代にかけての時期が国語醇化運動の最盛期となった背景には、韓国の政治、社会的な変化が密接に関係している。この時期、韓国政府は韓国語の醇化と国民の統一的なアイデンティティを強化するために言語政策を推進した。本節では、言語政策に特に力を入れた時期の時代背景を具体的な言語政策の内容とともに見ていく。

¹ 自国語から適当と思われない外来語を排除し、自国固有の言葉に置き換える運動が行われた。

2.1.1. 李善英 (2020)

解放を迎えた韓国は、図1(次ページ)の通り、言語表記に対する言語政策が行われた。しかし、韓国の言語政策は、一貫した言語表記ではなく、「漢字併用²期」「漢字一部混用³期」「完全ハングル専用期」「ハングル専用期(漢字部分併用)」に変遷してきた。

図1：韓国の言語表記の変遷



(李善英 2020)

これを踏まえて、言語政策が最も盛んな時期であった朴正熙政権下の言語政策を見ていく。1961年にクーデターを起こし実験を握った朴正熙は、経済復興に力を注ぐ一方で、大統領本人が直接的に言語政策の運営に介入して命令を下した。1950年代初め以降、韓国国内は朝鮮戦争により荒廃していた。経済的にはアメリカの援助に頼っていたものの、東アジアの中でも貧困の状況は最下位であった。政治においても李承晩政権の不正・腐敗と不正選挙に不満を抱いた国民が立ち上がり、1960年4月に「4・19革命」という民衆運動が起きた。そういった時代の1961年5月、軍人朴正熙が軍事クーデターを起こし、実権を握るようになった。韓国国内が不安定であり、その状況の中で実権を握った朴正熙は、韓国国民から政治的支持を受ける必要性と国家の基盤を安定させる必要があった。そのような中で行われた言語政策は、ハングル共同体を作り上げていく過程の中で、最も成果をあげた。朴正熙政権期になってから「漢字一部混用期」もあったが、1970年から「完全ハングル専用」を施行することを決め、ハングル専用に向けて拍車をかけた。途中で漢字併用の時期があったものの、「ハングル」専用を政権初期から試みていた。1970年から完全ハングル専用にすることを1968年に公表し、完全ハングル専用をより強調したこの時期は国家機関ではハングル専用が行われていた。朴正熙のこの動きの背景には、朴正熙政権期は「個人」より「共同体」を強調するというような国家への意識があった(李善英 2020)。

2.1.2. 野副 (2010)

野副(2010)で紹介されている、朴正熙大統領が大統領就任後2年目の1965年10月9日に発表した「ハングルの日に際しての談話文」の内容には次のような文がある。

² 「併用」とは漢字を括弧の中に入れてハングルと並べて使う文体のことである。

³ 「混用」とはハングルと漢字を混ぜて使用する表記のことである。

～今日は世宗大王がハングルを作られ、頒布されて 519 年になる記念日です。世界どの民族も自分の国の文字のために記念日を持つ民族はありません。ただ我が民族だけが持つ特有な誇りです。... 韓日関係等複雑な国際情勢と共産思想に対する熾烈な対決をしている今日に、民族の主体意識と伝統精神そしてその土台の上に我々の文化と生活を建設することは、どの時よりも切実に要請されていることです。それは即ち、ハングルを通じた文化建設です。～

(野副 2010: 17)

この文章から、朴正熙大統領がハングルを通しての民族意識をどれだけ重要視していたかがわかる。

2.2. 熊谷 (2014)

国語醇化運動において醇化の対象になった日本語由来の用語は、韓国の文化体育部(編)「国語醇化用語集」(1997)の「日本語的な日常用語」の項目をみればわかるとおり、1074語ある。これらの用語がどのように選定されたのか、熊谷(2014)を参照する。

熊谷(2014)では、醇化対象用語の選定基準について、以下のように述べている。

「下請」(hacheng)、「差入」(chaip)のように、訓読漢字語を朝鮮漢字語で字音化して借用された語彙は、他の漢字語彙に比べて日本語が原語であることをにせざる有標性が高い。それゆえ、「倭色(日本語的要素)」を排斥する醇化運動の標的になりやすい。このため近代文明を体現した音読漢字語からの借用語ではなく、日常生活領域や職人用語の領域に関連した日本語からの音借語や、訓読漢字語を字音化して借用した字音語が朝鮮語醇化運動の主要なターゲットとされてきた。

(熊谷 2014: 12-13)

このことから、醇化対象となった用語の選定基準として、その用語に日本語的要素が強く見られるかどうかを重視されていたことがわかる。熊谷曰く、このように漢字語のなかでも取り扱いの区別を明確にさせることで、言語醇化運動が近代朝鮮語語彙体系の根底を揺さぶるという可能性を低くしていたという。

3. 問題提起

このように先行研究では、韓国語における日本語系語彙の使用頻度、日本語系語彙が韓国語に入ってきた時代背景、その後の国語醇化運動の流れと政策内容を挙げている。3.2節や3.4節からわかるように、国語醇化運動は必ずしも全ての語彙で効果を出していたとはいえない。先行研究では、実際に国語醇化運動の効果がどのように出ていたのか、醇化前との比較や年代ごとの調査を行っていないため、本稿ではコーパス調査による使用例の収集により、年代別に国語醇化運動の効果を比較する。

4. コーパス調査

4.1. 調査方法

韓国の文化体育部（編）「国語醇化用語集」（1997）の「日本語的な日常用語」の項目にある 1074 例のうち、指定前の語彙が和製漢字語であり、指定後の韓国語彙（以下、指定語とする）がひと単語である 156 例のうち一部（下記）を除いたものを、延世コーパス用例検索システムを使い、10 年ごとに区切って指定前の和製漢字語と指定語の用例数をそれぞれ確認する。その後、40 年代から 90 年代のそれぞれの時期の、醇化前語彙に比べた指定語の使用頻度⁴を出したのち、その数字がどのように増減したか⁵を計算することで、醇化の効果をはかる。

なお、156 例のうち、48 例は、(1) 40 年代から 90 年代のそれぞれの時期の調査結果のうち、4 つ以上の年代で、醇化前語彙と指定語のどちらもの結果が 0 もしくは一桁であったこと、5 例は、(2) 醇化前語彙の用例数が 0 という年代が 5 つ以上あり、元々あまり使われていなかったこと、5 例は、(3) 前後で用例数が 0 のものが多く、年代をまたいだ増減割合を出せないことがわかるため、比較が難しいことから調査対象から外した。

4.2. 調査結果

コーパス調査の結果を、醇化に成功したもの、醇化に失敗したもの、指定語が定着しかけたが効果が長続きしなかったもの、どちらともいえないものの四つに分けて表にまとめたのが以下のものである。

表 1: 調査結果

分類	語彙	用例数
醇化に成功したもの	Seykong → Kongyey, Chaap → Aplywu, Socelswu → Swuphyo, Pwulha → Maykak, Kalyo → Chilyo, Hamwul → Cim, Sayang → Selmyeng, Kyensup → Swusup, Kumpan → Ipen, Manka → Manhwa, Myengnyen → Naynyen, Wenmang → Sowen, Iknyen → Taumhay, Cipwul → Cikup, Chwuichey → Tansok, Kyenpon → Pon, Kongcwung → Salamtul, Ilung → Iltan, Hoco → Swunco	19 例
醇化に失敗したもの	Koci → Allim, Kwaing → Chokwa, Taykyel → Kyelwuki, Sihap → Kyelwuki, Yangsik → Sesik, Chacang → Sungmwuwen, Ilpwu → Nalcca, Insang → Ollim, Kansik → Sayspap, Ipcang → Checi, Cekca → Kyelson, Chwuiso → Malso, Kayso → Kwuntay, Kokayk → Sonnim, Yekhal → Soim, Kisang → Ilenam, Chwukcey → Chwukcen, Kicwung →	38 例

⁴ 式は、X を和製漢字語の用例数、Y を指定語の用例数としたとき、 $(Y - X) / X \times 100$ (%) である。

⁵ 式は、A を前の年代における指定語の使用頻度の増減割合、B を後の年代における指定語の増減割合としたとき、 $(B - A) / A \times 100$ (%) である。

	Sangcwung, Pokci → Yangpokkam, Swutang → Temsaks, Welpwu → Talpwuski, Kachwul → Cipnakam, Kaykan → Ilkwum, Kyenglak → Kyengmaychaki, Kyengsi → Yathpom, Kongci → Pinttang, Kwukchay → Nalapic, Kihap → Yelchalye, Nocem → Kilkakey, Taypwu → Pillim, Taychwul → Pillim, Ilco → Pyelccoim, Celi → Ssanpyen, Cento → Sencikup, Cengchal → Ceykapsphyo, Ciyang → Samkam, Chwuikup → Talwum, Chimmok → Koimok	
効果が長続きしなかったもの	Konsayk → Kamsayk, Ilswu → Tokcem, Taymi → Maynkkuth, Inha → Naylim, Ceklip → Moum, Cenhyangcek → Cekkukcek, Celsang → Ollim, Chengpwu → Tokup, Ceycen → Chwukcen, Kakpan → Hayngcen	10 例
どちらともいえないもの	Pwulip → Nappwu, Thongtal → Allim, Hokseng → Haynseng, Wuncenswu → Wuncensa, Seytay → Kakwu, Swuip → Soncil, Sungchakwen → Chaphyo, Yangto → Nemkyecwuki, Yongtal → Simpwulum, Wenkum → Poncen, Wencok → Sophwung, Ywukkyo → Kwulumtali, Kocham → Senim, Kongsek → Pincali, Kongim → Phwumsaks, Kipho → Kephwum, Taykum → Kaps, Pwuci → Tayci, Naptuk → Ihay, Kaman → Sayngkak, Tapsin → Taytap, Taytaswu → Taypwupwun, Kyengkwan → Kyengchi, Kiso → Kicho, Ikil → Taumnal, Imkum → Saks, Ingye → Nameci, Cakang → Cakicang, Chwuico → Mwuncho, Hamyeng → Myenglyeng, Hochwul → Pwulum	31 例
合計		98 例

醇化に成功したものと失敗したものの数を見ると、成功したものよりも失敗したものの方が二倍多かったことが分かる。調査結果は、用例を大きく (4) + 効果が一つの時期で出たもの、(5) + 効果が連続して二つ以上の時期にわたって出たもの、(6) - 効果だけが出たもの、(7) その他、(8) 指定語の用例数が 0 という年代が五つ以上あったため、醇化の影響を受けなかったものと判断し、醇化に失敗したものに分類したものの四つに分類して分析した。種類別の用例は以下の通りである。

(4) + 効果が一つの時期で出たもの。(6 例)

Pwulip (払い入れる) → Nappwu, Seykong (細工する) → Kongyey, Chaap (差し押す) → Aplywu, Thongtal (通達する) → Allim, Hokseng (惑星) → Hayngseng, Socelswu (小切手) → Swuphyo

(5) +効果が連続して二つ以上の時期にわたって出たもの。(27 例)

Phulha (払い下げ) → Maykak, Sayang (仕様) → Selmyeng, Yangsik (様式) → Sesik, Wuncenswu (運転手) → Wuncensa, Kalyo (加療) → Chilyo, Kyenpon (見本) → Pon, Kyensup (見習い) → Swusup, Koci (告知) → Allim, Konsayk (紺色) → Kamsayk, Kumpan (今版) → Ipen, Manka (漫画) → Manhwa, Myengnyen (明年) → Naynyen, Kwaing (過剰) → Chokwa, Taykyel (対決) → Kyelwuki, Wenmang (願望) → Sowen, Kongcwung (公衆) → Salamtul, Sihap (試合) → Kyelwuki, Iknyen (翌年) → Taumhay, Insang (引き上げる) → Ollim, Ilpwu (日付) → Nalcca, Ilswu (一手) → Tokcem, Ilung (一応) → Iltan, Cipwul (支弗) → Cikup, Chacang (車掌) → Sungmwuwen, Chwuicyey (取り締め) → Tansok, Hamwul (荷物) → Cim, Hoco (好調) → Swunco

(6) -効果だけが出たもの。(19 例)

Yekhal (役割) → Soim, Kakpan (脚絆) → Hayngcen, Kansik (間食) → Sayspap, Kayso (個所) → Kwuntey, Kisang (起床) → Ilenam, Kicwung (忌中) → Sangcwung, Taymi (大尾⁶) → Maynkuth, Pokci (服地) → Yangpokkam, Kokayk (顧客) → Sonnim, Inha (引き下げる) → Naylim, Ipcang (立場) → Checi, Ceklip (積立て) → Moum, Cekca (赤字) → Kyelson, Cenhyangcek (前向きの) → Cekkukcek, Celsang (切上げ) → Ollim, Chengpwu (請負) → Tokup, Chwukcey (祝祭) → Chwukcen, Chwuiso (取り消し) → Malso, Ceycen (祭典) → Chwukcen

(7) その他 (27 例)

Seytay (世帯) → Kakwu, Swuip (手入れ) → Soncil, Sungchakwen (乗車券) → Chapyo, Yangto (譲渡) → Nemkyecwuki, Yongtal (用達) → Simpwulum, Wenkum (元金) → Poncen, Wencok (遠足) → Sophwung, Ywukkyo (陸橋) → Kwulumtali, Kocham (古参) → Senim, Kongsek (空席) → Pincali, Kongim (工賃) → Phwumsaks, Kipho (気泡) → Kephwum, Taykum (代金) → Kaps, Pwuci (敷地) → Tayci, Naptuk (納得) → Ihay, Kaman (勘案) → Sayngkak, Tapsin (答申) → Taytap, Taytaswu (大多数) → Taypwupwun, Kyengkwan (景觀) → Kyengchi, Kiso (基礎) → Kicho, Ikil (翌日) → Taumnal, Imkum (賃金) → Saks, Ingye (剰余) → Nameci, Cacang (磁場) → Cakicang, Chwuico (取り調べ) → Mwuncho, Hamyeng (下命) → Myenglyeng, Hochwul (呼び出し) → Pwulum

(8) 指定語の用例数が 0 という年代が五つ以上あったため、醇化の影響を受けなかったものと判断し、醇化に失敗したものに分類したもの。(19 例)

Swutang (手当て) → Temsaks, Welpwu (月賦) → Talpwuski, Kachwul (家出) → Cipnakam, Kaykan (開墾) → Ilkwum, Kyenglak (競り落とし) → Kyengmaychaki, Kyengsi (軽視) →

⁶ 「最後」「結局」「終わり」といった意味を持つ。

Yathpom, Kongci (空地) → Pinttang, Kwukchay (国債) → Nalapic, Kihap (気合) → Yelchalye, Nocem (露店) → Kilkakey, Taypwu (貸し付ける) → Pillim, Taychwul (貸し出す) → Pillim, Ilco (日照り) → Pyelccoim, Celi (低利) → Ssanpyen, Cento (前渡し) → Sencikup, Cengchal (定札) → Ceykapsphyo, Ciyang (止揚) → Samkam, Chwuikup (取扱) → Talwum, Chimmok (枕木) → Koimmok

5. 成功・失敗の理由の分析

成功の理由として、学問的語彙である用例が多いのではないかとということ、公の場で多く使われているのではないかとということが考えられる。一方で、失敗の理由として、成功の理由とは逆に、生活的語彙が多いのではないかとということ、公の場で使われにくいのではないかとということが考えられる。以下、それぞれについて検証した結果を述べる。

5.1. 成功の理由の分析

醇化の成功した用例に学問的語彙といえるものは見当たらなかった。公の場で多く使われているのではないかとということについて、この仮説を検証するために、延世コーパス用例検索システムを用いて、分野を文学と新聞それぞれで調べたときの用例数を比較することによって公で使われることが多い用例数を確定させた。なお、年代は国語醇化運動が最もさかんになったと考えられる 1970 年代以降に絞って調査した。結果は、19 例のうち、新聞の用例の方が文学の用例より多いものが 11 例と、半分以上を占めたものの、圧倒的に多いといえる数ではなかった。したがって、成功の理由を公の場で多く使われているとすることはできない。

5.2. 失敗の理由の分析

醇化に失敗した用例のうち、Sayspap (間食) と Ilenam (起床) の 2 語は生活的語彙といえるが、それが特徴であるといえるほど生活的語彙が、醇化に失敗したものに多いわけではない。したがって、失敗の理由を生活的語彙と考えることはできない。公の場で使われにくいのではないかとということについて、成功例の理由の考察でしたのと同じように、延世コーパス用例検索システムを用いて、分野を文学と新聞それぞれで調べたときの用例数を比較することによって公で使われることが多い用例数を確定させた。なお、ここでも年代は国語醇化運動が最もさかんになったと考えられる 1970 年代以降に絞って調査した。(8)に分類した用例は指定語の用例数が少なすぎるため、それを除いた 18 例⁷を見た。結果は、18 例のうち、新聞の用例の方が文学の用例より多いものが 9 例と、ちょうど半分を占めた。したがって、これらの語彙は文学作品でも新聞でも同じくらいよく見られるため、醇化に失敗した指定語が公の場で使われにくいということとはできない。

⁷ 当てはまる用例 19 例のうち、Taykyel と Sihap の 2 例の指定語が同じ Kyelwuki なので、18 例。

6. まとめ

本稿では、国語醇化運動において、醇化に失敗した語彙が成功した語彙を上回る結果が示された。これに対し、失敗の要因として生活的語彙が多く含まれ、公の場で使用されにくい可能性を考えた一方成功の要因として学問的語彙が多く含まれ、公の場で頻繁に使用されている可能性に着目した。しかし、これらの仮説は本研究内で立証に至らなかった。この結果は、醇化の成否が単純な語彙の性質や使用場面の違いだけでは説明できない複雑な要因に基づいている可能性を示唆する。本稿は、醇化運動における語彙の変容を多角的に考察し、その構造的な理解につながるものとなった。以上の結果を通じて、言語政策における言語使用の多様性と現実的な影響を改めて認識する契機となることを期待する。

参考文献

- 金光林 (2005) 「近現代の中国語、韓国・朝鮮語における日本語の影響：日本の漢字語の移入を中心に」『新潟産業大学人文学部紀要』 17: 111-128.
- 熊谷明泰 (2014) 「朝鮮語の近代化と日本語語彙」『関西大学人権問題研究所紀要』 67: 1-122.
- 権五鉉 (2015) 「韓国の社会科教育課程における市民性教育の変遷－初等学校社会科の目標を中心に－」『社会科教育論叢』 49: 45-54.
- 権正生 (2019) 「몽실언니」[訳: モンシル姉さん] ソウル: チャンビ出版社. 1-44.
- 張元哉 (2000) 「19 世紀末の韓国語における日本製漢語－日韓同形漢語の視点から－」『日本語科学』 8: 76-95.
- 野副伸一 (2010) 「韓国ハングル専用化政策の光と影」『新段階を迎えた東アジアⅣ』 7-17. 武蔵野: 亜細亜大学アジア研究所.
- 李光済 (2006) 「韓国の「国語醇化資料集」における日本語語彙－生活用語を中心に－」『多元文化／名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編』 6: 151-161.
- 李善英 (2020) 「言語共同体形成のための朝鮮半島における言語政策展開過程に関する研究－1910 年から 1979 年までの言語表記単一化政策を中心に－」博士論文, 立命館大学.

調査資料

- 연세 말뭉치 용례 검색 시스템. [訳: 延世コーパス用例検索システム]
<http://ilis.yonsei.ac.kr/corpus/#/search/TW> [2024 年 6 月 30 日アクセス]
- 文化体育部 (編) (1997) 「国語醇化用語資料集」文化体育部.

ドイツ語の従属文における定動詞中置

米原 鈴乃

(言語文化学部 ドイツ語専攻)

キーワード：ドイツ語，従属文，定動詞，代替不定詞，コーパス

1. はじめに

現代ドイツ語文法では、従属節 (embedded clause) における定動詞は後置されるのが規範的である (田中 2012: 284)。しかし節末に動詞群が形成された場合、例外的に定動詞が文末に置かれないことがある (以下、定動詞中置と呼ぶ)。本稿では、この例外的語順について調査によって使用実態を明らかにすることを目的とする。

なお、本稿の例文・図表番号、グロス、文字飾り、和訳は特に断りのない限り筆者による。

2. ドイツ語の基本語順に関する背景知識

ドイツ語の語順は、英語に比べるとかなり自由であるが、定動詞の位置はかなり固定しており、主文 (主節) では第 2 位を、副文 (従節) では末位を占める (橋本 1989: 1198)。述部成分が複数個ある場合、それらを一定の規則に従って並べ、平叙文では定動詞以外は文末に、定動詞を文末に置く副文 (従属文) では、述部成分は定動詞の直前に置く (在間 2006: 41)。

清水 (2024: 423) によると、ドイツ語の語順パターンは主節・従属節、平叙文・疑問文等の区別とは無関係に、文の領域モデルを用いて以下のように表すことができる。

前域 左枠 [中域] 右枠

図 1: ドイツ語における文の領域モデル (清水 2024: 424 より抜粋)

定動詞は右枠に位置し、「S (主語) + Adv (副詞句) + O (目的語) / C (補語) + V (定動詞)」となる。この定動詞末尾 (verb final) が基本語順である。重要なのは、主節の定動詞と従属節の従属接続詞が左枠を占める点であるが、これは左枠に従属接続詞がない場合に限って右枠の定動詞が左枠に移動するという相補分布で棲み分けがなされている (清水 2024: 425)。

3. 副文 (従属節) における定動詞中置

3.1. 定動詞中置と代替不定詞の定義

本稿で対象とする「定動詞中置」を次のように定義する。ドイツ語文の構造は 2 節の図 1 のように表すことができ、主要部後置であるドイツ語において (清水 2024: 462)、動詞群は右枠、かつ定動詞は末尾に置かれる。しかし、従属節において定動詞が右枠の最後に来ない場合が存在する。これを本稿では「定動詞中置」とする。

本稿において重要となる代替不定詞についても定義しておく。荻原 (2004: 65) によると、ドイツ語の完了形は助動詞 haben / sein と動詞の過去分詞形によって複合的に表現されるが、

これには例外があり、動詞が不定詞を伴う場合—典型的には話法の助動詞、知覚動詞、使役動詞—は動詞が過去分詞形をとらず、(1) の波線部のように代わりに不定詞の形が用いられる。すなわち、一般的に本動詞の不定形を伴う (a) 話法の助動詞、(b) 使役動詞、(c) 知覚動詞が完了時制になる場合、これらの助動詞・動詞は過去分詞形にならず、不定詞の形で現れる。これが「代替不定詞」である。(1) は () 内に助動詞の過去分詞形を示している。

- (1) Peter hat nach Frankfurt fahren müssen. (gemußt)
Peter have.AUX.PRS.3SG to Frankfurt drive.INF must.INF
「ペーターはフランクフルトに行かなければならなかった。」 (荻原 2004: 65)

少し研究結果の先取りになってしまうが、3.2.節で述べる高田 (1994) の動詞群の構成タイプ 4, 5a で定動詞中置が起こる。タイプ 4 は代替不定詞であるが、タイプ 5a は未来の助動詞 werden が元から不定詞をとるため、支配される話法の助動詞が不定形になっており、これは代替不定詞とは異なる。

3.2. 先行研究

橋本 (2002) 、在間 (2006) 、荻原 (1996) 、高田 (1994) 、清水 (2024) を扱う。

表 1: 先行研究における定動詞中置の条件の比較

	代替不定詞がある場合の定動詞中置	動詞が 3 個以上ある場合の定動詞中置	不定詞が 2 個以上ある場合の定動詞中置
橋本 (2002)	義務的	選択的	—
在間 (2006)	義務的	—	義務的
荻原 (1996)	義務的	—	—
高田 (1994)	定動詞の省略が増加	選択的	一部規範化 一部選択的
清水 (2024)	話法の助動詞: 頻繁 知覚・使役動詞: 任意	選択的	選択的

表 1 を見ると、どのような条件で定動詞中置が起こるのかについて、先行研究によって記述が異なる。さらに一部の条件下では、定動詞中置が義務的なのか、選択的なのか、先行研究によって違いがある。荻原 (1996: 18) によると、代替不定詞がある場合に定動詞が文末に来るのは非文であるが、高田 (1994) や清水 (2024) は非文ではないとしている。

橋本 (2002: 558) は動詞 (助動詞) が四個以上並ぶ場合には、動詞群の規則的語順 1, 2, 3, 4¹を 4, 1, 2, 3 とするのみでなく、4, 3, 1, 2 とすることもできる (3, 4, 1, 2 は誤り。) と述べている。高田 (1994) では、定動詞の位置が動詞群の前・中・後・省略という 4 つのパター

¹ 動詞群の語の順序付けにおいて、橋本 (2002) と清水 (2024) は異なる方針を取っている。同じ左枝分かれ型の 3 要素の動詞群があった場合、橋本 (2002) は「 $V_1 < V_2 < V_3$ 」(V_3 が定動詞) と数字を付しているが、清水 (2024) は「 $V_3 < V_2 < V_1$ 」(V_1 が定動詞) としている。本稿では、清水 (2024) の方針に従って動詞群の語の順序を表すこととする。

ンを調査している。しかし、その他の先行研究では定動詞は動詞群の先頭に置かれるという記述のみであり、定動詞中置にどのような語順パターンが認められるのか、各語順の出現頻度や容認度の差については不明である。

高田 (1994) は 17 世紀を時間軸として実証調査を行っており、多項述語²の構成要素の組み合わせに応じて以下のようなタイプを設定している (高田 1994: 13)。

タイプ 1: PII + PII + sein

タイプ 2: PII + Inf (werden / haben / sein) + werden

タイプ 3: PII + Inf (werden / haben / sein) + MV

タイプ 4: Inf + Ersatzinf + haben

タイプ 5a: Inf + Inf (=MV) + werden

タイプ 5b: Inf + Inf (≠MV) + werden

タイプ 6a: Inf + Inf (=MV) + MV

タイプ 6b: Inf + Inf (≠MV) + MV

タイプ 7: 4 項述語

[PII: 過去分詞 ; Inf: 不定詞 ; MV: 話法の助動詞]

調査の結果から、17 世紀に入りタイプ 1, 4 における定動詞の省略が飛躍的に増加したこと、定動詞前置は古い形であり、規範化しているタイプ (5a, 6a, 7) を除いて減少していることが分かった (高田 1994: 14-15)。高田 (1994: 18) によると、このような発展を推し進める大きな要因となったと思われるのが多項述語を構成している助動詞の種類である。助動詞間には、話法の助動詞、準話法の助動詞 (使役動詞、知覚動詞など)、未来の助動詞、受動の助動詞、完了の助動詞という順で意味的価値の序列が存在し、V2 と比べて V1 (定動詞) の意味的価値が高ければ高いほど、V1 の後置が起こりやすい (高田 1994: 18)。この高田 (1994) の調査は 17 世紀を時間軸としているが、現在では使用実態が変化している可能性がある。

したがって、定動詞中置の起こる条件とその頻度、加えて動詞群の語順を、現在使用されているドイツ語のデータをもとに明らかにする必要があると考える。

4. 調査 1: コーパス調査

4.1. 調査方法

マンハイムのドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache, Mannheim; IDS) によるコーパス調査分析システム COMAS II (Corpus Search, Management and Analysis System) のウェブ版を用いる。

² ここで高田 (1994) のいう多項述語とは、述語が 3 つ以上の動詞要素からなる場合のことを指す (高田 1994: 12)。

使用するコーパスは Die Zeit (Online-Ausgabe) 2013 (Z13) 、 Die Zeit (Online-Ausgabe), 2014 (Z14)³ である。調査方法の概略は次のとおりである。2つのコーパスにおいて、表2の検索式を用いて検索する。従属接続詞 *weil, wenn* についても同様に検索する。得られた例文の中で、主節と従属節をまたいで動詞・助動詞が3つあるいは4つ連続しているものなど、条件に合わないのは手作業で除外する。

表 2: 調査で用いた検索式

	式	見つかる文
検索式 1	[(dass daß) /+s0 (MORPH(V) /+w1:1 (MORPH(V) /+w1:1 MORPH(V)))]	従属接続詞 <i>dass / daß</i> と 3 つの動詞・助動詞の連続
検索式 2	[(dass daß) /+s0 (MORPH(V) /+w1:1 (MORPH(V) /+w1:1 (MORPH(V) /+w1:1 MORPH(V)))]	従属接続詞 <i>dass / daß</i> と 4 つの動詞・助動詞の連続

4.2. 調査結果と分析

調査によって得られた文例を動詞の個数ごとにまとめると以下表3、表4のようになる。なお、表中のパーセンテージは小数第2位を四捨五入して示す。

表 3: 3 項動詞群の文例の内訳

	Z13			Z14			計
	規則的 語順	定動詞 中置	小計	規則的 語順	定動詞 中置	小計	
<i>dass / daß</i>	741 (90.0%)	82 (10.0%)	823 (100.0%)	392 (89.5%)	46 (10.5%)	438 (100.0%)	1261
<i>weil</i>	131 (91.0%)	13 (9.0%)	144 (100.0%)	72 (90.0%)	8 (10.0%)	80 (100.0%)	224
<i>wenn</i>	133 (86.4%)	21 (13.6%)	154 (100.0%)	79 (90.8%)	8 (9.2%)	87 (100.0%)	241
計	1005	116	1121	543	62	605	1726

表 4: 4 項動詞群の文例の内訳

	Z13			Z14			計
	規則的 語順	定動詞 中置	小計	規則的 語順	定動詞 中置	小計	
<i>dass / daß</i>	9 (69.2%)	4 (30.8%)	13 (100.0%)	4 (50.0%)	4 (50.0%)	8 (100.0%)	21
<i>weil</i>	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1
<i>wenn</i>	0 (0.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1
計	9	6	15	4	4	8	23

³ ドイツの全国紙 “Die Zeit” のオンライン版記事からデータを収集したコーパスで、Z13 は 2013 年 1 月～12 月の記事 5771 文、約 612 万語、Z14 は 2014 年 1 月～7 月の記事 3070 文、約 338 万語で構成されている。このコーパスは COMAS II の形態統語的タグ付きコーパスのアーカイブ内にあり、検索語の指定の代わりに、品詞や下位カテゴリーを選択して事例を検索することができる。

表 3, 4 から、3 項の動詞群では定動詞中置が起こる割合が約 10%であるのに対し、4 項の動詞群の場合は約 30~50%と、4 項の動詞群の方が定動詞中置の起こる割合が高い。したがって、定動詞中置は連続する動詞・助動詞の数が多い方が起こりやすいことがわかる。

Z13, Z14 から集めた 1749 個の例文の中で、3 項の動詞群かつ定動詞中置の 178 例だけを高田 (1994) の多項述語の構成タイプに従って整理すると、タイプ 4 [不定詞 + 代替不定詞 + 完了の助動詞 *haben*] の場合は 139/140 例、タイプ 5a [不定詞 + 話法の助動詞の不定形 + 未来の助動詞 *werden*] の場合は 38/39 例と、それぞれ 1 件の例外を除き必ず定動詞中置が起こっていることが分かった。(2) がタイプ 4、(3) がタイプ 5a の文例である。なお、①定動詞は斜体で示し、②代替不定詞には波線、③②以外の非定形には下線を付す。

- (2) ..., [dass die Stadt Dresden dieses Bild nicht
that DEF.F.SG.NOM city.F.SG.NOM Dresden this.N.SG.ACC picture.N.SG.ACC NEG
unbedingt hätte zurückkaufen müssen].
absolutely have.AUX.SBJV.3SG buy back.INF must.INF
「ドレスデン市が必ずしもこの絵を買い戻す必要はなかったこと...。」(Z13/FEB.00266)

- (3) ..., [dass der Einkauf würde
that DEF.M.SG.NOM purchasing department.M.SG.NOM become.AUX.SBJV.3SG
umziehen müssen].
move.INF must.INF
「購買部門が移転しなければならないだろうこと...。」(Z13/FEB.00009)

タイプ 4, 5a で定動詞中置が起こっていない例が以下 (4), (5) である。(4) は、荻原 (1996) の「代替不定詞の場合に定動詞が文末に来るのは非文である」という記述に反する。(5) は代替不定詞ではないため先行研究には反していない。

- (4) ..., [weil das iranische Volk sich von
because DEF.N.SG.NOM Iranian.M.SG.NOM people.N.SG.NOM REFL.3SG.ACC from
der Brutalität des Regimes aus dem
DEF.F.SG.DAT brutality.F.SG.DAT DEF.N.SG.GEN regime.N.SG.GEN from DEF.N.SG.DAT
Jahre 2009 nicht abschrecken lassen hat].
year.N.SG.DAT 2009 NEG deter.INF CAUS.AUX.INF have.AUX.PRS.3SG
「イランの人々は 2009 年の政権の残忍さにも屈しなかったので…」(Z13/JUN.00356)

- (5) ..., [dass ein anderer Interessent die
that INDF.M.SG.NOM other.M.SG.NOM interested person.M.SG.NOM DEF.F.SG.ACC

Bank beauftragen wollen würde], ...
bank.F.SG.ACC entrust.INF will.INF become.AUX.SBJV.3SG

「他の利害関係者が銀行に委託したがるだろうこと…」 (Z13/MAR.00430)

4 項の動詞群の文例で定動詞中置が起こっているものは、すべてが代替不定詞を用いた文であった。

タイプ 4, 5a 以外で定動詞中置が起こっている文例が 1 件だけ出現し、多項述語の構成はタイプ 2 [過去分詞 + 不定詞 (werden / haben / sein) + werden] である。文例総数 1728のうち、タイプ 2 は 64 例出現し、63 例は規則的語順で用いられている。

動詞群の語順に注目すると、従属節で動詞が 3 個連続する場合、定動詞中置の語順パターンは全体の 1 割ほどである。そのうち 1 例を除く全てが、動詞群の先頭に定動詞が置かれる 1-3-2 の語順であった。(6) は唯一定動詞が動詞群の真ん中にある (3-1-2) 例である。

- (6) [Wenn wir damals schon feststellen hätten können], ...
if 1PL.NOM at that time already detect.INF have.AUX.SBJV.3PL can.INF
「我々が当時すでに気づくことができたら、...。」 (Z14/MAI.00223)

動詞が 4 個連続する場合、規則的語順 (4-3-2-1) と定動詞が動詞群の先頭に置かれる 1-4-3-2 の語順の割合が、どちらも 50%に近い結果となった。

5. 調査 2: インフォーマント調査

5.1. 調査方法

セクション 1 では、高田 (1994) の設定した多項述語の 7 つの構成タイプのうち、3 つの要素からなるタイプ 1 ~ 6b について調査した。調査 1 で定動詞中置が高確率で出現したタイプ 4, 5a は、コーパス調査で得た各タイプの例文 1 文を、該当箇所の動詞群を規則的語順に並べ替えて提示した。一方、規則的語順で出現したその他の 4 タイプについては、各タイプの例文 1 文を、定動詞が動詞の先頭に来るよう、定動詞中置に並び替えた文を提示した。回答者には、各文に対して小問 1 で〈1. 正しく、自分もこの語順をよく使う、2. 間違っているが、他の人がこの語順を使うのを見たり聞いたりする、3. 間違っており、この語順を見たり聞いたりしたことがない、4. その他〉の 4 つの選択肢から最も自分の考えに合うものを答えてもらった。小問 2 ではその文に対して使用できる動詞群の語順を、選択肢から複数選択可で選んでもらった。追加で小問 3 において語順ごとに意味の違いがあるかを問い、「ある」と答えた場合には小問 4 でその違いについて記述してもらった。

次にセクション 2 では、コーパス調査で得た例文を、4 項の動詞群の位置を空白にして提示し、小問 1 で空白に当てはめることのできる語順を 1 つ以上選択してもらった。さらに、

複数選択した場合は、小問 2 で語順によって違いがあるか、その違いはどのようなものかを記述してもらった。

調査 1 で用いたコーパスが新聞コーパスであることを踏まえ、アンケートでは書き言葉で考えてもらうよう回答者に求めた。

5.2. 調査結果と分析

表 5: 調査 2 の結果まとめ (小数第 2 位を四捨五入)

	予測	結果
大問 1: タイプ 4 (助動詞の代替不定詞)	○-1: 選択肢 2, 3 の「間違っている」が非常に多い ○-2: 定動詞が動詞群の先頭にある語順が圧倒的に多い	・「間違っている」が 78.4%で規則的語順の容認度は低い ・1-3-2 が 86.5%、3-1-2 が 67.6%で、定動詞中置の複数の語順を許容
大問 2: タイプ 4 (使役動詞の代替不定詞)		・「正しい」が 75.7%で規則的語順の容認度が非常に高い ・3-2-1 が 81.1%、1-3-2 が 73.0%で規則的語順も定動詞中置も許容
大問 3: タイプ 4 (知覚動詞の代替不定詞)		・「正しい」が 51.4%で規則的語順の容認度が高い ・1-3-2 が 94.6%、3-2-1 が 59.5%で定動詞を先頭に置く語順の使用率が非常に高い
大問 4: タイプ 5a		・「正しい」が 78.4%で規則的語順の容認度が非常に高い ・3-2-1 が 81.1%、1-3-2 が 62.2%で規則的語順の方が定動詞中置より許容度が高い
大問 5: タイプ 1	○-1: 選択肢 2, 3 の「間違っている」が多い ○-2: 規則的語順が非常に多い	・「間違っている」が 60%以上で定動詞中置の容認度は低い ・3-2-1 がすべてのタイプにおいて 90%以上で、定動詞中置はあまり許容されない
大問 6: タイプ 2		
大問 7: タイプ 3		
大問 8: タイプ 5b		
大問 9: タイプ 6a		
大問 10: タイプ 6b		・「間違っている」が 54.0%で、他と比べて定動詞中置の容認度が少し高い ・3-2-1 が 100.0%で一般的に用いられるが、1-3-2 も 43.2%と許容される
大問 11: タイプ 7 (代替不定詞を含む 4 項動詞群)	○-1: 定動詞が動詞群の先頭に来る語順が非常に多い	・1-4-3-2 が 86.5%と非常に高く、他の定動詞中置の語順も 30%以上と、定動詞中置の複数の語順が許容される。 ・4-3-2-1 は 13.5%で規則的語順の許容度が低い
大問 12: タイプ 7 (代替不定詞を含まない 4 項動詞群)	○-1: 規則的語順が非常に多い	・4-3-2-1 が 100.0%で一般的に用いられる ・定動詞中置の語順の容認度は 35%以下と低い

タイプ 4 [不定詞 + 代替不定詞 + 完了の助動詞 *haben*] の使役動詞、知覚動詞の代替不定詞とタイプ 5a [不定詞 + 話法の助動詞の不定形 + 未来の助動詞 *werden*] において、コ

一パス調査の結果とは全く異なる結果が得られた。調査2の結果を概観すると、ある1つの語順パターンしか使用できないタイプは存在しない。したがって、先行研究で義務的に定動詞中置が用いられるという旨の記述があったが、使用実態として、文法的に正しい・誤りという感覚に個人差はあるものの、話者は複数の語順を選択的に用いていると言える。その中でも動詞群の構成タイプごとに「最も自然な語順」が存在することには注意すべきである。語順による意味の違いを問う設問で、ニュアンスの違い、焦点の違いが指摘されたため、話者が自身の強調したい内容や表現したいニュアンスによって語順を使い分けることができると考える。

6. まとめと今後の課題

筆者が導き出した定動詞中置の条件は、「話法の助動詞の代替不定詞を含む動詞群である」ということである。ただし、完全義務的に定動詞中置が起こるのではなく、中置が非常に頻繁に起こり、母語話者の容認度も高いと言うにとどまる。話法の助動詞・使役動詞・知覚動詞の代替不定詞を含む動詞群、[不定詞 + 助動詞 + 未来の助動詞 werden] の組み合わせの動詞群では定動詞中置が用いられやすく、その他のタイプではあまり用いられない。このような定動詞中置の起こりやすさや容認度の差について、高田 (1994) の言う助動詞間の意味的価値の序列 (話法の助動詞 > 準話法の助動詞 > 未来の助動詞 > 受動の助動詞 > 完了の助動詞) がこれを適切に説明できるのではないかと筆者は考える。

動詞の数が多いほど従属節の動詞群において定動詞中置が起こりやすい傾向にあり、定動詞中置の語順パターンは複数認められることが調査2により明らかになった。

今後の研究課題として、コーパス調査で対象とする文の出典ジャンルを拡大することで、現代ドイツ語における総合的な定動詞中置の使用実態を調べることができると考える。定動詞中置が出現しやすい動詞群の構成タイプと、出現しにくい動詞群の構成タイプの違いについても、今後明らかにしたい。

【略号一覧】・機能の兼担 / 1 1 人称 / 3 3 人称 / ACC 対格 / AUX 助動詞 / CAUS 使役 / DAT 与格 / DEF 定 / F 女性 / GEN 属格 / INDF 不定 / INF 不定詞 / M 男性 / N 中性 / NEG 否定 / NOM 主格 / PL 複数 / PRS 現在 / REFL 再帰 / SBJV 接続法 / SG 単数

【参考文献】荻原達夫 (1996) 「文末動詞群の構造について」『独語独文学科研究年報』23: 15-34. / 荻原達夫 (2004) 「Ersatzinfinitiv と過去分詞の構造」『独語独文学科研究年報』31: 65-81. / 在間進 (2006) 『[改訂版] 詳解ドイツ語文法』東京: 大修館書店. / 清水誠 (2024) 『ゲルマン諸語のしくみ』東京: 白水社. / 高田博行 (1994) 「統語規範の形成と変遷 -17 世紀における多項述語の副文語順の場合-」『ドイツ文学』92: 12-24. / 田中雅俊 (2012) 「定動詞後置を伴わないドイツ語従属節にみる定動詞位置の動機づけ」『東洋法学』55. 3: 284-263. / 橋本郁雄 (1989) 「ドイツ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第2 巻 世界言語編 (中) さ-に』1189-1214. 東京: 三省堂. / 橋本文夫 (2002) 『詳解ドイツ語文法』東京: 三修社.

【調査資料】Z13 - Die Zeit (Online-Ausgabe), 2013: <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/faces/investigation/results.xhtml> (最終閲覧日: 2025 年 1 月 7 日). / Z14 - Die Zeit (Online-Ausgabe), 2014: <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/faces/investigation/corpus.xhtml> (最終閲覧日: 2025 年 1 月 7 日).

新しい表現形式「クナイ」の拡大について

レクレイター 序守
(言語文化学部 スペイン語専攻)

キーワード：首都圏，若年層，日本語，同意要求表現，否定表現

0. はじめに

本稿の目的は、「形容詞連用形＋ない」とは異なる用法で、首都圏若年層を中心に用いられる「クナイ」の使用範囲の拡大について明らかにすることである。先行研究において、本稿とは異なる用語が用いられている場合は、本文を直接引用している場合を除き、本稿で用いる用語¹に統一している。なお、津村 (2019) において用いられている「接尾語」という用語は、当時の「クナイ」の共起できる語の範囲から直感的に用いられたもの、あるいは後置型の附属語全般を指しているものと考えられるが、明確な定義は確認できないため、混乱を避ける目的で本稿では基本的には筆者が自らの意図で用いることはしない。ただし、先行研究と同一の調査を行うために便宜上、津村 (2019) で用いられていた用語として流用する場合があるが、その際は「接尾語」と鉤括弧とともに表記する。

本稿における例文・図表番号、文字飾りは、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 背景知識

1.1. 従来の用法における「クナイ」

小村・鹿浦 (2014: 2) で述べられているように、形容詞述語文の反対の意味を伝えるとき、(すなわち否定の意味で用いるとき)、形容詞の否定活用形「～くない」を用いる (小村・鹿浦 (2014) より筆者要約、() 内は筆者による補足)。

つまり「クナイ」は

『形容詞連用形＋ない』の形式 (津村 2019: 1)

の一部である。

1.2. 文末形式としての「クナイ」

高木 (2009) によると、2000 年代当時、関西方言を話す若年層のあいだで、形容詞否定形の一部である「クナイ」が「動詞基本形＋クナイ」という形で、ひとまとまりの文末形式として使用されている例がみられるという。

(1) 色画用紙とかも、ハッキリ行けばあるクナイ？ (高木 2009: 1)

¹ イ形容詞、ナ形容詞、語彙など、本稿で扱う内容に直接かわらない表現は「形容詞」「形容動詞」「語」などに統一した。

2. 先行研究

2.1. 「クナイ」の成立過程

平塚 (2009) では「クナイ」の成立過程を、関西方言・福岡市方言における「活用語尾の析出」という観点から説明した。当時首都圏では使用されなかった「クナイ」であるが、当該方言で新出の、否定のネオ方言の影響で〈デキン（動詞否定形）＋クナイ（活用語尾）〉という分析的な構造意識が生まれ、形態的な切れ目が感じられるようになったとしている。

2.2. 関西方言にみられる「クナイ」

2000 年代の関西方言で当時みられるようになった「クナイ」の使用範囲について、「多くは動詞の基本形に接続し、名詞や形容動詞語幹、形容詞基本形との共起は稀である」（高木 2009: 12）と述べている。

2.3. 首都圏若年層に近年みられる「クナイ」

津村 (2019) では、首都圏の若年層でみられるようになった「クナイ」に関する調査を行った。twitter (現 X) を用いて、名詞、形容詞、形容動詞、連体詞、副詞の 5 つ²の品詞を含む計 476 の語に「クナイ」が接続していた投稿の、twitter 日本語版が開設された 2008 年からの 10 年間に於ける件数と、その用法に関する調査であった。調査の対象とする語は、『テレビ放送の語彙調査 II 一語彙表一』（国立国語研究所 1997）より、「本編〔音声〕度数順語彙表」の「体の類」を度数順に 130 語、「相の類」の全語、および、形容動詞の用例数の確保を目的に『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 5 形容詞』（西原他 1988）の索引から形容動詞語幹を抽出したものをを用いたとしている。その結果によると、近年東京周辺で耳にする、「形容詞連用形＋ない」の形式とは異なる文末表現「クナイ」に関して、これを以下の二つの用法に整理できるとしている。

I 同意要求

1. 自分が確信していることや考えていることに対して相手に同意を求める。
- (2) 「無理くない？」（無理だよな？）（津村 2019: 1）
2. 自分が判断した様態や性質について相手にそのことについて認めてもらえるよう同意を求める。
- (3) 「子供くない？」（子供っぽくない？）（津村 2019: 1）

II 否定

接続した語を否定する。前に接続している語が様態や性質を表す言葉の場合は「～っぽくない」と言い換えが可能。

²² 津村 (2019) の本文中では、さらに動詞を加えた 6 つの品詞との説明があるが、実際の調査語には動詞は含まれていないため、ここでは実際に行われたデータのある 5 つの品詞のみを掲載している。

(4) 「女くない」(女っぽくない) (津村 2019: 1)

同意要求と否定の2つの用法については、以下のように述べている。

「クナイ」の否定用法は、相手の言い方をオウム返しして否定する表現技法の可能性がある。それによって表現を柔らかくすることができる。しかし、否定の意味のみに特化している「クナイ」はほとんど存在しない。また、他の同意要求表現と比較して軽い印象になるため、否定の意味で使う場合も含めて、断定的な表現を避ける近年の傾向と合致する一種のポライトネス表現となっている。

(津村 2019: 15)

なお、「クナイ」の使用範囲の拡大については (津村 2019) では、次のように述べている。

名詞や形容動詞語幹だけではなく、形容詞基本形やことわざ・慣用句等にも接続することができる。その一方で、接尾語のついている語彙には「クナイ」は接続せず、「クナイ」自体が文末表現の枠を超えて接尾語としての性質を持ち始めているものだと考えられる。

(津村 2019: 15)

3. 問題提起

先行研究を踏まえ、以下のような問題点が挙げられる。

「クナイ」の使用範囲に関して、津村 (2019) では「クナイ」自体が「接尾語」としての機能をもち始めているために、「接尾語」の付いている語には「クナイ」は接続しないと述べられている。一方、現在では津村 (2019) の調査によって否定されている「～的」「～げ」「～がち」に接続する「クナイ」やオウム返しでない否定用法の例が、X (旧 twitter) などの SNS 上でも確認される。「クナイ」の使用範囲が変化しているという仮説のもと、その実態を明らかにするために、調査を行う必要があるといえる。

4. 調査① X (旧 twitter) での用例調査

4.1. 調査方法

津村 (2019) における調査と同一の語に関して、X (旧 twitter) 上で同一の条件での調査を行う。調査対象 466 の語³に「クナイ」を後置した形で検索し、2024 年 6 月から 2014 年 7 月までの過去 10 年間の投稿を手作業で抽出する。検索には X の「高度な検索」機能を用いて、完全一致しているものだけを検索する。形容詞は基本形に、形容動詞には語幹に「クナイ」を後置したものをを用いる。「事」は「事くない」、「すごい」は「すごくない」、「静か(だ)」は「静かくない」とする。それらの検索結果を、以下 2 つの指標で確認する。

A. 投稿数の変化

³ 津村 (2019) における 476 の調査対象語のうち、「確か」「変」「大変」「きれい」「ダメ (駄目)」「有名」「たくさん」「真っ直ぐ (真っすぐ)」「まじめ (真面目)」「立派」の 10 語は重複していたため、本調査では 466 語を対象とする。

投稿数で 15 投稿以上、1~14 投稿、0 投稿の 3 種類に分類し、全体での増減を確認する。

B. 用法の調査

投稿数が 0 以外の語に関して、各用法ごとの投稿の有無を調べる。有無の確認をする用法については、津村 (2019) において定められた同意要求、オウム返しの否定の 2 つに加え、オウム返しでない否定があればその件数、及びそれ以外に用法があればそれも記録する。なお、投稿数が 15 以上の投稿において、最新投稿から 15 件以内に確認できない用法があれば、100 投稿まで遡り、有無を確認する。100 投稿目までに用例が確認できない用法については、最新の投稿において 1% 未満の出現率であることから、本調査では、なしとして扱う。

A および B に関して、津村 (2019) の結果との比較から、5 年間での「クナイ」の拡大の様子を調査する。

4.2. 調査結果 A 投稿数の変化

調査対象の 466 語のうち、2019 年時点で「15 投稿以上」に分類されていた 195 語は、今回の調査でも 15 件以上あるかのみを調査し、下回った場合はその投稿数を記録した。減少したのは、3 件のみであった。2019 年時点で 15 投稿未満であった 271 語のうち、2019 年と比べて投稿数が増加していたのは 100 語、減少していたのは 43 語であった。減少した語の中には「ハンサム」や「テレビ」など、現在での使用頻度そのものが低下していると考えられる語が多く含まれていた。使用が増加した語は「水」「それぞれ」「厚い」など多岐にわたり、一般的に広く用いられるようになったと考えることもできるだろう。

4.3. 調査結果 B 用法の調査

2019 年時点で同意要求のみで用いられていた 61 語のうち今回は 31 語で、0 投稿であった語のうち今回は新たに 11 語で、それぞれ否定用法が新たにみられたため、否定用法の拡大も確認できる。

- (5) 高級くない杏仁豆腐を食す (X より引用)
- (6) 時期的に今くないと無いみたいよー？ (X より引用)

津村 (2019) で指摘されているような、相手が言ったことを直接オウム返しして否定しているような文脈はなく、唐突に否定表現として用いられている。このような用法が、全 467 語中、約半数の 210 語で確認された。

5. 調査② (アンケート調査)

5.1. 調査方法

「クナイ」の使用に関するアンケート調査を Google Forms を用いて行う。筆者の知人の中から、高校時代以降に主な居住地が首都圏である人を対象とする。今回の調査対象である「クナイ」は若年層を中心に使用されていることから、回答者を①2024 年度現時点で高校生である世代、②2024 年度現時点で高校生卒業から 5 年以内の世代、③特段上限を定めず、

①②よりも年齢層の高い世代、の3つに分類し、世代の違いによって許容度に差異があるかどうかを確認する。調査の具体的な内容については、以下の3項目とする。

- I. 調査①の結果で、2019年時点よりも件数が増加している語について、自らが使用するか、あるいは実際に使用する場面に遭遇するかを調査し、調査①の結果の考察に用いる。
- II. 調査①で確認された、否定用法のオウム返し以外の否定の用法について、それらが用いられる場面に遭遇するか、あるいは自らが使用するかを調査する。
- III. 津村 (2019) が「クナイ」との共起を否定している「～的」「～げ」「～がち」などの「接尾語」に対して、「クナイ」が用いられる場面に遭遇するか、あるいは自らが使用するかを自由記述形式で質問をする。なお、回答者の負担等を考え、調査①で増加がみられた語をすべては取り扱わず、文脈などを考慮して筆者が選んだ任意の語について行う。例文は、文脈を設定できることから、筆者が作例したものを用いて、文脈とともに提示する。

調査で用いるアンケートは選択形式 (一部質問では自由記述形式を含む) で作成する。回答の選択肢は 1. 言える 2. 周りの人は言うが、自分では使わない 3. 自分より若い人が言うかもしれないが、自分では使わない 4. 聞かないし言いもしないが、使用されていても受け入れられる 5. 聞かないし言いもしない。誤りであっておかしいと思う 6. その他自由記述 の6択とする。上記を17問設定するほか、III. の「～的」「～がち」などに対してさらに「クナイ」が使用される場面があればそれを記入する項目、それ以外で「クナイ」を使用する場面の自由記述および回答者自身に関する質問の全20項目を設定する。回答者自身に関する質問は生年月日、性別、出身地とし、方言による影響を考慮に入れられるようにする。なお、アンケート中で用いた例文番号をそのまま用いるため、本稿中の本文の例文番号との混同を避けるために、本調査中の例文番号は <1> のように括弧を付して区別している。

5.2. 調査結果

筆者の知人31人から回答を集計した。①の2024年度現時点で高校生である世代から10人、②の2024年度現時点で高校生卒業から5年以内の世代から10人、③の特段上限を定めず、①②よりも年齢層の高い世代から11人分の回答を得ることができた。

5.2.1. 新たな否定用法

5年前には確認されていなかった、オウム返しの文脈のない否定の結果は以下のとおりである。

表1: (バイトでつまらない仕事ばかり振られて) 全然やりたい仕事くないんだけど

<8>	1. 言える	2. 言わないが 聞く	3. 若い人なら 言うかも	4. 使わないが受 け入れられる	5. 使わなく、受け 入れられない	6. その他
高校生	0	0	0	7	3	0
卒業5年以内	0	0	1	1	8	0
それ以上	0	0	1	1	8	1

その他: 5. だと思うが、冗談として使っているならば、あり

7 つの例文の結果では、すべての用法において、高校生を除く両世代で、5.「聞かないし言いもしない。誤りであっておかしいと思う」を選んだ人が半数以上いることが確認された。一方で、高校生では 1.「言える」や 4.「聞かないし言いもしないが、使用されていても受け入れられる」などの回答が多く確認され、高校生を中心とした若年層から広がる新しい用法としてオウム返しではない否定の用法があるといえるだろう。

5.2.2. 5 年間で増加した語

前回の調査と比較して、用例数が X 上で増加した語に関して、実際にはどの程度受け入れられているのか、世代間の違いとともに確認する。

表 2: (よくあるミスを見聞きして) そういうのありがちくない？

< 15 >	1. 言える	2. 言わないが 聞く	3. 若い人なら 言うかも	4. 使わないが受 け入れられる	5. 使わなく、受け 入れられない	6. その他
高校生	6	0	0	1	3	0
卒業 5 年以内	3	2	0	3	2	0
それ以上	0	2	1	6	1	1

その他: 5. だと思うが、冗談として使っているならば、あり

過去 5 年で X 上での投稿数が増加した語の同意要求表現の、世代別の許容度を確認すると、全体的に若年層であるほど使用がみられた。自らが使用すると答えた人が一番少なかった「絶対くない？」という表現においても、使用されていれば受け入れられると回答した人数は若年層であるほど多い傾向が確認された。

5.2.3. 調査② 結果のまとめ

本調査において、全体的には若年層ほど「クナイ」を使用するという結果が確認された。一方、調査①において、「絶対くない」という表現の用法は、確認された 6 投稿のうちの 50%にあたる 3 投稿がオウム返しではない否定であったが、アンケートでは若年層を含めて、言うと回答した 2 人を除いたほぼすべての人が言わないかつ聞かないと回答した。SNS 上での書き込みでしかまだ用いない、まだ出現したての表現である可能性が考えられる。ただし、言わないし聞かないが、用いられていたら受け入れられる、と寛容な見解を示した人数は若年層ほど多い結果となった。

自由記述では、「～気味くない」「～くさいくない」「お腹空いたくない？」「笑えるくない？」「ありくない？」「なくくない？」「できるくない」「その土地の雰囲気、飛田給くない？」などの回答が得られた。

6. 調査③ アンケート調査を踏まえた X (旧 twitter) での用例調査

6.1. 調査方法

調査①と同様の調査を、津村 (2019) では行われなかった語について行う。津村 (2019) の段階では「クナイ」との共起が確認されていなかった動詞、「接尾語」、調査②で回答のあった語について行う。なお、動詞に関しては現代日本語書き言葉均衡コーパスを参考に、使用頻度上位の語から順に動詞を 15 個手作業で抽出し、調査対象語とする。調査①とは異なり、2019 年時点の比較対象はないが、現代における「クナイ」の用法の考察の参考とするために行う。調査対象語は「する、いる、ある、いう、なる、くる、思う、見る、行く、できる、困る、つく、仕舞う、持つ、やる、的、げ、がち、気味、ぼい、くさい、空いた」の 22 語とする。

6.2. 調査結果

22 の語について調査した結果、動詞に関してはすべての語で 15 投稿以上確認され (実際には全て 100 投稿以上)、そのすべてが同意要求であった。このことから、「クナイ」を用いた否定表現は、動詞以外の品詞に限られるものであると考えることができる。

(7) もう秋の匂いするくない? (X より引用)

動詞以外の語に関してもすべて 15 投稿以上確認され、「げ」「ぼい」「気味」に関してはオウム返し以外の否定の用法がみられたが、「的」「がち」「くさい」は同意要求のみがみられた。「空いた」に関しては、「お腹空いたくない?」などの同意要求は多く確認されたが、「会いたくない」の誤字と判別がつきにくいものが非常に多かったため、今回の調査結果からは除外することとした。

(8) 妖しげ…くない菓を調合しているのがバレましたか!? (X より引用)

本調査では、津村 (2019) の時点では否定されていた「接尾語」である「健康的、良さげ、バズリがち、さぼってる気味、貧乏くさい」などと共起する「クナイ」が多数みられた。

7. 考察

津村 (2019) での調査から 5 年が経過し、「クナイ」の使用数の拡大とともに、用法も拡大したことを確認することができた。調査②のアンケート調査の自由記述で確認された「いけるくね」のように、形が変化したものがみられる場合がある。

(9) カッコいくなくても、この (中略) 部分が好き (X より筆者引用、一部略)

(10) ラーメン体にいくなくね? (X より筆者引用)

例文 (10) のように、「いいクナ (否定) クナイ (同意要求)」が相互同化し、さらに縮約が起きたものも見られた。上記のような変化形も確認することはできたが、本調査での調査

方法では、新たな変化形で検索した際に従来の「クナイ」を排除する方法が見つからず、他の変化形について調査することは難しかったため、追加の調査は行っていない。

「クナイ」に前置する語には幅広い品詞があり、名詞や形容詞、形容動詞、連体詞、副詞に加えて、今回の調査で動詞も含まれることが確認できた。なお、動詞の場合は同意要求でしか用いられず、現時点で否定用法を確認することはできない。これは、動詞には助動詞があるからと考えることはできないだろうか。「来ない」だけでなく、「来られない」「来られなさそう」など、否定を非直接的に伝えるために様々な表現の組み合わせがしやすいが、名詞や形容詞の否定を婉曲的な表現を挟んで伝えるためには「クナイ」を用いることが一つの方法になっているのだろう。なお、「～的」「～げ」のように語に後置する表現にさらに「クナイ」を後置することもできるため、以前よりも「クナイ」の生産性は向上し、後置できる範囲が拡大しているところであると考えられる。

用法としては、同意要求と否定の意味があることは津村 (2019) の時点で明らかにされていた。否定用法に関して、現在ではオウム返しでない場合にも、一般的な否定表現としてとして用いられているようになってきている。この形式は、津村 (2019) で指摘されていた通り、直接的な否定表現を避けるための一種のポライトネス表現になっていると考えられる。なお、基本的には同意要求も否定表現も文脈によって使い分けることが可能である。

8. まとめと今後の展望

本稿では、近年首都圏の若年層を中心にみられる「クナイ」の拡大の様子を確認することができた。否定の用法で用いることのできる文脈の制限がなくなったこと、様々な語に後置できるようになり生産性が向上したこと、5年前の若年層よりもさらに若い層が、現在ではより多くの場面でかつ多くの語で使用していること、動詞の場合は「クナイ」が後置しても同意要求でしか使用されないことを示した。5年前の調査との比較から使用頻度、用法、共起できる語の範囲などで変化が確認され、また現時点では世代間で使用度合いに差がみられることも述べた本稿では、2024 年現在での「クナイ」の実態を記録することができた。今後の「クナイ」の実態の変化や若年層以外への拡大の様子にも注目されたい。

【参考文献】 国立国語研究所 (1997) 『テレビ放送の語彙調査 II 一語彙表一』 六一書房 (筆者未見)/ 小村新英・鹿浦佳子 (2014) 「対義語を使ったイ形容詞の新しい指導方法」『日本語教育論集』 24: 91-104. / 高木千恵 (2009) 「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』 5-4: 1-15. / 津村彩子 (2019) 「新しい接尾語「クナイ」の使用実態とその拡大について」『言語の研究』 5: 1-16. / 西原鈴子・川村よし子・杉浦由紀子 (1988) 『形容詞 (外国人のための日本語例文・問題シリーズ; 5)』 荒武出版 (筆者未見). / 平塚雄亮 (2009) 「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ (カ)」『日本語文法』 9-1: 71-87.

【調査資料】 国立国語研究所コーパス開発センター 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 短単位語彙表 (Version 1.0) <https://repository.ninjal.ac.jp/records/3234> (最終閲覧 2024/7/4)

思言 東京外国語大学記述言語学論集 第 21 号

2026 年 3 月 2 日発行

編集・発行： 東京外国語大学 記述言語学研究室（風間伸次郎）

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

mail: kazamas@tufs.ac.jp

Edited and Published by Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistic Papers

SHIGEN

vol. 21

Articles

On the Corresponding Expressions of Japanese Compound Verbs in Altaic-type Languages (2) · KAZAMA Shinjiro (3)

Materials

Tsitsikar (Qiqihaer) Dagur Texts ····· KAZAMA Shinjiro (27)

Abstracts of the MA Theses

Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil ····· KOBAYASHI Hayato (41)

A Study of “*cjoba*” in the Japanese Dialect of Yamanashi Prefecture

—On the Conjunctive Including an Imperative Form— ····· TAKAHASHI Arata (51)

Meaning and Usage of the Verbal Suffix -*čix* in Mongolian ····· DAGVADORJ Maralma (61)

On the System of Theme Vowels in Arabic Varieties ····· MIYAKAWA Hiroto (71)

Abstracts of the Graduation Papers

Verbs Co-occurring with the Directional Complement “*khí-lâi* 起來” in Taiwanese

—A Contrastive Study with Chinese “起來”— ····· IMAI Rin (83)

On the form ‘*beki*’ in Miyako-substrate Japanese ····· IWAKUMA Konan (91)

A Contrastive Study of Internet Slang in Japanese and French ····· OBA Yuya (99)

Case Frame of Experiencer and Stimulus in the Choshi dialect of Japanese ····· KASAHARA Takanari (107)

A Morphosyntactic Study of the Subjunctive in Early Scots

—With Special Reference to The Original Chronicle of Andrew of Wyntoun— ····· KAWAGUCHI Kota (115)

Reanalysis of the “Passive” in Spoken Finnish ····· KOBAYASHI Mao (123)

Distribution of Italian Partitive Articles in Plural Form in Written Italian Corpora ····· SAKAI Masaki (131)

Restrictions and Tendencies of the Mongolian Verbs Combining with Progressive Aspect ····· SEKINE Ayano (139)

Expression of Prohibition by Using the Prefix “*di-*” in Indonesia ····· TAKATA Midori (147)

Prohibitive Forms in the Tokushima Dialect of Japanese ····· TADA Mayuka (155)

Typology of Multiple Ergative with Instrumental Function

—Focusing on Ergative Allomorphy— ····· HAKOZAKI Mitsuki (163)

The Influence of Language Purification Movement in Korean ····· MINOWA Yume (171)

The Medial Position of Finite Verbs in Embedded Clauses in German ····· YONEHAWA Suzuno (179)

On the Recent Evolution of “*kunai*” in Japanese ····· LECHLEITER Josh (187)

2026

Department of Descriptive Linguistics

Graduate School of Global Studies / School of Language and Culture Studies

Tokyo University of Foreign Studies